

婦系図

泉鏡花

青空文庫

鯛、比目魚

一

素顔に口紅で美しいから、その色に紛うけれども、可愛い音は、唇が鳴るのではない。お薦は、皓齒に酸漿を含んでいる。……

「早瀬の細君はちようど（二十）と見えるが三だとサ、その年紀で酸漿を鳴らすんだもの、大概素性も知れたもんだ、」と四辺近所は官員の多い、屋敷町の夫人連が風説をする。

すでに昨夜も、神楽坂の縁日に、桜草を買ったついでに、可い

のを撰よつて、昼夜帯の間に挟んで帰った酸漿を、隣家となりの娘——女学生に、一ツ上げましょう、と言つて、そんな野蠻なものは要らないわ！ と匆はねられて、利いた風な、と口惜くやしがつた。

面当つらあてというでもあるまい。あたかもその隣家となりの娘の居間と、垣一ツ隔てたこの台所、腰障子の際に、懐手で佇たずんで、何だか所在なさそうに、しきりに酸漿を鳴らしていたが、ふと銀杏いちょうがえ返しのほつれた鬢びんを傾けて、目をぱちちりと開けて何かを聞澄ますようにした。

コロコロコロコロ、クウクウコロコロと声がする。唇の鳴るのに連れて。

ちよいと吹留ふきやむと、今は寂寞しんとして、その声が止まって、ぼツ

と腰障子へ暖う春の日は当るが、軒を伝う猫も居おらず、雀の影もささぬ。

鼠かと思つたそうで、斜ななめに棚の上を見遣みやつたが、鍋も重箱もかたりとも云わず、古新聞がまたがさりともせぬ。

四辺あたりを見ながら、うっかり酸漿に齒が触る。とその幽かすかな音にも直ちに応じて、コロコロ。少し心着いて、続けざまに吹いて見れば、透かさずクウクウ、調子を合わせる。

聞き定めて、

「おや、」と云つて、一段下しもながし流の板敷へ下りると、お源と云う女中が、今しがたここから駈かけ出して、玄関の来客を取次ひっいだ草履が一ツ。ぞんざいに黒い裏を見せて引ひくり返っているのを、

白い指でちよいと直し、素足に引懸ひっかけ、がたり腰障子を左へ開けると、十時過ぎの太陽ひが、向うの井戸端の、柳の上から斜はすつかけに、あまね 遍さしこく射込んで、まないた 俎まなの上に揃えた、ほうれんそう 菠薐草の根を、くれない 紅くれないに照らしたばかり。

多分はそれだろう、口真似くちまねをするのは、と当りをつけた御用聞ききの酒屋の小僧は、どこにも隠れているのではなかった。

眉ひそを顰ひそめながら、その癖恍うっとり惚とした、迫らない顔かおつき色いろで、今度は口くちずさむと言うよりもわざと試みにククと舌したの尖さきで音を入れる。響ひびに応じて、コロコロと行やったが、こっちは一吹きで控えたのに、先方さきは発奮はげんだと見えて、コロコロコロ。

これを聞いて、屈かがんで、板いたへ敷く半纏はんてんの裙すそを搔か取り、膝ひざに挟

んだ下交したがいの棲つまを内端うちわに、障子腰から肩を乗出すようにして、ついで目の前さきの、下水の溜りに目を着けた。

もとより、溝板どぶいたの蓋ふたがあるから、ものの形は見えぬけれども、優しい連弾つれびきはまさしくその中。

笑えみを含んで、クウクウと吹き鳴らすと、コロコロと拍子を揃えて、近づいただけ音を高く、調子が冴えてカタカタカタ！

「蛙だね。」

と莞爾にっこりした、その唇の紅を染めたように、酸漿あせみを指に取って、衣紋えもんを軽く拊うちながら、

「憎らしい、お源や……………」

来て御覧、と呼ぼうとして、声が出たのを、圧おさえて酸漿をまた

吸った。

ククと吹く、カタカタ、ククと吹く、カタカタ、蝶々の羽で三味線みせんの胴をうつかと思われつつ、静かに長たくる春の日や、お蔭の袖に二三寸。

「おう、」と突つっこ込んで長く引いた、遠くから威勢の可いい声。

来たのは江戸前の魚屋で。

二

ここへ、台所と居間の隔てを開け、茶菓子を運んで、二階から下りたお源という、小柄こがらの可いい島田の女中が、逆上のぼせたような顔か

おつき
色で、

「奥様、魚屋が参りました。」

「大きな声をおしでないよ。」

とお蔦は振向いて低声こごえで嗜めたしな、お源が背後うしろから通るように、身を開きながら、

「聞こえるじゃないか。」

目配せをすると、お源は莞爾にっこりして俯向うつむいたが、ほんのり紅あかくした顔を勝手口から外へ出して路地うちの中を目迎える。

「奥様おくさんは？」

とその顔へ、打着ぶけるように声を懸けた。またこれがその（おう。）の調子で響いたので、お源が気を揉もんで、手を振っておさ圧え

た処へ、盤はんだい台を肩にぬいと立つた魚屋は、渾名あだなを（め組）と称となえる、名代の芝こツ児。

半纏は薄汚れ、腹掛の色が褪あせ、三尺が捻ねじくれて、股引ももひきは縮んだ、が、盤台うつくしは美しい。

いつもの向むこう顛はちまき巻まきが、四五日陽気がほかほかするので、ひしやげ帽子を蓮の葉かぶり、ちつとも涼しそうには見えぬ。例によつて飲きこしめした、朝から赤ら顔の、とろんとした目で、お薦すすがそこに居るのを見て、

「おいでなさい、奥おく様さん、へへへへへ。」

「お止よしつてば、気障きざじゃないか。お源もまた、」

と指さの尖さきで、鬢びんをちよいと搔かきながら、袖を女中の肩に当てて、

「お前もやつぱり言うんだもの、半纏着た奥様おくさんが、江戸に在るものかね。」

「だって、ねえ、めのさん。」

とお源は袖を擦抜けて、俎板まないたの前へ蹲しゃがむ。

「それじゃ御新造ごしんぞかね。」

「そんなお銭あしはありやしないわ。」

「じゃ、おかみさん。」

「あいよ。」

「へッ、」

と一ツ胸でしゃくつて笑いながら、盤台を下ろして、天秤てんびんを立掛ける時、蒔萩草を揃えている、お源の背せなを上から見て、

「相かわらずおおき大な尻だせだぜ、台所だいどころ充満いっぱいだ。串じょうだん戯ごじゃねえ。

めかた目量めりょうにしたら、およそどのくれえ掛かるだろう。」

「お前まへさんのおし圧おしぐらい掛かります。」

「ああいう口くちだ。はははは、奥おくさんのお仕し込みみだろう。」

「めの字、」

「ええ、」

「二階にがいにお客きやくさまが居いるじやないか、奥おく様さんはおよしと言ういうの

ね。」

「おっと、そうか、」

ペロペロと舌したを吸すって、

「何なにだって、日蔭ひかげものにして置おくだろう、こんな実みのある、気前きぜん

の可い……」

「値切らない、」

「ほんによ、所帯持の可い姉さんを。分らない旦那じゃねえか。」

「可いよ。私が承知しているんだから、」

と眦まなじりの切れたのを伏目になって、お蔭は襟おとがに頤がいをつけたが、慎

ましく、しおらしく、且つ湿しめやかに見えたので、め組もおとなし

く頷うなずいた。

お源が横向きに口を出して、

「何があるの。」

「へ、野暮な事を聞くもんだ。相変らず旨うめえものを食くわしてやるの

よ。黙って入物を出しねえな。」

「はい、はい、どうせ無代価ただで頂戴だいたしますものでございます。めのさんのお魚は、現金にも月末つきすえにも、ついぞ、お代をお取り遊ばしたことはありません。」

「皮肉を言うぜ。何てつたつて、お前はどうせ無代価で頂くもんじゃないやねえか。」

「大きに、お世話、御主人様から頂きます。」

「あれ、見や、島田ゆすぶを揺つてら。」

「ちよいと、番ごといがみあつていないでさ。お源や、お客様に御飯が出そうかい。」

「いかがでございますか、婦人おんなの方ですから、そんなに、お手間は取れますまい。」

三

「だつてお前、急に帰りそうもないじやないか。」

と云つて、め組の蓋を払つた盤台を差さ覗のぞくと、鯛たいの濡色輝い

て、広重の絵を見る風情、柳の影は映らぬが、河岸の朝の月影は、
まだその鱗うろこに消えないのである。

俎板をポンと渡すと、目の下一尺の鮮からくれない紅そり、反そりを打つてひらり翻然
と乗る。

とろんこの目には似ず、キラリと出刃を真名箸まなばしの構かまえに取つて、

「刺身かい。」

「そうね、」

とお蔦は、半纏の袖を合わせて、ちよつと傾く。

「焼きねえ、昨日も刺身だったから……」

と腰を入れると腕の冴さえ、颯さつと吹いて、鱗がぱらぱら。

「ついでに少々お焼きなさいますなぞもまた、へへへへへ、お宜よろしゅうございましょう。御婦人のお客で、お二階じや大層お話が持てますそうでございますから。」

「憚はばかりさま様。お客は旦那様のお友達の母おつかさん様でございます。」

めの字が鯛をおろす形は、いつ見てもしみじみ可い、と評判の手つきに見惚みとれながら、お源が引取つて口を入れる。

えらを一突き、ぐいと放して、

「凹へこんだな。いつかの新ぎれじやねえけれど、めの公塩へこが廻り過へぎたい。」

「そういや、めの字、」

とお薦は片手を懐ふちに、するりと辻すべる黒くろ繻じゆす子の襟えりを引いて、

「過このあいだ日ひ頼たのんだ、河野こうのさん許とこへ、その後廻のちつてくれないツて言ううじやないか、どうしたの？」

「むむ、河野こうのツて。何かい、あの南町なんまちのお邸やしきかい。」

「ああ、なぜか、魚屋ういが来きないツて、昨日きのうも内うちへ来きて、旦那だんなにそ
う言いつていなすつたよ。行いかないの、」

「行いかねえ。」

「ほんとうに、」

「行きませんとも！」

「なぜさ、」

「なぜツて、お前めえ、あんけだもの獣ア、」

お源あわただが慌しく、

「めのさん、」

「何だ。」

「めのさんや。お前さんちよいと、お二階に来ていらつしやるのはその河野さんの母おつかさん様じゃないか、気をお着けな。」

帽子をすつぽり亀の子すく竦みで、

「ホイ阿陀おだふつ仏、へい、あすこにや隠居ばかりだと思つたら……」

「いいえね、つい一昨日おとといあたり故郷おくにの静岡からおいでなすつたん

ですとき。私がお取次に出たら河野の母でございます、とおつし
 やったわ。」

「だから、母様が見えたのに、おいしいものが無いツて、河野さ
 んが言っていないなすつたのさ、お前、」

「おいしいものが聞いて呆れら。へい、そして静岡だつてね。」

「ああ、」

「と御維新このかた以来、江戸えど兎つこの親分の、慶喜様が行つていた処だ。

第一かく申すめの公も、江戸城を明渡しおちうどの、落人おちうどを極きめた時分、
 二年越居た事がありますぜ。

馬鹿にしねえ、大親分が居て、それから私わつしが居た土地だ。大てえげ

概い江戸ッ兎いになつてそんなもんだに、またどうして、あんな獣

が居るんだろう。

聞きねえ。

過こ日ないもね、お前めえ、まったくはお前、一軒かけ離れて、あすこへ

行くのは荷ゆなんだけれども、ちとポカと来たし、佳いい魚うおがなくツ

て困るツて言いなさる、廻まわつてお上げ、とお前さんが口を利くか

ら、ちヨツ蔦つたちゃんの言うこツた。

脛すねを達たて引ひけ、と二三度行つたわ。何じやねえか、一度お前めえ、お

う、先公、居るかいつて、景氣けいきに呼んだと思おもいねえ。」

お蔦つたは莞にっこり爾して、

「せんこうツて誰のこつたね。」

「内の、お友達よ。河野さんは、学士だとか、学者だとか、先生

だとか言うこツたから、一ツ奉つて呼んだのよ。」
と鰭ひれをばつさり。

四

「可いいじゃねえか、お前めえ、先公だから先公よ。何も野郎とも兄きょう弟でえとも言つたわけじゃねえ。」

と庖丁の尖さきを危すべくひっこすらして、鼻の下を引擦つて、

「すると何だ。肥ふとつちよ満のお三どんが、ぶつちよう面をしやあが

つて、旦那様とか、先生とかお言いなさい、御近所へ聞えます、
と吐ぬかしただろうじゃねえか。

ええ、そんなに奉られたけりや三太夫でも抱えれば可い。口に税を出すくらいなら、憚はばかんながら私わつしあ酒も啖くらわなけりや魚も売らねえ。お源ちゃんの前めえだけれども。おつとこうした処は、お尻の方だ。」

「そんなに、お邪魔なら退どけますよ。」

お源が俎板を直して向直る。と面おもてを合わせて、

「はははははは、今日こんちあ、」

「何かい、それで腹を立てて行ゆかないのかい。」

「そこはお前さんに免じて肝かんの虫を圧おさえつけた。翌あくるひ日も廻まわった

がね、今度は言い種いぐさがなお気に食わねえ。

今日けふはもうお菜かずが出来たから要らないよサ。合が点ってんなるめえじ

やねえか。^{わっし}私が商う魚だつて、品に因つちや好^{すき}嫌^{きれ}えは当^{あたり}然^{めえ}

だ。ものを見てよ、その上で欲しくなきや止すが可い。喰いたく

もねえものを勿^{もつてえ}体ねえ、お附合いに買うにや当りやせん、食も

たれの曖^{おくび}なんぞで、せせり箸をされた日にや、第一魚^{うお}が可哀相だ。

こつちはお前^{めえ}、河岸で一番首を討取る氣組みで、佳いものを仕

入れてよ、一ツおいしく食わせてやろうと、汗みずくで駈附ける

んだ。醜^{すべた}女^{いろ}が情人を探しはしめえし、もう出来たよで断られちゃ、

間尺に合うもんじゃねえ。ね、薦ちゃんの前だけれど、」

「今度は私が背後^{うしろ}を向こうか。」

とお薦は、下に居る女中の上から、向うの棚へ手を伸ばして、

摺鉢^{すりばち}に伏せた目筈^{めざる}を取る。

「そらよ、こつちが旦だんの分。こりやお源坊のだ。奥おく様はあらが可い、煮るとも潮うしおにするともして、天窓あたまを噛かじりの、目球めだまをつるりだ。」

「私は天窓を噛かむのかい。」

お薦すすは莞にっこり爾りして、め組にその笊ざるを持たせながら、指の尖すみで、涼しい鯛たいの目をちよいと当ある。

「ワンワンに言うようだわ、何だねえ、失礼しつれいな。」

とお源げんは柄杓ひしやくで、がたりと手桶ておけの底そこを汲くむ。

「田舎いんげものめ、河野かのの邸やしへ鞍くら替がえしろ、朝飯あさめしに牛ぎゆうはあつても、鯛たいの目を食たった犬いぬは昔むかしから江戸えどにや無なえんだ。」

「はい、はい、」

手桶を引立てて、お源は腰を切つて、出て、溝板を下駄で鳴らす。

「あれ、邪険にお踏みでない。私の情人が居るんだから。」
「情人がね。」

「へい、」

と言つたばかり、こつちは忙がしい顔色で、女中は聞棄てにして、井戸端へかたかた行く。

「溝の中に、はてな。」

印半纏の腰を落して、溝板を見当に指しながら、ひしやげた帽子をくるりと廻わして、

「変つてますね。」

「見せようか。」

「是非お目に懸^{かか}りてえね。」

「お待ちよ、」

と目筈^{ながし}は流へ。お蔭は立直つて腰障子へ手をかけたが、溝^{どぶ}の上に背伸をして、今度は氣構えて勿体らしく酸^{ほおずき}漿をクウと鳴らすと、言合せたようにコロコロコロ。

「ね、可愛いだろう。」

カタカタカタ!

「蛙^{けえろ}だ、蛙だ。はははは、こいつア可い。なるほど蔭ちゃんの情

人かも知れねえ。」

「朧^{おぼろづきよ}月夜の色なんだよ。」

得意らしく済ました顔は、柳に対して花やかである。

「畜生め、拝んでやれ。」

と好事ものずきに蹲しゃがみこ込んで、溝板を取ろうとする、め組は手品の玉手箱の蓋ふたを開ける手つきなり。

「お止しよ、遁にげるから、」

と言う処へ、しとやかに、階子段はしごだんを下りる音。トタンに井戸

端で、ざあと鳴ったは、柳の枝に風ならず、長閑のどかに釣瓶つるべを覆かえしたのである。

見知越

五

続いてドンドン粗略ぞんざいに下りたのは、名を主税ちからという、当家、早瀬の主人で、直ぐに玄関に声が聞える。

「失礼、河野さんに……また……お遊びに。さようなら。……」

格子戸の音がしたのは、客が外へ出たのである。その時、お薦の留めるのも聞かないで、溝どぶなる連弾つれびきを見届けようと、やにわにその蓋を払ったため組は、蛙の形も認めない先に、お薦がすつと身を退ひいて、腰障子の蔭へ立隠れをしたので、ああ、落人でもな
いに気の毒だ、と、客はどんな人間だろうと、格子から今

出た処を透かして見る。とそこで一つ腰を屈めて、立直った束髪は、前刻から風説のあつた、河野の母親と云う女性。

黒の紋羽二重の紋着羽織、ちと丈の長いのを襟を詰めた後姿。悴が学士だ先生だというのでも、大略知れた年紀は争われず、髪は薄いのが、櫛にてらてらと艶が見えた。

背は高いが、小肥に肥った肩のやや怒つたのは、妙齡には御難だけれども、この位な年配で、服装が可いと威が備わる。それに焦茶の肩掛をしたのは、今日あたりの陽気にはいささかお荷物だろうと思われるが、これも近頃は身躰の一ツで、貴婦人方は、菖蒲が過ぎても遊ばさるる。

直ぐに御歩行かと思うと、まだそれから両手へ手袋を嵌めたが、

念入りに片手ずつ手首へぐつと扱いた時、襦袢じゆばんの裏の紅いのが
チラリと翻かえる。

年とし紀のほどを心づもりに知つたため組は、そのちらちらを一目見
ると、や、火の粉が飛んだように、へツと頸うなじを窘すくめた処へ、

「まだ、花道かい？」

とお蔦こしえが低声。

「附際つけぎわ々々、」

ともう一息め組の首を縮すくめる時、先方さきは格子戸に立かけた蝠こうちも
傘りがさを手を取つて、またぞろ会釈がある。

「思入れ沢山たくさんだ。いよう！」

おつとその口を塞いだ。声はもとより聞えまいが、こなたに人

の居るは知れたろう。

振返つて、額の広い、鼻筋の通つた顔で、屹きつと見越した、目が光つて、そのまま悠々と路地を町へ。——勿論勝手口は通らぬのである。め組はつかつかと二足三足、

「おやおやおや、」

調子はずれな声を放つて、手を払げてぼうとなる。

「どうしたの。」

「可おか訝かしいぜ。」

と急に威勢よく引返ひっかえして、

「あれが、今のが、その、河野ツてえのの母おふくろ親かね、静岡だつて、故郷くにあ、」

「ああ。」

「家は医師いしやじゃねえかしらん。はてな。」

「どうした、め組。」

とむぞうさに台所へ現われた、二十七八のこぎつぱりしたのは主税である。

「へへへへへ、」

満面に笑えみを含んだ、め組は蓮葉帽子はすつばの中から、夕映ゆうやけのようがな顔色しよく。

「お早うござい。」

「何が早いものか。もう午飯おひるだろう、何だ御馳走は、」

と覗のぞ込んで、

「ははあ、鯛たいだな。」

「鯛とおつしやいよ、見ツともない。」

とお蔦が笑う。

「他の魚屋の商うのは鯛たいさ、め組のに限つちや鯛たいよ、なあ、めい公。」

「違えねえ。」

「だって、貴郎あなたは柄にないわ、主公様だんなさまは大人しく鯛魚たいとととおつしやるもんです、ねえ、めのさん。」

「違えねえ。」

主税は色気のない大息ついて、

「何なんにしろ、ああ腹はらが空いたぜ。」

「そうでしようツて、寝坊をするから、まだ朝御飯を食^{あが}らないもの。」

「違えねえ、^{たしか}確にアリヤ、」

と、め組は路地口へ伸上る。

六

「大分御執心のようにだが、どうした。」

と、め組のその素振に目を着けて、主税は空^{すきはら}腹だというのに。

……

「後姿に惚れたのかい。おい、もう可^いい加減なお婆さんだぜ。」

「だって貴郎あなたにやお婆さんでも、め組には似合いな年紀としごろだわ。ねえ、ちよいと、」

「へへへ、違えねえ。」

「よく、（違えねえ。）を云う人さ。」

「だから、確たしかだろうと思うんでさ。」

と呟つぶやいて独ひとりで飲込み、仰向あやむいて天秤棒を取りながら、

「旦那、」

「己おら御免だ。」と主税は懐手で一ツ肩ゆすを揺る。

「え、何を。」

「文でも届けてくれじゃないか。」

「御串戯ごじょうだん。いえさ、串戯は止して今のお客は直ぐに南町うちの家へ

帰りそうな様子でしたかね。」

「むむ、ずつと帰ると言つたつけ。」

「難ありがて有え、」

額をびつしやり。

「後を慕つて、おおそうだ、と遣やれ。」

「行くのかい、河野さんへ。」

「ちよつぴりね、」

「じゃ可いけれど。貴郎、」

と主税を見て莞爾にっこりして、

「めい公がね、また我儘わがままを云つて困つたんですよ。お邸風を吹

かしたり、お惣菜並に扱うから、河野さんへはもう行かないツて。

折角お頼まれなすったものを、貴郎が困るだろうと思つて、これから意見をしてやろうと思つた処だったのよ。」

「そうか。」

となぜか、主税は気の無い返事をする。

「御覧なさい。そうすると急にあの通り。ほんとうに気が変わるつちやありやしない。まるで猫の目ね。」

「違えねえ、猫の目の犬の子だ。どっこい忙がしい、」
と荷を上げそうにするのを見て、

「待て、待て、」

「沢山よ。貴郎の分は三切あるわ。まだ昨日きのうのも残つてるじゃありませんか。めのさん、可いんだよ。この人にね、お前の盤台を

覗かせると、皆欲みんなほしがるンだから……」

「これ、」

旦那様苦しい顔で、

「端近こっで何の事ことたい、野良猫に扱こいやあがる。」

「だっ……て、」

「め組も黙もくって笑わらってる事はない、何か言え、営業えいぎやの妨さまたげ害がいをす
る婦おんなだ。」

「肯きかないよ、めの字、沢山さわやまなんだから、」

「まあ、お前、」

「いいえ、沢山、大事な所帯すてだわ。」

「驚おどきますな。」

「私、もう障子を閉めてよ。」

「め組、この体だ。」

「へへへ、こいつばかりや犬も食わねえ、いや、四寸しずつ食あがりまし。」

「おい、待てと云うに。」

「さつさとおいでよ、魚屋のようでもない。」

「いや、遣瀬やるせがねえ。」

と天秤棒てんべんぼうを心しんにして、め組は一ツくるりと廻る。

「お菜かぜのあとねだりをするんじや、ないと云うに。」

と笑いながらお蔭にらを睨んで、

「なあ、め組。」

「ええ、」

「これから河野へ行くんだらう。」

「三枚並で駈附けませ。」

「それに就いてだ、ちよいと、ここに話が出来た。」

七

「その、河野へ行くに就いてだが、」

と主税は何か、言淀んで、

「何は、」

お蔭に目配せ、

「茶はないのか。」

「お茶ツて？ 有りますわ。ほほほほ、まあ、人に叱言こごとを云う癖に、貴郎あなたこそ端近で見ツともないじやありませんか―ありますわ―さあ、あっちへいらつしやい。」

と上ろうとする台所に、主税が立塞がっているので、袖の端をちよいと突いて、

「さあ、」

め組は威勢よく、

「へい、跡は明晩……じゃねえ、翌あしたの朝だ。」

「待まちなツてば、」

「可まいよ、めのさん。」

「はて、どうしたら、」と首を振る。

「お前たちは、」

と主税は呆れた顔で呵々からからと笑つて、

「相応に気が利かないのに、早飲込だからこんがらがつて仕様が
ない。め組もまた、さんざ油を売った癖に、急にそわそわせずと
もだ。まあ、待て、己おれが話があると言えば。

そこでだ……お茶と申すは、冷たい……」

と口へつけて、指で飲む真似。

「と行やる一件だ。」

「め組に……」

「沢山だ、沢山だ。わっし私なら、」

と声ばかり沢山で、俄然^{がぜん}として蜂の腰、竜の口、させ、飲もうの構^{かまえ}になる。

「不可^{いけ}ません、もう飲んでるんだもの。この上^{あお}煽^{あお}らして御覽^{ごらん}なさい。また過日^{いつか}のように、ちよいと盤台^{ばんたい}を預^{まか}つとくんねえ、か何かで、」

お蔭^{かげ}は半纏^{はんぢん}の袖^{そで}を投^なげて、婀娜^{あだ}に酔^よッぱらいを、拳固^{こぶ}で見せて、「それツきり、五日の間行方^{ゆくえ}知れずになつちまう。」

「旦那、こうなると頂^{いただき}きてえね、人間^{にんげん}は依怙^{いこじ}地^ぢなもんだ。」

「可^いいから、己^{おれ}が承知^{しやうち}だから、」

「じゃ、め組^{めぐみ}に附合^{つがひ}つて、これから遊^{あそ}びにでも何^{なに}でもおいでなさい。お腹^{おな}が空^{すく}いたって私^{わたし}、知らないから。さあ、そこを退^どいて頂^{いただき}

戴よ、通れやしないわね。」

「ああ、もしもし、」

主税は身を躲かわして通しながら、

「御立腹の処を重々恐縮でございしますが、おついでに、手前にも一杯、同じく冷いのを、」

「知りませんよ。」

とつつと入る。

「旦那も、ゆすり方は素人じゃねえ。なかなか馴れてら、」

もう飲みかけたようなもの言い、腰障子から首を突込み、

「今度八丁堀の私わっしの内へ遊びに来ておくんなせえ。一番ひとつ私がね、

鼻々左衛門かかあざえもんに酒を強請ねだる呼吸というのをお目にかけます。」

「女房かみさんが寄せつけやしまい、第一びつくり吃驚するだろう、己なんぞが飛込んじや、山の手から猪いのししぐらいに。所かわれば品かわるだ、

なあ、め組。」

と下流したながしへかけて板の間へ、主税は腰を掛け込んで、

「ところで、ちと申かねるが、今の河野の一件だ。」

「何です、旦、」

と吃驚するほど真顔。

「お前めえさんや、奥様おくさんで、私わつしに言い憎いつて事はありやしねえ、

また私が承つて困るつて事もねえじやねえか。

鼻かかあ々を貸せとも言いなさりやしめえ、早い話が。何また御使い

道がありや御用立て申します。」

「打ぶ附つけた話がこうだ。南町はちと君には遠廻りの処を、是非廻つて貰もらいたいと云うもんだから、家内うちで口を利用して行くゆくようになったから、ここがちと言いい憎にくいのだが、今云つた、それ、膚はの合あひいの合あわいない処だ。

今来た、あの母お親ふも、何のかのつて云つてゐるからな、もう彼家あへは行かない方が可あいいぜ。心持あを悪くしてくれちや困るよ。また何だ、その内に一杯お奢ごるから。」
とまめやかに言う。

皆まで聞かず、め組は力んで、

「誰が、誰があんな許へ、とこ私ア今も、わっしだからそう云つてたんで、頼まれたツて行きやしねえ。」

「ところが、また何か気が變つて、三枚並で駈附けるなぞと云うからよ。」

「そりや、何でさ、ええ、ちよいとその気になりやなツたがね、商いになんか行くもんか。あの母おふくろ親ツて奴を冷かしに出かける肝はらでさ。」

「そういう料りようけん簡だから、お前、南町御構いになるんだわ。」

と盆の上に茶呑茶碗……不心服な二人分……ににん焼海苔やきのりにはりはりは心意気ながら、極めて恭しからず押附おツつけものに粗雑ぞんざいに持つて、

お蔭が台所へあらわ顕れて、

「お客様は、め組の事を、何か文句を言つたんですか。」

「文句はこつちにあるんだけれど、言分は先方さきにあつたのよ。」

と盆を受取つて押出して、

「さあ、茶を一ツ飲みたまえ。時に、お茶菓子にも言分があるね、もうちつとどうか腹きたなに溜りそうなものはないかい。」

「貴郎のように意地汚きたなではありません。め組は何にも食べやしないのよ。」

「食べやしねえばかりじゃありませんや、時々、このせいで食べられなくなる騒ぎだ。へへへ、」

と帽子を上へ拔上げると、元気に額の皺しわを伸ばして、がぶりと

一口。鵺せきれいの尾のごとく、左の人指ひとさしをひよいと芴はね、ぐいと首を据えて、ペロペロと舌したなめず舐なる。

主税はむしやりと海苔を頬張り、

「め組は可いが己の方さ、何とももつて大空腹の所だから。」

「ですから御飯になさいなね、種いろん々な事いっを言いて、お握飯むすびを拵こしらえろつて言いいかねやしないんだわ。」

「実は……」と莞爾にここにこ々々、

「その気なきにしもあらずだよ。」

「可い加減になさいまし、め組は商売がありますよ。疾はやくお話しなさいなね。」

「そう、そう。いや、可い気なもんです。」

と糸底を一つ撫でて、

「その言分というのは、こうだ。どうも、あの魚屋も可いが、門の外から（おう）と怒鳴り込んで、（先公居るか。）は困る。この間も御隠居をつかまえて、こいつあ婆さんに食わしてやれば、いかにもあんまりです。内じやがえんに知己ちかづきがあるようで、真まことに近所きまりへ極きまりが悪い。それに、聞けば芸者屋待合なんぞへ、主まに出で入はいりをするんだそうだから、娘たちのためにもならず、第一家庭の乱れです。また風説うわさによると、あの、魚屋の出入でいりをする家は、どこでも工面こうめんが悪いって事ことだから、かたがた折角せつかく、お世話を願ねがったそうだけれど、宜よろしいように、貴下あなたから……と先ずぎつところよ。」

め組より、お蔭が呆れた顔をして、

「わざわざその断りに来なすつたの。」

「そうばかりじゃなかったが、まあ、それも一ツはあつた。」

「仰山だわねえ。」

「ちと仰山なようだけれど、お邸つき合いのお勝手口へ、この男が飛込んだんじゃ、小火ぼやぐらいには吃驚びっくりしたろう。馴れない内は時々火事かと思うような声で怒鳴り込むからな。こりや世話をしたのが無理だった。め組怒つちや不可いけない。」

「分つた……」

と唐突だしぬけに膝を叩いて、

「旦那、てつきりそうだ、だから、私ア違えねえツて云つたんだ。」

彼奴あいつ、兇状持だ。」

「ええー」

何としたか、主税、茶碗酒をふらりと持った手が、キッチンと極きまる。

「兇状持え？」とお蔦も袖を抱いたのである。

め組は、どこか当なしに睨にらむように目を据えて、

「それを、私わっしア、私アそれをね、ウイ、ちゃんと知ってるんだ。

知ってるもんだから、だもんだから。……」

「ウイ、だから私が出入わつしつちや、どんな事で暴露ばれようも知れねえという肚はらだ。こつちあ台所でえどこまでだから、ちつとも気がつかかなかつたが、先方さきじや奥から見懸けたもんだね。一昨日おととい頃静岡から出て来たつて、今も蔦ちやんの話だつて。

状ざまあ見やがれ、もつと先から来ていたんだ。家風に合わねえも、近所の外聞もあるもんか、笑わらかしゃあがら。」

と大きに氣勢きおう。

「何だ、何だ、兇状とは。」

「あの、河野さんの母おつかさん様がかい。」

とお蔦も真顔で訝いぶかつた。

「あれでなくつて、兇状持は、誰なもんかね、」

「ほほほ、あなた貴郎、まじめ真面目で聞くことはないんだわ。め組の云う兇

状持なら、あの令夫人おくさんがああ見えて、内々大福餅がお好きだぐら

いなもんですよ。お彼岸にお萩餅はぎこしらを拵こしらえたつて、自分の女房かみさんを

敵かたきのように云う人だもの。ねえ、そうだろう。めの字、何か甘い

ものが好すきなんだろう。」

「いずれ、何か隠かくしぐい喰いさ、盗人どろぼうじょうご上戸じやうごなら味方同士だ。」

「へへ、その通り、隠喰いいにや隠喰いのだが、喰いつたものがね、」

「何だ、」

「馬でさ。」

「馬だと……」

「旅俳やくしや優いかい。」

「いんや、馬丁……貞造つて……馬丁でね。私が静岡に落ちてた時分の飲友達、旦那が戦争に行った留守に、ちよろりと嘗めたが、病着で、嘔の出るほど食ったんだ。」

主税は思わず乗出して、酒もあつたが元気よく、

「ほんとうか、め組、ほんとうかい。」

と事を好んだ聞きようをする。

「嘘よ、貴郎、あの方たちが、そんなことがあつて可いもんですか、めの字、滅多なことは云うもんじゃありません、他の事と違うよ、お前、」

「あれ、串戯じゃねえ。これが嘘なら、私の鯛は場違だ。」

ええ、旦那、河野の本家は静岡で、医者だろうね。そら、御覧じ

ろ、河野ツてえから気がつかなかった。門に大な榎おおきえのきがあつて、榎やしきと云や、お前めえ、興津江尻まで聞えたもんだね。

今見りや、ここを出た客てえのは、榎邸おきさんの奥様で、その馬丁いろおんなの情婦だ。

だから私ア、冷かしに行つてやろうと思つたんだ。嘘にもほんとうにも、児こがあらあ、児が。ああ、

また一口がぶりと遣やつて、はりはりを噛かんだ齒をすすつて、
「ねえ、大勢小児こどもがきましょう。」

「南町の学士先生もその一人にん、何でも兄弟は大勢ある。八九人かも知れないよ、いや、ほんとうなら驚いたな。」

「おお、待ちねえ、その先生は幾歳いくつだね。」

「六か、七だ。」

「二十とだね、するとその上か、それとも下かね。どっち道その人じやねえ。何でも馬丁の因果のたねは婦人おんななんだ。いずれ縁附いちやいるだろうが、これほど確たしかな事はねえ。私わつしア特別で心得てるんで、誰も知つちやいますめえよ。知らぬは亭主ばかりなりじやねえんだから、御存じは魚屋惣そうすけ助（本名）ばかりなりだ。

はははは、下郎は口のさがねえもんだ。」

ぐいと唇を撫でた手で、ポカリと茶碗の蓋ふたをした。

「危え、危え、冷かしに行くどころじやねえ。鰻汁てっぽうとこいつだ

けは、命がけでも留やめられねえんだから、あの人の酌でも頂き兼ねねえ。軍医の奥さんにお手のもので、毒いっぶくも薬装られちや大変

だ。だが、何だ、旦那も知らねえ顔でいておくんねえ、とかく町内に事なかれだからね。」

「ああ、お前ももうおいででない。」

「行くもんか、行けつたつてお断りだ。お断り、へへへ、お断り、」

と茶碗を捻ひねくる。

「厭いやな人だよ。仕様がなないね、さあ、茶碗をお出しなね。」

「おお、」

と何か考え込んだ、主税が急に顔を上げて、

「もうちつと精くわしくその話を聞かせないか。」

井戸端から、婦人おんなの凧たこが切れて来たかと、お源が一文字に飛込

んだ。

「旦那様、あの、何が、あの、あのあの、」

矢車草

十

お源のその慌し^{あわただ}さ、駈^かけて来た呼吸^{いき}づかいと、早口^{せきこみ}の急^{せきこみ}込^{こみ}に
 真赤^{まっか}になりながら、直ぐに台所から居間^{つつき}を突切^{つつき}つて、取次^{みもだ}ぎに出
 る手廻^{たすき}しの、襷^{たすき}を外^{はた}すのが膚^{はだ}を脱^{はだ}ぐような身悶^{みもだ}えで、

「真砂町の、」
まさごちちよう

「や、先生か。」

真砂町と聞いただけで、主税は素直まっすぐに突立ち上る。お蔭はさそくに身を躲かわして、ひらりと壁くっつに附着いた。

「いえ、お嬢様でございます。」

「嬢的たえ、お妙たえさんか。」

と謂いうと齊ひとしく、まだ酒のある茶碗を置いた塗盆を、飛上る足で蹴覆けかえして、羽織ひもの紐ひもを引拵ひつつかんで、横飛びに台所を消えようとして、

「赤いか、」

お蔭を見向おもていて面を撫でると、涼しい瞳で、それ見たかと云う

めつき
目色で、

「誰が見ても……」と、ぐつと落着く。

「弱った。」と頭つむりをおさえる。

「朝湯々々、」と莞爾にっこり笑う。

「軍師なるかな、諸葛孔明しよかつこうめい。」といい棄てに、ばたばたとん

と出て行つたは、玄関に迎えるのである。

ふらふらとした目を据えて、まだ未練にも茶碗を放さなかつた、
め組の惣助、満面の笑えみに崩れた、とろんこの相格そうごうで、

「いよう、天人。」と向うを覗のぞく。

「不可いけないよ、」

と強きつく云う、お蔭かげの聲こゑが屹きつとしたので、きよとんとして立つ処

を、横合からお源の手が、ちよろりとその執心の茶碗を搔攪つて、

「失礼だわ。」

と極めつける。天下大變、吃驚して、黙って天秤の下へ潜ると、ひよいと盤台の真中へ。向うの板塀に肩を寄せたは、遠くから路を開く心得、するするとこれも出て行く。

もう、玄関の、格子が開きそうなものだと思つと、音もしなければ、声もせぬので、お蔭が、

「御覽、」と目配せする。

覗くは失礼と控えたのが、遁腰で水口から目ばかり出したと思つと、反返るように引込んで、

「大変でございます。お台所口へいらつしやいます。」

「ええ、こちらへ、」

と裾を捌くと、何と思つたか空を望み、破風から出そうにきりりと手繰つて、引窓をカタリと閉めた。

「あれ、奥様。」

「お前、そのお盆なんぞ、早くよ。」と釣鐘にでも隠れたそうに、肩から居間へ翻然と飛込む。

驚いたのはお源坊、ぼうとなつて、ただくるくると働く目に、一目輝くと見たばかりで、意気地なくぺたぺたと坐つて、偏ひとえに恐入つてお辞儀をする。

「御免なさいよ。」

と優やさしい声、はツと花降る留南奇とめきの薫に、お源は恍惚うつとりとして顔を上げると、帯も、袂たもとも、衣紋えもんも、扱帯しごきも、花いろいろの立姿。まあ！ 紫と、水浅黄と、白と紅咲くれないき重なった、矢車草を片袖に、月夜に孔雀くじやくを見るような。め組が刎返はねかえした流汁の溝溜どぶだまりもこれがために水澄んで、霞をかけたる蒼空あおぞらが、底美しく映るばかり。先祖が乙姫に恋歌して、かかる処に流された、蛙の児よ、いでや、柳の袂に似た、君の袖すがに縫ぬれかし。

妙子は、有名な独逸ドイツ文学者、なにがし大学の教授、文学士酒井俊蔵の愛娘である。

父とうさん様は、この家やの主人、早瀬主税には、先生で大恩人、且つ

御主おしゆうに当る。さればこそ、嬢様さんと聞くと齊ひとしく、朝から台所で
 冷酒ひやざけのぐい煽あおり、魚屋と茶碗を合わせた、その挙動ふるまい魔のごと
 きが、立たちどころ処ちこに影を潜めた。

まだそれよりも内証ないしよなのは、引窓を閉めたため、勝手の暗い
 ……その……誰だか。

十一

妙子の手は、矢車の花の色に際立って、温しなやか柔な葉の中に、枝
 をちよいと持替えながら、

「こんなものを持っていますから、こちらから、」

とまごつくお源に氣の毒そう。ふつくりと優しく微笑み、

「お邪魔をしてね。」

「どういたしましたして、もう台なしでございまして、」と雑巾を引ひツツか
搦つかんで、

「あれ、お召ものが、」

と云う内に、吾妻下駄あずまげたが可愛く並んで、白足袋薄く、藤色の裾
を捌はいて、濃かいお納戸地なんどに、浅黄と赤で、撫子なでしこと水の繻珍しゅちんの
帯腰、向う屈かがみに水瓶みずがめへ、花はな董なすみれの簪かんざしと、リボンの色が、蝶
々の翼薄黄色に、ちらちらと先ず映つて、矢車を挿込むと、五彩
の露は一入ひとしおである。

「ここに置かして頂戴よ。まあ、お酒の香においがしてねえ、」と手を

放すと、揺々ゆらゆらとなる矢車草より、薫ばかりも玉に染む、顔かんばせ酔せいいて桃に似たり。

「御覧なさい、矢車が酔ってふらふらするわ。」と罪もなく莞爾にっこりする。

お源はどぎまぎ、

「ええ、酒屋の小僧が、ぞんざいだものでごさいますから。」

「ちよいと、溢こぼしたの。やっぱり悪いたずら戯ずな小僧さん？ 犬にばかり弄からかっているんでしよう、私とこン許このものも同一よ。」

一いつかど廉れん社会観しゃかいかんのような口ぶり、説くがごとく言いながら、上に

上つて、片手にそれまで持っていた、紫の風呂敷包、真四角なのを差置いた。

「お裾が汚れます、お嬢様。」

「いいえ、可いのよ、」

と褻つまは上げてても、袖は板の間に敷くのであった。

「あの、お惣菜になすって下さい。」

「どうも恐れ入ります。」

「旨おいくはありませんよ、どうせ、お手製なんですから。」

少し途切れて、

「お内ですか。」

「はい、」

「主税さんは……あの旦那様は、」

と言いかけて、急に気が着いたか、

「まあ、どうしたの、暗いのねえ。」

成程、そこまでは水口の明あかりが取れたが、奥へ行く道は暗かった。

「も、仕様がなかったのでございますよ、ほんとうに、あら、どうしましよう。」

とお源は飛上つて、慌てて引窓を、くるり、かたり。颯さつと明る虹の幻、娘の肩から矢車草に。

その時台所へ落着いて顔を出した、主人あるじの主税と、妙子は面おもてを見合わせた。

「驚おどかして上げましようと思つたんだけれども。」と、笑つて串し戲ようだんを言いながら、瓶かめなる花と対ついたけ丈たけに、そこに娘が跪つひい居いるので、渠かれは謹かしこんで板いたに片手を支たいたのである。

「驚かしちや、私厭いやですよ。」

「じゃ、なぜそんな水口からなんぞお入んなさいます。ちやんと玄関へお出迎いをしているじゃありませんか。」

「それでもね、」

と愛々しく打傾き、

「お惣菜なんか持込むのに、お玄関からじゃ大業ですもの。それに、あの、花にも水を遣りたかつたの。」

「綺麗ですな、まあ、お源、どうだ、綺麗じゃないか。」

「ほんとうにお綺麗でございますこと。」と、これは妙子に見み惚とれている。

「同じく頂戴が出来ますんで？」

「どうしようかしら。お茶を^{あが}食べるんなら^{いい}可けれど、お酒を^{のむ}飲んじや、可哀相だわ。」

「え、酒なんぞ。」

「厭な、おほほ、主税さん、飲んでるのね。」

「はは、はは、さ、まあ、二階へ。」

と^{にげだ}遁出すような。後へするする衣の^{きぬ}音。階子^{はしごだん}段の下あたりで、

主税が思出したように、

「成程、今日は日曜ですな。」

「どうせ、そうよ、（日曜）が遊びに来たのよ。」

二階の六畳の書斎へ入ると、机の向うへ引附けるは失礼らしいと思つたそうで、火鉢を座中へ持つて出て、床の間の前に坐り蒲団とん。

「どうぞ、お敷きなさいまし。」

主税あらたまは更つて、慇懃いんぎんに手を支ついて、

「まあ、よくいらつしやいました。」

「はい、」とばかり。長年内に居た書生の事、随分、我わが儘ままも言

つたり、甘えたり、勉強の邪魔もしたり、悪口も言つたり、喧嘩けんか

もしたり。帽子と花簪の中であつた。が、さてこうなると、心は

おなじおなじへへここおおびびと扱し帯ぎほど隔へてが出来る。主税もその扱しにすれば、

お嬢さんも晴がましく、顔の色とおなじような、ハンケチ毛巾たよりに
 して、姿と一緒にひらひらと動かすと、かげろう暈に陽炎が燃えるような
 り。

「御無沙汰を致しまして済みません。おくさん奥様もお変りがございま
 せんで、結構でございます。先生は相変わらず……めしあが飲酒りますか
 。

「誰か、たれと同おんなじ一のように……やっぱり……」とにつこり莞爾。落着かな
 い坐りようをしているから、火鉢の角へ、力を入れて手を掛けな
 がら、床の掛物に目をそ反らす。

主税は額に手を当てて、

「いや、恐縮。ですが今日のは、こりや逆上のぼせませんですよ。前さ

刻朝湯つきに参りました。」

「父様とうさんもね、やつぱり朝湯に酔うんですよ。不思議だわね。」

主税は胸を据えた体ていに、両膝にぴたりと手を置き、

「平に、奥様おくさんには御内分。貴女あなたまた、早瀬が朝湯に酔っていた

なぞと、お話をなすつては不可いけませんよ。」

「ほんとうに貴郎あなたの半分でも、父様が母様の言うことを肯きくと可

いんだけれど、学校でも皆みんなが評判をするんですもの、人が悪いの

はね、私の事を（お酌さん。）なんて冷評ひやかすわ。」

「結構じゃありませんか。」

「厭だわ、私は。」

「だって、貴女、先生がお嬢さんのお酌で快く御酒を召食めしあがれば、

それに越した事はありません。後いまにその筋から御褒美ごほうびが出ます。

養老の滝でも何でも、昔から孝行な人物の親は、大概酒を飲みますものです。貴女を（お酌さん。）なぞと云う奴は、親のために焼芋を調べ、牡丹餅おはぎを買い……お茶番の孝女だ。」

と大おおに撥いくつて笑うと、妙子は怨めしそうな目で、可愛らしく見たばかり。

「私は、もう帰ります。」

「御申ごしやうだん戯だんをおっしゃっては不可いません。これからその焼芋おはぎだの、牡丹餅おはぎだの。」

「ええ、私はお茶番の孝女ですから。」

「まあ、御褒美を差上げましょう。」

と主税が引寄せる茶道具の、そこらをなが視めて、

「お客様があつたのね。お邪魔をしたのじやありませんか。」

「いいえ、もう帰つた後です。」

「厭な人ね？」

と唐だしぬけ突に澄まして云う。

「見たんですか。」

「見やしませんけれど、御覧なさいな。お茶台に茶碗が伏ふつてい
るじやありませんか、お茶台に茶碗を伏せる人は、貴下嫌きらいだもの、

父様も。」

「天晴あつぱれ御鑑定、本阿弥ほんあみでいらつしやる。」と急須きびしよ子をあける。

「誰方どなたなの？」

「御存じのない者です。河野と云う私の友達……来ていたのはその母親ですよ。」

「河野ね？ 主税さん。」と妙子はふっくりした前髪で打傾き、
「学士の方じゃなくって、」

「知っていらっしやるか。」と茶筒にかけた手を留めた。

「その母おっかさん様と云うのは、四十余りの、あの、若造りで、ちよ

いとお化粧なんぞして、
細ほそおもて面の、鼻筋の通った、何だか権式

の高い、違つて？」

「まったく。どうして貴女、」

「私の学校へ、参観に。」

新学士

十三

「昨日は母様が来て御厄介でした。」

と、今夜主税の机の際に、河野英吉が、まだ洋服の膝も崩さぬ前から、

「君、困つたろう、母様は僕と違って、威儀堂々という風で厳肅だから、ははは、」

と肩を揺つて、無邪気と云えば無邪気、余り底の無さ過ぎるよ

うな笑方。文学士と肩書の名刺と共に、あたらし新しいだけに美しい若々しい髯ひげを押揉おしもんだ。ちと目立つばかり口が大きいのに、おおき似合わず声の優しい男で。気焰きえんを吐くのが愚痴のように聞きなされる事がある。もつとも、何をするにも、福、徳とだけ襟を数えれば済む身分。貧乏は知らないと云つても可いいから、愚痴になるわけはないが、自分の親を、その年とし紀で、友達の前で、呼ぶに母様をもつてするのでも大略あらかた解る。酒に酔わずにアルコオルに中あた毒たるような人物で。年とし紀は二十七。従五位勲三等、前さきの軍医監、同姓英ひでおみ臣の長男、七人の同きょうだい胞うちの中に英吉ばかりが男子で、姉が一人、妹が五人、その中縁附いたのが三人で。姉は静岡の本宅に、さる医学士を婿にして、現に病院を開いている。

南町の邸は、祖母おばあさんが監督に附いて、英吉が主人あるじで、三人の妹が、それぞれ学校に通っているのです、すでに縁組みした令嬢たちも、皆そこから通学した。別家のようで且つ学問所、家蔵はこれに桐楊塾と題したのである。漢詩の嗜たしなみがある軍医だから、何等か桐楊の出処があるろう、但しその義審つまびらかならず。

英吉に問うと、素湯さゆを飲むような事を云う。枝も栄えて、葉も繁ると云うのだろう、松柏も古いから、そこで桐楊だと。

説なを為すものあり、曰く、桐楊の桐きりは男児に較べ、楊やなぎは令嬢むすめたちに擬なぞらえたのであろう。漢皇いろをおもんじてけいこくをおもう 重色 思傾 国 …… 楊家ようかに

女じよあり有、と同一おんなじ字だ。道理こそ皆美人であると、それあるいは然しからむ。が男の方は、桐ほうおうに鳳凰、とばかりで出処が怪しく、花は

骨牌なふだから出たようであるから、遂にどちらも信あてにはならぬ。

休題さておき、南町の桐楊塾は、監督が祖母さんで、同窓が嬢たちで、

更に憚はばかる処が無いから、天下泰平、家内安全、鳳凰は舞い次第、

英吉は遊び放題。在学中も、雨桐はじめ鳥からすがね金の絶倍で、しば

しばかいがんに及んだのみか、卒業も二年ばかり後れたけれども、

首尾よく学位を得たと聞いて、親たちは先ず占めた、びきで、あ

おたんの掴つかみだと思うと、手八てはちの蒔まき直なおしで夜泊よどまりの、昼流連ひるながし。

祖母さんの命を承うけて、妹連から注進櫛の齒を挽ひくがごとし。で、

意見かたがたしかるべき嫁もあらばの気構えで、この度母親が上

京したので、妙子が通う女学校を参観したと云うにつけても、意

のある処が解せられる。

「どうだい、君、窮屈な思いをしたろう。」

親が参つて、さぞ御迷惑、と悪気は無いあいさつ挨拶も、母様で、かあさん威

儀で、厳肅で、窮屈な思いを、と云うから、何と豪えらいか、恐入つ

たろう、と極きめつけるがごとくに聞える。

いつも例の調子と知っているから、主税は別に気にも留めず、勿論、

恐入る必要も無いので、

「姑に持とうと云うんじやなし、ちつとも窮屈な事はありません

。」

机の前に鉄拐てつかあぐら胡坐で、悠然と煙草を輪に吹く。

「しかし、君、その自おのずから、何だろう。」

とその何だか、火箸で灰を引ひっか掻いて、

「僕は窮屈で困る。母様がああだから、自から襟を正すと云ったような工合でね。……」

直じきの妹なんざ、随分脱兎だつとのごとしだけれど、母様の前じゃほとんど処女だね。」

と髻ひねを捻ひねる。

十四

「で、何かね、母様かあさんは、」

と主税は笑いながら、わざと同おんなじ一いっのように母様と云つて、煙管きせるを敲たたき、

「しばらく御滞在なんですかい。」

「一月ぐらい居るかも知れない、ああ、」と火鉢に凭掛る。

「じゃ当分謹慎だね。今夜なぞも、これから真直にお帰りだろ
う、どこへも廻りやしますまいな。」

「うふふ、考えてるんだ。」とまた灰に棒を引く。

「相変わらず辛抱が出来ないか。」

「うむ、何、そうでもない。母様が可愛がつてくれるから、来て
いる間は内も愉快だよ。賑じゃあるし、料理が上手だからお菜も
旨いし、君、昨夜は妹たちと一所に西洋料理を奢つて貰つた、僕
は七皿喰つた。ははは、」

と火箸をポンと灰に投て、仰向いて、頬杖ついて、片足を鳶

になる。

「御馳走と云えば内へ来るめ組だが、」

皆まで聞かず、英吉は突放つっぱなしたように、

「ありや君、もう来なくツても可いよ。余り失礼な奴だと、母様が大変感情を害したからね、君から断つてくれたまえ。」

と真面目で云つて、衣兜かくしから手巾ハンケチをそそくさ引張出し、口を拭ふいて、

「どうせ東京の魚だもの、誰のを買ったつて新鮮あたらしいのは無い。

たまに盤台の中で芻はねてると思や、蛆うじで蠢うごくか、そうでなければ比目魚ひらめの下に、手品の鱒どじょうが泳いでるんだと、母様がそう云つたつ
け。」

め組が聞いたら、立たちどころ処ところに汝の一命覚おぼつか束つかない、事を云つて、けろりとして、

「静岡は口の奢つた、旨いものを食う処さ。汽車の弁当でも試みたまえ、東海道一番だよ。」

主税はどこまでも髯のある坊ちゃんにして、逆らわない気で、「いや、何か、手前でもで、め組のものを召めし食あがつて、大層御意に叶ったから、是非寄越してくれと誰かが仰おっしや有るもんだから取あえず差立てたんだ。御家風を存じないでもなかつたけれども、承知の上で、君がたつてと云つたから、」

「僕は構わん。僕は構わんが、あの調子だもの、祖母おばあさんや妹たちあなはもとよりだ。故郷くにから連れて来ている下女さえ吃びっくり驚おどろしたよ。

母様は、僕を呼びつけて談じたです。あんなものに朋輩呼ばわりをされるような悪い事をしたか。そこいらの芸妓げいしやにや、魚屋だの、蒲鉾屋かまぼこの職人、蕎麦屋そばの出前持の客が有ると云うから、お前、どこぞで一座でもおしだらう、とね、叱られたです。

僕は何、あれは通りもんです。早瀬とこの許へ行つても、同一くおなじ、

今日は旨えものを食わせてやろう。居るか、と云つた調子です、

と云つたら、母様が云うにや、当あたりまえ前まえだ、早瀬じゃ、細君……」

と云いかけて、ぐつと支つかえたが、ニヤリとして、

「君、僕は饒舌しやべりやしないよ。僕は決して饒舌らんさ。秘密で居ることを知ってるから、君の不利益になるような事は云わないがね、妹たちが知ってるんだ。どこかで聞いて来てたもんだから、

ついで、」

と気の毒そう。

「まあ、可い、そんな事は構わないが、僕と懇意にしてくれんなら、もうちつと君、遊蕩あそびを控えて貰いたいね。

昨日きのうも君の母様が来て、つくづく若様の不始末を愚痴るのが、何だか僕が取巻きでもして、わツと浮かせるようじやないか。

高利アイスを世話して、口銭を取る。酒を飲ませてお流頂戴ながれ。切々せつせつ

内へ呼び出しちや、花骨牌はなふだでも撒まきそうに思つてるんだ。何の事

はない、美少年録つつもたせのソレ何だつけ、安保箭五郎あほのやごろうな直行おゆきさ。甚しき

は美人局つつもたせでも遣りかねないほど軽蔑けいべつしていら。母様の口ぶり

が、」

とややその調子が強くなつたが、急に事も無げな串戯じょうだんぐち口、

「ええ、隊長、ちと謹んでくれないか。」

「母様の来ている内は謹慎さ。」

と灰を搔きまわして、

「その代り、西洋料理七皿だ。」と火箸をバタリ。

十五

「じゃあ色気より食気の方だ、何だか自棄やけに食うようじゃないか。しかし、まあそれで済みや結構さ。」

「済みやしないよ、七皿のあとが、一銚ひとちょうし子、玉子に海苔のりと来て、

おひけとなると可いんだけど、やっぱり一人で寝るんだから、大きに足が突張つっぱるです。それに母様が来たから、ちつとは小遣があるし、二三時間駈出して行つて来ようかと思う。どうだろう、君、迷惑をするだろうか。」

と甘えるような身体からだつき、座蒲団にぐったりして、横合のぞから覗いて云う。

「何が迷惑さ。君の身体で、御自分お出かけなさるに、ちつとも迷惑な事はない。迷惑な事はないが……」

「いや、ところが今夜は、君の内へ来たことを、母様が知ってるからね。今のような話じゃ、また君が引張出したように、母様に思われようかと、心配をするだろうと云うんだ。」

「お疑いなさるは御勝手さ。癩しやくに障ればたつて、恐い事、何あるものか、君の母親おふくろが何だ？」

と云いかけて、語気をかえ、

「そう云つちまえば、実も蓋ふたもない。痛くない腹を探られるのは、僕だつて厭いやだ。それにしても早瀬へ遊びに行くと云う君に、よく故障を入れなかつたね。」

「うむ、そりやあれです、君に逢わない内は疑うたぐつていないでもなかつたがね、」

あえて臆おく面めんは無い容よう子すで、

「昨日逢きのうつてから、そうした人じゃないようだ、と領うないていた。」

母様はね、君、目が高いんだ、いわゆる士を知る明ありだよ。」

「じゃ、何か、士を知る明があつて、それで、何か、そうした人じゃないようだ、（ようだ。）とまだ疑があるのか。」

「だつてただ一面識なものね、三四度交際たびつきあつて見たまえ。ちやんと分るよ、五度とは言わない。」

「何も母様に交際うには当らんじゃないか。せめて年増でもあればだが、もう婆さまだ。」

と横を向いて、微笑ほほえんで、机の上の本を見た。何の書だか酒井蔵書の印が見える。真砂町から借用のものであろう。

英吉は、火鉢越に覗きながら、その段は見るでもなく、

「年とし紀は取つてるけれど、まだ見た処は若いよ。君、婦人会なんぞじゃ、後姿を時々姉と見違えられるさ。」

で、何だ、そうやって人を見る明が有るもんだから、婿の選択は残らず母様に任せてあるんだ。取当てるよ。君、内の姉の婿にした医学士なんざ大当りだ。病院の立派になつた事を見たまえな。
」

「僕なんざ御選択に預れまいか。」

と気を、その書物に取られたか、木に竹を接いだよつうな事を云うと、もつての外真面目まじめに受けて、

「君か、君は何だ、学位は持つちやおらんけれど、独逸ドイツのいけるのは僕が知ってるからね。母様の信用さえ得てくれりや、何だ。

ええ君、妹たちには、もとより評判が可いんだからね、色男、ははは、」

と他愛なく身体からだ中で笑い、

「だつて、どうする。階下したに居るのを、」

背後うしろを見返り、

「湯かい。見えなかつたようだつけ。」

主税は堪えず失笑ふきだしたが、向直つて話に乗るように、

「まあ、可い加減にして、疾はやく一人貰はつちやどうだ。人の事より御自分が。そうすりや遊蕩あそびも留やみません。安保箭五郎悪い事は言わないが、どうだ。」

「むむ、その事だがね。」

とぐつたりしていた胸を起して、また手巾で口を拭いて、なぜか、縞しまのズボンを揃えて、ちやんと畏かしこまつて、

「実はその事なんだ。」

「何がその事だ。」

「やっぱりその事だ。」

「いずれその事だろう。」

「ええ、知ってるのか。」

「ちつとも知らない。」

と煙管きせるを取って、

「いや、真面目に真面目に、何か、心当りでも出来たかね。」

縁談

十六

時に河野がその事と言えば、いずれ婦おんなに違いないが、早瀬はいつもこの人から、その収しゅう紅こう拾しゅう紫しう、鶯うぐいすを鳴かしたり、蝶もてあそを弄もだりの件について、いや、ああ云つたがこれは何と、こう申したがそれは如何いかに。無心をされたがどうしたものか、なるべくは断りたい、断つたら嫌われようか、嫌われては甚まだ不ず好ずい。一スウイート体恋トでありながら金かね子をくれるは変な工合だ、妙だよ。その意志のある処を知るに苦くるしむ、などと、※紅をさして、蚯みみず蚓ずまでも突附けて、意見？ を問われるには恐れている。

誇るに西洋料理七皿をもつてする、式かたのごとき若様であるから、
 冷評ひやかせば真に受ける、打棄うつちやつて置けば梢しよげる、はぐらかしても
 乗出す。勢い可い加減にでも返事をすれば、すなわち期せずして
 遊蕩あそびの顧問になる。尠すくなからず悩まされて、自分にお薦と云う弱点よわみ
 があるだけ、人知れず冷汗ならいが習であつたから、その事ならもう聞
 くまい、と手強く念を入れると、今夜はズボンの膝を畏かしこまつただけ
 大真面目。もつとも馴染なじみの相談も串じょうだん戲ではないのだけれども。
 特に更あらたまつて、ついにない事、もじもじして、

「実はね、母様も云つたんだ、君に相談をして見ると……」

「縁談だね、真面目な。」

珍らしそうに顔を見て、

「母様から御声懸りで、僕に相談と云う縁談の口は、当時心当りが無いが。ああ、」

と軽く膝を叩いた。

「隣家となりのかい。むむ、あれは別嬪べっぴんだ。ちよいと高慢じゃあるが、

そのかわり学校はなかなか出来るそうだ。」

英吉は小児こどものように頭かぶりを振って、

「ううむ、違うよ。」

「違う。じゃ誰だい。」

と落着いて尋ねると、慌てて衣兜かくしへ手を突込みつつこ、肩を高うして、

一ツ揺ゆつて、

「真砂町の、」

「真砂町!?!」

と聞くや否や、鸚鵡おうむがえ返しに力が入った。床の間にしつとりと露を被かついだ矢車の花は、燈ひの明あかりを余所よそに、暖か過ぎて障子すかを透した、富士見町あたりの大空の星の光を宿して、美しく活いかっている。見よ、河野が座を、斜ななめに避けた処には、昨日きのうの袖の香を留めた、友染の花も、綾あやの霞も、畳の上を消えないのである。

真砂町、と聞返すと斉ひとしく、屹きつとその座に目を注いだが、驚破すわと謂いわば身をもって、影をも守らん意気組であった。

英吉はまた火箸を突支棒つつかいぼうのようにして、押立尻おったてじりをしながら、火鉢の上へ乗掛のっかかって、

「あの、酒井ね、君の先生の。あすこに娘があるんだね。」

「あるさ、」と云つたが、余り取つても着けないようで、我ながら冷かに聞えたから、

「知らなかつたかな、君は。随分その方へかけちや、脱落ぬかりはあるまいに。」

「洋燈台ランプ下暗しで、（と大に洒落おおいしやれて、）さつぱり気が付かなかつた。君とこン許へもちよいちよい遊びに来るんだらう。」

「お成りがあるさ。僕には御主人だ。」

「じや一度ぐらい逢いそうなものだった。」

何か残惜く、かごとがましく、不平そうに謂つたのが、なぜ見せなかつた、と詰なじるように聞えたので、早瀬は石を突流すごとく、
「縁が無かつたんだらうよ。」

「ところがあります、ははは、」と、ここでまた相好とともに足を崩して、ぐたりと横坐りになって、

「思うに逢わずして思わざるに……じゃない。向うも来れば僕も来るのに、此家ここで逢いそうなものだったが、そうでなくって君、学校で見たよ。ああ、あの人の行く学校で、妙子さんの行く学校で。」

と、何だか話しに乗らないから、畳かけて云った。妙子、と早や名のこの男に知られたのを、早瀬はその人のために恥辱のように思つて、不快な色が眉の根に浮んだ。

「どうして、学校で、」

とこの際わざと尋ねたのである。母子おやこで参観したことは、もう

心得ていたのに。

十七

「どうもこうも無いさ。母様と二人で参観に出掛けたんだ。教頭は僕と同窓だからね。先せんにから来て見い、来て見い、と云うけれど、顔の方じゃ大した評判の無い学校だから、馬鹿にしていたが驚いたね。勿論五年級にや佳いいのが居ると云ったつけが、」

「じゃあその教頭、媒なこうど酌や人も遣やるんだな。」

と舌したさき尖したさき三分で切附けたが、一向に感じないで、

「遣やるさ。そのかわり待合や、何かじゃ、僕の方が媒酌人だよ。」

「怪しからん。黒と白との、待て？ 海老茶と緋縮緬ひぢりめんの交換だな。いや、可い面つらの皮だ。ずらりと並べて選取りよりどにお目に掛けます、小格子の風だ。」

「可いじゃないか、学校の目的は、良妻賢母を造るんだもの、生理の講義も聞かせりや、媒酌なこうどもしようじやあないか。」

とこの人にして大警句。早瀬は恐入った体で、

「成程、」

「勿論人を見てするこつた、いくら媒酌人をすればツて、人ごとに許しやしない。そこは地位もあり、財産もあり、学位も有るもんなら、」

と自若として、自分で云つて、意気すこぶ頗る昂然こうぜんたりで、

「講堂で良妻賢母を拵こしらえて、ちゃんと父兄に渡す方が、双方の利益だもの。教頭だつて、そこは考えているよ。」

「で何かね、」

早瀬は、斜めに開き直つて、

「そこで僕の、僕の先生の娘を見たんだな。」

「ああ、しかも首席よ。出来るんだね。そうして見た処、優美しとやかで、品が良くつて、愛嬌あいきようがある。沢山ない、滅多よにないんだ。

高級三百顔色なし。照陽殿裏第一人だよ。あたかも可よ、学校も照陽女学校さ。」

と冷えた茶をがぶりと一口。浮かれの体とおいでなすつて、

「はは、僕ばかりじゃない、第一母様が気に入ったさ。あれなら

河野家の嫁にしても、まあまあ……恥かしくない、と云つて、教頭に尋ねたら、酒井妙子と云うんだ。ちよつと、教員室で立話しをしたんだから、委くわいことは追てとして、その日は帰つた。

すると昨日きのう、母様がここへ訪ねて来たろう。帰りがけに、飯田町みつけから見附を出ようとする処で、腕車くるまを飛ばして来た、母衣ほろの中のがそれだツたつて、矢車の花を。」

と言いかけて、床の間を凝じつと見て、

「ああ、これだこれだ。」

ひよいと腰を擡もたげて、這身はいみにぬいと手を伸ばした様子が、
本引とひんぬ抜きそうに見えたので、
一ひとつも

「河野！」

「ええ、」

「それから。おい、肝心な処だ。フム、」

乗って出たのに引込まれて、ト居直って、

「あのすなほこり砂埃の中を水際立って、駈け抜けるように、そりや綺

麗だったと云うのだ。立留って見送ると、この内の角へ車を下ろしたろう。

そろそろ引ひっかえ返したんです、母様がね。休んでいた車夫に、今

のお嬢さんは真中の家へですか。へい、さようで、と云うのを聞いて帰ったのさね。」

と早口に饒舌しゃべって、

「美人だねえ。君、」とゆったり顔を見る。

「ト遣つた工合は、僕が美人のようだ、厭だ。結婚なんぞ申込んじや、」と笑いながら、大おおに諷おおいするかのごとくに云つて、とんと肩を突いて、

「浮気ものめ。」

「浮気じゃない、今度ばかりや大真面目だがね、君、どうかなるまいか。」

また甘えるように、顔を正まとも的に差出して、頤おとがを支えた指で、しきりに忙せわしく髻ひねを捻ひねる。

早瀬はしばらく黙つたが、思こまわず拱まぬいていた腕うでに解くと、背後うしろぎまに机ひじに肱ひじ、片手をしかと膝ひざに支ついて、

「貰もらうさ。」

「え。」

「お貰いなさい。」

「くれようか。」

「話によつちや、くれましょう。」

「後継者あととりじゃないんだね。」

「勿論後継者じゃあない。」

「じゃ、まあ、話は出来るとして、」と、澄まして云つて、今度

は心ありげに早瀬の顔を。

「だが、何だよ、私あつしア」と云つた調子が変わつて、

「媒介人なこうどは断るぜ、照陽女学校の教頭じゃないんだから。」

十八

そうすると英吉が、かねて心得たりの態度で、媒酌人は勿論、しかるべき人をと云つたのが、其そのもと許ごときに勤まるものかと、
軽んじ賤いやしめたように聞えて、

「そりや、いざとなりや、教育界に名望のある道学者先生の叔父もあるし、また父とうさん様の幕下で、現下その筋の頭職にある人物も居るんだから、立派に遣つてくれるんだけれど、その君、媒酌人を立てるまでに、」

と手を揃えて、火鉢の上へ突出して、じりりと進み、

「先方さきの身分も確めねばならず、妙子、（ともう呼棄てにして）

の品行の点もあり、まあ、学校は優等としてだね。酒井は飲酒家さけのみだと云うから、遺伝性の懸念もありだ。それは大丈夫としてからが、ああいう美しいのには有りがちだから、肺病の憂うれがあつてはならず、酒井の親屬關係、妙子の交友の如何いかにん、そこらを一つ委くわしく聞かして貰いたいんだがね。」

主税は堪たまりかねて、ばりばりと烏府すみとりの中を突崩した。この暖いのに、河野が両手を翳かざすほど、火鉢の火は消えかかったので、彼は炭を継つぎうとして横向になつていたから、背けた顔に稲妻のごとく閃ひらめいた額の筋は見えなかつたが、

「もう一度聞こう、何だっけな。先方さきの身分？」

「うむ、先方の身分さ。」

「独逸文学者よ、文学士だ……大学教授よ。知ってるだろう、私の先生だ。」

「むむ、そりや分ってるがね、妙子の品行の点もあり、」

「それから、」

「遺伝さ、」

「肺病かね、」

「親族関係、交友の如何いかんさ。何、友達の事なんぞ、大した条件ではないよ。結婚をすれば、処女時代の交際は自然に疎うとくなるです。それに母様が厳しく躰しつければ、その方は心配はないが、むむ、まだ要点は財産だ。が、酒井は困っていやしないだろうか。誰も知つた俠きょうかく客風きやくふうの人間だから、人の世話をすりや、つい物費ものいりも少

くない。それにや、評判の飲酒家^{さけのみ}だし、遊ぶ方も盛だと云うし、借金はどうかだろう。」

主税は黙つて、茶を注いだ^つが、強いて落着いた容子に見えた。

「何かね、持参金でも望みなのかね。」

「馬鹿を謂^いいたまえ。妹たちを縁附けるに、こちらから持参はさせるが、僕が結婚するに、いやしくも河野の世子が持参金などを望むものか。」

君、僕の家じゃ、何だ、女の児^こが一人生れると、七夜から直ぐに積立金をするよ。それ立派に支度が出来るだろう。結婚してからは、その利息が化粧料、小遣となろうというんだ。自然嫁入^{かえ}でも幅が利きます。もつともその金を、婿の名に書き替^{かえ}るわけじ

やないが、河野家においてき、一人一人の名にして保管してあるんだから、例えば婿が多しばらく日月給に離れるような事があつても、たちまち破綻はたんを生ずるとき不面目は無い。

という円満な家庭になつてゐるんだ。で先方さきの財産は望じやないが、余り困つてゐるようだと、親族の関係から、つい迷惑をすゑる事になつちや困る。娘の縁で、一時借用なぞというのは有がちだから。」

「酒井先生は江戸見だ！」

と唐突だしぬけに一喝して、

「神田の祭礼まつりに叩き売つても、娘の縁で借りるもんかい。河野！」
と屹きつと見た目の鋭さ。眉を昂あげて、

「髯があつたり、本を読んだり、お互の交際は窮屈だ。撲倒すはりたおのを野蛮と云うんだ。」

お蔭は湯から帰つて来た。艶やかな濡髪に、梅花の匂ふくいく馥郁いくとして、縹しゆす子の襟の烏羽玉うばたまにも、香やは隠るる路地の宵。格子戸を憚はばかつて、台所の暗がりへ入ると、二階は常ならぬ声高で、お源の出迎える氣勢けはいもない。

石鹼シヤボンを巻いた手拭てぬぐいを持ったままで、そつと階子段はしごだんの下へ行くと、お源は扉ひらきに附着くツついて、一心に聞いていた。

十九

「先生が酒を飲もうと飲むまいと、借金が有ろうと無かろうと、大きなお世話だ。遺伝が、肺病が、品行が何だ。当方こちらからお給みやづ事かえをしようと云うんじやなし、第一欲しいと仰おっしや有ったつて、差上げるやら、平に御免を被るやら、その辺も分らないのに、人の大切な令嬢を、裸体はだかにして検査するような事を聞くのは、無礼じやないか。

わっし私あ第一、河野。世間の宗教家と称となうる奴が、吾々を捕つかまえて、罪の児こだの、救つてやるのと、商売柄すき好な事を云う。薬屋の広告は構わんが、しらきちようめんな人間に向つて罪の子とは何んだい。本人はともかくも、その親たちに対して怪しからん言い種ぐさだと思つてるんです。

今君が尋問に及んだ、先生の令嬢の身許検べの条件が、ただの一ヶ条でもだ。河野英吉氏の意志から出たのなら、私はもう学者や紳士の交際は御免蒙る。そのかわりだ、半纏着の附合になつて撲倒すよ。はははは、えい、おい、」

と調子が碎けて、

「母様の指揮さしずだろう、一々。私はこうして懇意こんいにしているからは、君の性質は知つてるんだ。君は惚れたんだろう。一も二もなく妙ちゃんを見染みそめたんだ。」

「うう、まあ……」と対手の血相あいてもあり、もじもじする。

「惚れてよ、可愛い、可憐いとしいものなら、なぜ命がけになつて貰わない。

結婚をしたあとで、不具かたわになろうが、肺病になろうが、またその肺病がうつつて、それがために共々倒れようが、そんな事を構うもんか。

まあ、何は措おいて、嫁の内の財産を云々うんぬんするなんざ、不埒ふらちの到いたりだ。万々一、実家さとの親が困窮して、都合に依つて無心ごうりよく合力りよくでもしたとする。可愛い女房の親じゃないか。自分にも親なんだぜ、余裕があつたら勿論貢ぐんだ。無ければ断る。が、人情なら三杯食う飯を一杯わけずつ分るんだ。着物は下着から脱いで遣るのよ。

—
 と思ひ入つた体で、煙草を持った手の尖さきがぶるぶると震えると、相手の河野は一向気にも留めない様子で、ただ上の空で聞いて首こうべ

だけ垂れていたが、かえつて襖ふすまの外で、思わずはらはらと落涙したのはお蔭である。

何の話？ と声のはげしいのを憂慮きづかつて、階子段の下でそつと聞くと、縁談でございますよ、とお源の答えに、ええ、旦那の、と湯上りの颯さつと上氣した顔の色を変えたが、いいえ、河野様が御自分の、と聞いて、まあ、と呆れたように莞爾にっこりして、忍んで段を上つて、上り口の次の室まの三畳へ、欄干てすりを擦つて拔足で、両方へ開けた襖の蔭へ入つたのを、両人ふたりには気が付かずに居るのである。

と河野は自分には勢いきおいのない、聞くものには張合くちぶりのない口吻で、「だが、母さんが、」

「母様が何だ。母様が娶うんじやあるまい、君が女房にするんじやないか。いつでもその遣方だから、いや、縁談にかかったの、見合をしたの、としばしば聞かされるのが一々勘定はせんけれども、ざつと三十ぐらいあつた。その内、君が、自分で断つたのは一ツもあるまい。皆母さんがこう云つた。叔父さんが、ああだ、父さんが、それだ、と難癖を附けちや破談だ。

君の一家は、およそどのくらいな御門閥ごもんぼつかは知らん。河野から縁談を申懸けられる天下の婦人は、いずれも恥辱を蒙るようで、かねて不快に堪えんのだ。

昔の国守大名が絵姿で捜せば知らず、そんな御註文に応ずるのが、ええ、河野、どこにだつてあるものか。」

と果は歎息して云うのであった。河野は急に景氣づいて、

「何、無いことはありやしない。そりや有るよ。君、僕とこン許とこの妹
たちは、誰でもその註文に応ずるように仕立ててあるんだ。

揃きりようつて容よし色よしも好よし、また不思議みんなつぴんに皆別みんなつぴん嬪みんなつぴんだ。知みんなつぴんつてるだろう。

生あかんぼれたたての嬰あかんぼ児あかんぼの時あかんぼは、随分あかんぼ、おかしな、色の黒いのもあるけ
れど、母さんが手しおに掛けて、妙としごろ齡としごろにするまでには、ともか
くも十人並あかんぼ以上あかんぼになるんだ、ね、そうじやないか。」

主税ことばは返ことばす言ことばもなく、これには否うなず応うなずなく領うなずかさされたのである。
蓋けだし事実けだであるから。

「それから、財産は先刻さつきも謂いつた通り、一人一人に用意がしてある。病気なり、何なりは、父様も兄も本職だから注意が届くよ。

その他は万事母様が預かつて躓しつけるんだ。

すきぎらい

好嫌は別として、こちらで他に求める条件だけは、ちやんとこちらにも整えてあるんだから、強あながち身勝手ばかり謂うんじゃない。

けれども、品行の点は、疑えば疑えると云うだろう。そこはね、性理上も斟しん酌しゃくをして、そろそろ色気が、と思う時分には、妹

たちが、まだまだ自分で、男をどうのこうのという悪智慧わるぢえの出ない先に、親の鑑定めがねで、婿を見附けて授けるんです。

「否いやも応も有りやしない。衣服きものの柄ほども文句を謂わんさ。謂わない筈はずだ、何にも知らないで授けられるんだから。しかし間違いはない、そこは母さんの目が高いもの。」

「すると何かね、婿を選ぶにも、およその条件が満足に解決されないいかと不可いんのだね。」

「勿論もちろんさ、だから、皆みんな円満に遣つとるよ。第一の姉が医学士さね、直じきの妹の縁附よいているのが、理学士。その次つぎのが工学士。皆食みんないはぐれはないさ。……今また話しのある四番目よのも医学士さ、」

「妙えりどに選取えりどつて揃そろえたもんだな。」

「うむ、それは父様の主義で、兄弟一家一門いっけを揃えて、天下に一階級を形造ろうというんだ。なるべくは、銘々それぞれの収入も、一番の姉が三百円なら、次が二百五十円、次が二百円、次が百五十円、末が百円といった工合に長幼の等差を整然きちんと附けたいというわけだ。

先ず行われている、今の処じゃ。そうしてその子、その孫、と次第にこの社会における地位を向上しようというのが理想なんです。例えば、今の代よが学士なら、その次が博士さ、大博士さね。君。

謂つて見れば、貴族院も、一家族で一党を立てることが出来る。

内閣も一門で組織し得るようという遠大の理想があるんだ。また幸に、父様にや孫も八九人出来た。姪めいを引取って教育しているのも三四人ある。着々として歩を進めている。何でも妹たちが人才を引着けるんだ。」

ひとごと 人事ながら、主税は白面に紅こうを潮して、

「じゃ、君の妹たちは、皆学士を釣る餌だ。」

「餌でも可い、構わんね。藤原氏の為だもの。一人や二人犠牲ぎせいが出来ても可いが、そりや大丈夫心配なしだ。親たちの目は曇りやしない。」

いか 次第々々に地位を高めようとするんだから、奇才俊才、傑物は不可かん。そういうのは時々失敗を遣る。望む処は凡才で間違いの

無いのが可いのだ。正々堂々の陣さ、信玄流です。小豆長光を翳^{かざ}して旗下へ切込むようなのは、快は快なりだが、永久持重の策に
あらず……

その理想における河野家の僕が中心なんだろう。その中心に据^{すわ}ろうという妻^{さい}なんだから、大に慎重^{おおし}の態度を取らんけりやならん
じゃないか。詰り^{いっけ}一家の女^{クウイイン}王^{クウイイン}なんだから、

河野は、渠^{かれ}がいわゆる正々堂々として説くこと一条。その理想
における根ざしの深さは、この男の口から言っても、例の愚痴の
ように聞えるのや、その落着かない腰には似ない、ほとんど動か
すべからざる、確乎としたものであつた。

「いや、よく解つた、成程その主義じゃ、人の娘の体格検査をせ

ざあなるまい。しかし私は厭いやだ！ 私の娘なら断るよ、たとい御

試験には及第を致しましても、」

と冷かに笑うと、河野は人物に肖にず、これには傲然ごうぜんとして、

信ずる処あるごとく、合点のみこんだ笑い方をして、

「でも、条件さえ通過すれば、僕は娶もらうよ。ははは、きつと貰うね、おい、一本貰つて行くぜ。」

と脱兎のごとく、かねて計っていたように、この時ひよいと立つと、肩を斜めに、衣兜かぶしに片手を突込んだまま、急つかつか々と床の間に立向うて、早や手が掛った、花の矢車。

片膝立てて、颯さっと色をかえて、

「不可いけないよ。」

「なぜかい？」

と済まして見返る。主税は、ややあせった気味で、

「なぜと云つて、」

「はははは、そこが、肝心な処だ、と母様が云つたんだ。」

と突立つたまま、ニヤリとして、

「早瀬、君がどうかしているんじゃないか、ええ、おい、妙子を」

二十一

冷^{れい}か、熱^{ねつ}か、
ヒ首^{ひしゅ}、寸鉄にして、
英吉のその舌の根を留めよう

と急あせつたが、咄とつ嗟さに針を吐くあたわずして、主税は黙こぶつて拳こぶしを握にぎる。

英吉は、ここぞ、と土俵に仕切つた形で、片手に花の茎じくを引ひ拵かみ、片手で髯ひげを捻ひねりながら、目をぎろぎろと……ただ冴さえない光で、

「だろう、君、筒井筒振分髪と云うんだろう。それならそう云いたまえ、僕の方にもまた手加減があるんだ、どうだね。」

信玄流の敵が、かえつてこの奇兵を用いたにも係らず、主税の答えは車懸りでも何でも無い、極めて平凡なものであつた。

「怪しからん事を云うな、串じょうだん戯だんとは違ちがう、大切なお嬢さんだ

。」

「その大切のお嬢さんをどうかしているんじゃないか、それとも
心で思ってるんか。」

「怪しからん事を云うなと云うのに。」

「じゃ確かい。」

「御念には及びません。」

「そんなら何も、そう我が河野家の理想に反対して、人が折角聞
こうとする、妙子の容子を秘かくさんでも可いじゃないか。話が纏まとま
りや、その人にも幸福だよ、河野一党の女クウイン王になるんだ。」

「幸か、不幸か、そりや知らん、が、私は厭だ。一門の繁栄を望
むために、娘を餌にするの、嫁の体格検査をするの、というのは
真平御免だ。惚れたからは、癩なりでも肺病でも構わんでなくつち

や、妙ちやんの相談は決してせん。勿論お嬢は瑕きずのない玉だけれど、露出むきだしにして河野家に御覧に入れるのは、平相国清盛に招かれて月が顔を出すようなものよ。」といささか云い得て濃い煙草ほっつを吻くっと吐いたは、正にかくのごとく、山の端はの朧おぼろげ気ならん趣であつた。

「なら可い、君に聞かんでも余処わきで聞くよ。」

と案内また英吉は廉立かじだった様子もなく、争や勝てりの態度で、「しかし縁起だ、こりや一本貰つて行くよ。妙子が御持参の花だから、」

「……………」

「君がどうと云う事も無いのなら、一本二本惜むにや当るまい、

「こんな沢山あるものを、」

「……………」

「失敬、」

あわや抜き出そうとする。と床しい人香が、はつと襲つて、

「不可いけませんよ。」と半纏の襟を扱しごきながら、お蔭ふすまが襖ふすまから、す

つと出て、英吉の肩へ手を載せると、蹠よろ踉よろけるように振向く処を、

入違いに床の間を背負しよつて、花を庇かばつて膝をついて、

「厭いやですよ、私が活けたのが台なしになります。」

と嬌えんぜん然ぜんとして一笑する。

「だつて、だつて君、突込んであるんじゃないか、池の坊も遠州もありやしない。ちつとぐらい抜いたつて、あえてお手前が崩れ

るといふでもないよ。」

とさすがに手を控えて、例の衣兜へ突込んだが、お蔭の目前めさきを、
 (子を捉とろ、子捉とろ。)の体で、靴足袋で、どたばた、どたばた。
 「はい、これは柳橋流と云うんです。柳のように房々活けてあり
 ましよう、ちゃんと流儀があるじゃありませんか。」

「嘘を吐きたまえ、まあ可いから、僕が惚込んだ花だから。」
 主税は火鉢をぐつと手許へ。お蔭はすらりと立って、

「だってもう主のある花ですもの。」

「主がある！」と目を睜みはる。

「ええ、ありますとも、主税と云ってね。」

「それ見ろ、早瀬、」

「何だ、お前、」

「いいえ、貴下あなた、この花を引張ひっぱるのは、私を口説くのと同一おんなじ訳よ。主があるんですもの。さあ、引張ひっぱつて御覧なさい。」

と寄ると、英吉は一足引く。

「さあ、口説いて頂戴、」

と寄ると、英吉は一足引く。微笑ほほえみながら擦すり寄るたびに、たじたじと退すきつて、やがて次の間へ、もそりと出る。

道学先生

二十二

月の十二日は本郷の薬師様の縁日で、電車が通るようになっても相かわらず賑にぎやかな。書肆ほんや文求堂をもうちつと富坂寄とみざかよりの大道へ出した露店ほしみせの、いかがわしい道具に交せて、ばらばら古本がある中の、表紙との除れた、けばの立つた、端摺はしずれの甚ひとい、三世相あかりを開けて、燻くすぼったカンテラの燈あかりで見ている男は、これは、早瀬主税である。

何の事ぞ、酒井先生の薰陶くんとうで、少くとも外国語をもつて家をな為し、自腹あおで朝酒を呷あおる者が、今更いかなる必要があつて、前世なの鸚鵡おうむたり、猩しょうじよう々じようたるを懸念する？

もつとも学者だと云つて、天氣の好い日に浅草をぶらついて、奥山を見ないとも限らぬ。その時いかなる必要があつて、玉乗の看板を観ると云う、奇問を発するものがあれば、その者愚ならずんば狂に近い。鰻屋の前を通つて、好い匂がしたと云つても、直ぐに隣の茶漬屋へ駈込みの、箸を持ちながら嗅ぐ事をしない以上は、速断して、伊勢屋だとは言憎い。

主税とても、ただ通りがかりに、露店ほしみせの古本の中にあつた三世相が目を遮つたから、見たばかりだ、と言えはそれまでである。けれども、渠は目下誰かの縁談に就いて、配慮しつつあるのではないか。しかも開けて見ている処が——夫婦相性の事——は棄置かれぬ。

且つその顔かおつき色が、紋附の羽織で、袴ふきの厚い内君マダムと、水兵服の坊やを連れて、別に一人抱いて、鯨くじらにしようか、汁粉じゆいにしようかと歩てく行くっている紳士のような、平和な、樂たのしげなものではなく、主税は何か、思い屈くした、沈しずんだ、憂うれわしげな色が見える。

好男子世に処あして、屈く託たくそうな面おももち色いろで、露店の三世相を繰くりとなると、柳の下てのひらに掌てのひらを見せる、八卦の亡者と大差はない、迷まいはむしろそれ以上である。

所以ゆえある哉かな、主税のその面上の雲は、河野英吉と床の間の矢車草やぐるま……お妙の花を争あった時から、早やその影が懸かつたのであつた。その時はお蔦いづもの機知さそくで、柔能よく強ごうを制せいすることを得たのだから、例いづもなら、いや、女房は持つべきものだ、と差さ対むかいで祝杯しゆはいを挙げ

かねないのが、冴えない顔をしながら、湯は込んでいたか、と聞いて、フイと出掛けた様子も、その縁談を聞いた耳を、水道の水で洗わんと欲する趣があつた。

本来だと、ともだち朋友が先生の令嬢をめと娶りたいに就いて、したぎき下聴に

来たものを、聞かせない、と云うもいこじ依怙地なり、りようけん料簡の狭い

話。二才らしくまた何も、娘がくれた花だといつて、人に惜むに

も当たらない。この筆法をもつてすれば、いろ情婦から来たふみがら文殻がま紛

ぎれこ込んだといふので、紙屑買をおっか追懸けて、慌どろぼうてて盗賊と怒鳴り

兼ねまい。こちの人措おいて下さんせ、と洒落しやれにも嗜たしなめてしかるべ

き者までが、その折から、ちよいと留女の格で早瀬に花もたを持せた

のでも、河野一家いっけに対しては、お薦いっけさえ、如何いかんの感情を持つかが

明かに解る。

それは英吉と、内の人の結婚に対する意見の衝突の次第を、襖の蔭で聴取つたせいもあるう。

そうでなくつても、惚れそうな芸妓はないか。新学士に是非と云つて、達引きたてひのような朋輩はないか、と煩く尋ねるような英吉に、厭いやなこつた、良人うちのが手を支ついてものを言う大切なお嬢さんを、とお薦はただそれだけでさえ引退ひつさがる。処へ、幾いくすじ条も幾条も家中の縁の糸は両親で元緊もとじめをして、颯さつさらりと鶉繩うなわに捌さばいて、娘たちに浮世の波を潜くぐらせて、ここを先途と鮎あゆを吞ませて、ぐツと手許へ引手繰ひつたぐつては、咽喉のどをギュウの、獲物を占め、一門いちもん一家いつけの繁昌を企むような、ソんな勘作とこの許へお嬢さんを嫁やられるもん

か。

いいえ、私が肯きかないわ、とお源をつかまえて談ずる処へ、熱い湯だった、といくらか気色を直して、がたひし、と帰つて来た主税に、ちよいとお前さん、大丈夫なんですか、とお薦の方が念を入れたほどの勢いきおい。

二十三

何が大丈夫だか、主税には唐突だしぬけで、即座には合点がってんしかねるばかり、お薦の方の意気込すさまが凄じい。

まだ、取留めた話ではなし、ただ学校で見初めた、と厭らしく

云う。それも、恋には丸木橋を渡つて落ちてこそしかるべきを、石の橋を叩いて、杖ステッキを支いて渡ろうとする縁談だから、そこいら聴合あわせて歩行あく中に、誰かの口で水を注させば、直ぐに川留めの洪水ほどに目を廻わしてお流れになるだろう。

けれども、なぜか、母子連おやこづれで学校へ観に行つた、と聞いただけで、お妙さんを観世物みせものにし、またされたやうで癩しやくに障つた。しかし物にはなるまいよ、と主税が落着くと、いいえ、私は心配です。どこをどう聞き廻つたつて、あのお嬢さんさんに難癖を着けるものはありません。いずれ真砂町様さんへ言入れるに違いますまい。それに河野と云う人が、他に取柄は無いけれど、ただ頼もしいのが押の強いことなんですから、一押二押で、悪くすると出来ますよ。

出来るような気がしてならない。私は何だかもうお妙さんが、ペ
ろペロと嘗なめられる夢を見て、今夜にも寝うなていて魘うなされそうで、
お可哀相でなりません。貴郎あなた油断をしちや厭いとですよ、と云った—
—お蔭の方が、その晩毛虫くツツに附着くツツされた夢を見た。いつも河野の
その眉が似ていると思つたから。——

もつとも河野は、綺麗に細眉にしていたが、剃りづけませぬよ
う、と父様の命令で、近頃太くしているので、毛虫ではない、臥が
蚕さんである。しかるにこの不生産的の美人は、蚕の世を利するを知
らずして、毛虫の厭いとうべきを恐れていた、不心得と言わねばなら
ぬ。

で、お蔭は、たとい貴郎が、その癖、内々お妙さんに岡おか惚ぼを

しているのでも可い。河野に添わせるくらいなら、貴郎の令夫人おくさんにして私が追出おんだされる方がいつそ増だ、とまで極端に排斥する。

この異体同心の無二の味方を得て、主税も何となく頼母たのもしかつたが、さて風はどこを吹いていたか、半月ばかりは、英吉も例いつもになく顔を見せなかつた。

と一日あるひ、

(早瀬氏は居おらるるかね。)

応柄おうへいのような、そうかと云つて間違いの無いような訪ずれ方をして、お源に名刺を取次がせた者がある。

主税は、しかかつていた翻訳の筆ペシを留めて、請取つて見ると、ちよつと心当りが無かつたが、どんな人だ、と聞くと、あの、痘あ

痕ぼたのおあんなさいいます、と一番疾はやく目についた人相を言ったので、直ぐ分つた。

本名坂田礼之進、通り名をアバ大人、誰か早口な男がタの字を落した。ゆつくり言えばアバタ大人、どちらでもよく通る。通りが可よければと言つて、渾あだな名を名刺に書くものはない。手札は立派に、坂田礼之進……傍かたわらへ羅馬字で、L. Sakata.

すなわち歴々の道学者先生である。

渠かれの道学は、宗教的ではない、倫理的、むしろ男女交際的である。とともに、その痘痕あぼたと、細君が若うして且つ美であるのをもつて、処々の講堂においても、演説会においても、音に聞えた君子である。

謂うまでもなく道德円満、ただしその細君は三度目で、前の二人とも若死をして、目下のがまた顔色が近来、蒼い。

と云つてあえて君子の徳を傷けるのではない、が、要のないお饒舌しやべりをするわけではない。大人は、自分には二度まで夫人を殺しただけ、盞さかずきの数の三々九度、三度の松風、ささんぎの二十七度で、婚姻の事には馴れてござる。

処へ、名にし負う道学者と来て、天下この位信用すべき媒妁なこうど人は少いから、呉も越も隔てなく口を利いて巧く纏める。従うて諸家の閨門けいもんに出入すること頻繁にして時々厭らしい！と云う風説わさを聞く。その袖を曳いたり、手を握ったりするのが、いわゆる男女交際的で、この男の余徳ほまちであろう。もつとも出来た験ためしはない。

蓋しけだせざるにあたらず能あたわざるなりでも何でも、道徳は堅固で通る。
ここに於おいてか、品行方正、御媒おなこうど人でも食くつて行ゆかれる……

二四四

道学先生の、その坂田礼之進であるから、少くともめ組が出入りをするような家庭？ へ顔出しをする筈はずがない。と一度ひとたびは怪あやしんだが、偶然ふと河野の叔父おなじに、同一道学者何某なにがしの有るのに心付いて、主税は思わず眉を寄せた。

諸家お出入りの媒ま人、ある意味における地じ者もの稼かせの冠かぶたる大家、さては、と早やお妙の事が胸に応えて、先ずともかくも二階

へ通すと、年配は五十ばかり。推しものの痘痕あばたは一目見て気の毒な程で、しかも黒い。字義をもつて論ずると月下氷人でない、竈かまのした
 下 炭焼であるが、身みだしなみ躰たよく、カラアが白く、磨込んだ顔がてらてらと光る。地の透く髪を一筋梳すきに整然きちんと櫛くしを入れて、髻こぎの尖さきから小鼻へかけて、ぎらぎらと油ぎった処、いかにも内君が病身らしい。

さて、お初にお目に懸かかりまする、いかがでござりまするか、まます御翻訳で、とさぞ食うに困つて切々稼いぐだらう、と謂いわな
 いばかりな言ことを、けろりとして世辞に云つて、衣兜かくしから御殿持の煙草入、薄色の鉄の派手な塩瀬に、鉄扇かずらの浮織のある、近頃行わるる洋服持。どこのか媒妁人した御縁女の贈物らしく、貰

つた時の移香を、今かく中ちゆうぶる古こに草臥くたびれても同一香おなじおいの香水で、
 追おつかけ追おつかけ香におわせてある持物もつぶつを取と出して、気きになるほど爪つめの伸のび
 びた、湯ゆが嫌きららしい手てに短みい延のべの銀煙管ぎんえんぐわん、何か目出度めでたい薄うすつぺら
 な彫ほりのあるのを控かえながら、先まず一ひとツ奥歯おくはをスツと吸すつて、寛ゆつく
 悠りと構かまえた処ところは、生命保せいめいほ険けんの勧誘かんとも出来できそうに見みえた。

甚しだ突然とつぜんでござりまするが、酒井俊蔵しゅんざう氏し令嬢れいぢやうの儀ぎで……ござり
 まして、とまたスツと齒はせせりをする。

それ、えへん！ と云いえば灰吹はいふと、諸礼しよれい躡しつかけ方かた第一義だいいちぎに有ある
 けれども、何なににも御馳走ごちそうをしない人に、たとい噺わらわが葱ねぎ臭くさかろう
 が、干鱈ひだらの織維はが挟はさまつていそうであらうが、お楊枝ようじを、と云いうは
 無礼むれいに当ある。

そこで、止むことを得ず、むずむずする口を堪える下から、直ぐに、スツとまたぞうろ風を入れて、でござりまするに就いて、かような事は、余り正面から申入れまするよりと、考えることでごわりまする……と搔かつまんで謂えば、自分はいまだ一面識も無いから、門生の主税から紹介をして貰いたいと言うのである。

南無三、橋は渡った、いつの間にか、お妙は試験済の合格になった。

今は表向に縁談を申込むばかりにしたらしい。それに、自分に紹介を求めめるのは、英吉に反対した廉かどもあり、主税は面当つらあてをされるように撥くすくつたく思ったばかりか、少からず敵の機敏に、不意打を食ったのである。

いや、お断り申しませう、英吉君に難癖のある訳ではないが、河野家の理想と言うものが根も葉も挙げて気に入らない。余所よそで紹介をお求めなさるなり、また酒井先生は紹介の有り無しで、客わけへだての分わけ隔へだてをするような人ではないから——直接じかにお話しなすつて、御縁があれば纏まとる分ま。心に潔しとしない事に、名刺一枚御荷担はは申兼ねる、と若武者だけに逸はやつてかかると、その分は百も合がつてんつてん点で、戦場往来の古ふる兵つわもの。

取りあえず、スースーと齒をすすつて、ニヤニヤと笑いかけて、何か令嬢お身の上に就いて、下した聴ぎきをするのが、御賛成なかつたとか申すことでごわりましたな。御説に因れば、好いた女なら娼じ妓ろうでも（と少しおまけをして、）構わん、死なば諸共にと云う。

いや、人生意気を重んず、（ト齒をすすつて）で、ごわりまするが、世間もあり親もあり……

とこれから道学者の面目を發揮して、河野のためにその理想の、道義上完美にして非難すべき点の無いのを説くこと数千言。約半日にして一先ず日暮前に立歸つた。ざつと半日居たけれども、飯時を避けるなぞは、さすがに馴れたものである。

二十五

客が来れば姿を隠すお蔭が内に居るほどで、道学先生と太刀打して、議論に勝てよう道理が無い。主税の意気ずくで言うことは、

ただ礼之進の齒ですすられるのみであつたが、厭なものは厭だ、と城を枕に討死をする態度で、少々自棄^{やけ}気味の、酒井先生へ紹介は断然、お断り。

そこを一つお考え直されて、^{ことば}とを言を残して歸つた後で、アバ人が媒^{なこうど}灼ではなおの事。とお妙の顔が蒼^{あお}くなつて殺されでもするように、酒も飲まないで屈託をする、とお蔦はお蔦で、かくまつてあつた姫君を、鐘を合図に首討つて渡せ、と懸合われたほどの驚き加減。可愛^{いと}い夫が^{おし}惜がる大切なお主^{しゆう}の娘、ならば身替りにも、と云う逆上^{のほ}せ方。すべてが浄瑠璃の三^{きり}の切を手本だが、憎くはない。

さあ、貴郎、そうしていらつしやる処ではありません、早く真

砂町へおいでなすつて、先生が何なら奥様まで、あんな許へは御相談なさいませんように、お頼みなさらくなくツちや不可ません。ちよいと、羽織を着換えて、と箆笥をがたりと引いて、アア、しばらく御無沙汰なすつた、明日め組が参りますから、何ぞお土産をお持ちなさいまし、先生はさつぱりしたものが好きだ、と云うし、彼奴が片思いになるように鮑がちようど可い、と他愛もない。

馬鹿を云え、縁談の前へ立つて、なかくち 讒口なんぞ利こうものなら、おれ 己の方が勘当だ、そんな先生でないのだから、と一言にしては 匆ねられた、柳橋の策不被用焉。

また考えて見れば、道学者の説を待たずとも、河野家に不都合

はない。英吉とても、ただちとだらしの無いばかり、それに結婚すれば自然治まる、と自分も云えば、さもあろう。人の前で、母あさん様と云おうが、父様とうさまと云おうが、道義上あえて差さしつかえ支はない、かえって結構なくらいである。

そのこれを難ずるゆえんは……曰く……言い難しだから、表向きはどこへも通らぬ。

困ったな、と腕を組めば、困りましたねえ、とお蔭も鬱ふさぐ。

ここへ大いなる福音を齎もたらし来ったのはお源で。

手廻りの使いに遣やつたのに、大分後れたにもかかわらず、水口の戸を、がたひし勢いきおいよく、唯ただいま今帰りました、あの、御新造様ごしんぞさん、

大丈夫でございます。

明後日出来るのかい、とお薦がきりもりで、夏の搔卷かいまきに、と思つて古浴衣の染を抜いて形を置かせに遣つてある、紺屋へ催促の返事か、と思うと、そうでない。

この忠義ものは、二人の憂うれいを憂として、紺屋から帰りがけに、千裁ものの、風呂敷包を持つたまま、内の前を一度通り越して、見附へ出て、土手際の売卜者うらないに占みて貰つた、と云うのであつた。

対手あいては学士の方ですつて、それまで申して占て貰いましたら、とても縁は無い断念あきらめものだ、と謂いいましたから、私は嬉しくつて、三銭の見料へ白銅一つ発奮はずみました。可い気味でございますと、独りで喜んでアハアハ笑う。

まあ、嬉しいじゃないか、よく、お前、お嬢さんの年なんか知

つていたね、と云うと、勿怪もつげな顔をして、いいえ、誰方どなたのお年も存じません。お蔭ふは腑ふに落ちない容子をして、売卜うらない者は、年とし紀しを聞きやしないかい。ええ、聞きましたから私の年を謂つてやりました。

当あたり前まえよ、对手が学士でお前じや、と堪たまりかねて主税が云うのを聞いて、目を睜みはつて、しばらくして、ええ！ 口惜くやしいと、台所へ逃込んで、売卜屋の畜生め、どたどたどた。

二人は顔を見合せて、ようように笑わらいが出た。

すぐにお蔭かげが、新しい半襟をひとかけ一掛ひとかけ礼に遣つて、その晩は市が栄えたが。

二三日経たつて、ともかく、それとなく、お妙がお持たせの重箱

を返ししかたがた、土産ものを持つて、主税が真砂町へ出向くと、あいにく、先生はお留守、令夫人おくがたは御墓参、お妙は学校のひげが遅かった。

二十六

仮にその日、先生なり奥方なりに逢つたところで、縁談の事に就いて、とこう謂いうつもりでなく、また言われる筋でもなかつたが、久闊振ひさしぶりではあり、誰方どなたも留守と云うのに気抜けがする。今度来た玄関の書生は馴染なじみが薄いから、巻まきたばこ 苘まの吸殻沢山な火鉢をしきりに突着けられても、興に乗る話も出ず。しかしこの一両

日に、坂田と云う道学者が先生を訪問はしませんか、と尋ねて、来ない、と聞いただけを取柄。土産ものを包んで行つた風呂敷を畳みもしないで突込んで、見ツともないほど袂たもとを膨らませて、ぼんやりして帰りがけ、その横町の中程まで来ると、早瀬さん御機嫌宜しゆう、と頓とんきよう興きように馴々しく声を懸けた者がある。

玄関に居た頃から馴染の車屋で、見ると障子を横にして眩まばゆい日当りを遮つた帳場から、ぬい、と顔を出したのは、酒井へお出入りわかいしゆのその車くるま夫。

おうと立停まつて一言二言交すついでに、主税はふと心付いて、もしやこの頃、先生の事だの、お嬢さんの事を聞きに来たものはないか、と聞くと、月はじめにモオニングを着た、痘痕あばたのある立

派な旦那が。

来たか！ へい、お目出たい話なんだからちつとばかり様子を聞かせな、とおつしやいましたね。しまい終にや、き様、お伴をするだろう、懸かかりつけの医師いしやはどこだ、とお尋ねなさいましたつけ。

台所から、筒袖を着た女房が、ひよっこり出て来て、おやまあ早瀬さん、と笑いかけて、いいえ、やどでもここが御奉公と存じましてね、もうもう賞ほめて賞めて賞め抜いてお聞かせ申しましてございますよ。お嬢様も近々御縁きまが極きまりますそうで、おめでどう存じます、えへへ、と燥はしやいだ。

余計な事を、と不興な顔をして、不愛想に分れたが、何も車屋へ捜りを入れずともこの事だ、またそれにしても、モオニング着用

は何事だと、苦々しき一方ならず。

曲角の漬物屋、ここいらへも探偵いぬが入ったろうと思うと、筋向いのハイカラ造りの煙草屋がある。この亭主もベラベラお饒舌しゃべりをする男だが、同じく申上げたろう、と通りがかりに睨にらむと、腰かけ込んだ学生を対手あいてに、そのまた金齒の目立つ事。

内へ帰ると、お蔭はお蔭で、その晩出直して、今度は自分が売うらないトの前へ立つと、この縁はきつと結ばる、と易が出たので、大ふきに鬱ふさぐ。

もつとも売ト者も如才はない。お源が行ったのに較べれば、容子を見ただけでも、お蔭の方が結ばるに違いないから。

一日措おいて、主税が自分囑たのまれのさる学校の授業を済まして帰

つて来ると、門口にのそりと立つて、頤あごを撫でながら、じろじろ
門札を視ながめていたのが、坂田礼之進。

早やここから齒をスーと吸つて、先刻さつきからお待ち申して……は
ちと変だ。

さては誰も物もの申もうに応うるものが無かつたのであろう。女中おんな
外出そとでで？ お蔭は隠れた。……

無人ぶにんで失礼。さあ、どうぞ、と先方さきは編上靴あみあげぐつで手間が取れる。
主税は氣早ひらきに靴を脱いで、癩かん癩しゃくまぎれ紛まぎれに、突然二階へ懸上る。

段の下の扉ひらきの蔭から、そりやこそ旦那様。と、によつと出た、お
源を見ると、取次に出ないも道理、勝手働きの玉たま襷たすき、長刀ながなた
小脇こわきに搔か込んだりな。高たか箒ぼうきに手拭てぬぐいを被かせたのを、柄長かぶに構

えて、逆上のぼせた顔色がんしよく。

馬鹿め、と噴出ふきだして飛上る後から、ややあつて、道学先生、のそりのそり。

二階ろつばんの論判ひととき一時に余りけるほどに、雷様の時の用心の線香を芬ふんとさせ、居間から躡あらわれたのはお蔭もぐさで、艾まじないはないが、禁厭まじないは心ゆかし、片手に煙草をひとつまみ撮ひとつまみ。拔足で玄関へ出て、礼之進の靴の中へ。この燃もえぐさ草ききは利が可かつた。※と煙ぼつが、むらむらと立つ狼煙のろしを合図に、二階から降りる氣勢けはい。翻然路地へお蔭にげこが遁にげこむと、まだその煙は消えないので、雑水ぞうみずを撒まきかけてこの一芸に見惚れたお源が、さしつたりと、手でしやくつて、ぎぶりと掛けると、おかしな皮の臭がして、そこら中水だらけ。

二十七

それ熟々つらつら、史あんを按あずるに、城なり、陣所、戰場なり、軍いくさは婦
の出る方が大概ま敗ける。この日、道学先生に対する語学者は勝利
でなく、礼之進の靴は名譽の負傷で、揚々と引挙げた。

ゆえ如何いかんとなれば、お厭いやとあれば最早紹介は求めますまい、そ
のかわりには、当方から酒井家へ申入れまする、この縁談に就き
まして、貴方あなたから先生に向つて、河野に対する御非難をなされぬ
よう。御意見は御意見、感情問題は別として、これだけはお願
い申したいでござりまするが、と婉曲に言いは言ったが、露骨に遣や

つたら、邪魔をする勿なかれであるから、御懸念無用と、男らしく判はつき然り答えたは可いけれども、要するに釘を刺されたのであった。

札之進の方でも、酒井へ出入りの車夫くるまやまで捜さがり入れた程だから、その分は随分手が廻まわつて、従したがつて、先生が主税に対する信用の点も、情愛のほども、子のごとく、弟のごときものであることさえ分わつたので、先まんずれば人を制しすで、ぴたりとその口をおさえたのであろう。

讒なかくち口は決して利かない、と早瀬は自分も言ったが、またこの門生の口一ツで、見事まじま纏まとる縁も破やぶることは出来たのだつたに。

ここで賽さいは河野の手に在あり矣い。ともかくもソレ勝負、丁か半かは酒井家の意志の存する処ところに因よるのみとぞなんぬる。

先生が不承知を言えばだけれども、諾、とあればそれまで。お妙は河野英吉の妻になるのである。河野英吉の妻にお妙がなるのであるか。

お薦さえ、憂慮きづかうよりむしろ口惜くやしがつて、ヤイヤイ騒ぐから、主税の、とつおいつは一通りではない。何は措おても、余所よそながら真砂町の様子を、と思うと、元来お薦あるために、何となく疵持きず足、思いなしで敷居が高い。

で何となく遠のいて、ようよう二日前に、久しぶりで御機嫌うかが窺いに出た処、悪くすると、もう礼之進が出向いて、縁談が始まつていそうなかへ、急に足近くは我ながら気が咎める。

愚ぐ図ず々ぐ々ずすれば、貴郎例あなねに似合わない、きりきりなさいなね：

…とお蔦が齒痒はがゆがる。

勇を鼓して出掛けた日が、先生は、来客があつて、お話中。玄関の書生が取次ぐ、と（この次、来い。）は、ぎよつとした。さりとして曲がない。ないしやう内証のお蔦の事、露頭にでも及んだかと、まさかとは思うが気怯きおくれがして、奥方にもちよいと挨拶をしたばかり。その挨拶を受けらるる時の奥方が、端然として針仕事の、気高い、奥床うしろめたしい、懐なつかしい姿を見るにつけても、お蔦に思較べて、いよいよ後うしろめた暗あさに、あとねだりをなさらないなら、久しぶりですから一銚ひとちやうし子、と莞爾にっこりして仰せある、優しい顔が、眩まぶしいように後しりご退みして、いずれまた、と逃出すがごとく帰りしなに、お客は誰？……とそつと玄関の書生に当つて見ると、坂田礼之進、噫あ、止やん

ぬる哉。かな

しばらくは早瀬の家内、火の消えたるごとしで、憂慮きづかわしさの余り、思切つて、更に真砂町へ伺つたのが、すなわち薬師の縁日であつたのである。

ちと、恐怖おぞおぞの形で、先ず玄関を覗のぞいて、書生が燈下に読書す

るのを見て、またお邪魔に、と頭から遠慮をして、さて、先生は、と尋ねると、前刻御外出。奥様おくさんは、と云うと、少々御風邪の気

味。それでは、お見舞に、と奥に入ろうとする縁側で、女中おんなが、唯今すやすやと御寐おやすみになつていらつしやいます、と云う。

悄悄すずすず々玄関へ戻つて、お嬢さんは、と取つて置きの頼みの綱を

引いて見ると、これは、以前奉公していた女中おんなで、四ツ谷の方へ

縁かたづ附いたのが、一年ぶりで無沙汰見舞に来て、一晚御厄介になるはず筈で、お夜食が済むと、奥方の仰おおせに因り、お嬢さんのお伴をして、薬師の縁日へ出たのであつた。

それでは私も通とおの方を、いづれ後刻のちほど、とこれを機しおに。出しな
にまた念のために、その後、坂田と云うのは来ませんか、と聞くと、アバ大人ですか、と書生は早や渾名を覚えた。ははは、来ひるすぎましたよ。今日の午後。

男金女土

二十八

主税は、礼之進が早くも二度の魁かけを働いたのに、少なからず機先を制せられたのと——かてて加えてお蔭の一件が暴露ばれたために、先生が太いたく感情を損ねられて、わざとにもそうされるか、と思われなくてもない——玄関の畳が冷く堅いような心持とに、屈託の腕こまぬを拱こまぬいて、そこともなく横町から通りへ出て、件の漬物屋くだんの前を通ると、向う側がとある大おお構がまえの邸の黒板塀で、この間しばらく、三方から縁日の空が取囲んで押揺おしゆるがすごとく、きらきらと星がきらめいて、それから富坂をかけて小石川の樹立こたちの梢こすげえへ暗くなる、ちよつと人足の途絶え処。

東へ、西へ、と置場処の間けんすう数を示した標く杵いが灰ほのしろ白く立つて、車は一台も無かつた。真まつくろ黒な溝の縁に、野を焚やいた跡の湿つたかと見える破風やぶれぶろしき呂敷を開いて、式かたのごとき小灯こともしが、夏になつてもこればかりは虫も寄るまい、明あかりの果敢はかなさ。三束五束みたばい附木つつけぎを並べたのを前に置いて、手を支ついて、縛もつれ髪うなじの頸清うなじらかに、襟脚なきねい白く、女房がお辞儀をした、仰向けになつて、踏反ふんぞつて、泣寐入なきねいりに寐入あかんぼつたらしい嬰あかんぼ児が懐に、膝すがに縛むつつて六歳むつばかりの男の子が、指を銜くわえながら往来をきよろきよろと視ながめる背後うしろに、母親うしろのその背せなに凭もたれかかつて、四歳よつぐらいなのがもう一人。

一ひとしきり陣風あわれが吹くと、姿も店も吹き消されありさまそうあわれで哀ありさまな光景。

浮世の影絵が鬼の手の機からくり関で、月なき辻へ映るのである。

さりながら、縁日の神仏は、賽銭さいせんの降る中ならず、かかる処にこそ、影向ようごうして、露にな濡れそ、夜風に堪えよ、と母子おやこの上に袖笠して、遠音に觀世ものの囃子はやしの声を打聞かせたまうらんよ。

健在すこやかなれ、御身等、今若、牛若、生立おいたてよ、と窃ひそかに河野の一門を呪つて、主税は袂たもとから戛然かちりと音する松の葉を投げて、足疾とくその前を通り過ぎた。

ふと例の煙草屋の金齒の亭主が、箱火鉢を前に、胸を反らせて、煙管きせるを逆に吹口でぴたり戸外おもてを指して、ニヤリと笑つたのが目に附くと同時に、四五人店前みせさきを塞いだ書生が、こなたを見向いて、八の字が崩れ、九の字が分れたかと同じに立騒いで、よう、と声を懸ける、万歳、と云う、叱しつ、と圧おさえた者がある。

向うの真砂町の原は、真中あたり、火定の済んだ跡のように、寂しく中空へ立つ火気を包んで、黒く輪になつて人集り。ひとだか寂ひっそ寞りしたその原のへりを、この時通りかかった女が二人。

主税は一目見て、胸が騒いだ。右の方が、お妙である。

リボンも顔も単ひとえに白く、かすりの羽織が夜の艶つやに、ちらちらと蝶が行交う歩行あるきぶり、紅くれないちらめく袖は長いが、不断着の姿は、年も二ツ三ツ長たけて大人びて、愛らしいよりも艶あてやか麗かであつた。

風呂敷包を左手ゆんでに載せて、左の方へ附いたのは、大一番の円まるま鬚げだけれども、花はな簪かんざしの下になつて、脊が低い。渾名たごを鮓とと云つて、ちよんぼりと目の丸い、額に見上げ皺じわの夥おびただ多おんなしい婦なで、主税が玄関に居た頃勤めた女中おさんどん。

心懸けの好いい、実じつてい体もので、身が定まってからも、こうした御機嫌うかがいに出る志。お主しゅうの娘ひっそに引添うて、身を固めて行くゆ態ふりの、その円鬚おおきの大きいのも、かかる折から頼たのもしい。

煙草屋の店でくるくるるぱちぱち、一いちダアス打うちばかりの眼め球のたまの中を、仕切しきつて、我身でお妙を遮るしるように、主税は真中へ立ったから、余り人目に立つので、こなたから進んで出て、声を掛けるのは憚はばかつて差控えた。

そうしてお妙が気が付かないで、すらすらと行過ぎたのが、主税は何となく心寂さびしかった。つい前さきの年までは、自分が、ああして附ついて出たに。

とりボンが靡なびいて、お妙は立停とどまった。

肩が離れて、大な白足袋の色新しく、附木つけぎを売る女房のあわれ
ともしびらかづな灯に近いのは円髻かづで。実直ものの丁寧かに、屈み腰かがになつて手
 を出したは、志を恵んだらしい。親子が揃ぬかつて額ぬかずいた時、お妙
 の手の巾きんちやく着やくが、羽織の紐の下へ入つて、姿は辻の暗がりへ。
 書生たちは、ぞろぞろと煙草屋の軒を出て、斉ひとしく星を仰いだの
 である。

二十九

○男おとこ金かね女おんな土なつち大おおいに吉よし、子五人か九人あり衣食満ち富貴ふつきにして

男金女土こそ大吉よ

衣食みちみち……………

と歌の方も衣食みちみちのあとは、虫蝕むしくいと、雨染あまじみと、摺剥すりむけたので分らぬが、上に、業平なりひらと小町のようなのが対向さしむかいで、前に土器かわらけを控えると、万歳まんざい烏帽子えぼしが五人ばかり、ずらりと拝伏した処が描いてある。いかさまにも大吉に相違ない。

主税うづむは、お妙の背後姿うしろを見送つて、風が染みるような懐手で、俯向き勝うづむちに薬師堂の方へ歩行あるいて来て、ここに露店の中に、三世相がひっくりかえつて、これ見よ、と言わないばかりなのに目が留とどまつて、漫そぞろに手に取つて、相性の処を開けたのであつた。

その英吉が、金の性しよう、お妙が、土性であることは、あらかじめ

お薦うつくしが美しい指の節から、寅卯戌亥とらういぬいと繰出したものである。

半吉でもある事か、大おおに吉よしは、主税めに取たくつて、一向めに芽出度

ない。勿論、いかに迷えば、と云つて、三世相を気にするような

男ではないけれども、自分とはとにかく、先生は言うに及ばずなが

ら、奥方はどうかすると、一白九紫を口にされる。同じ相性でも、

始はじめわるし、中程宜しからず、末覚おぼつか束おぼつかなしと云う縁なら、いくら

か破談の方に頼みはあるが……衣食満ち満ち富貴……は弱つた。

のみならず、子五人か、九人あるべしで、平家の一門、藤原一

族、いよいよ天下はびこに蔓はびこらんずる根ねざしが見えて容易でない。

すでに過日いつかも、現ひるすぎに今日の午後ひるすぎにも、礼之進れいしんが推参おしりに及んだ、

というきつさきなり、何となく、この縁、纏まとまりそうで、一方な

らず氣に懸る。

ああ、先生には言われぬ事、奥方には遠慮をすべき事にしても、今しも原の前で、お妙さんを見懸けた時、声を懸けて呼び留めて、もし河野の話が出たら、私は厭いや、とおっしゃいよ、と一言いえば可かつたものを。

大道で話をするのが可訝おかしければ、その辺の西洋料理へ、と云つても構わず、鳥居の中には藪蕎麦やぶそばもある。さしむかいに云うではなし、円鬚も附添しきいつた、その女中おんなとても、長年の、犬鷹朋輩の間柄、何の遠慮も無かつた。

お妙さんがまた、あの目で笑つて、お小遣いはあるの？ とは冷評ひやかしても、どこかへ連れられるのを厭味らしく考えるような間なか

ではないに、ぬかつたことをしたよ。

なぞと取留めもなく思い乱れて、凝じつとその大吉を瞻みつめっていると、次第次第に挿画さしえの殿上人に髯ひげが生えて、たちまち尻尾のように足を投げ出したと思うと、横倒れに、小町の膝へ凭もたれかかつて、でれでれと溶けた顔が、河野英吉に、寸分違わぬ。

「旦那いかがでございます。えへへ、」と、かんでらの灯の蔭から、気味の悪い唐突だしぬけの笑わらいごえ声は、当露店の亭主で、目を細うして、額にらで睨にらんで、

「大分御意に召しましたようで、えへへ。」

「幾いくら干くらだい。」

とぎよつとした主税は、空くうで値を聞いて見た。

「そうでげすな。」

と古帽子の庇ひさしから透かして、撓ためつつ、

「二十銭にいたして置きます。」と天窗あたまから十倍に吹懸ふっかける。

その時かんでらが煽あおる。

主税は思わず三世相を落して、

「高価たかい！」

「お品が少うげして、へへへ、当節の九星早合点、陶宮手引草な
どと云う活版本とは違いますで、」

「何だか知らんが、さんざ汚れて引断ひつちぎれているじゃないか。」

「でげすがな、絵が整然ちやんとしておりますでな、挿絵は秀蘭斎貞秀
で、こりや三世相かきの名人でげす。」

と出放題な事を云う。相性さえ悪かったら、主税は二十銭のその二倍でもあえて惜くはなかつたろう。

「余り高価いよ。」と立ちかける。

「お幾干で？ ええ、旦那。」

と引据ひっすえるようにおさ圧えて云った。

「半分か。」

「へい。」

「それだつてやす廉くはない。」

亭主は膝を抱いて反身そりみになり、禪の問答持つて来い、という高慢がんしよくな顔色で。

「半価値ねだんは酷ひどうげす。植木屋だと、じやあ鉢は要りませんか、と云つて手を打つんでげすがな。画ひつだけ引剥ぺがして差上げる訳にも参りませんで。どうぞ一番御奮発ひとつを願いてえんで。五錢や十錢、旦那方にや何だけの御散財でもありやしません。へへへへへ、」

「一体高過ぎる、無法だよ。」

と主税はその言い種くせが憎いから、ますます買う気は出なくなる。「でげすがな、これから切通しの坂を一ツお下りになりや、五兩と十兩は飛ぶんでげしよう。そこでもつて、へへへ、相性は聞きまし年紀としは秘かくしたしなんて寸法だ。ええ、旦那、三世相は御祝儀

にお求め下さいな。」

いよいよむつとして、

「要らない。」と、また立とうとする。

「じゃもう五銭、五百、たつた五銭。」

片手を開いて、ひじ 肱で けんぺき 肩癖の手つきになり、ばらばらと主税の めさき 目前へ も 揉み立てる。

憤然として つッ 衝と立った。主税の肩越しにきらりと飛んで、かんとらの くすぶ 燻つた あかり 明を切つて玉のごとく、古本の上に異彩を放つた銀貨があつた。

同時に、

「要るものなら買って置け。」

と鏽さびのある、凜りんとした声がかかった。

主税は思わず身を窘すくめた。帽子を払って、は、と手を下げて、

「先生。」

露店の亭主は這出して、慌てて古道具の中へ手を支ついて、片手で銀貨をおさえながら、きよとんと見上げる。

茶の中折帽なかおれを無造作に、黒地に茶の千筋、平お召の一枚小袖。

黒斜子くろななこに丁子巴ちようじどもえの三つ紋の羽織、紺の無地献上博多の帯腰

すつきりと、片手を懐に、ゆきみじか短な袖を投げた風采は、丈高く

瘦やせぎすな肌いなせに粹である。しかも上品えもんに衣紋正しく、黒八丈くろはちの襟

を合わせて、色の浅黒い、鼻筋の通つた、目に恐ろしく威のある、

品のある、眉の秀でた、ただその口許くちもとはお妙にに肖なつて、嬰兒みどりごも懐

くべく無量の愛の含まるる。

一寸見ちよつとみには、かの令嬢にして、その父ぞとは思われぬ。令夫おく人は許がいなすけ嫁いなすけで、お妙は先生がいまだ金きんぼたん鈕たんであつた頃の若木の花。夫婦ふたりの色香を分けたのである、とも云うが……

酒井はどこか小酌かえりの帰途と覚しく、玉樹一人縁日の四辺あたりを払つてたらずイんだ。またいつか、人足もややこの辺あたりまばらに疎あたらになつて、薬師の御堂の境内のみ、その中空も汗するばかり、油煙が低く、露ほしみせ店の大傘おおがらかさを圧おさしている。

会釈をしてわずかに擡もたげた、主税の顔を、その威のある目で屹きつと見て、

「少わかいものが何だ、端はした銭せんをかれこれ人中で云つてゐる奴があるか

い、見つともない。」

と言い棄てて、直ぐに歩を移して、少し肩の昂あがつたのも、霜に堪え、雪を忍んだ、梅の樹振は潔い。

呆あっけ氣に取られた顔をして、亭主が、ずツと乗出しながら、

「へい。」

とばかり怯おびえるように差出した三世相を、ものをも言わず引ひ拵かんで、追お継いつて跡に附くと、早や五六間前途むこうへ離れた。

「どうも恐入ります。ええ、何、別に入用いりようなのじゃないのでございますから、はい、」

と最初の一喝に怯び気く々びくもので、申訳ひらしく独ひとりごと言ことのように言う。

酒井は、すらりと懐手のまま、斜めに見返つて、

「用らないものを、何だつて価を聞くんだ。素見すのかい、お前

は、」

「……………」

「素見すのかよ。」

「ええ、別に、」と俯向いて怨めしそうに、三世相を揉み、且つ

捻くる。

少時して、酒井はふと歩を停めて、

「早瀬。」

「はい、」

とこの返事は嬉しそうに聞えたのである。

三十一

名を呼ばれるさえ嬉しいほど、久闊懸違しばらくかけちがつていたので、い
そいそ懐かしそうに擦寄つたが、続いて云つた酒井の言ことばは、太いたく
主税の胸を刺した。

「どこへ行くんだ。」

これで突放されたようになって、思おもわず後退あとしざりすること三尺半。
この前さきの、原一つ越した横町が、先生の住居すまいである。そなたに
向つて行くのに、従つて歩行あるくものを、（どこへ行く。）は情な
い。散々の不首尾に、云う事も、しどろになつて、

「散歩でございます。」

「わざわざ、ここの縁日へ出て来たのか。」

「いいえ、実は……」

といささか取附くことが出来た……

「先刻、御宅へ伺いましたのですが、御留守でございましたから、後程にまた参りましょうと存じまして、その間この辺にぶらついておりました。先生は、」

酒井がずっと歩あるり出したので、たじたじと後を慕うて、

「どちらへ？」

「俺か。」

「ずっと御おかえり帰宅でございませうか。」

知れ切つたような事を、つなぎだけに尋ねると、この答えがまた案外なものであつた。

「俺は、何だ、これからお前の処へ出掛けるんだ。」

「ええ！」と云つたが、何は措おいても夜が明けたように勇み立つて、

「じゃ、あのこちらから……角の電車へ、」と自分は一足引返ひつかえしたが、慌ててまた先へ出て、

「お車を申しましょうか。」
とそわそわする。

「水道橋まで歩行くが可い。ああ、酔醒えいざめだ。」と、衣紋えもんを揺ゆつて、ぐっと袖口へ突込んだ、引緊ひきしめた腕組になつたと思うと、林

檜ひんごの綺麗な、芭蕉実バナナの芬ぶんと薰あかりる、燈あかりの真ま蒼さおな、明あかるい水菓子屋の角を曲つて、猶ためら予らわず衝つと横町の暗がりへ入つた。

下宿屋の瓦斯がすは遠し、顔が見えないからいくらか物が云いよくなつて、

「奥さんが、お風邪け気でいらつしやいますそうで、不可いけませんでございます。」

「逢つたか。」

「いえ、すやすやお寐やすみだと承りましたから、御遠慮申しました。」

「妙は居たかい。」

「四谷へ縁かたづ附づいております、先せんのお光みつをお連れなさいまして、縁

日へ。」

「そうか、娘こどもが出歩で行くようじや、大した御容態ごようたいでもなしさ。」

と少し言ことばが和らいで来たので、主税は吻ほっと呼い吸きを吐ついて、はじめて持扱もちあつた三世相さんせいそうを懐ふところ中へ始末しじまつをすると、壹岐いぎ殿坂どのざかの下口おりぐちで、急いそな不意打ふい打ち。

「お前まへの許とこでも皆健みんな康たつしやか。」

また冷りとした。内には女中と……自分ばかり、（皆健康か。）は尋常ただごと事でない。けれども、よもや、と思うから、その（皆）を僻ひがみ耳みみであろう、と自分でも疑うたがつて、

「はい？」

と、聞直きこしたつもりを、酒井がそのまま聞流きこしてしまったので

(さようでございます。)と云う意味になる。

で、安からぬ心地がする。突当りの砲兵工廠ぞうへいの夜の光景は、樂天的ながめに視ると、向島の花盛を幻燈で中空へ踊わしたようで、轟ごうごう々と轟とどろく響が、吾妻橋を渡る車かと聞なさるるが、悲観すると、煙が黄に、炎が黒い。

通りかかる時、蒸気が真まっしろ白な滝のように横みなぎざまに漲なって路を塞いだ。

やがて、水道橋の袂たもとに着く——酒井はその雲に駕がして、悠悠として、早瀬は霧に包まれて、ふらふらして。

無言の間、吹かしていた、香の高い卷まきたばこ 苳ばこを、煙の絡んだまま、ハタとそこで酒井が棄てると、蒸気は、ここで露になつて、

ジューと火が消える。

萌黄もえぎの光が、ぱらぱらと暗やみに散ると、炬きよのごとく輝く星が、人
を乗せて衝つと外濠そとほりを流れて来た。

電車

三十二

河野から酒井へ申込んだ、その縁談の事の為ではないが、同じ
この十二日の夜よ、道学者坂田礼之進は、渠かれが、主なる発企者で且

つ幹事である処の、男女交際会——またの名、家族懇話会——委くわしく註するまでもない、その向の夫婦が幾組か、一処に相会して、飲んだり、食つたり、饒舌しゃべつたり……と云うと尾籠びろうになる。紳士貴婦人が互に相親睦あいしんぼくする集会で、談政治に渉わたることは少ないが、宗教、文学、美術、演劇、音楽の品定めがそこで成立つ。現代における思潮の淵源、天堂と食堂を兼備えて、薔薇しょうび薰じ星の輝く美的の会合、とあつて、おしめと襷たすきを念頭に置かない催しであるから、留守では、芋が焦げて、小児こどもが泣く。町内迷惑な……その、男女交際会の軍用金。諸処から収集めた百有余円を、馴染なじみの会席へ支払いの用があつて、夜、モオニングを着て、さて電燈あかるの明い電車に乗った。

(アバ大人ですか、ハハハ今日の午後^{ひるすぎ}。)と酒井先生方の書生が主税に告げたのと、案ずるに同日であるから、その編上靴は、一日に市中のどのくらいに足跡を印するか料られぬ。御苦勞千万と謂わねばならぬ。

先哲曰く、時は黄金である。そんな隙^{ひまつぶ}潰しをしないで、交際の会費なら、その場で請取つて直ぐに払いを済したら好きそうなものだが、一先ず手許へ引取つて、更^{あらた}めて夫子^{ふうし}自身^{みづから}を勞するの？ 知らずや、この勘定の時は、席料なしに、その何とか云う姉さんに、茶の給仕をさせて無^{ただ}銭で手を握るのだ、と云つたものがある。世には演劇^{しばい}の見物の幹事をして、それを縁に、俳^や優^{くしゃ}と接吻^{キス}する貴婦人もあると云うから。

もつともこれは、嘘であろう。が、会費を衣兜かくしにして、電車に乗ったのは事実である。

「ええ、込合いますから御注意を願います。」

礼之進は提革さげかわに拵つかまりながら、人と、車の動揺の都度、なるべ

く操りのポンチたらざる態度を保つて、しこうして、乗合の、肩

頬、耳などの透間から、痘痕あぼたを散らして、目を配つて、鬢びんず、簪かんざし、

庇ひさし、目つきの色々を、膳の上の箸休めの気で、ちびりちびりと独

酌えどっこの格。ああ、江戸児はこの味を知るまい、と乗合の婦おんなの移香を、

楽たのしみそうに、齒をスーと遣やつて、片手で頤あごを撫でていたが、車掌

のその御注意に、それと心付くと、俄然がぜんとして、慄然りっぜんとして、

膚寒はだうして、腰が軽い。

途端に引込めた、年紀の若い半纏着の手ツ首を、即座の冷汗と取つて置きあぶらあせの膏汗で、ぬらめいた手で、夢中にしつかと引ひ拵つかんだ。

道学先生の徳孤ならず、隣りに掏摸すりが居たそうな。

「……………」

と、わななないで、気が上ずつて、ただ睨にらむ。

対手あいては手拭てぬぐいも被かぶらない職人体のが、ギツクリ、髪かみの揺れるほど、頭あたまを下げて、

「御免なすつて、」と盗むように哀憐あわれみを乞う目づかいをする。

「出、出しおろう、」

と震え声で、

「馬鹿！」と一つ極めつけた。

「どうぞ、御免なすつて、真平、へい……」

と革に縫つたまま、ぐったりとなつて、悄気返つた職人の状は、消えも入りたいとよりは、さながら罪を恥じて、自分で縊つたようである。

「コリヤ」とまた怒鳴つて、満面の痘痕を蠢かして、堪えず、握拳を挙げてその横頬を、ハタと撲つた。

「あ、痛、」

と横に身を反らして、泣声になつて、
「酷、酷うござんすね……旦那、ア痛々、」

も一つ拳で、勝誇つて、

「酷いも何も要つたものか。」

「どつ 哄と立上るたにんず 多人数の影で、月の前を黒雲が走るような電車の中。

大事に革靴かばんを抱きながら、車掌が甲走つた早口で、

「御免なさい、何ですか、何ですか。」

三十三

カラアのまっしろ 純白な、髪をきちんと分けた紳士が、職人体の半纏

着を引ひつとら 捉えて、出せ、出せ、と喚わめ いているからには、その間の

消息一目してりようぜん 瞭然たりで、車掌もちつとも猶ためら 予わず、むずと

曲者の肩を握とりしば った。

「降りろ——さあ、」

と一ツしやくり附けると、革を離して、よろよろ 蹠もたと凭もたれかかる。半纏着にまた凭れ懸かるようになって、三人もみかさ揉重もみかさなつて、車掌台へお圧されて出ると、先せんから、がらりと扉を開けて、把ハンドル手に手を置きながら、中をのぞきこ覗込んでいた運転手が、チリン無しにちようどその停留所に車を留めた。

おんたけさん

御嶽山を少し進んだ一ツ橋通どおりを右に見る辺りで、この街鉄は、

これから御承知のごとく東明館前を通つて両国へ行くのである。

「少々お待ちを……」

と車掌も大事件の肩を掴まえているから、息急せいて、四五人押込もうとする待合わせの乗組を制しながら、後退あとじきりに身をそ反らせ

て、曲者を釣身に出ると、両手を突張つつばつて礼之進も続いて、どたり。

後からぞろぞろと七八人、我勝ちに見物に飛出たのがある。事ありと見て、乗ろうとしたのもそのまま足を留めて、押取おつとりま巻いた。二人ばかり婦おんなも交つて。

外へ、その人数を吐出したので、風が透いて、すつきり透明になつて、行儀よく乗合の膝だけは揃いながら、思い思いに捻向ねじむいて、硝子戸がらすどから覗く中に、片足膝の上へ投げて、丁子巴ちようじどもえの羽織の袖を組合わせて、茶のその中折を額ひたいぶか深く、ふらふら坐眠いねむりをしていたらしい人物は、酒井俊蔵であつた。

けれども、礼之進が今、外へ出たと見ると同時に、明かにその

両眼を睜みひらいた瞳には、一点も睡ねむそうな曇くもりが無い。

惟おもうに、乗合いの蔭ではあつたが、礼之進に目を着けられて、

例の（ますます御翻訳で、）を前置きに、（就きましては御縁女儀、）を場処柄かまも介おそれわらず弁じられよう恐があるため、計略ここに出たのであろう。ただしその縁談を嫌つたという形跡はいささかも見当らぬが。

「攫やられたのかい。」

「はい、」

と見ると、酒井の向い合わせ、正面を右へ離れて、ちようどその曲者の立つた袖下の処に主税が居て、かく答えた。

「何でございますか、騒さわぎです。」

先生の前で、立騒いでは、と控えたが、門生が澄まし込んで冷
淡に膝に手を置いて、いるにも係わらず、酒井はずつと立つて、脊
だか高く車掌台へ出かけて、ここにも立淀む一ひとかたまり団の、弥次の上か
ら、大路へ顔を出した……時であつた。

主客顛倒しゅかくてんどう、曲者の手がポカリと飛んで、礼之進の痘痕あばたは砕
けた、火の出るよう。

「猿唐人め。」

あろう事か、あつと頬ほげたをおさ圧えて退る、道学者の襟飾ネクタイへ、
はすつ斜すかに肩つかを突懸つかけて、横押にぐいと押しして、

「何だ、何だ、何だ、何だど？ 掏摸すりだ、盗賊どろぼうだと……クソを
くら啖え。ナニその、胡麻和ごまあえのような汝てめえが面つらを甜なめろい！ さあ、ど

こに私が汝の紙入を掏すつたんだ。

こつちあまた、串じょうだん戯あそびじゃねえ。込合こみあつてる中だから、汝の

足でも踏んだんだろう、と思つてよ。足ぐれえ踏んだにしちや、怒りようが御大層だが、面を見や、踵かかとと大した違いは無えから、

ははは、」

と夜の大路へ笑わらいが響いて、

「汝てめえの方じや、面を踏まれた分にして、怒りやがるんだ、と断念あきらめてよ。難有ありがたく思え、日傭取ひようとりのお職人様が月給取に謝罪あやまつたんだ。

いつ出来た規則だか知らねえが、股ももツたア出すなツてえ、肥満ふとつた乳母おんぼどんが焦じれツたがりやしめえし、厭味あやまツたらしい言分だが、

そいつも承知で乗つてるからにや、他様の足を踏みや、引摺ひきずり下おろされる御法だ、と往生してよ。」

と、車掌にひよこと頭を下げて、

「へいこら、と下りてやりや、何だ、掏摸だ。掏摸たア何でえ。」
また礼之進つつかかに突懸る。

三十四

「掏すられた、盗とられたツて、幾いく千ばかり台所の小遣いりようをごまかして来やあがったか知らねえけれど、汝てめえがその面つらで、どうせなけなしの小遣だろう、落しっこはねえ。」

へん、鈍漢のろま。どの道、掏られたにや違えはねえが、汝がその間
 抜けな風で、内からここまで墓がまぐち口が有るもんかい、疾とつくの昔に
 ちよろまかされていやあがつたんだ。

さあ、お目通りで、着物を引掉ひつぷるつて神田兎かんだツこの膚はだあい合を見せ
 てやらあ、汝が口説おんなく婦おんなじやねえから、見たつて目の潰つぶれる憂きづけ
 慮えはねえ、安心して切立きつたての禪ふんどしを拝まみやあがれ。

ええこう、念晴しを澄すました上じや、汝うぬ、どうするか見ろ。」

「やあ、風が變つた、風が變つた。」

と酒井は快活に云つて、原もとの席しきに歸つた。

車掌台からどやどやと客が引込む、直ぐ後へ——見張員いきおいに事情
 を通じて、事件を引渡したと思われる——車掌いきおいが勢いきおいなく戻つて、

がちやりと提革靴さげかばんを一つ揺ゆつて、チチンと遣ゆつたが、まだ残惜
 そうに大路に半身を乗出して人だかりの混ごたごた々揉むのを、通り過
 ぎ状ぎまに見て進む。

と錦帯橋きんたいきょうの月の景色を、長谷川が大道具で見せたように、
 ずらりと繋つながって停留していた幾つとない電車は、大通りを廻り舞
 台。事の起つた車内では、風説うわさとりどり。

あれは掏摸すりの術てでございます。はじめに恐入つていた様子じゃ、
 確たもとに業わざをしたに違ちがいませんが、もう電車を下りますまでには同類
 の袂たもとへすつこかしにして、証拠が無いから逆捻さかねじを遣ゆるでござい
 ます、と小商人風こあきんどの一分別ありそうなのがその同伴つれらしい前まえ
 垂掛れかけに云うと、こちらでは法然ほうねん天窓あたまの隠居ななたび様が、七度搜たし

て人を疑えじや、滅多な事は謂われんもので、のう。

そうおつしやれば、あの掬られた、と言いなさる洋服ふくを着た方も、おかしな御仁でござりますよ。此娘これの貴下あなた、（と隣に腰かけた、孫らしい、豊肌ぼつてりした娘の膝を叩いて、）簪かんざしへ、貴下、立っ
ていてちよいちよい手をお触りなさるでございます。御仁体が、
御仁体なり、この娘こが恥かしがって、お止しよ、お止しよ、と申
しますから、何をなさる、と口まで出ましたのを堪こえていたので
ござりますよ。お止しよ、お祖母さんと、その娘はまた同じこと
をここで云つて、ぼうと紅くなる。

法然天窓は苦笑いをして……後からせせるやら、前からは毛の
生おえた、大おな足を突出すやら……など、浄瑠璃にもあつて、のう、

昔、この登り下りの乗合船では女子衆おなごしゆが怪しからず迷惑をしたものじゃが、電車の中でも遣りますか、のう、結句、掏摸よりは困りものじやて。

駄目でさ、だつてお前さん、いきなり引摺り下ろしてしまったんだから、それ、ばらばら一緒に大勢が飛出しましたね、よしんばですね、同類が居た処で、疾とつくさきの前、どこかへ、すつ飛んでいるんですから手係りはありません。そうでなくつて、一人も乗の客りてが散らずに居りや、私わっしだち達だつて関かかりあ合あいは抜けませんや。巡おまわり査しらが来て、一応検べるなんぞツて事になりかねません。ええ、後はどうなるツて、お前さん、掏摸は現行犯ですからね、証拠が無くつて、知らないと云や、それまででさ。またほんとうに掏ら

れたんだか何だか知れたもんじやありません、どうせ間抜けた奴
 なんでさあね、と折革鞆おりかばんを抱え込んだ、どこかの中小僧らしい
 のが、隣合つた田舎の親仁おやしに、尻上りに弁じたのである。

いずれ道学先生のために、祝すべき事ではない。

あえて人の憂うれいを見て喜ぶような男ではないが、さりとして差当り
 ああした中の礼之進のために、その憂を憂として悲かなしむほどの君子
 でもなからう。悪くすると（状を見ろ。）ぐらいは云うらしい主
 税が、風向きの悪い大人の風説うわさを、耳を澄まして聞き取りながら、
 太いたく憂うれわしげな面おも色もちで。

實際鬱ふさぎ込んでいるのはなぜか。

忘れてはならぬ、差向いに酒井先生が、何となく、主税を睨にらむ

がごとくにしてしていることを。

三十五

鬱ぐも道理ことわり、そうして電車の動くままに身を任せてはいるものの、主税は果してどこへ連れられるのか、雲に乗せられたような心持がするのである。

もつとも、薬師の縁日で一所になって、水道橋から外濠線そとぼりせんに乗った時は、仰せに因つて飯田町なる、自分の住居すまいへ供をして行ったのであるが、元来その夜は、露店の一喝と言ひ、途中の容子と言ひ、酒井の調子が凜りんとして厳しくつて、かねて恩威並び行わ

るる師の君の、その恩に預かれそうではなく、罰利生ばちりしようある親分の、その罰の方が行われそうな形勢は、言わずともこの事であつたから、電車でも片隅へ蹙すくんで、僥倖さいわいそこでも乗客のりてが込んだ、人蔭まばゆになつて、眩まばゆい大目玉の光から、顔を躲かわして免まぬかれていたは可いが、さて、神楽坂で下りて、見附の橋を、今夜に限つて、高い処のように、危あやつかしく渡ると、件くだんの売卜者うらないの行燈あんどうが、真黒まつくろな石垣の根に、狐火かと思えて、急に土手の松風を聞く辺あたりから、そろそろ足許が覚束なくなつて、心も暗く、吐胸とむねを支ついたのは、お蔭おかげの儀。

ひとえに御目玉の可おそろし恐おそいのも、何を秘かくそう縷子しゆすの帯きに極まつたのであるから、これより門口へかかる……あえて、のろけるにし

もあらずだけれども、自分のあしおと 躑音は、聞覚えてゐる。

その躑音が、他の躑音と共に、澄まして音おとず 信れば、（お帰んなさい。）で、出て来るは定のもの。分けて、お妙の事を、やきもき氣を揉んでいる処。それが為にこうして出向いた、真砂町の様子を聞き度さに、特に、こと 似たもの夫婦の譬、たとえ 信玄流の沈勇の方ではないから、随分ひらり 翻然と露れ兼ねない。

いぎ、露れた場合には……と主税は冷汗になつて、胸が躍る。あいにく例いつも のように話しもしないで、ずかずか酒井が歩行ある いたので、とこう云う間ひま もなかつた、早や我家の路地が。

堪たま りかねて、先生と、呼んで、女中おんな が寝ていますと失礼ですか、一足！ と云うが疾はや いか、（お先へ、）は身体からだ で出て、横ツ

飛びに駈^かけ抜ける内も、ああ、我ながら拙^{つたな}い言分。

(待て！ 待て！)

それ、声が掛った。

酒井はそこで足を留めた。

屹^{きつ}と立って、

(宵から寐^ねるような内へ、邪魔をするは気の毒だ。他^わへ行こう、

一緒に来な。)

で路が變つて、先生のするまま、驚^わに攫^{さら}われたような思いで乗

つたのが、この両国行——

なかなか道学者の風説^{うわさ}に就いて、善悪ともに、自から思慮^{めぐ}を回

らすような余裕とは無いのである。

電車が万世橋の交叉点を素直ぐに貫いても、鷺は翼を納めぬので、さてはこのまま隅田川へ流罪ものか、軽くて本所から東京の外へ追放になろうも知れぬ。

と観念の眼を閉じて首垂れた。

「早瀬、」

「は、」

「降りるんだ。」

一場展開した広小路は、二階の燈と、三階の燈と、店の燈と、街路の燈と、蒼に、萌黄に、紅に、寸隙なく鏤められた、綾の幕ぞと見る程に、八重に往来う人影に、たちまち寸々と引分けられ、さらさらと風に連れて、鈴を入れた幾千の輝く鞆となつて、

八方に投げ交わさるるかと思われる。

ここに一際夜の雲の濃こまやかに緑の色を重ねたのは、隅田へ潮がさすのであろう、水の影か、星きらめが閃く。

我が酒井と主税の姿は、この広小路の二点となつて、浅草橋を渡果てると、富貴ふうきかまど竈が巨人のごとく、仁丹が城のごとく、相對して角を仕切つた、横町へ、斜めに入つて、磨硝すりがらす子の軒の燈籠の、媚なまめかしく寂寞ひっそりして、ちらちらと雪の降るような数ある中を、みの蓑さまを着た状して、忍びやかに行くのであつた。

柏家

三十六

やがて、貸切と書いた紙の白い、その門の柱の暗い、敷石のぱ
 つと明あかるい、静しん肅としながら幽かすかなように、三味線さみせんの音ねが、チラチラ
 水の上を流れて聞える、一軒大おお構がまえの料理店の前を通つて、三
 つ四つ軒燈籠の影に送られ、御神燈の灯に迎えられつつ、地つちの濡
 れた、軒つやに艶ある、その横町の中程へ行くと、一ひとすじ条おぼろ朧な露路が
 ある。

芸妓家二軒げいしややの廂ひあわい合あひで、透かすと、奥に薄墨で描いたような、
 竹垣が見えて、涼しい若葉の梅ひときが一木、月はなけれど、風情を知

らせ顔にすつきりとイむと、向い合つた板塀越に、青柳の忍び姿が、おくれ毛を銜えた態で、すらすらと靡なびいている。

梅と柳の間を潜くぐつて、酒井はその竹垣について曲ると、処がら何となく羽織の背の婀娜あだめくのを、隣家となりの背戸の、低い石燈籠がト踞しゃがんだ形で差覗さしのぞく。

主税は四辺あたりを見て立つたのである。

先生がその肩の聳そびえた、懐手のまま、片手で不精らしくとんとんと枝折戸しおりどを叩くと、ばたばたと跫音あしおと聞えて、縁の雨戸が細目に開いた。

と派手な友染の模様が透いて、真円まんまるな顔を出したが、燈あかりなしでも、その切下げた前髪の下、くるツとした目は届く。隔ては

一重で、つい目の前の、丁子巴の紋を見ると、莞爾々と笑いかけて、黙って引込むと、またばたばたばた。

程もあらせず、どこかでねじを圧したと見える、その小座敷へ、

電燈が颯と点くのを合図に、中脊で瘦ぎすな、二十ばかりの細

面、薄化粧して眉の鮮明な、口許の引緊った芸妓島田が、

わざとらしい堅気づくり。袷をしゃんと、前垂がけ、褌を取るの

は知らない風に、庭下駄を引掛けて、二ツ三ツ飛石を伝うて、カ

チリと外すと、戸を押してずツと入る先生の背中を一ツ、黙言

で、はたと打った。これは、この柏屋の姐さんの、小芳と云う

ものの妹分で、綱次と聞えた流行妓である。

「大層な要害だな。」

「物騒ですもの。」

「ちつとは貯蓄たまったか。」

と粗雑ぞんざいに廊下へ上る。先生に従うて、浮かぬ顔の主税と入違いに、綱次は、あとの戸を閉めながら、

「お珍らしいこと。」

「……………」

「葛吉姉さんはお達者？」と小さな声。

主税はヒヤリとして、ついに無い、ものをも言わず、恐れた顔をして、ちよつと睨にらんで、そつと上つて、開けた障子へ身体からだは入れたが、敷居際かじへ畏まる。

酒井先生、座敷の真中へぬいと突立ったままで——その時茶が

かつた庭を、雨戸で消して入り来る綱次に、

「どうだ、色男が糺せりだ出したように見えるか。」

とずつと胸を張つて見せる。

「私には解りません、姉さんにお見せなさいまし、今に帰りますから、」

「そう目前めまきが利かないから、お茶を挽ひくのよ。当節は女学生でも、今頃は内には居ない。ちつと日比谷へでも出かけるが可いい。」

「憚はばかりさま様、お座敷は宵の口だけですよ。」

と姿見の前から座蒲団をすりと引いて、床の間の横へ直した。

「さあ、早瀬さん。」と、もう一枚。

主税は膝わきの傍へ置いたままなり。

友染の羽織を着たのが、店から火鉢を抱えて来て、膝と一所に、お大事のもののように据えると、先生は引ひん跨またぐ体に胡坐あぐらの膝へ挟んで、口の辺あたりを一ツ撫でて、

「敷きな、敷きな。」

と主税を見向いた。

「はい、」

とばかりで、その目玉に射られるようで堅くなつてどこも見ず、
面おもてを背けると端はしなく、重かさ筆ねだん筒すの前なる姿見。ここで梳くしける柳けずの髪は長かろう、その姿見の丈が高い。

「お敷きなさいなね、貴下あなた、此家ここへいらつしやりや、先生も何も
ありはしません、御遠慮をなさらなくつても可いんですよ。」

と意気、文学士を呑む。この女は、主税きちんが整然きちんとしているのを、
気の毒がるより、むしろ自分の方が、為に窮屈きつこくを感ずるので。

その癖、先生には、かえつて、遠慮の無い様子で、肩を並べる
ようにして支つき膝ひざで坐りながら、火鉢の灰をならして、手でその
縁しじをスツと扱しごく。

「茶を一ツ、熱いのを。」

酒井は今のを聞かない振で、

「それから酒だ。」

綱次は入口の低い襖ふすまを振返つて、ト拝む風に、雪のような手をたた叩く。

「自分で起たて。少わかいものが、不精を極きめるな。」

「厭いやですよ。ちゃんと番をしていなくつては。姉さんに言いつか
つているんだから。」

と言いながら、人懐かしげに莞爾にっこりして、

「ねえ、早瀬さん。」

「で、ございますかな。」とようよう膝いざ去り出して、遠くから、
背を円くして伸上つて、腕を出して、巻まきた蓑ばこに火を点つけたが、
お蔭ものさしが物指ものさしを当てた襦袢じゆばんの袖が見えたので、気にして、慌て
て、引込める。

「ちつと透かさないか、籠こもるようだ。」

「縁側ですか。」

「ううむ、」

と頭かぶりを掉ふつたので、すつと立って、背後うしろの肱ひじ掛かけ窓まどを開けると、

辛すうじて、雨落すだけの隙すきを残のこして、厳いかめしい、忍返しのしのある、しか

も真ま新あたらしい黒板ま塀らが見える。

「見霽みはしでも御覽みはなさいよ。」

と主税しゆぜを振向ふりむいてまた笑う。

酒井さかいが凝じつと、その塀へを視ながめて、

「一面いっぺんの杉すぎの立樹たてじゆだ、森々もりもりとしたものさ。」

と撥くすぐつて、独ひとりで笑った。

「しかし山焼の跡だと見えて、真黒は酷いな。俺もゆくゆくは此家へ引取られようと思つたが、裏が建つて、川が見えなくなつたから分別を変えたよ。」

そこへ友染がちらちら来る。

「お出花を、早く、」

「はあ、」

「熱くするんだよ。」

「これ、小児こどもばかり使わないで、ちつと立つて食うものの心配でもしろ。民たみはどうした、あれは可いい。小老こまめ実に働はたらくから。今に帰かえつたら是非酌しやくをさせよう。あの、愛あい嬌きやうのある処ところで。」

「そんなに、若いのが好すなら、御内のお嬢さんが可いんだわ。ね

え早瀬さん。」

これには早瀬も答えなかつたが、先生も苦笑した。

「妙も近頃は不可いけなくなつたよ。奥方と目配めくばせをし合つて、とかく

銚子をこぎつて不可いか。第一酌をしないね。学校で、（お酌さん

。）と云うそうだ。小児どもの癖に、相応に皮肉なことを云うも

んだ。」

「貴郎あなたには小児でも、もうお嫁入盛ざかりじやありませんか。どうかす

ると、こつちへもいらつしやる、学校出の方にや、酒井さんの天エ

女ンゼルが、何のと云つちや、あの、騒いでおいでなさるのがありま

すわ。」

「あの、嬰児あかんぼをか、どこの坊やだ。」

「あら、あんなことを云つて。こちらの早瀬さんなんかでも、ちようど似合いの年紀頃じやありませんか。」

と何でものう云つてのけたが、主税は懐中の三世相とともに胸に支えて俯向いた。

「その癖、当人は嫁入と云や鼠の絵だと思つているよ。」

と云いかけて莞爾として、

「むむ、これは、猫の前で危い話だ。」

と横顔へ煙を吹くと、

「引搔いてよ。」と手を挙げたが、思い出したように座を立つて、

「どうしたんだらうねえ、電話は、」と呟いて出ようとする。

「おい、阿婆は？」

「もう寐ねました。」

「いや、老人としよりはそう有りたい。」

座の白ける間は措かず、綱次はすぐに引返ひっかえして、

「姉さんは、もう先方むこうは出たそうですわ。」

云う間程なく、矢を射るような腕車くるま一台、からからと門かどに着いたと思うと、

「唯ただいま今！」と車夫の声。

三十八

「そうかい。」

と……意味のある優しい声を、ちよいと誰かに懸けながら、一枚の襖音ふすまなく、すらりと開いて入ったのは、座敷帰りの小芳である。

うりぎねが^お瓜核顔の、鼻の準じんじょう縄な、目の柔和やさしい、心ばかり面おも裏やつれがして、黒髪の多いのも、世帯を知ったようで奥床しい。眉のやや濃い、生際はえぎわの可いい、洗髪を引詰ひつつめた総そう髪がみの銀杏返いちようがえしに、すつきりと櫛の齒が通つて、柳に雨の艶つやの涼しさ。撫肩えもんの衣紋つき、少し高目なお太鼓の帯の後姿が、あたかも姿見に映つたれば、水のように透通る細長い月の中から拔出したようで気高いくらい。成程この婦おんなの母親なら、芸者家の阿婆おつかあでも、早寝をしよう、と領うなずかれる。

「まあ、よくいらしつてねえ。」

と主税の方へ挨拶して、微笑みながら、濃い茶に鶴の羽小紋の紋もんつき着二枚あわせ袴、藍あいけねずみ気鼠ねずみの半襟、白茶しらちゃじ地に翁おきなごうし格子ごうしの博多の丸帯、古代模様空色ちりめん縮ちりめん緬ながじゆばんの長襦ながじゆばん袴、慎ちりめんましやかに、酒井ひっそに引添ひっそうた風とりなり采さしつかは、左支さしつかえなく頭つむりが下るが、分けてその夜よの首尾ひっそであるから、主税は丁寧よに手を下げて、

「御機嫌よ宜よう、」と会釈よをする。

その時、先生ぶぜん撫然ぶぜんとして、

「芸者に挨拶よをする奴があるか。」

これに一言句ひともんくあるべき処よを、姉おとなしさんは柔順おとなしいから、

「お出花よが冷よくなつて、」

と酒井の呑さしを取つて、いそいそ立つて、開けてある肱掛ひしかけ窓まどから、暗い雨落へ、ぎぶりと覆かえすと、斜めに見返つて、

「大な湯覆おおきゆこぼしだな、お前まへン許とこのは。」

「あんな事ばかり云つて、」

と、主税を見て莞爾にっこりして、白歯を染めても似合う年紀とし、少しも浮いた様子は見えぬ。

それから、小芳は伏目になつて、二人の男へ茶を注ついだが、ここに居ればその役目の、綱次は車が着いた時、さあお帰りだ、と云うとともに、はらはら座敷を出たのと知るべし。

酒井は軽かるく襟しほを扱しいて、

「そこで、御馳走は、」

「綱次さんが承知をします。」

「また寄鍋だろう、白滝沢山と云う。」

「どうですか。」

と横目で見えて、嬉しそうに笑えみを含む。

「いずれ不漁しけさ。」

と打う棄ちるやように云ったが、向直むかひつて、

「早瀬、」と呼んだ声あが更あらたまった。

「ええ。」

「先刻さつきの三世相を見せろ。」

一 仔細ひとしさいなくてはならぬ様子があるので、ぎよつとしながら、

辞いなむべき数すうではない。……柏家は天井裏を掃除しても、こんなも

のは出まいと思われる、薄汚れたのを、電燈の下もとに、先生の手にもじもじと奉る。

引取ひつとつて、ぐいと開けた、気が入つて膝を立てた、顔の色が厳しくなつた。と見て胆きもを冷したのは主税で、小芳は何の気も着かないから、晴々しい面おももち色で、覗のぞきこ込んで、

「心当りでも出来たんですか。」

不答こたえず。煙草の喫すいさしを灰の中へ邪険つっこに突込み、

「何は、どうした。」

と唐突だしぬけに聞かれたので、小芳は恍惚うっとりしたように、酒井の顔を視ながめると……

「あれよ、ちよいと意気な、清元うまの旨い、景氣うまの可い、」

「いいいい本を引返して、

「扱帯しづきで、鏡に向つた処は、絵のようだという評判の……」

と凝じつと見られて、小芳は引入られたように、

「蔦吉さん。」

と云つて、喫きいかけた煙管きせるを忘れる。

主税あたまは天窓ぞつから悚然ぞつとした。

「あれはどうした。」

「え、」

「俺はさつぱり山手のてになつて容子を知らんが、相変らず
繁はんじよう昌しよう

か。」

三十九

小芳は我知らず、（ああ、どうしよう。）と云う瞳が、主税の方へ流るるのを、無理に堪えて、酒井を瞻みまもった顔が震えて、

「葛吉さんはもう落籍ひきしましたそうです。」

と言わせも果てずに、

「（そうです。）は可怪おかしい。近所に居ながら、知らんやつがあるか、判然はつきり謂え、落籍ひきたのか！」

「はい、」と伏目になったトタンに、優しげな睫毛まつげが、（どうかなさいよ。）と、主税の顔へ目配せする。

酒井は、主税を見向きもしないで、悠々とした調子になり、

「そりや可い事をした、泥水稼業を留めたのは芽出度い。で、どこに居る、当時は……よ？」

「私はよく存じませんので……あの、どこか深川に居るんですつて。」

「深川？ 深川と云う人に落籍されたのか、川向うの深川かい。」
「……………」

「どうだよ、おい、知らない奴があるか。お前、仲が好くつて、姉きょうだい妹いのようだと云ったじゃないか。姉妹分が落籍たのに、その行先が分らない、べら棒があるもんかい。

姉さんとか、小芳さんとか云つて、先方さきでも落籍ひき祝いに、赤飯ぐらい配つたらう、お前食つたらう、そいつを。

蒸立だとか、好い色だとか云つて、喜んでよ、こつちからも、
 伊にんべんの切手の五十銭ぐらい祝つたろう。小遣帳に記ついているだろう。
 その婦おんなの行先が知れない奴があるものか。

知らなきや馬鹿だ。もつとも、己おれのような素すいちぶ一步と腐合おうと
 云う料簡りょうけん方かただから、はじめから惻りこう憐れんでないのは知れてるんだ。
 馬鹿は構わん、どうせ、芸者だ、世間並じやない。芸者の馬鹿は
 構わんが、薄情は不可いかんな！ 薄情は。薄情な奴は俺おいら真平だ。」

「いつ、私が、薄情な、」
 と口惜くやしく屹きつとなる処を、酒井の劍幕はげしが烈しいので、悄しおれて声こゑが
 霑うるんだのである。

「薄情でない！ 薄情さ。懇意おんなな婦おんなの、居処いこを知らなけりや薄情

じやないか。」

「だって、貴郎あなた。だって、先方さきでも、つい音信たよりをしないもんですから、」

「先方さきが音信たよりをしなくつても、お前の薄情は帳消は出来ん。なぜこつちから尋ねんのだ。こんな稼業だから、暇ゆきが無い。行ゆき通かよいはしないでも、居処きんかが分らんじや、近火きんかはどうする！ 火事見舞ゆきに町内の頭かしらも遣らん、そんな仲よしがあるものか、薄情だよ、水臭いよ。」

姉さんの震えるのを見て、身から出た主税たまは堪りかねて、

「先生、」

と呼んだが、心ばかりで、この声は口へは出なかつた。

酒井は耳にも掛けないで、

「済まん事さ、俺も他人でないお前を、薄情者にはしたくないから、居処を教えてやろう。」

堀の内へでも参詣まいする時は道順だ。煎餅の袋でも持つて尋ねてやれ。おい、蔦吉は、当時飯田町五丁目の早瀬主税の処ところに居るよ。」

真蒼まっさおになつて、

「先生、」

「早瀬！」

と一声屹きつとなつて、膝を向けると、疾風一陣、黒雲を捲まいて、三世相を飛ばし来つて、主税の前へはたと落した。

眼の光射るがごとく

「見ろ！ 野郎は、素^{すあわせ}裕^ゆのすツとこ被^{かぶり}よ。おんな^{おんな}婦^{おんな}は編笠^{あむがさ}を着^きて三味^{さんみ}線^{せん}を持^もつた、その門^{かどつけ}附^{つけ}の絵^えのある処^{ところ}が、お前^{まへ}たちの相性^{さうせい}だ。はじめから承知^{しやうち}だろう。今更^{いまさら}本郷^{ほんきやう}くんだりの俺^{おれ}の縄張^{なわば}内^{うち}を胡乱^{うらん}ついで、三世相^{さんせいさう}の盗人^{ぬすつとのぞ}覗^{のぞ}きをするにや当^{あた}るまい。

その間^ま抜^ぬけさ加減^{かげん}だから、露店^{ほしみせ}の亭主^{ていしゆ}に馬鹿^{ばか}にされ^らるんだ。立派^{りつぱ}な土百姓^{どひやくしやう}になりやあがつたな、田舎^{いなかもの}漢^まめ！」

四十

主税^{しゆぜい}はようよう、それも唾^{つば}が乾^{かわ}くか、かすれた声^{こゑ}で、

「三世相^{さんせいさう}を見ておりましたのは、何も、そんな、そんな訳^{わけ}じゃござ

「ございません……」とだけで後が続かぬ。

「翻訳でも頼まれたか、前世は牛だとか、午うまだとか。」

と串じょうだん戯ごのような警拔な詰問が出たので、いささか言ことばが引立ひつたつて、

「いいえ、実はその何でございまして。その、この間中から、お嬢さんの御縁談がはじまつております、と聞きましたもんですから、」

小芳はそつと酒井を見た。この間なかでも初に聞いた、お妙の縁談と云うのを珍らしそうに。

「ははあ、じゃ何か、妙と、河野英吉との相性を検しらべたのかい。」
果せる哉かな、礼之進が運動で、先生は早や平家の公きん達だちを御存じ、

と主税は、折柄も、我身も忘れて、

「はい、」と云つて、思わず先生の顔を見ると、まぶたさつ瞼が颯と暗くなるまで、眉の根がじりりと寄つて、

「大きに、お世話だ。酒井俊蔵と云う父親と、れっき歴然とした、謹

(夫人の名。)と云う母親が附いている妙の縁談を、門附風情が何を知つて、あわて周章なさんな。

せんじょう僭上だよ、無礼だよ、罰当り!

お前が、男世帯をして、いや、菜が不味まずいとか、女中おんなが焼豆腐ばかり食わせるとか愚痴うそつた、と云つて、可いいか、この間持つて行つた重詰うどなんざ、妙が独活うどを切つて、奥さんが煮たんだ。お前達もつたい了道具の無い内だから、勿体ない、一度先生が目を通して、綺

麗もに装もつてあるのを、重箱のまま、売婦ばいたとせせり箸ばしなんぞしやあがつて、弁松にや叶わないとか、何とか、薄生意気な事を言つたろう。

よく、その慈姑くわいが咽喉のどに詰どつて、頓死とんしをしなかつたよ。

無礼千万な、まだその上に、妙の縁談の邪魔をするというは何事だ。」

と大喝した。

主税は思わず居直つて、

「邪魔を……私わたくし、私わたくしが、邪魔なんぞいたしますものでございますか。」

「邪魔をしない！ 邪魔をせんものが、縁談の事に付いて、坂田

が己おれに紹介を頼んだ時、お前なぜそれを断つたんだ。」

「……………」

「なぜ断つた？」

「あんな、道学者、」

「道学者がどうした。結構さ。道学者はお前のような犬でない、畜生じゃないよ。何か、お前は先方さきの河野一家の理想とか、主義とかに就いて、不服だ、不賛成だ、と云つたそうさ。不服も不賛成もあつたものか。人間並の事を云うな。畜生の分際で、出過ぎた奴だ。」

第一、汝きさまのような間違つた料簡りようけんで、先生の心が解るのかよ

！ お前は不賛成でも己は賛成だか、お前は不服でも己は心服だ

か——知れるかい。

何のかのと、故障を云つて、（御門生は、令嬢に思召しがあるのでごわりましょう。）と坂田が齒を吸つて、合点のみこんでいたが、
 どうだ。」

「ええ！ あの、痘痕あばたが、」

と色をかえて戦わなないた。主税はしかも点々たらたらと汗を流して、

「他の事ほかとは違います、聞棄てになりません。私わたくしは、私は、これは、改めて、坂田に談じなければなりません。」

「何だ、坂田に談じる？ 坂田に談じるまでもない。己がそう思つたらどうするんだ、先生が、そう思つたら何とするよ。」

「誰が、先生、そんな事。」

「いいや、内の玄関の書生も云った、坂田が己の許へ来たと言うと、お前の目の色が違うそうだ。車夫も云った、車夫の女房も云ったよ。（誰か妙の事を聞きに来たものはないか。）と云って、お前、車屋でまで聞くんだそうだな。恥しくは思わんか、大きな態なりをしやあがって、薄髯うすひげの生えた面つらを、どこまで曝さらして歩行あるしているんだ。」

と火鉢をぐいぐいと揺ゆすぶつて。

四十一

「あつちへ躑ひよろひよろ々々、こつちへ踉よろよろ々々、狐の憑ついたように、俺の

近所を、葛西街道かさいにして、肥料桶こえたごの臭においをさせるのはどこの奴だ。

何か、聞きや、河野の方で、妙の身体からだに探捜さぐりを入れるのが、不

都合だとか、不意気ぶいきだとか言うそうだが、

噫あゝ、礼之進れいしんが皆饒舌しゃべった……

「意気も不意気も土百姓の知った事かい。これ、河野はお前のよ
うな狐憑こむぎじゃないのだぜ。」

学位のある、立派な男が、大切な嫁とを娶とるのだ。念ねんを入れんで
どうするものか。検しらべるのは当あたり前まえだ。芸者かかあを媽かかあ々にするんじ
やない。

また己おれの方おれじゃ、探捜たんさくを入れて貰もらいたいのよ。さあ、どこでも

非難ひなんをして見ろ、と裸体はだかで見せて差支さしつかえの無いように、己おれと、謹

とで育てたんだ。

何が可おそろし恐おそろしい？ 何が不平だ？ 何が苦しい？ 己は、渠等かれらの

検べるのより、お前がそこらをまごつく方がどのくらい迷惑か知れんのだ。

よしんば、奴等に、身元検べをされるのが迷惑とする、癩しやくに障るとなりや、己がちやんと心得てる。この指一本、妙の身体からだを秘かくした日にや、按摩あんまの勢揃あつえほど道学者輩が杖つえを突張つえって押寄せて、垣かき覗のぞきを遣はなつたつて、黒子ほくろ一点も見せやしない、誰だと思う、

おい、己だ。」

とまた屹きつと見て、

「なぜ、泰然と落着おち払はらつて、いや、それはお芽出度い、と云つて、

頼まれた時、紹介をせん。癪に障る、野暮だ、と云う道学者に、ぐツと首根ツ子をおさ圧えられて、（早瀬氏はこれがために、ちと手負猪じしでござりましたな。）なんて、齒をすすらせるんだ。

馬鹿野郎！俺おいら弟子はいくらでもある、が小児こどもの内から手許てもとに置いて、飴あめン棒までねぶらせて、妙ひとつと同一内で育てたのは、汝きこたまばかりだ。その子分が、道学者に冷かされるような事を、なぜするよ。

（世間に在るやつでござります。飼犬に手を嚙かまれると申して。以来あの御門生には、令嬢お氣を着けなさらんと相成りませんで。）坂田が云つたを知ってるか。

馬鹿野郎、これ、」

と迫った調子に、慈愛が籠って、

「さほどの鈍^{とんちき}的でもなかったが、天罰よ。先生の目を眩^{くら}まして、売^{ばいた}婦なんぞ引摺込む罰が当って、魔^まが魅^さしたんだ。

嫁入前の大事な娘だ、そんな狐の憑いた口で、向^{こうご}後妙の名も言うな。

生意気に道学者に難癖なんぞ着けやあがつて、汝^{てめえ}の面^{つら}当にも、娘は河野英吉にたたツ呉れるからそう思え。」

「貴^{あなた}郎、」

と小芳が顔を上げて、

「早瀬さんに、どんな仕損いが、お有んなすったか存じませんが、決して、お内や、お嬢さんの……（と声が曇って、）お為悪かれ、

と思つてなすつたんじやござんすまいから、」

「何だ。為悪かれ、と思わん奴が、なぜ芸者を引摺込んで、師匠に対して申訳のないような不埒ふらちを働はたらく。第一お前も、」

稲妻が西へ飛んで、

「同類だ、共謀ぐもだ、同罪だよ。おい、芸者を何だと思つている。

藪やぶ入いりに新橋を見た素す丁てい稚ちのようありがたに難有あいもんだと思つているの

か。馬鹿だから、己おのが不便ふびんを掛けて置きや、増長して、酒井は芸者の情婦いろを難有あがつてると思うんだらう。高慢に口なんぞ突出しやがつて、俯向うつむいておれ。」

はつと首垂うなだれたが、目に涙一杯。

「そんな、貴郎、難有あがつてゐるなんのツて、」

「難有くないものを、なぜ俺の大事な弟子に蔦吉を取持ったんだい！」

主税は手を支ついて摺ずって出た。

「先せ、先生、姉さんは、何にも御存じじやございません、それは、お目違いでございまして、」

と大呼吸おおいきを胸で吐つくと、

「黙れ！ 生れてから、俺おいち、目違いをしたのは、お前達二人ばかりだ。」

「お言葉を反かえしますようでございますが、」

主税は小芳の自分に対する情あだが仇あだになりそうなので、あるにもあられず据身すえみになつて、

「誰がそういうことをお耳に入れましたか存じませんが、芸者が内に居りますなんてとんだ事でございます。やっぱり、あの坂田の奴が、怪しかりません事をわたくし。私は覚悟がございます、彼奴あいつに對しましては、」と目の血走るまで意気込んだが、後暗い身の明あかりは、ちつとも立つのではなかつた。

「覚悟がある、何の覚悟だ。おれ己おれに申訳が無くつて、首くくを縊くくる覚悟か。」

「いえ、坂田の畜生、根もない事を、」

「馬鹿！」

と叱しつして、調子を弛ゆるめて、

「も休み休み言え。失礼な、他人の壁訴訟を聞いて、根も無い事

を疑うような酒井だと思つているか。お前がその盲目めくらだから悪い

事を働いて、一端いっぽし己の目を盗んだ気で洒しやあしやあ亜々々としてゐるんだ。

先刻さつきどうした、牛込見附でどうしたよ。慌いいぐてやあがつて、言

種さもあるうに、（女中が寝ていますと失礼ですから。）と駈出

した、あれは何の状ざまだ。婆ばばあが高利貸をしていやしまい、主人あるじの留

守に十時前から寝込む奴がどこに在る。

また寝ていれば無礼だ、と誰が云つたい。これ、お前たちに掛

けちや、己の目は暗やみでも光るよ。飯田町の子分の内には、玄関の

揚板の下に、どんな生意気な、おんな婦の下駄が潜んでるか、鼻緒の色まで心得てるんだ。べらぼうめ、ないしよう内証でする事は客の靴へ灸を据えるのさえ秘かくしおおされないで、（恐るべき家庭でごわります。）と道学者に言われるような、薄っぺらな奴等が、先生の目を抜こうなぞと、天下を望むような叛逆を企てるな。

悪事をするならするようには、もつと手際よく立派に遣れ。見事に己を間抜けにして見ろ。同じ叱言こごとを云うんでも、その点だけは恐入ったと、鼻毛を算よまして讚ほめてやるんだ。三下め、先生の目を盗んでも、お前なんぞのは、たかだか駈出しの（タツシエン、ディーブ）だ。」

これは、（攫徒すり）と云う事だそうである。主税は折れるように

手をハツと支ついた。

「恐入つったか、どうだ。」

「ですが、全く、その、そんな事は……」

「無い？」

「……………」

「芸者は内に居ないと云うのか。」

「はい。」

へきれき
霹靂のごとく、

「帰れ！」

小芳が思わず肩を窘すくめる。

「早瀬さん、私、私じゃ、」

と声が消えて、小芳は紋着もんつきの袖そのまま、眉も残さず面おもてを蔽おほう。

「いや、愛想の尽きた蛆虫うじむしめ、往生際の悪い丁稚でっちだ。そんな、しみつたれた奴は盗賊どろぼうだって風上にも置きやしない、酒井の前は恐れ多いよ、帰れ！」

これ、姦通まおとこにも事情はある、親不孝でも理窟を云う。前座のような情実わけでもあつて、一旦内へ入れたものなら、猫の兎この始末をするにも、鯉節かつおぶしはつきものだ。談はなしを附けて、手を切らして、綺麗さばに捌さばいてやろうと思つて、お前の許とこへ行くつもりで、百と、二百は、懐中ふところに心得て出て来たんだ。

この段になつても、まだ、ああ、心得違ちがいをいたしました。先

生よしなに、とは言い得ないで、秘し隠しをする料簡りようけんじゃ、
 汝うぬが家を野天のてんにして、婦おんなとさかっていたいのだろう。それで身が
 立つなら立つて見ろ。口惜くやしくば、おい、こうやって馴染なじみの芸者
 を傍そばに置いて、弟子に劍突けんつくをくわせられる、己のような者にな
 って出直して来い。

さあ、帰れ、帰れ、帰れ！ 汚けがらわしい。帰らんか。この座敷は
 己の座敷だ。己の座敷から追出すんだ。帰らんか、野郎、帰れと
 云うに、そこを起たたと蹴殺けころすぞ！」

「あれ、お謝罪わびをなさいまし。」と小芳が楯たてに、おろおろする。
 主税は、砕けよ、と身を揉んで、

「小芳さん、お取なしを願います。」と熟じつと瞻みつめて色が変わった。

「奥さんに、奥さんに、お願いなさいよ、」

四十三

「何を、奥さんに頼めだい、黙れ。謹が芸者の取持なんぞすると思ふか。先刻も云う通り、芳、お前も同類だ、同類は同罪だよ。早瀬を叩出した後じゃ己が追出る、お前ともこれきりだから、そう思え。」

と言わるるままに、忍び音が、声に出て、肩の震えが、袖を揺つた。小芳は幼いもののごとく、あわれに頭を掉つて、厭々をするのであつた。

「姉さん、」

と思込んだ顔を擡もたげた、主税は臉まぶたを引ひっこす擦こすつて、元氣づいたよ

うな……調子ばかりで、一向取留の無い様子、しどろりになって、

「貴女あなたは、貴女は御心配下さいませんように……先生、」

と更あらためて、両手を支ついて、息を切つて、

「申訳がございません。とんだ連まぎぞえ累づえでお在んなさいます。どう

ぞ、姉さんには、そんな事をおつしやいません様に、私わたくしを御存分

になさいまして。」

「存分にすれば蹴殺すばかりよ。」

と吐出すように云つて、はじめて、豊かに煙を吸つた。

「じゃ恐入つたんだな。」

内に蔦吉が居るんだな。

もう陳じないな。」

「心得違いをいたしましたして……何とも申しようがございませぬ。」
と吻ほっと息を吐ついたと思うと、声こゑが霑うるむ。

最早罪に伏したので、今までは執成とりなすことも出来なかつた小芳が、ここぞ、と見計みはからつて、初心にも、袂たもとの先を爪つまさぐりながら、「大目に見てお上あげなすつて下さいまし。蔦吉さんも仇あだな氣じゃありません。決して早瀬さんのお世帯ふための不為ふためになるような事はしませんですよ。一生懸命だったんですから。あんな派手こな妓ひきが落ひ籍わい祝いどころじゃありません、貴郎あなた、着換きがえも無くしてまで、借金の方をつけて、夜遁よにげをするようにして落籍ひいたんですもの。

堅氣に世帯が持てさえすれば、その内には、世間でも、商売したのは忘れましようから、早瀬さんの御身分に障るようなこともござんすまい。もうこの節じや、洗濯ものも出来るし、ひとえもの単衣おそぐらい縫えますつて、この間も夜晩く私に逢いに來たんですがね。

と婀娜あだな涙声になつて、

「羽織が無いから日中は出られない、と拗すねたように云うのがねえ、どんなに嬉しそつたでしょう。それに土地馴ところれないのに、臆おくびよう病な妓ですから、早瀬さんがこうやつて留守くつにしていなさいます、今頃は、どんなに心細がつて、戸くつに附着くついて、土間に立つて、帰りを待つてゐるか知れませんが、私あそれを思うと……」

と空色の、まぶた瞼を染めて、浅くおさ圧えた襦袢じゆばんの袖口。月に露添う顔を見て、主税もはらはらと落涙する。

「世迷言よまいごとを言うなよ。」

と膠にべもなく、虞氏ぐしが涙なみだを斥しりぞけて、

「早瀬はやせどうだ、分れるか。」

「行処ゆきどころもございません、仕様が無いんでございますから、先生ささえ、お見免みのがし下くださいますれば、私わたくしの外聞わたくしや、そんな事は。世間体なまなんぞ。」と半云なかばつて唾つが乾く。

「いや、不可いかん、許ゆるしやしないよ。」

「そう仰おっしゃ有あつて下さいますのも、世間を思おもつて下さいますからでございます。もう、私わたくしは、自分自分だけでは、決心決心をいたしまして、

世間には、随分一人前の腕を持っていながら、財産を当に婿養子になりましたり、てまえ汝が勝手に嫁にすると申して、人の娘の体格検査を望みましたり、」

と赫かつとなつて、この時やや血の色が眉宇びうに浮んだ。

「女学校の教師をして、媒なこうど妁をいたしましたり……それよりか、ひろいて拾人の無い、社会の遺失物おとしものを内へ入れます方が、同じ不都合でも、罪は浅かろうと存じまして。それも決して女房になんぞ、しますわけではございません。一生日蔭ものの下女同様に、ただないしよう内証で置いてやりますだけのことでございますから。」

「血迷うな。腕があつて婿養子になる、女学校で見合をする、そりや勝手だ、己の弟子じゃないんだから、そのかわり芸者を内へ

入れる奴も弟子じゃないのだ、分らんか。」

四十四

折から食卓を持って現れた、友染のその愛々しいのは、座のあたかも吹荒んだ風の跡のような趣に對して、散り残ったかえりばな 花の風情に見えた。輝く電燈の光さえ、こがらしあいて 凧の対手や空に月一つ、で光景がすさま 凄じい。

一言も物いわぬ三人の口は、一度にバアと云つて驚かそうと、我がために、はた爾しかく閉されているように思つて、友染はかんざし 簪の花とともに、堅くなつて膳を据えて、浮上るように立つて、こきざみ 小刻

に襖ふすまの際。

川千鳥がそこまで通つて、チリチリ、と音ねが留とどまつた。杯はい洗せん、鉢はち肴さかななどを、ちよこちよこ運んで、小ぢんまりと綺麗きれいに並なべるうち中ちゆうも、姉あねさんは、ただ火鉢ひばちをちつとずらしたばかり、悄しおれて俯うつむ向むいて、ならば直ちゆうぐに、頭かぶが打うつつのをおさおしたおそうに、火箸ひしゆうに置おくお手の白々と、白けた容子を、立際に打うち傾かしいで、熟じゆうと見て出ようとする時、

「食うものはこれだけか。」

と酒井は笑みを含んだが、この際、天窓あたまから塩しほで食うと、大口おほくちを開けられたように感じたそうぞつで、襖ふすまの蔭かげで慄ぞつ然ぜんと萎すくんで壁の暗くらさに消えて行く。

慌てて、あとを閉めないで行ったから、小芳が心付いて立とうとすると、するすると裾を捌いて、慌しげに來たのは綱次。

唯今の注進に、ソレと急いで、銅壺の爛を引抜いて、長火鉢の前を衝と立ち状に來た。

前垂掛けとはがらりと變つて、鉄お納戸地に、白の角通しの縮緬、かわり色の裳を払つて、上下対の袷の襲、黒縹珍に金茶で菖蒲を織出した丸帯、緋綸子の長襦袢、冷く絡んだ雪の腕で、猶予らう色なく、持つて來た銚子を向けつつ、

「お酌、」

冴えた音を入れると、鶯のほうと立つ、膳の上の陽炎に、電氣の光が和いで、朧々 と春に返る。

「まだ宵の口かい。」

「柏家だけではね。」と莞爾にっこりする。

「遠慮なく出懸けるが可い、しかし猥褻わいせつだな。」

「あら、なぜ？」

「十一時過ぎてからの座敷じゃないか。」

「御免なさいよ、苦界だわ。ねえ、早瀬さん、さあ、めしあがれよ、ぐうと、」

「いいえ、もう、」

主税は猪口ちよくを視ながむるのみ。

「お察しなさいよ。」

と先生にまたお酌をして、

「御鼻^{ごひいき}肩の民子ちゃんが、大江山に捕まえられていますから、助

出しに行くんだわ。渡辺の綱次なのよ。」

「道理こそ、鎖帷子^{くさりかたびら}の扮装^{いでたち}だ。」

「綴^{しころ}のように、根が出過ぎてはしなくって。姉さん、」

と髻^{たほ}に手を触る。

「いいえ、」

と云って、言^{ことば}の内に、（そんな心配をおしでない。）の意味が

籠る。綱次は、（安心）の体に、胸をちよいと軽く撫でて、

「おいしいものが、直ぐにあとから、」

「綱次姉さん、また電話よ。」

と廊下から雛妓^{こども}の声。

「あい、あい、あちらでも御用とおっしゃる。では、直き行つて来ますから、貴下あなた帰つちや、厭ですよ、民ちゃんを連れて来て、一所にまたお汁粉をね。」

酒井は黙つて頷うなずいた。

「早瀬さん、御ご緩ゆり。」

と行く春や、主税はそれさえ心細そうに見送つて、先生の目から面おもてを背ける。

酒井は、杯を、つつと献さし、

「早瀬、近う寄れ、もつと、」

と進ませ、肩を聳そびかして屹きつと見て、

「さあ、一ツ遣ろう。どうだ、別離わかの杯にするか。」

「……………」

「それとも婦おんなを思切るか。芳、酌ついでやれ、おい、どうだ、早瀬。

これ、酌いでやれ、酌がないかよ。」

銚子を挙げて、猪口ちよくを取って、二人は顔を合せたのである。

四十五

その時、眼光稲妻のごとく左右を射て、

「何を愚ぐ々ぐ々ぐ々ぐしているんだ。」

「私がお願いでござんすから、」と小芳は胸の躍るのを、片手で

密そつとおさ圧えながら、

「ともかくも今夜の処は、早瀬さんを帰して上げて下さいまし。そうしてよく考えさして、あらた更めてお返事をお聞きなすつて下さいましな、後生ですわ、あなた貴郎。」

ねえ、早瀬さん、そうなさいよ。先生も、こんなに仰おっしや有るんですから、あなた貴下もよく御分別をなさいまし、ここは私が身にかえてお預り申しますから。よ……」

と促がされても立ちかねる、主税は後を憂慮きづかうのである。

「薦吉さんが、どんなに何なんしたって、私が知らない顔をしていれば可よかったですのですけれど、思う事は誰も同おなじ一だと、私、」

と襟おとがに頤い深く、迫った呼吸いきの早口に、

「身につまされたもんだから、とうとうこんな事にしてしまつて、

元はと云えば……」

「そんな、貴女あなたが悪いなんて、そんな事があるもんですか。」

と酒井の前を庇かばう気で、肩に力味りきみを入れて云ったが、続いて言おうとする、

(貴女がお世話なさいませんでも……)の以下は、怪しからず、と心着いて、ハツとまた小さくなった。

「いいえ、私が悪いんです。ですから、後で叱られますから、貴下、ともかくもお帰んなすつて……」

「ならん！ この場に及んで分別へちまも糸瓜もあるかい。こんな馬鹿は、助けて返すと、婦おんなを連れて駈かけ落おちをしかねない。短兵急に首おきを圧おさえて叩たたつ斬きつてしまうのだ。」

早瀬。」

と苛々した音調で、

「是も非も無い。さあ、たとえ俺が無理でも構わん、無情でも差支えん、おんな婦が怨んでも、泣いても可い。憧れ死に死んでも可い。こが憧れ死に死んでも可い。先生の命い令だ、切れつちまえ。

俺を棄てるか、婦を棄てるか。

むむ、この他ほかに言句もんくはないのよ。」

(どうだ。)と頤あごで言わせて、悠然と天井を仰いで、くるりと背を見せて、ドンと食卓ひじに肱をついた。

「婦を棄てます。先生。」

と判然はつきり云った。そこを、酌をした小芳の手の銚子と、主税の

猪口ちよくと相触れて、カチリと鳴った。

「幾久く、お杯を。」と、ぐつと飲んで目を塞いだのである。

物をも言わず、背うしろむ向きになったまま、世帯話をするように、

先生は小芳に向つて、

「そつちの、そつちの熱い方を。——もう一杯ひとつ、もう一ツ。」

と立続けに、五ツ六ツ。ほつと酒が色に出ると、懐中物を懐へ、羽織の紐を引懸けて、ずつと立った。

「早瀬は涙を乾かしてから外へ出る。」

小芳はひたと、酒井の肩に、前髪の附くばかり、後に引添ひっそうて
縫すがり状ざまに、

「お帰んなさるの。」

「謹が病氣よ。」

と自分で雨戸を。

「それは不可いけませんこと。」と縁側に、水際立つてはらりと取つた、隅田の春の空色の棲つま。力なき小芳の足は、カラリと庭下駄に音を立てたが、枝折戸のまだ開あかぬほど、主税は座をずらして、障子の陰になつて、忙せわしく巻まきたばこばこを吸うのであつた。

ふたとき
一一時ばかり過ぎてから、主税が柏家の枝折戸を出たのは、やがて一時に近かつたろう。その時は姉さんはじめ、綱次ともう一人のその民子と云う、牡丹ぼたんの花のような若いのも、一所に三人で路地の角まで。

「お互に辛抱するのよう。」と酒氣さかけのある派手な声で、主税を送

つたのは綱次であつた。ト同時に渠かれは姉さんと、手をしっかりと取り合つた。

時に、寂ひっそりした横町の、とある軒燈籠の白い明あかりと、板塀の黒い蔭はさまとに挟ひらたつて、平くなつていた、頬ほおかむり被かをした伝坊が、一人、後先みまわをつかつかして、密そつと出て、五六歩行過ぎた、早瀬うしろの背後へ、……
拔足つかつかで急々。

「もし、」

「……………」

「先刻さつぎアどうも。よく助けて下さつたねえ。」

と頬かむりを取つた顔は……礼之進に捕まつた、電車の中の、その半纏はんでんぎ着。

誰が引く袖

四十六

土曜日は正午^{ひる}までで授業が済む——教室を出る娘たちで、照陽女学校は一斉に温室の花を緑の空に開いたよう、澆^{ぼつう}と麗^らな日^かを浴びた色香は、百合よりも芳しく、杜^{かきつばた}若^{ばた}よりも紫である。

年上の五年級が、最後に静々と出払って、もうこれで忘れた花の一枝もない。四五人がちらほらと、式台へ出かかる中に、妙子

が居た。

阿嬢は、おじよう就なかんづく中活澆に、大形の紅入友染の袂の端を、藤色

の八ツ口からひらり翻然と掉つて、何を急いだか飛下りるように、靴のさき尖を揃えて、トンと土間へ出た処へ、小使が一人ばたばたと草履ばき穿で急いで来て、

「ああ酒井様。」

と云う。優等生で、この容きりよう色であるから、寄宿舍へ出入りの諸商人も知らぬ者は無いのに、別けてなしみ馴染のじいさま翁様ゆえ、いづれあやめ菖蒲と引き煩らわずに名を呼んだ。

「はい。」

と振向くと、小使は小腰をかが屈めて、

「教頭様が少し御用がござります。」

「私に、」

「ちよつとお出で下さりまし。」

「あら、何でしょう、」

と友達も、吃驚びっくりしたような顔で、すと、出口に一人、駒下駄こまげた

を揃えて一人、一人は日傘を開け掛けて、その辺の辻まで一所に
 帰る、お定まりの道連みちづれが、齊ひとしく三方からお妙の顔を瞻みまもつて黙
 った。

この段は、あらかじめ教頭が心得さしたか、翁じいさま様がまた、そ
 こらの口が姦かしましいと察おことした気転か。

「何か、お父様へ御託おことづけものもがござりますで。」

「まあ、そう、」

と莞爾にっこりして、

「待つてて下すつて？」と三人へ、一度に黒目勝なのを働して見せると、言合せた様に、二人まで、胸を撫で下して、ホホホと笑った——お腹が空いた——という事だそうである。

お妙はずんずん小使について廊下を引返ひっかえしながら、怒ったよ
うな顔をして、振向いて同じように胸の許もとを擦さすつて見せた。

「応接室までござりますわ。」

教員室の前を通ると、背後うしろむきで、丁寧に、風呂敷しわの皺のばを伸し
て、何か包みかけていたのは習字の教師。向うに仰のけさま様に寝て、
両りょうひじ脇ひつつかを空に、後脳うしろを引摺ひつつかむようにして椅子にかかっていた

のは、数学の先生で。看護婦のような服装で、ちようど声高に笑った婦おんなは、言わずとも、体操の師匠である。

行きがかりに目についた、お妙は直ぐに俯目ふしめになつて、コトコ

トあしおと躑音が早くなつた。階はしご子段の裏を抜けると、次の次の、応

接室ドアの扉は、半開きになつて、ペンキ塗の硝子戸がらすどいり入の、大書棚の

前に、卓テーブル子に向つて二三種新聞は見えたが、それではなしに、

背文字の金の燦さんらん爛たる、新あたらしい洋書の中ほどを開けて読む、天窓あたま

の、てらてら光るのは、当女学校の教頭、倫理と英文学受持：の

学士、宮畑閑耕。同じ文学士河野英吉の親友で、待合では世話に

なり、学校では世話をする（蝦えび茶と緋ひぢりめん縮緬の交換だ。）と主

税が憤つた一人である。

この編の記者は、教頭氏、君に因つて、男性を形容するに、留と南奇めきの薰馥ふくいく郁いくとしてと云う、創作的文字もんじをここに挟み得ることさしはさを感謝しよう。勿論、その香においの、二十世紀であるのは言うまでもない。

お妙は、扉ドアに半身を隠して留まる。小使はそのまま向うへ行過ぎぎる。

閑耕は、キラリ目金めがねを向けて、じろりと見ると、目を細うして、髯ひげの尖さきをピンと立てた、頤あごが円い。

「こちらへ、」

と鷹揚おうように云つて、再び済まして書見に及ぶ。

お妙は扉くつつに附着いたなりで、入口を左へ立つて、本の包みを抱

いたまま、しとやかに会釈をしたが、あえてそれよりは進まなかつた。

「こちらへ。」と無造作なように、今度は書見のまま声をかけたが、落着かれず、またひよいと目を上げると、その発奮はずみで目金が躍る。

頬ほおへ両手をびったり、慌てて目金の柄を、鼻筋へ揉もみこ込むと、睫毛まつげをおさえ込んで、驚いて、指の尖を潜くぐらして、瞼まぶたを擦こすって、

「は、は、は、は、」と無意味な笑方をしたが、向直つて真面目な顔で、

「どうですな。」

四十七

もう傍そばへ来そうなもの、閑耕教頭が再び、じろりと見ると、お妙は身動きもしないで、熟じつと立って、臍ろうたけた眉が、雲の生際に浮いて見えるように俯向うつむいているから、威勢おに怖おじて、頭かしらも得え上げぬのであろう、いや、さもあらん、と思うと……そうでない。酒井先生の令嬢は、笑えみを含んでいるのである。

それは、それは愛々しい、仇気あどけない微笑ほほえみであつたけれども、この時の教頭には、素直に言う事を肯きいて、御前おんまえへ侍さむらいわぬだけに、人の悪い、与くみし易やすからざるものがあるように思われた。で、苦い顔をして、

「酒井さん、ここへ来なくちや不可いかんですよ。」

時に教頭胸を反そらして、卓タイプル子をドンと拳こぶしで鳴らすと、妙子は

つつと勇ましく進んで、差向いに面おもてを合わせて、そのふつくりし

た二重ふたかわめ瞼おくを、臆おそする色なく、円みはく睜みはつて、

「御用ですか。」

と云つた風采、云い知らぬ品威こもが籠こもつて、閑耕は思いかけず、

はつと照らされて俯向うつむいた。

教場でこそあれ、二人だけで口を利くのは、抑そもそも々そも生それて以来

最初はじめである。が、これは教場以外ではいかなる場合場合にても、こ

うであらうも計はかられぬ。

はて、教頭ほどの者が、こんな訳はずではない筈はずだが、と更あらためて疑

の目を挙げると、脊もすらりとして椅子に居る我を仰ぐよ、酒井の嬢は依然として気高いのである。

「酒井さん……」

声の出処が、倫理を講ずるようには行かぬ。

咽喉が狂つて震えがあるので、えへん！ と咳いて、手巾で擦つて、四辺をみたが、湯も水も有るのでない、そこで、

「小ウ使いい、」と怒鳴つた。

「へ——い、」

と謹んだ返事が響く。教頭はこれに因つて、大にその威厳を恢復し得て、勢に乗じて、

「貴娘に聞く事があるのですが、」

「はい。」

「参謀本部の翻訳をして、まだ学校なども独逸語を持っていますな——早瀬主税——と云う、あれは、貴娘の父とうさん様の弟子ですな。」

「ええ、そう………」

「で、貴娘の御宅に置いて、修業をおさせなすつたそうだが、一体あれの幾歳ぐらいの時からですか。」

「知りません。」

と素そ気けなく云つた。

「知らない？」

と妙な顔をして、額でお妙を見上げて、

「知らないですか。」

「ええ、前ぜんにからですもの。内の人と同おんなじ一ですから、いつ頃か
らだか分りませぬの。」

「貴娘は幾歳いくつぐらいから、交際をしたですか。」

「……………」

と黙つて教頭を見て、しかも不思議そうに、

「交際つて、私、厭いやねえ。早瀬さんは内の人なんですもの。」と
打微笑む。

「内の人。」

「ええ、」と猶ためら予うなずわず頷いた。

「貴娘、そういう事を言つては不可いけますまい。あれを（内の人）

だなんと云うと、御両親をはじめ、貴娘の名誉に関わるでしょうが、ああ、」

と口を開いてニヤリとする。

お妙はツンとして横を向いた、まなじりやさし 眦に優い怒が籠ったのである。

閑耕は、その背けた顔をのできこ 覗込むようにして、胸を曲げ、膝を叩きながら、鼻の尖に、へへん、と笑つて、

「あんな者と、貴娘交際するなんて、芸者を細君にしていると云うじやありませんか。汚わしい。怪しからん不行跡です。実に学者の体面を汚すものです。そういう者の許とこへ貴娘出入りをしてはなりません。知らない事はないのでしよう。」

妙子は何にも言わなかつたが、はじめて眩まぶしそうに瞬まきした。

小使が来て、低頭して命を聞くと、教頭は頤あごで教えて、

「何を、茶をくれい。」

「へい。」

「そこを閉めて行け、寄宿生が覗くようだ。」

四十八

扉とが閉ると、教頭身みがまえ構を崩して、仰向けに笑い懸かけて、

「まあ、お掛かなさい、そこへ。貴娘あなたのためにならんから、云うの

だよ。」

わざわざ立って突着けた、椅子の縁は、袂へりに触れて、その片袖を動かしたけれども、お妙は規則正しいお答礼じぎをただけで、元の横向きに立っている。

「早瀬の事はまだまだ、それどころじゃないですが、」と直ぐにまた眉を顰ひそめて、談じつけるような調子に変わって、

「酒井さん、早瀬は、ありや罪人だね、我々はその名を口にするさえ憚はばかるべき悪漢ですね。」

とのツそり手を伸ばして、卓子テーブルの上に散ばった新聞を撫でながら、

「貴娘、今日のA……新聞を見んのですか。」

一言聞くと、颯さっと瞼まぶたを紅あかにして、お妙は友染の襦袢じゆばんぐるみ袂

の端を堅く握った。

「見ませんか、」

と問返した時、教頭は傲然ごうぜんとして、卓子に頤杖あごづえを支く。

「ええ、」とばかりで、お妙は俯向うつむいて、瞬きしつつ、流しりめづ眄かいをするのであつた。

「別に、一大事いちだいじに関して早瀬は父様の許とこへ、頃日このころに参つた事はないですかね。或あるは何か貴娘あいの、聞いた事はありませんか。」

小さな声だったが判然はつきりと、

「いいえ。」と云つて、袖に抱いた風呂敷包みの紫を、皓齒しろはで嚙かんだ。この時、この色は、瞼まへのその朱あけを奪さらうて、寂さみしく白く見えただのである。

「行かん筈はずはないでしょうが、貴娘、知っていて、まだ私の前に、秘すかくのじやないかね。」

「存じませんの。」

と頭つむりを掉ふつたが、いたいけに、拗すねたようで、且つくどいのを煩うるさそう。

「じゃ、まあ、知らないとして。それから、お話するですがね。」

早瀬は、あれは、攫すり徒の手伝いをする、巾着きんちやく切きりの片割かたわりのような男おとこですぞ！」

簪かんざしの花が凜りんとして色が冴さえたか気が籠こもつて、屹きつと、教頭を見向むかいたが、その目の遣場やりばが無なさそうに、向うの壁かべに充満いっぱいの、偉おおいなる全世界の地図ちずの、サハラさはらの砂漠さぼくの有あるあたりを、清すずしい瞳ひとみがうろ

うろする。

「勿論早瀬は、それがために、分けて規律の正しい、参謀本部の方は、この新聞が出ない先に辞職、免官に、なつたです。これはその攫徒に遭つた、当人の、御存じじやろうね、坂田礼之進氏、あの方の耳に第一に入つたです。

で、見ないんなら御覧なさい。他の二三の新聞にも記かいてあるですが。このA……が一番くわ悉しい。」

と落着いて向うへ開いて、三の面を指で教えて、

「ここにありますが、お読みなさい。」

「歸つて、私、内で聞きます。」と云つた、唇の花が戦そよいだ。

「は、は、は、貴娘、（内の人）だなんと云つたから、極きまりが悪

いかね。何、知らないんなら宜よろしいです。私は貴娘の名誉を思つて、注意のために云うんだから、よくお聞きなさい。帰つて聞いたつて駄目さね。」

と太いたく侮あなどつた語氣を帯びて、

「父様は、自分の門生だから、十に八九は秘かくすですもの。何で真相が解りますか。」

コツコツ廊下から剥啄ノックをした者がある。と、教頭は、ぎろりと目金を光らしたが、反身そりみに伸びて、

「カム、イン、」と猶ためら予わずに答えた。

この剥啄と、カム、インは、余りに呼吸が合過ぎて、あたかもかねて言合せてあつたものようである。

すなわち扉ドアを細目に、先ず七分しちぶだち分の写真のごとく、顔から半身を突入れて中を覗いたのは河野英吉。白地に星模様の豎たてネクタ
イ、金剛石ダイヤモンドの針留ピンどめの光っただけでも、天窓あたまから爪つまさき先まで、
その日の扮装いでたち想うべしで、髪から油とろが溶けそう。

早や得えも言われぬ悦喜の面で、

「やあ、」と声を懸けると、入違いに、後をドーン。

扉の響きは、ぶるぶると、お妙の細い靴の尖に伝わって、揺らめく胸に、地図の大西洋の波が煽あおる。

四十九

「失敬、失敬。」

とちと持上げて、浮かせ気味に物馴なれた風で、河野は教頭と握手に及んで、

「やあ、失敬、」と云いながら、お妙の背後うしろから、横顔をじろりと見る。

河野の調子の発奮はずんだほど、教頭は冷やかな位に落着いた態度で、

「どこの帰りか。」

「大学（と力を入れて、）の図書館しらに検しらべものをして、それから精養軒ひるめしで午飯ひるめしを食くうて来た。これからまたH博士とこの許とこへ行かねばならん。」

と忙しせわそうに肩を掉ふつて、

「君（とわざと低声こゝろえで呼んで、）この方は……」

「生徒——」と見下げたように云う。

「はあ、」

「ミス酒井と云う、」と横を向いて忍び笑を遣る。

「うむ、真砂町の酒井氏の、」

と首を伸ばして、分ったような、分らぬような、見知越みしりごしのよ

うな、で、ないような、その辺あやふやなお妙の顔の見方をした

が、

「君、紹介してくれたまえ。」

「学校で、紹介は可訝おかしかろう。」

「だつてもう教場じゃないじゃないか。」

「それでは、」と真まことに余儀なさそうに、さて、厳格に、

「酒井さん、過般いっかも参観に見えられた、これは文学士河野英吉君

」。

同じ文字を露あらわした大形の名刺ぶんの芬ぶんと薰かほるのを、疾とく用意をして
いたらしい、ひよいと抓つまんで、蚤はやいこと、お妙の袖摺そでずれに出そう
とするのを、拙ますい！ と目で留め、教頭は髯ひげで制して、小鼻へ掛
けて揉み上げ揉み上げ揉んだりける。

英吉は眼みはを睜みはつて、急いでその名刺と共に、両手を衣兜かかしへ突込
んだが、斜めに腰を掉おるよと見れば、ちよこちよこ歩あ行きに、ぐ
るりと地図を背負しよつて、お妙の真まっし正しょう面めんへ立たつて、も一つ肩を

揉こすんで、手の汗を、ずぼんの横へ擦りつけて、清めた気で、くの字形なりに腕を出したは、短兵急に握手つもりの積か、と見ると、揺ゆるがぬ黒髪おのずに自然と四辺あたりを払はらわれて、

「やあ、はははは、失敬。」

と英吉大照れになって、後さがざまに退さがつて（おお、神よ。）と云いそうな態たいになり、

「お遊びにいらつしやい、妹たちが、学校は違いますが、皆みんな貴女を知っているのですよ。はあ……」

と独ひとりで頷うなずいて、大廻りに卓テイブル子の端を廻めぐつて、どたりと、腹はらん這ばいになるまでに、拵はらげた新聞の上へ乗のり懸かつて、

「何を話していたのだい。」

教頭をちよいと見れば、閑耕は額で睨めつけ、苦き顔して、その行^{やりすごし}過^{たしな}を躡めながら、

「実は、今、酒井さんに忠告をしている処だ。」

お妙は色をまた染めた。

「そうだとも！ ええ、酒井さん……」

黙っているから、

「酒井さん！」

「ははい、」と声がふるえて聞える。

「貴娘^{あなた}知らんのならお聞きなさい。頃^{このごろ}日の事ですが、今も云つ

た、坂田礼之進氏が、両国行の電車で、百円ばかり攫徒^{すり}に拘^やられたです。取られたと思うと、気が着いて、直^{ただち}に其奴^{そいつ}を引搦^{ひつつかま}えて、

車掌とで引摺下ろしたまでは、恐入つて冷却していたその攫徒がだね、たちまち烈火のごとくに猛り出して、坂田氏をなぐつた騒ぎだ。」

「撲なぐられたつてなあ、大人、気の毒だったよ。」

「災難とも。で、何です。巡査が来たけれども、何の証拠も挙あらんもんで、その場はそれツきりで、坂田氏は何の事はない、打ぶたれ損の形だったんだね。お聞きなさい——貴娘。」

証拠は無かったが、怪あやしむべき風体の奴だから、その筋の係が、其奴を附廻して、同じ夜よの午前二時頃に、浅草橋辺で、フトした星が附いて取抑えると、今度は袱紗ふくさに包んだ紙入ぐるみ、手も着けないで、坂田氏の盗られた金子かねを持っていたんだ。

ねえ、貴娘。拘引こういんして嚴重に検べたんだね。どこへそれまで隠して置いたか。先刻は無かつた紙入を、という事になる……とです。」

あくまで慎重に教頭が云うと、英吉が軽そそっかしく、
「妙だ、妙だよ。妙さなあ。」

五十

「攫徒すりの名も新聞に出ているがね、何とか小僧万太まんたと云うんだ。其奴そいつの白状した処では、電車の中で掏あいてつた時、大不出来おおふでかしに打ふんづ攫かまって、往生をしたんだが、対手あいてが面つらを撲なぐつたから、癩しやくに障

つて堪たまらないので、ちようど袖の下に俯向うつむいていた男の袖口から、早業でその紙入をずらかし込んで、もう占めた、とそこで逆捻さかねじに捻じたと云うんだね。

ところで、まん直しの仕事でもしたいものだど、柳橋辺を、晩おそくなつてから胡乱うろついていると、うっかり出合つたのが、先刻さつき、紙入れをすべらかした男だから、金子かねはどうなつたらうと思つて、捕まったらそれ迄だ、と悪度胸で当つて見ると、道理で袖が重いと云つて、はじめて、気が着いて、袂たもとを探してその紙入を出してくれて、しかし、一旦こつちの手へ渡つたもんだから、よく攫徒仲間が遣ると云う、小包みにでもして、その筋へ出さなくつちや不可いかんぞ、と念を入れて渡してくれた。一所に交番へ来い！ と

も云わずに、すつきりしたその人へ義理が有るから、手も附けな
いで突出すつもりで、一先ず木賃宿へ帰ろうとする処を、御用に
なりました。たつたひととき一時でも善人になってぼうとした処だつた
から掴まつたんで、盗人心ぬすつとごころを持つた時なら、浅草橋の欄干てすりを
踏んで、富貴ふうきかまど竈の屋根へ飛んでも、旦那方の手に合うんじやな
いと、太平楽を並べた。太い奴は太い奴として。

酒井さん。その攫徒の、袖の下になつて、坂田氏の紙入を預つ
たという男は、誰だと思ひますか、ねえ、これが早瀬なんだ。」
と教頭は椅子をずらして、卓子を軽くかろ打つて、

「どうです、貴娘が聞いても変だらうが。

その筋じや、直じきその関係者にも当りがついて、早瀬も確か一

二度警察へ呼ばれた筈だ。^{はず}しかしその申立てが、攫徒の言に符合^{ことば}するし、早瀬もちつとは人に知られた、しかるべき身分だし、何は措^おいても、名の響いた貴娘の父様の門下だ、というので、何の仔細^{しさい}も無く済むにや済んだ。

真砂町の御宅へも、この事に附いて、刑事が出向いたそうだが、そりや憚^{はばか}つて新聞にも書かず、御両親も貴娘には聞かせんだろう。で、とんだ災難で、早瀬は参謀本部の訳官も辞した、と新聞には体裁よく出してあるが、考えて御覧なさい。

同じ電車に乗っていて、坂田氏が掏られた事をその騒ぎで知らん筈がない。知っていてだね、紙入が自分の袂に入っている事を……まあ、仮に攫徒に聞かれるまで気がつかなんだにしてからが

だ、いよいよ分つた時、面識の有る坂田氏へ返そうとはしないで、
 ですね、」

河野にも言ことばを分けて、

「直接じかに攫徒どろぼうに渡してやるもいかなもんだよ。何よりもだね、
 そんな盗賊どろぼうとひそひそ話をして……公然とは出来んさ、いずれ
 ひそひそひそひそばなし
 密々話さ。」

誰も否とは云わんのに、独りで嵩かさにかかつて、

「紙入を手から手へ譲ゆずりわたし渡わたしをするなんて、そんな、不都合な、
 後暗い。」

「だがね、」

とちよいちよい、新聞を見るようにしては、お妙の顔を伺い伺

い、嬢があらぬ方を向いて、今は流しりめづかい 眇もしくもしなくなつたので、果は遠慮なく視ながめていたのが、なえた様な声を出して、

「坂田が疑うように、攫徒の同類だという、そんな事は無いよ。君、」

「どうとも云えん。酒井氏の内に居たというだけで、誰の子だか素性も知れないんだというじゃないか。」

「父とうさん上じやうに……聞いて……頂戴。」

とお妙は口惜くやしそうに、あわれや、うるみ声して云つた。

二人密そつと目を合せて、苦々しげに教頭が、

「あえてそういう探索をする必要は無いですがね、よしんば何事も措いて問わんとして、少くとも攫徒に同情したに違いない、そ

うだろう。」

「そりやあの男の主義かも知れんよ。」

「主義、危険極まる主義だ。で、要するにです、酒井さん。ああいう者と交際をなさるといふと、先ず貴嬢あなたの名誉、続いてはこの学校の名誉に係りますから、以来、口なんぞ利いてはなりません。宜しいかね。危険だから近寄らんようになさい、何をするか分からんから、あんな奴は。」

お妙は気を張はりつめんと勤むるごとく、熟じつと瞋みまもる地図を的に、目を睜みはつて、先刻さつきからどんなに堪こらえたるう。得え忍えばず涙ぐむと、もうはらはらと露になつて、紫の包にこぼれた。あわれ主税をして見せしめば、ために命も惜むまじ。

五十一

いや、学士二人驚いた事。

「貴娘あなた、どうしたんだ。」

と教頭が椅子から突立つったつた時は、お妙は始からしつかり握つたたもと袂をそのまま、白羽二重の肌襦袢の筒袖の肱ひじを円まろく、本の包に袖を重ねて、肩をせめて揉込むばかり顔を伏せて、声は立てずに泣くのであつた。

「ええ、どうして泣くです。」

靴音高く傍そばへ寄ると、河野も慌あわただしく立たつて来て、

「泣いちや不可いけませんなあ、何も悲い事は無いですよ。」

「私は貴娘を叱ちつたんじやない。」

「けれども、君の話振がちと穩おだやかでなかつたよ。だから誤解をされ

たんだ。貴娘泣く事はありません、」

と密そつと肩に手を掛けたが、お妙の振払いもしなかつたのは、泣入いつて、知らなかつたせいであつたに……

河野英吉嬉こしそうな顔をして、

「さあ、機嫌を直してお話しなさい。」と云う時、きよときよと目で、お妙の俯向うつむいた玉の頸うなじへ、横から徐々そろそろと頬を寄せて、リボンの花結びにちよつと触れて、じたじたと総身を戦わなかしたが、教頭は見て見ぬ振の、謂おもえらく、今夜の会計は河野持もちだ。

途端にお妙が身動をしたので、はねと 刎飛ばされたように、がたりと退る。すさ

「もう帰つても可いんですか。」

と顔を隠したままお妙が云つた。これには返す言ことばもあるまい。

「可いですとも！」

と教頭が言いも果てぬに、身を捻ひねつたなりで、礼もしないで、

つかつかと出そうにすると、がたがたと靴を鳴らして、教頭は及お

よびごし 腰に追つかけて、

「貴娘内へ帰つて、父様にこんな事を話しては不可いかんですよ。貴娘の名誉を重んじて忠告をしたですから、ね、宜いいですかね、ね。」

急せいた声で賺すかすがごとく、顔を附く着つけて云うのを聞いて、お妙は立留たまつて、おとなしく頷うないたが、（許す。）の態度で、しかも優やさしかった。

「ああ。」と、安堵あんどの溜息を一所にして、教頭は室の真中に、ぼんやりと突立つつ。

河野の姿が、横よこざまに飛んで、あたふた先へ立つて扉ドアを開いて控えたのと、擦違すりいに、お妙は衝つと抜けて、顔に当てた袖を落した。

雨を帯びたる海かい棠とうに、廊下の埃ほこりは鎮しずまつて、正午過ひるの早はやや蔭かげになつたが、打向ういたる式台しきだいの、戸外おもては麗うらかな日ひなのである。

ト押お重かさななつて、木この実みの生なつた状さまに顔かほを並ならべて、斉ひとしくお妙

を見送った、四ツの髯の粘り加減は、なめくじ 蛞蝓の這うにこそ。

真砂町の家へ帰ると、玄関には書生が居て、送迎いの手数を掛けるから、いつも素通りにして、横の木戸をトンと押して、水口から庭へ廻つて、縁側へ飛上るのが例で。

さしむき今日あたりは、飛石を踏んだまま、母様御飯かあさん、と遣つて、何ですね、唯ただいま今も言わないで、と躑たしなめられそうな処。

そうではなかつた。

いつも例の通りで、庭へ入ると、母様は風邪が長引いたので、もう大概は快いが、まだちつと寒気がする肩つきで、寝着ねまきの上に、縞しまの羽織を羽織つて、珍らしい櫛巻で、面窠おもやつれがした上に、色が抜けるほど白くなって、品の可いのが媚なまめかしい。

寢床の上に端然きちんと坐つて、膝かひへ搔かき卷まきの襟をかけて、その日の新聞を読む——半面が柔かに蒲団ふとんに敷かいている。

これを見ると、どうしたか、お妙は飛石に突据つえられたようになって、立留たまつた。

美しい袂たもとの影が、座敷へ通つて、母様は心着こころいて、

「遅おそかつたね。」

「ええ、お友達と作文の相談をしていたの。」

優しくも教頭のために、腹案はらがあつたと見えて、淀みなく返事をしながら、何となく力なさそうに、靴くつを脱はぎかける処へ、玄関げんかんから次の茶の間へ、急いで来た躑あしおと音ねで、襖ふすまの外そとから、書生の声、「お嬢さんですか、今日の新聞に、切抜きをなすつたのは。」

紫

五十二

お茶漬さらさら、だいすき 大あじ 好あじ な鱒あじ の新切で御飯が済むと、すずり 硯を一枚、
ふさようじ 房楊枝ふさようじ を持添えて、袴を取ったばかり、くびれるほど固く巻い
しんぎ た扱帯しんぎ に手拭てぬぐい を挟んで、かなだら 金かなだら 盥らい をがらん、と提ぼき げて、黒塗に
もえぎ 萌葱もえぎ の綿天の緒の立つた、齒の曲った、女中の台所穿ばき を、雪の素
つつか 足つつか に突掛けたが、靴足袋を脱いだままのすそみじか 裾すそみじか 短みじか なのをちつとも

介意かまわず、水口から木戸を出て、日の光を浴びた状さまは、踊舞台の潮しおくみ波に似て非なりで、藤間が新案の（羊飼。）と云う姿。

お妙は玄関わき傍、生垣の前の井戸へ出て、乾いてはいたがすべ迂りの

ある井戸流ながしへ危あぶなげ気も無くその曲つた下駄で乗った。女中も居る

が、母様の躡しつけがい可いから、もう十一二の時分からはだ膚についたもの

だけは、人手には掛なけさせないので、ここへはなしみ馴染で、水心があ

つて、つい去年あたりまで、土用中は、遠慮なしにからからと汲

み上げて、釣瓶つるべへ唇おっつを押附けるので、井筒の紅梅は葉になつても、

時々花片はなびらが浮ぶのであつた。直すぐに桃色の襷たすきを出して、袂を投げ

て潜くぐらした。惜氣の無い二の腕あたり、柳の絮わたの散るよと見えて、

井戸繩が走つたと思うと、金盥へ入れた硯の上へ颯さっとかかる、水

が紫に、墨が散った。

宿墨を洗う気で、楊枝の房を、小指を刎ねて撈りはじめたが、何を焦れたか、ぐいと引断るように邪険である。

ト構かまえうち

内の長屋の前へ、通勤つとめに出る外、余り着て来た事の無

い、珍らしい背広の扮装いでたち、何だか衣兜かくしを膨らまして、その上暑

中でも持ったのを見懸けぬ、蝙蝠傘こうもりがささえ携えて、早瀬あとさきが前後

をみまわしながら、悄しやうぜん然として入って来たが、梅の許もとなるお妙を

見る……

「おお、」

あわただと慌しい、懐しげな声をかけて、

「お嬢さん。」

お妙はそれまで気がつかなかった。呼よばれて、手を留とめて主税を見たが、水を汲んだ名残なごりか、顔の色がほんのりと、物いわぬ目は、露や、玉や、およそ声なく言ことばなき世のそれらの、美しいものより美しく、歌よりも心が籠こもった。

「また、水いたずらをしているんですね。」
と顔を視ながめて元氣らしく、呵から々と笑やうと、柔やさい瞳にらが睨にらむように動き止とまって、

「金魚じゃなくなつてよ。硯すずりを洗すすうの。」

「ああ、成程。」

と始めて金盥のぞきこを覗う込んで俯うつ向むいた時、人知れず目をしばたいたが、さあらぬ体で、

「御清書ですかい。」

「いいえ、あの、絵なの。あの、上手な。明後日学校へ持つて行くのを、これから描^かくんだわ。」

「御手本は何です、姉^{あねさま}様の顔ですか。」

「嘘よ、そんなものじゃないわ。ああ、」

と莞^{にっこり}爾して、独りで頷^{うなず}いて、

「もつと可いもの、杜^{かきつばた}若^{わか}に八橋よ。」

「から衣きつつ馴^なれにし、と云うんですね。」

と云いかけて愁^{しゆうぜん}然^{ぜん}たり。

お妙は何の気もつかない、派手な面^{おももち}色して、

「まあ、いつ覚えて、ちよいと、感心だわねえ。」

「可哀相に。」

と苦笑いをする、お妙は真顔で、

「だって、主税さん、先年いっか私の誕生日に、お酒に酔って唄ったじやありませんか。貴下あなたは、浅くとも清き流れの方よ。ほんとの歌は柄に無いの。」

とつけつけ云う。

「いや、恐入りましたよ。（トちよつと額に手を当てて、）先生は？」と更あらためて聞くと、心ありげに頷いて、

「居てよ、二階に。」（おいでなさいな。）を色で云つて、臍ろうたたく生垣から、二階を振仰ぐ。

主税はたちまち思いついたように、

「お嬢さん、」と云うや否や、蝙蝠傘こうもりがさを投出すごとく、井の柱へ押倒おつたおして、勢猛いきおいに、上衣を片腕から脱ぎかけて、

「久しぶりで、私が洗つて差上げましょう。」と、脱いだ上衣を、井戸側へ突込つっこむほど引掛ひっかけたと思うと、お妙がものを云う間ひまも無かつた。手を早や金盥ひんに突込んで、

「貴娘、その房楊枝を。——浅くとも清き流れだ。」

五十三

「あら、乱暴ねえ。ちよいと、まだ釣瓶しずくから雫しずくがするのにな、こんな処へ脱ぐんだもの。」

とたしな寝めるように云つて、お妙は上衣を引取つて、露あらわに白こがい腕なで、羽二重で結ゆわえたように、胸へ、薄色を抱いたのである。

「貴娘は、先生のように癩かんし性しょうで、寒うちの中も、井戸端へ持出して、ざあざあ水を使うんだから、こうやつて洗うのにも心持は可いいけれども、その代り手を墨だらけにするんです。爪の間へ染みた日にや、ちよいとじや取れないんですからね。」

「厭ねえ、恩に被きせて。誰も頼みはしないんだわ。」

「恩に被せるんじやありません。爪つま紅まへにと云つて、貴娘、紅をさしたような美うつくしい手の先を台なしになさるから、だから云うんです。やつぱり私が居た時分のように、お玄関の書生さんにしてお貰いなさいよ。」

ああ、これは、」

と片頬かたほえ笑みして、

「余り上等な墨ではありませんな。」

「可いわ！ どうせ安いんだわ。もう私がするから可よくってよ。」

「手が墨だらけになりますと云うのに。貴娘そんな邪険な事を云つて、私の手がお身みがわり代に立っている処じゃありませんか。」

「それでもね、こうやってお召物を持っている手も、随分、随分（と力を入れて、微笑んで、）迷惑してよ。」

「相変らずだ。（と独ひとりごと言のように云つて、）ですが、何です
ね、近頃は、大層御勉強でございますね。」

「どうしてね？ 主税さん。」

「だって、明後日あさってお持ちなさろうという絵を、もう今日から御手

廻しじゃありませんか。」

「翌日あしたは日曜だもの、遊ばなくっちゃ、」

「ああ日曜ですね。」

と雫を払った、硯は顔も映りそう。熟じつと見て振仰いで、

「その、衣兜かくしにあります、その半紙を取って下さい。」

「主税さん。」

「はあ、」

「ほほほほ、」とただ笑う。

「何が、可笑おかしいんです。え、顔に墨が芴はねましたか。」

「いいえ、ほほほほ。」

「何ですてば、」

「あのね、」

「はあ。」

「もしかすると……」

「ええ、ええ。」

「ほほほ、翌日あしたまた日曜ね、貴郎あなたの許ところへ遊びに行つてよ。」

水に映つた主税の色は、颯さっと薄墨の暗くなつた。あわれ、仔細しさいあつて、飯田町の家はもう無かつたのである。

「いらつしやいましたも。」

と勢込んで、思入つた語気で答えた。

「あの、庭の白百合はもう咲いたの、」

「……………」

「この間行つた時、まだ蒼つぼみが堅かつたから、早く咲くように、おまじないに、私、フツフツとふくらまして来たけれど、」
と云う口許くちもとこそふくらなりけれ。主税の背せなは、搾木しめぎにかけて細つたのである。

ト見て、お妙が言おうとする時、からりと開あいた格子の音、玄関の書生がぬつと出た。心づけても言うことを肯きかぬ、羽織の紐を結ばずに長くさげて、大跨おおまたに歩行あるいて来て、

「早瀬さん、先生が、」

二階の廊下は目の上の、先生はもう御存じ。

「は、唯今、」

と姿は見えぬ、二階へ返事をするようにして、硯を手に据え、急いで立つと、上衣を開いて、背後へ廻つて、足駄穿いたが対丈つけに、肩を抱くように着せかける。

「やあ、これは、これはどうも。」

と骨も砕くる背に被かついで、戦わななくばかり身を揉むと、

「意地が悪いわ、突張るんだもの。あら、憎らしいわねえ。」

と身動みじろきに眉を顰ひそめて——長屋の窓からお饒舌しやべりの媽かかあ々の顔が

出ているのも、路地口の野良猫が、のっそり居るのも、書生が無念そうにその羽織の紐をくるくると廻すのも——一向気にもかけず、平気で着せて、襟おきを圧おさえて、爪立つまだつて、

「厭な、どうして、こんなに雲脂ふけが生できて？」

五十四

主税が大急ぎで、ト引挟ひっばさまるようになって、格子戸を潜くぐった時、手をぶらりと下げて見送ったお妙が、無邪気な忍笑。

「まあ、粗そそつかしいこと。」

まことに硯ななおれを持って入って、そのかわり蝙蝠傘こうもりと、その柄に引掛けた中折帽ななおれを忘れた。

後へ立淀んで、こなたを覗ながめた書生が、お妙のその笑顔を見る
と、崩れるほどにニヤリとしたが、例の羽織の紐を輪形なりに掉ふつて、
格子を叩きながら、のそりと入った。

誰も居なくなると、お妙はその二重瞼ふたかわめをふつくりとするまで、もう、（その速力をもつてすれば。）主税が上つたらしい二階を見上げて、横歩あゐる行きに、井の柱へ手をかけて、伸上るようになした。やがて、柱に背せなをつけて、くるりと向をかえて凭もたれると、学校から帰つたなりの袂たもとを取つて、振ふりをはらりと手許へ返して、睫毛まつげの濃くなるまで熟じつと見て、袷あわせと唐縮緬めりんす友染の長襦袢ながじゆばんのかさなる袖を、ちゆうちゆうたこかいなど算かぞえるばかりに、丁寧に分けて、深いほど手首を入れたは、内心人目を忍んだつもりであるが、この所作で余計に目に着く。

ただし遣方あどけが仇気あどけないから、まだ覗くだんいている件の長屋窓かみさの女房まんぼの目では、おやおや細螺きしやごか、鞠まりか、もしそれ堅豆かたまめだ、と

思つた、が、そうでない。

引出したのは、細長い小さな紙で、字のかいたもの、はて、怪しからんが、心配には及ばぬ——新聞の切抜であつた。

さればこそ、学校の応接室でも、しきりに袂を気にしたので、これに、主税——対坂田の百有余円を掏つた……掏摸に關した記事が、細こまかに一段ばかり有ることは言うまでもない。

お妙は、今朝学校へ出掛けに、女中おんなが味噌汁おみおつけを装もつて来る間に、膳そばの傍へ転んだようになって、例に因つて三の面の早読と云うのをすると、（独語学者の掏摸。）と云う、幾分か挑撥的の標み語だしで、主税のその事が出ていたので、持ちかえて、見直したり、引張ひっぱつたり、畳たたんだり、太いたく氣を揉んだ様子だったが、ツンと怒

つた顔をしたと思うと、お盆を差出した女中おんなと入違いに、洋燈棚ランプへついと起たつて、剪刀はさみを袖の下へ秘かくして来て、四辺あたりをみまわして、ずぶりと入れると、昔取つた千代紙なり、めつきり裁縫しごとは上達なり、見事な手際でチヨキチヨキチヨキ。

かあさん

母様は病気を勤めて、二階へ先生を起しに行つて、貴郎あなた、貴郎

と云う折柄。書生は玄関どたんばたん。女中はちようど、台所の何かの湯気に隠れたから、その時は誰も知らなかったが、知れずに済みそうな事でもなし、またこれだけを切取つても、主税の迷惑は隠されぬ、内へだつて、新聞は他ほかに二三種も来るのだけれども、そんな事はおかまいなし不関焉。

で、教頭の説くを待たずして、お妙は一切を知っていたので、

話を聞いて驚くより、無念の涙が早かつたのである。

と書生はまた、内々はがき便見ただよりのようなものへ、投書をする道楽があつて、今日当り出そうな処と、床の中から手ぐすねを引いたが、寝坊だから、奥へ先せんぐり繰になつたのを、あとで飛附いて見ると、あたかもその裏へ、目的物が出る筈はずの、三の面が一小間切抜いてあるので、落胆がっかりしたが、いや、この悪戯いたずら、嬢的に極きわまつたり、と怨恨骨髄うらみに徹して、いつもより帰宅かえりの遅いのを、玄関の障子から睨ねめ透すかして待構えて、木戸を入つたのを追かけて詰問に及んだので、その時のお妙の返事というのが、ああ、私よ。と済すましたものだつた。

それをまたひとりここで見直しつつ、半ば過ぎると、目を外

らして、多時しばらく思入った風であつたが、ばさばさと引裂ひっさいて、くるりと丸めてハタと向う見ずに投ほうり出すと、もう一ツの柱もとの許もとに、その蝙蝠傘こうもりに掛かけてある、主税なかつねの中折帽なかおれへ留とまつたので、

「憎らしい。」と顔を赤めて、匆はね飛ばして、帽ハット子を取とつて、袖そでで、ばたばたと埃ほこりを払はつた。

書生しやうせいが、すつ飛とんで、格子かぢを出でて、どこへ急いそぐのか、お妙みよの前まへを通とりかけて、

「えへへへ。」

その時お妙は、主税なかつねの蝙蝠傘こうもりを引抱ひっかかえて、

「どこへ行くゆの。」

「車屋くるまやへ大急おほいそぎでございます。」

「あら、父上とうさんはお出掛け。」

「いいえ、車を持たせて、アバ大人を呼びますので、ははは。」

はなむけ

五十五

媒妁人なこうどは宵の口、燈火ともしびを中に、酒井とさしむかひの坂田礼之進。

「唯今は御使で、特ことにお車をお遣わしで恐縮こつとくにござります。実は

な、ちよと私用で外出をいたしおりましたが、俗にかの、虫が知らせるとか申すような儀で、何か、心急ぎ、帰宅いたしますると、門口に車がごわりまして、来客かと存じましたれば、いや、」と、額を撫でて笑うのらいかくに前齒あらわが露出。

「はははは、すなわち御持せのお車、早速間に合いました。実は好都合と云つて宜しいので、これと申すも、偏ひとえに御縁のごわりまする兆しるしでござりまするな、はあ、」

酒井も珍らしく威儀を正して、

「お呼立て申して失礼ですが、家内が病気で居ますんで、」と、手を伸して、まきたばこ巻 蓑をぐつをぐつ、と抜く。

「時に、いかがでござりまするな、御令室御病気は。御勝れ遊ばおすぐ

さん事は、先達ての折も伺いましてごわりましてな。河野でも承り及んで、英吉君の母なども大きにお案じ申しております。どうい御容体でいらつしやりまするか、わたくし私もその、甚だ心配をつかまつ仕りまするので、はあ、」

「別に心配なんじやありません。肺病でも癩病でもないんですから。」

と先生警抜なことを云つて、うつむ俯向きざまに、灰を払つたが、か左か手を袖口へ搔か込んで胸を張つて煙を吸つた。礼之進は、かしこま畏つたズボンの膝を、はりひじ張はり肱の両手で二つ叩いて、スーと云つたばかりで、斜めに酒井の顔を見込むと、

「たかだか風邪のこじれです。」

「その風邪が万病の原もとじゃ、と誰でも申すことでごわりまするが、
 事実まじたくでな。何分御注意なさらんとなりません。」

と妙に白けた顔が、燈火に赤く見えて、

「では、さように御病中でごわりましたは、御縁女の事に就きま
 して、御令室とまだ御相談下さります間もごわりませんので？」
 と重々しく素そ引きかけると、酒井は事も無げな口くちぶり吻。

「いや、相談はしましたよ。」

「ははあ、御相談下さりましたか。それは、」と頤あごを揉んで、ス
 ーと云つて、

「御令室の思おぼしめし召めはいかがでござりませうか。実はな、かよ
 うな事は、打明けて申せば、貴下あなたより御令室の御意向が主でござ

りまするで、その御言葉一ツが、いかがの極まりまする処で、推お着しつけがましゆうごわりまするが、英吉君の母も、この御返事……と申しまするより、むしろ黄道吉日をば待ちまして、唯今もつて、こちら東京に逗とうりゆう留りゆういたしておりまする次第で。はあ。御令室の御言葉一ツで、」

と、意気込んで、スーと忙せわしく啜すすつて、

「何か、私わたくしまでも、それを承りまするに就いて、このな、胸とどろが轟とどろくでござりまするが、」

と熟じつと見据じつえると、酒井は半ば目を閉じながら、

「他ほかならぬ先生の御口添ほかじやあるし、伺わがつた通りで、河野さんの方も申分も無い御家です。実際、願ねがつてもない良縁で、もとより

かれこれ異存のある筈はずはありませんが、ただ不束ふつつかな娘ですから、

「いや、いや、」

と頭を掉ふつて、大おおきに発奮はずみ、

「とんだ事でごわります、怪しかりませんな、河野英吉夫人を、不束などと御意なされますと、親御の貴下のお口でも、坂田礼之進聞棄てに相成りません、はははは。で、御承諾下さりませんか。」

「家内は大喜びで是非とも願いたいと言いますよ。」

時に襖ふすまに密そと当つた、柔やわらかきぬな衣の氣勢けはいがあつた——それは次の座

敷からで——先生の二階は、八畳と六畳二室ふたまたで、その八畳の方が

書齋であるが、ここに坂田と相對したのは、壇から上あがりぐち口の六畳の方。

礼之進はまた額に手を当て、

「いや、何とも。わたくし私大願成就仕りましたような心持で。お庇かげを持ちまして、痘痕あばたが栄えるでござりまする。は、はは、」

道学先生が、自からその醜を唱うるは、例として話の纏まった時に限るのであつた。

五十六

望んでも得難き良縁で異存なし、とあれば、この縁談はもう纏まとま

つたものと、今までの経験に因つて、道学者はしか心得るのに、
 酒井がその氣骨稜々りようりようたる姿に似ず、悠然と構えて、煙草の煙
 を長々と続ける工合が、どうもまだ話の切目ではなさそうで、こ
 れから一物あるらしい、底の方の擦くすぐつたさに、礼之進は、日一日
 歩行廻るあるき、ほとぼりの冷めやらぬ、靴足袋の裏が何となく生熱い。
 坐つた膝をもじもじさして、

「ええ、御令室が御快諾下されましたとなりますると、あなた貴下の思お
 ぼしめし
 召は。」

ちつとも猶ため予らわずに、

「私に言句もんくのあろう筈はありません。」

「はあ、成程、」と乗かかったが、まだ荷が済まぬ。これで決着

しなければならぬ訳だが……

「しますると、御当人、妙子様でござりまするが。」

「娘は小児こどもです。箸を持って、婿をはさんで、アンとお開き、とくく哺めてやるような縁談ですから、否いやも応もあつたもんじゃありません。」

と小刻こきぎこみに灰を落したが、直ぐにまた煙草にする。

道学先生、堪たまりかねて、手を握り、膝ゆすを揺つて、

「では、御両親はじめ、御縁女にも、御得心下されましたれば、直ぐ結納と申すような御相談はいかがなものでござりましたでしょうか。

善は急げでござりまするで。」と講義の外の格言を提出した。

「先生、そこですよ。」と灰吹に、ずいと突込む。

「成程、就きまして、何か、別儀が。」

「大有り。（と調子が碎けて、）私どもは願う処の御縁であるし、妙にもかれこれは申させません。無論ですな、お前、河野さんの嫁になるんだ。はい、と云うに間違いはありませんが、他にもう一人、貴下からお話し下すつて、承知をさせて頂きたいものがあるんです。どうでしょう、その者へ御相談下さるわけに参りましようか。」

「お易い事で。何でござりまするか、どちらぞ、御親類でもおあんなさりまするならば、直ぐにこの足で駈着けましても宜しゅう存じまするで。ええ、御姓名、御住所は何とおっしゃる？」

「^{すまい}住居は飯田町ですが、」

と云う時、先生の肩がややそび聳えた。

「早瀬ですよ。」

「御門生。」と、吃びっくり驚する。

「すり掏摸一件の男です。」と意味ありげに打微笑む。

礼之進、苦り切った顔色で、がんしょく

「へへい、それはまた、どういう次第でござりまするか、ただ御門生と承りましたが、何ぞ深しき理由でもおありなさりますと云う……」

「理由も何にもありません。早瀬は妙に惚れています。」と澄まして云った、酒井俊蔵は世に聞えたる文学士である。

道学者はアツと痘痕、目をつぶら円かにして口をつぐむ。

「実の親より、当人より、ぞッこん惚れてる奴の意向に従った方が一番間違が無くつて宜しい。早瀬がこの縁談を結構だ、と申せば、直ぐに妙を差上げますよ。面倒は入らん。先生が立たちどころ処に手を曳ひいて、河野へ連れてお出でなすつて構いません。早瀬が不い可けない、と云えば、断然お断りをするまでです。」

黙つてはいられない。

「しますると、その、」

と少し顔の色も変えて、

「御門生は、妙子様……」と、あとは他人でもいささか言いかねて憚はばかつたのを、……酒井は平然として、

「惚れていますともさ。同一家ひとつに我儘わがままを言合つて一所に育つて、

それで惚れなければどうかしているんです。もつともその惚方――

――愛――はですな、兄きょうだい妹いもうとのようか、従いとこ兄妹いとこのようか、それと

も師弟しゆうじゆうのようか、主しゆうじゆう従しゆうじゆうのようか、小説しやうせつのようか、伝奇でんきのよう

か、そこは分りませんが、惚れているにや違ちがいがないのですから、

私は、親、伯父、叔母、諸親類、友達、失礼しつれいだが、御媒酌人おなごうど、そ

んなものの口に聞いたり、意見いけんに従したがつたりするよりは、一も二も

ない、早手廻はやてまわしに、娘むすめの縁談えんたんは、惚おぼれてる男おとこに任まかせるんです。い

かがでしよう、先生せんせい、至極妙策しごくめうさくじゃありませんか。それともまた

酒飲さけのみの料りょうけん簡けんでしようか。」

と串じやうだん戯ぎのように云いつて、ちよつと口切くぎつたが、道学者だいがくしやの呆おろ

れて口が利きけないのに、押被おつかぶせて、

「さっぱりとそうして下さい。」

五十七

「あなた貴下、ええ、お言葉ではごわかりますが、スー」と頬の窪むばかりに吸って、礼之進、ねつねつ、……

「さよういたしますると、御門生早瀬子が令嬢を愛すると申して、万一結婚をいたしたいと云うような場合におきましては……でござりまする……その辺はいかがお計らいなされますおほしめし思召でござりまするな。」

「勝手にさせます。」と先生言下に答えた。

これにまた少なからず怯おびかされて、

「しまするといふと、貴下は自由結婚を御賛成で。」

「いや、」

「はあ、いかような御趣意に相成りまするか。」

「私は許いいな嫁なづけの方ですよ。」と酒井は笑う。

「許嫁？ では、早瀬子と、令嬢とは、許嫁でお在いなされますので。」

「決してそんな事はありません。許嫁は、私と私の家内とです。で、二人ともそれに賛成……ですか。同意だったから、夫婦になりましたよ。妙の方はどんな料簡だか、更さらに私には分りません。早瀬とくつついて、それが自由結婚なら、自由結婚、誰かと駈落

をすれば、それは駈落結婚、」と澄ましたものである。

「へへへ、御串戯ごじょうだんで。御議論がちと矯きょう激げきでござりませう
！」

「先生、人の娘を、嫁に呉れい、と云う方がかえつて矯激ですな、
考えて見ると。けれども、習慣だからちつとも誰も怪あやしまんのです。

貴下から縁談の申込みがある。娘には、惚れてる奴が居ますか
ら、その料簡次第で御話を取極とりきめる、と云うに、不思議はありま
すまい。唐突だしぬけに嫁入よめらせると、そのぞつこんであつた男が、い
や、失望だわ、懊惱おうのうだわ、煩悶はんもんだわ、迂すべつた、転んだ、とと
かく世の中が面倒臭くつて不可いかんです。」

「で、ござりまするが、この縁談が破れますると、早瀬子はそれ

で宜しいとして、英吉君の方が、それこそ同じように、失望、懊惱、煩悶いたしましたようで、……その辺も御勘考下さりますように。」

「大丈夫、」

と話は済んだように莞爾にっこりして、

「昔から媒酌人なこうど附の縁談が纏まらなかつた為に、死ぬの、活きるの、と云つた例ためしはありません。騒動の起るのは、媒酌人なしの内証の奴に極きまつたものです。」

「はあ、」

と云つて、道学者は口を開あいて、茫然として酒井の顔を見ていたが、

「しかし、貴下、聞く処に拠りますると、早瀬子は、何か、芸妓風情を、内へ入れておると申すでござりまするが。」

「さよう、芸妓を入れていて、自分で不都合だと思つたら、妙には指もさしますまい。直ちに河野へ嫁入らせる事に同意をしまし
よう。それとも内心、妙をどうかしたいというなら、妙と夫婦に
なる前に、芸妓と二人で、世帯の稽古をしているんでしよう。ど
ちらとも彼奴の返事をお聞き下さい。或は、自分、妙を欲しいで
はないが、他なら知らず河野へは嫁つちや不可ん、と云えば、私
もお断だ。どの道、妙に惚れてる奴だから、その真実愛している
ものの云うことは、娘に取つては、神仏の御託宣と同一で
す。」

形勢かくのごとくんば、掏摸の事など言い出したら、なおこの上の事の破れ、と礼之進行詰つて真赤まっかになり、

「是非がごわりませぬ。ともかく、早瀬子を説きまして、更あらためて

御承諾を願おうでござりまする。が、困りましたな。ええ、先刻

も飯田町の、あの早瀬子の居おらるる路地を、私わたくし通りがかりに覗のぞき

ますると、何か、魚屋体のものが、指図をいたして、荷物を片着

けおりまする最中。どこへ引越ひっこされる、と聞きましたら、（引越

すんじゃない、夜遁よにげだい。）と怒鳴ります仕誼しぎで、一向その行

先も分りませんが。」

先生こうぜん哄然こうぜんとして、

「はははは、事実ですよ。掏摸の手伝いをしたとかで、馬鹿野郎、

東京には居られなくなつて、遁げたんです。もうこちらへも暇いとま乞ごいに來ましたが、故郷の静岡へ引込む、と云つていましたから、河野さんの本宅と同郷でしょう。御相談なさるには便宜かも知れません。……御随意に、——お引取を。」

ああ、媒酌人なこうどには何がなる。黄色い手巾ハンケチを忘れて、礼之進の歸るのを、自分で玄関へ送出して、引返して、二階へ上つた、酒井が次のその八畳の書齋を開けると、そこには、主税が、膳の前そばに手を支ついて、畏かしこまつて落涙しつ居たのである。夫人も傍そばに。

先生はつかつかと上座に直つて、

「謹、酌をしてやれ。早瀬、今のはお前へ餞別だ。」

五十八

主税は心も闇やみだつたらう、覺おぼつか束なげな足取で、階はしごだん子壇をみ
 しみしと下りて来て、もつとも、先生と夫人が居らるる、八畳の
 書齋から、一室ひとま越し袋の口を開いたような明あかりは射さすが、下は長六
 畳で、直ぐそこが玄関の、書生の机も暗かつた。

さすがは酒井が注意して——早瀬へ驢はなむけにする為だつた——道
 学者との談話を漏聞かせまいため、先んじて、今夜はそれとなく
 余所よそへ出して置いたので。羽織の紐は、結んだかどうか、まだ帰
 らぬ。

酔つてはいないが、蹠よろよろと、壁へ手をつくばかりにして、壇を

下り切ると、主税は真ま暗くらな穴へ落ちた思おもがして、がつくりとなつて、諸もろ膝ひざを支つこうとしたが、先生はともかく、そこまで送り出そうとした夫人を、平に、と推着けるように辞退して来たものを、ここで躡ちゆう躡ちよしている内に、座を立たれては恐多い、と心ひつたを引立てた腰を、自分で突飛ばすごとく、大おお跨またに出合頭。

颯さつと開いた襖ふすまとともに、唐めりん縮す緬す友染の不断帯、格子の銘めい仙せんの羽織を着て、いつか、縁日で見たような、三ツ四ツ年とし紀たの長けた姿。円い透すぎ硝子の笠のかかった、背の高い竹台ランブの洋燈ランプを、杖に支つく形に持つて、母かあ様さんの居室いままから、衝つと立ちざまの容よう子すであつた。

お妙の顔を一目見ると、主税は物をも言わないで、そのままそこへ、膝を折つて、畳つっぱに突伏ぶすがごとく会釈えしゃくをすると、お妙も、

黙つて差置いた洋燈の台擦れに、肩を細うして指の尖を揃えて坐る、袂が畳にさらりと敷く音。

こんな慇懃な挨拶をしたのは、二人とも二人には最初で、玄関の障子にほとんど裾の附着く処で、向い合つて、こうして、さて別れるのである。

と主税が、胸を斜めにして、片手を膝へ上げた時、お妙のリボンは、何の色か、真白な蝶のよう、燈火のうつろう影に、黒髪を離れてゆらゆらと揺めいた。

「もう帰るの？」

と先へ声を懸けられて、わずかに顔を上げてお妙を見たが、この時の倅は、主税が世を終るまで、忘れまじきものであった。

机に向つた横坐りに、やや乱れたか衣紋えもんを氣にして、手でちよ
 いちよいと搔合うすらさむわせるのが、何やら薄寒うすらさむ、それで風采とりなりも沈ん
 だのに、唇が真黒まっくろだったは、杜若かきつばたを描く墨の、紫の雫しずくを含
 んだのであろう、艶えんに媚なまめかしく、且つ寂しく、翌日あすの朝は結う
 筈の後れ毛かすさえ、眉を掠めてはらはらと、白き牡丹の花片に心の
 影のたたずまえる。

「お嬢さん。」

「……………」

「御機嫌宜よう。」

「貴下も。」とただ一言、無量の情なさけが籠つたのである。

靴はを穿はいて格子を出るのを、お妙は洋燈せなを背せなにして、かまち框の障子

に掴つかまって、熟じつと覗のぞくように見送りながら、

「さようなら。」

と勢いきおいよく云つたが、快く別れを告げたのではなく、学校の帰りに、どこかで朋とも達たちと別れる時のように、かかる折にはこう云うものと、規則で口へ出たのらしい。

格子の外にちらちらした、主税の姿が、まるで見えなくなつたと思うと、お妙は拗すねた状さまに顔だけを障子で隠して、そのつかまつた縁を、するする二三度、烈たなしく掌そこで擦すつたが、背せなを捻よつて、切なそうに身を曲げて、遠い所のように、つい襖あなの彼方なたの茶の間を覗くと、長火鉢わきの傍わきの釣洋燈の下に、ものの本にも実際にも、約束通りの女中おさんの有様。

ちよいと、風邪を引くよ、と先刻さつぎから、隣座敷の机に怗よつかか
つて絵を描かきながら、低声こゝろえで気をつけたその大揺れの船が、この
時、最早や見事な難船。

お妙はその状を見定めると、何を穿いたか自分も知らずに、ス
ツと格子を開けるが疾はやいか、身動みじろぎに端が解けた、しどけない扱し
帯ごきくれないの紅。

五十九

「厭いやよ、主税さん、地方いなかへ行つては。」

とお妙の手は、井戸端の梅に縫すがつたが、声は早瀬をせき留める。

「……………」

「厭だわ、私、地方へなんぞ行つてしまつては。」

主税は四辺あたりを見たのであろう、闇やみの青葉に帽子ぼうが動いた。

「直じき帰つて来るんですからね、心配しないで下さいよ。」

「だつて、直じきだつて、一月や二月で帰つて来やしないんでしょう。」

。

「そりや、家を畳んで参るんですもの。二三年は引ひ込みます積り

です。」

「厭ねえ、二三年。……月に一度ぐらゐは遊びに行つた日曜さえ、私、待遠しかつたんだもの。そんな、二年だの、三年だの、厭だわ、私。」

お妙は格子戸を出るまでは、仔細しさいらしく人目を忍んだようだけれども、こうなるとあえて人聞はばかきを憚はばるとき、低い声ではなかつたのが、ここで急に密ひっそりして、

「あの、貴下あなた、父様とうさんに叱なられて、内証うちしやうの……奥さん、」

「ええ！」

「その方と別れたから、それで悲かなくなつて地方いなかへ行つてしまふのじゃないの、ええ、じゃなくつて？」

「……………」

「それならねえ、辛抱しんぱうなさいよ。母様かあさんが、その方もお可哀相あはれなだから、可いい折ひに、父様にそう云つて、一所いこにして上げるつて云つてるんですよ。私がね、（お酌しやくさん。）をして、沢山たくさんお酒を飲まし

て、そうして、その時に頼めば可いのよ、父様が肯きいてくれますよ。」

「……罰、罰の当つた事をおつしやる！ 私は涙が溢こぼれます、勿体ない。そりやもう、先生の御意見で夢が覚さめましたから、生れ代りましたように、魂を入替えて、これから修行と思ひましたに、人は怨みません。自分の越度おちどだけれど、掬すり摸と、どうしたの、こゝうしたの、という汚名を被きては、人中へは出られません。

先生は、かれこれ面倒めんどうだつたら、また玄関へ来ておれ、置いてやろう、とおつしやつて下さいますけれども、先生のお手許てぐらに居ては、なお掬摸すりもの名が世間に騒さわがしくなるばかりです。

卑怯ひななようですけれど、それよりは当分地方いなかへ引込んで、人の

噂も七十五日と云うのを、果敢はかないながら、頼みにします方が、
 万全の策だ、と思いますから、私は、一日旅行してさえ、新橋、
 上野の停車場ステイションに着くと拝みたいほど嬉しくなります、そんな懐なつかし
 い東京ですが、しばらく分れねばなりません。」

「厭だわ、私、厭、行っちゃ。」

言が途絶ことばえると、音がした、釣瓶つるべの雫しずくが落ちたのである。

差俯さしうつむ向くと、仄ほのかにお妙の足が白い。

「静岡へ参つて落着いて、都合が出来ますと、どんな茅屋あばらやの軒
 へでも、それこそ花だけは綺麗に飾つて、歓ウエルカム迎ウエルカムをしますから、
 貴娘あなた、暑中休暇には、海水浴にいらしつて下さい。」

江尻も興津も直じきそこだし、まだ知りませんが、久能山だの、

竜華寺だの、名所があつて、清見寺も、三保の松原も近いんですから、」

富士の山と申す、天までとどく山を御目にかけまするまで、主税は姫を賺^{すか}して云つた。

「厭だわ、そんな事よりか、私、来年卒業すると、もうあんなな学校や教頭なんか用は無いんだから、そうすると、主税さんの許^{とこ}へ、毎日朝から行つて、教頭なんかに見せつけてやるのにねえ。口惜^{くや}しいわ、攫^{すり}徒の仲間だの、巾着切の同類だのつて、貴郎^{あなた}の事をそう云うのよ。そして、口を利いちや不可^{いけな}いつて、学校の名譽に障るつて云うのよ。可^ようござんす、歸途^{かえり}に直ぐに、早瀬さんへ行つていつつけてやるつて、言おうかと思つたけれど、行状点を減^ひか

れるから。そうすると、お友達に負まけるから、見つともないから、黙もつていたけれど、私、泣いたの。主税さん。卒業したら、その日から、（私も掏摸かい、見て頂戴。）と、貴下の二階かたきに居ゐて讐しを取とつてやりたかつたに、残念だわねえ。」

と擦寄すりよつて、

「地方いなかへ行かない工夫はないの？」と忘れたように、肩もたに凭たれて、胸すがへ縫ぬつたお妙すずの手を、上へ頂くがごとくに取とつて、主税は思おもわず、唇ゆびわを指環ゆびわに接つけた。

「忘れません。私は死んでも鬼になつて。」

君の影身に附添つわん、と青葉をさらさらと鳴らしたのである。

巢立の鷹

六十

「おつと、ここ、ここ、飯田町の先生、こつちだ、こつちだ、はははは。」

十二時近い新橋ステーション停車場の、まばらな、陰気な構内も、冴返る高調子で、主税を呼懸けたのは、め組の惣助。

手荷物はすつかり、このいさみが預つて、先へ来て待合わせたものと見える。おおきしなかばん大な支那革鞆を横倒しにして、えいこらさと腰を

懸けた。重荷に小附ポトフオリオの折革靴、慾張つて挟んだ書物の、背のクロ
 オスの文字が、伯林ベルリンの、星の光はかくぞとて、きらきら異彩を
 放つのを、瓢ひょうたん箆せん式しきに膝ひざに引着け、あの右角の、三等待合の入
 口を、叱しられぬだけに塞ふさいで、樹下石上の身の構え、電燈の花見
 る面色つらつき、九分九厘おみつに飲酒いたり矣。

あれでは、我慢が仕切れまい、真砂町の井筒もとの許もとで、青葉落ち、
 枝裂けて、お嬢と分れて来る途中、どこで飲んだか、主税も陶然のぞ
 たるもので、かつと二等待合室を、入口から帽子を突込んで覗のぞく
 処ところを、め組は渠かれのいわゆる（こつち。）から呼んだので。これが
 一言ひとことでブーンと響くほど聞えたのであるから、その大音や思う
 べし。

「やあ、待たせたなあ。」

主税も、こうなると元気なものなり。

ドッコイシヨ、と荷物は置棄てに立って来て、

「待たせたぜ、先生、私あ九時から来ていた。」

「退屈したろう、気の毒だったい。」

「うんや、何。」

とニヤリとして、半纏はんでんの腹を開けると、腹掛へ斜はすつかいに、

正宗の四合しごうびん鑷はさ、ト内証で見せて、

「これだ、訳やねえ、退屈をするもんか。時々喇叭らっぱを極きめちやあ

ね、」

と向む願こう卷はちまきの首を掉ふつて、

「切符の売下口うりさげぐちを見物でき。ははは、別嬪べっぴんさんの、お前さんめえ、

手ばかりが、あすこで、真白まっしろにこうちらつく工合は、何の事あ

ねえ、さしがねで蝶々を使うか、活動写真の花火と云うもんだ、

見物みものだね。難ありがて有え。はははは。――

「馬鹿だな、何だと思う、お役人だよ、怪しからん。」

と苦笑いをしてたしな羨めながら、

「家うちはすっかり片附いたかい、大変だったろう。」

「戦いくさだ、まるで戦だね。だが、何だ、帳場の親方も来りや、挽子ひきこ

も手伝って、燈あかりの点つく前めえにや縁ランブの下の洋燈こわの破れまで掃出した。

何をどうして可めえいんだか、お前さんめえ、みんな根たこそぎた敲たき売れ、

と云うけれど、そうは行かねえやね。蔦たちゃんたが、手を突込んだ

糠味噌なんざ、打棄うつちやるのは惜おしいから、車屋かかあの嬢あ々に遣りさ。お
 仏壇は、蔦ちゃんわつしが人手ひつしよにや渡さねえ、と云うから、私は引背負
 っつて、一度内へ帰けえったがね、何だつて、お前さん、女人禁制で、
 蔦ちゃんむすに、采さいを掉ふらせねえで、城を明渡すんだから、煩むずかしいや。
 長火鉢の引出しから、紙にくるんだ、お前さん、仕つけ糸の、抜
 屑ひんまるを丹念ごしんに引丸ひんまるめたのが出たのにや、お源坊が泣出した。こん
 なに御新造ごしんさんが氣をつけてなすったお世帯だのにつて、へん、
 遣つてやあがら。

ええ、飲みましたとも。鉄砲卷は山に積むし、近所の肴さかなや屋やか
 ら、鰹かつおはまぐろございきつてら、鮪まぐろの活いきの可いやつを目利して、一土手提げ
 て来て、私が切味きれあじをお目めにかけたね。素敵な切味、一分だめし

だ。転がすと、一びんが出ようというやつを親指でなめずりながら、酒は鉢はちめえ前で、焚火で、煮爛にがんだ。

さあ、飲めつてえ、と、三人で遣りかけましたが、景氣だいでこづいたから手明きの挽子どもを在りつたけ呼よんで来た。薄暗い台所を覗く奴あ、音羽から来る八百屋だつて。こつちへ上れ。豆腐イもお馴染だろう。彼奴あいつしよび背負引け。やあ、酒屋の小僧か、き様喇叭節を唄え。面白え、となつた処へ、近所の挨拶を済すまして、帰けえつて来た、お源坊がお前さん、一枚いちめえ着換えて、お化粧つくりをしていたらうじやありませんか。蚤取のみとりまなこ眼こぎれで小切を探して、さつさと出てでも行く事か。御奉公のおなごりに、皆さんお酌、と来たから、難ありがて有え、大日如来、己おらが車に乗せてやる、いや、私わっちが、と戦たたかだね。

戦と云やあ、音羽の八百屋は講釈の真似を遣つた、親方が浪花節だ。

ああ、これがお世帯をお持ちなさいますお祝いだつたら、とお源坊が涙ぐんだしおらしさに。お前さん、有象無象うぞうむぞうが声を納めて、しんみりとしたろうじゃねえか。戦だね。泣くやら、ははははははは、笑うやら、はははははは。」

六十一

「そこでお前さん、何だつて、世帯をお仕舞しめえなさるんだか、金銭かねずくなら、こちとらが無尽むじんをしたつて、此家こゝの御夫婦ごふうふに夜遁よにげ

なんぞさせるんじやねえ、と一番しみたれた服装なりをして、銭の無さそうな豆腐屋が言わあ。よくしたもんだね。

銭金ずくなら、め組がついてる、と鉄砲卷の皿まんなかを真中へ突出した、と思いいねえ。義理にや叶わねえ、御新造ごしんぞの方は、先生が子飼から世話になった、真砂町さんと云う、大先生が不承知だ。聞きねえ。師匠と親は無理なものと思え、とお祖師様が云つたとよ。無理でも通さにやならねえ処ひを、一々御ごもつとも尤なんだから、一言もなしに、御新造も身を退ひいたんだ。あんなにお睦じかつた、へへへ、」

「おい、可い加減めえにしないかい。」

「可いやね、お前めえさん、遠慮えんりょをするにや当らねえ、酒屋の御用も、

挽子連も皆知つてらな。」

「なお、悪いぜ。」

「まあ、忍まげときねえな。それを、お前、大先生に叱なられたつて、柔順すなおに別れ話にした早瀬さんも感心だろう。

だが、何だ、それで家を畳たたむんじやねえ。若い掏摸すりが遣損やっそくな

つて、人中ちゅうぢうで面つらを打ぶたれながら、お助け、と瞬まばたきするから、そこア

男だ。諾よしき来た、と頼たのまれて、紙入を隠してやったのが暴露ばれたんで、

掏摸の同類だ、とか何とか云つて、旦那方つぎええの交際が面倒臭くくなつ

たから、引払ひっぱらつて駈落かれだどね。話は間違まちがつたかも知れねえけれ

ど、何だつてお前さん頼たのまれて退ひかねえ、と云やあ威勢いきせが可いいか

ら、そう云つて、さあ、おい、皆みんな、一番しやん、と占める処だが、

旦那が学者なんだから、万歳、と遣れ。いよう旦那万歳、と云うと御新造万歳、大先生万歳で、ついでにお源ちゃん万歳——までは可かったがね、へへへ、かかり合だ、その掏摸も祝つてやれ。可かろう、」

と乗気になつて、め組の惣助、ステイション停車場で手真似が交つて、

「掏摸万歳——と遣つたが、（すりばんだい。）と聞えましょう。近火きんかのようだね。火事はどこだ、と木遣で騒いで、巾着切万歳！

と祝い直す処へ、八百屋と豆腐屋の荷の番をしながら、人だかりの中へ立つて見てござつた差配おおやさん様が、お前めさん、苦笑いの顔をひよつこり。これこれ、火の用心だけは頼むよ、と云うと、手廻しの可い事は、車屋のかみさんが、あとへもう一度はたき払を掛けて、

縁側を拭き直そう、と云う腹で、番手桶に水を汲んで控えていて、どうぞ御安心下さいましツさ。

わっし
私は、お仏壇と、それから、蔦ちゃんが庭の百合の花を惜がつ
たから、荅つぼみを交せて五六本ぶらさげて、お源坊と、車屋の女房かみさん
とで、縁の雨戸を操るのを見ながら、梅坊主の由良之助、と云う
思おも入いれで、城を明渡して来ましたがね。

世の中にや、とんだ唐変木も在ったもんで、まだがらくたを片
附けてる最中でさ、だん袋いでたちを穿きあがった、」

と云いかけて、主税の扮装いでたちを、じろり。

「へへへ、今夜はお前めさんも着やつてるけれど。まあ、可いや。で
何だ、痘痕あばたの、お前さん、しかも大面おおづらの奴が、ぬうと、あの路

地を入つて来やあがつて、空いたか、空いつたか、と云やあがる。それが先生、あいたかつた、と目に涙でも何でもねえ。家は空いたか、と云うんでさ。近頃流行るけれど、ありや不躰だね。お前さん、人の引越しの中へ飛込んで、値なんか聞くのは。たとい、何だ、二ツがけ大きな内へ越すんだつて、お飯粒を撒いてやつた、雀ツ子にだつて残懐は惜いや、蔦ちやんなんか、馴染になつて、酸漿を鳴らすと鳴く、流元の蛙はどうしたろうツて鬱ぐじやねえか。」

「止せよ、そんな事。」

と主税は帽子の前を下げる。

「まあさ、そんな中へ来やあがつて、お剩に、空くの待つてい

た、と云う口吻くちぶりで、その上横柄だ。

誰しやくの癩しやくに障るのも同おんなじ一だ、と見えて、可笑おかしゆうがしたぜ。車

屋の挽子つんぼがね、お前めさん、え、え、ええッて、人の悪いッたら、

聾つんぼの真似をして、痘痕の極印を打った、其そいつ奴の鼻頭はなづらへ横のめり

に耳みみを突つかけたと思ひねえ。奴もむか腹が立った、と見えて、空

いた家うちか、と喚わめいたから、私わつしア階子段はしごだんの下に、蔦つたちゃんにおいが香を

隠して置いたらしい白粉おしろい入いれを引出しながら、空家くうけだい！ と怒

鳴なった。吃驚びっくりしやがって、早瀬はやせは、と聞くから、夜遁よにげげをした

よ、と威おどかすと、へへへ旦那だんな、」

め組は極めて小さい声で、

「私わたしア高利貸だ、と思つたから……」

話も事にこそよれ、勿体ない、道学の先生を……高利貸。

六十二

ちと黙ったか、と思うと、め組はきよろきよろ四辺あたりを見ながら、
 帰天齋が扱すうように、敏捷すばやく四合罎さかさまから倒たにがぶりと飲やつて、呼い
 吸きも吐つかず、

「それからね、人を馬鹿にしやあがつた、その痘痕あばためい、差配おおやは
 どこと聞きやあがる。差配おおやさん様か、差配ここ様は此家の主人あるじが駈落おおや
 をしたから、後を追っかけて留守だ、と言つたら、苦がつた顔がんしよ
 色くをしやがって、家賃いくらは幾干か知らんが、前ぜんにから、空いたら

貸りたい、と思うておつたんじゃ、と云うだらうじゃねえか。お前めさん、我慢なるめえじゃねえかね。こう、可い加減にしねえかい。柳橋の蔦吉さんが、情人いろと世帯を持った家うちだ、汝てめえ達たちの手に渡すもんか。め組の惣助と云う魚河岸の大問屋おおどいやが、別荘にすゐるつてよ、五百兩敷金が済んでるんだ。帰けえれ、と喚わめくと、驚いて出で行つたつけ、はははは、どうだね、氣に入つたらう、先生。」

「悪いたずら戯ざをするじゃないか。」

「だつて、お前めさん、言種いいぐさが言種な上に、図体が氣に食わねえや。しらふの時ころだったから、まだまあそれで済んだがね。掏摸とくも万歳ばんざいの時ころで御覽ごらんじろ、えて吉、存命おぼつかは覚束おぼつかねえ。」

と図に乗つて饒舌しゃべるのを、おかしそうに聞惚ききとれて、夜の潮しおの、

充ち満ちた構内にみおつくし 濡標のごとく千鳥脚を押据えてはば 憚からぬ高話、人もなげな振舞い、小面憎かつたものであろう、夢中になつたかれら 渠等のそば 傍で、駅員が一名、密と寄つて、中にもめ組の横腹のあたり 辺でだしぬけ 唐突に、がんからん、がんからん、がんからん、がんからん。

「ひやあ、」と据すえまなこ 眼い に呼吸いき を引いて、たじたじと退すき ると、駅員は冷々然として衝つ と去つて、入口へ向いて、がらんがらん。

主税も驚いて、

「切符だ、切符だ。」

と思わず口へ出して、慌てて行くのを、

「おっと、おっと、先生、切符なら心得てら。」

「もう買つといたか、それは豪えら い。」

惣助これには答えないで、

「ええ、驚きたい、串じょうだん戯じやねえ、二合半こなからが処こファイにした。

さあ、まあ、お乗んなせえ。」

荷物を引立ひつたてて来て、二人で改札口を出た。その半纏はんでんぎ着と、

薄色背広の押並んだ対照は妙であつたが、乗客のりてはただこの二人の影のちらちらと分れて映るばかり、十四五人には過ぎないのであつた。

め組が、中ほどから、急にあたふたと駈出して、二等室を一つ覗のぞき越しにも一つ出て、ひよいと、飛込むと、早や主税が近寄る時は、荷物を入れて外へ出た。

「ここが可いや、先生。」

「何だ、青切符か。」

「知れた事だね、」

「大束おおたばを言うな、駈落の身分じゃないか。幾干いくらだっけ。」

と横へ反身そりみに衣兜かくしを探ると、め組はどんぶりを、ぎつくと叩き、

「心得てら。」

「お前に達引かして堪るものか。」

「ううむ、」と真面目で、頭かぶりを掉ふって、

「不残のこらず叩き売った道具のお銭あしが、ずツしりあるんだ。お前めさん

が、薦ちやんに遣れって云うのを、まだ預っているんだから、遠

慮はねえ、はははは、」

「それじゃ遠慮しますまいよ。」

と乗込んだ時、他に二人。よくも見ないで、窓へ立って、主税は乗出すようにして妙なことを云った。それは——め組の口から漏らした、河野の母親が以前、通じたと云う——馬^{べっとう}丁貞造の事に就いてであつた。

「何分頼むよ。」

「むむ、可いつて事に。」

主税は笑つて、

「その事じゃない、馬丁の居処さ。己^{おれ}も捜すが、お前の方も。」

「……分つた。」

と後退^{あとしき}つて、向うざまに顱^{はちまき}巻を占め直した。手をそのまま、

花火のごとく上へ開いて、

「いよ、万歳！」

傍^{かたわら}へ来た駅員に、突^{つん}のめるように、お辞儀をして、

「真平御免ねえ、はははは。」

主税は窓から立直る時、向うの隅に、婀娜^{あだ}な櫛巻の後姿を見た。
ドンと硝子戸^{がらすど}をおろしたトタンに、斜めに振返ったのはお蔭である。

はっと思うと、お蔭は知らぬ顔をして、またくるりと背^{うしろ}を向いた。

汽車出でぬ。

貴婦人

一

その翌日、神戸行きの急行列車が、函根はこねの隧道トンネルを出切る時分、食堂の中に椅子を占めて、卓テイブル子は別であるが、一人にん外国の客と、流りゆううちよう暢ドイッに独逸語を交えて、自在に談話しつつある青年の旅客があつた。

こなたの卓子に、我が同胞のしかく巧みに外国語を操るのを、嬉しそうに、且つ頼母たのもしそうに、熟じつと見ながら、時々思出したように、隣の椅子の上に愛らしく乗のつかかった、かすりあわせで揃あと

筒袖の羽織を着せた、四ツばかりの男の児こに、極めて上手な、肉フ又オークと小刀ナイフの扱ぶりい振チキンで、肉を切つて皿へ取分けてやる、盛装した貴婦人があつた。

見渡す青葉、今日しとしと、窓の緑に降りかかる雨の中を、雲は白鷺しらさぎの飛ぶごとく、ちらちらと来ては山の腹しりえを後に走る。

函嶺はこねを絞しる点滴したたりに、自然浴おのずかした貴婦人の膚はだは、滑かに玉を刻んだように見えた。

真白なりボンに、黒髪つやの艶きんまきえは、金蒔きんまきえ絵の櫛ぼたんの光を沈めて、いよいよ漆のごとく、藤紫のぼかしに牡丹しべの花、蕊しべに金入の半襟、栗梅の紋お召あわせの袷つま、薄色の褙かさを襲かねて、幽かすかに紅の入った黒地友染したの下が襲かさね、折からの雨に涼しく見える、柳の腰を、十三の糸

で結んだかと黒^{くろ}縷^{じゆ}子の丸帯に金泥でするすると引いた琴の絃^{いと}、添えた模様^{ことじ}の琴柱^{ひとつ}の一枚が、ふつくりと乳房を包んだ胸を^{おさ}圧えて、時計の金鎖を留めている。羽織は薄い小豆色の縮^{ちりめん}緬^にに……ちよいと分りかねたが……五ツ紋、小刀持つ手の動くに連れて、指環^{ゆびわ}の玉の、幾つか連つてキラキラ人の眼^{まなこ}を射るのは、水晶の珠数を爪^{つまぐ}繰るに似て、非ず、浮世は今^{さかり}を盛^あの色。艶^{あで}麗^{やか}な女^{おんな}俳^{やく}優^{しゃ}が、子役を連れているような。年^{とし}齡^しは、されば、その児^この母親とすれば、少くとも四五であるが、姉とすれば、九でも二十でも差支^はえ^{たち}はない。

婦人は、しきりに、その独語に巧妙な同胞の、鼻筋の通つた、細表の、色の浅黒い、眉のやや迫つた男の、少^{わか}々^{わか}しい口^{くち}許^{もと}と、

心の透通るような眼まなざし光を見て、ともすれば我を忘れるばかりになるので、小児こどもは手が空いたが、もう腹は出来たり、退屈らしく皿の中へ、指でくるくると環わを描かいた。それも、詰おなじらなそうに、円い目で、貴婦人の顔を視ながめて、同一おなじようにそなたを向いたが、一向珍らしくない日本の兄あにいより、これは外国の小父さんの方が面白いから、あどけなく見入つて傾く。

その、不思議そうに瞳をくるくると遣やつた様子は、よつぽど可愛くつて、隅の窓を三角に取つてたたずゝんだボオイさえ、莞爾にっこりした程であるから、当の外国人は髯ひげをもじやもじやと破顔して、ちやうど食後の林檎りんごを剥むきかけていた処、小刀を目八分に取つて、皮をひよいと雷かみなり干ぼしに、菓物くだものを差上げて何か口早に云うと、青

年が振返つて、身を捻じぎまに、直ぐ近かつた、小児の乗つかつた椅子へ手をかけて、

「坊ちゃん、いらつしやい。好いものを上げますとき。」とその言を通じたが、無理な乗出しようをして逆に向いたから、つかまつた腕に力が入つたので、椅子が斜めに、貴婦人の方へ横になると、それを嬉しそうに、臆面なく、

「アハアハ、」と小児が笑う。

青年は、好事にも、わざと自分の腰をずらして、今度は危あぶな気なしに両手をかけて、揺籠ゆりかごのようにぐらぐらと遣ると、

「アハハ、」といよいよ嬉しがる。

御機嫌を見計らつて、

「さあ、お来いでなさい、お来なさい。」

貴婦人の底意なく、頷うなずいたのを見て、小さな靴を思う様上うえした下したに
 刎はねて、外国人の前へ行くと、小刀と林檎と一緒に放して差置く
 や否いなや、によいと手を伸ばして、小児を抱えて、スポンと床から
 振取もぎとったように、目よりも高く差上げて、覺おぼ束つかない口で、

「万歳——」

ボオイが愛想に、ハタハタと手を叩いた。客は時に食堂に、こ
 の一組ばかりであった。

「今のは独逸ドイツ人でございますか。」

外客がいかくの、食堂を出たあとで、貴婦人は青年に尋ねたのである。会話の英語イングリッシュでないのを、すでに承知していたので、その方の素養のあることが知れる。

青年は椅子をぐるりと廻して、

「僕もそうかと思いましたが、違います、伊太利人イタリイだそうです。」

「はあ、伊太利の、商人ですか。」

「いえ、どうも学者のようです。しかしこつちが学者でありませんから、科学上の談話はなしは出来ませんでした。が、様子が、何だか理学者らしゅうございます。」

「理学者、そうでございますか。」

小児こどもの肩に手を懸けて、

「これの父親ちちも、ちとばかりその端くれを、致しますのでござい
ますよ。」

さては理学士か何ぞである。

貴婦人はこう云った時、やや得意気に見えた。

「さぞおもしろい、お話しがございましたでしょうね。」

雪踏せったをずらす音がして、柔かな肱やわらひじを、唐草の浮模様ある、卓テイブ
子の蔽おおいに曲げて、身を入れて聞かれたので、青年はなぜか、困
った顔をして、

「どう仕つかまつりまして、そうおつしやられては恐縮しましたな、僕の

は、でたらめの理学者ですよ。ええ、」

とちよいと天窓あたまを搔かいて、

「林檎を食べた処から、先祖のニュウトン先生を思い出して、そこで理学者と遣やつたんです。はは、はは、実際はその何だかちつとも分りません。」

「まあ。お人の悪い。貴郎あなたは、」

と莞爾にっこりした流眇ながしめなまめの媚かしさ。熟じつと見られて、青年は目を外らしたが、今は仕切の外に控えた、ボオイと硝子がらす越に顔の合つたのを、手招きして、

「珈琲コオヒイを。」

「ああ、こちらへも。」

と貴婦人も註文しながら、

「ですが、大層お話が持てましたじやありませんか。彼地あちらの文学のお話でもございましたんですか。」

「どういたしました、」

と青年はいよいよ弱って、

「人を見て法を説けは、外国人も心得ているんでしよう。僕の柄じや、そんな貴女あなた、高尚な話を仕かけツこはありませんが、妙なことを云っていましたよ。はあ、来年の事を云っていました。西洋じや、別に鬼も笑わないと見えましてね。」

「来年の、どんな事でございます。」

「何ですって、今年は一度国へ帰って来年出直して来る、と申すことです。（日にっしょく蝕よくがあるからそれを見にまた出懸ける、東洋

じやほとんど皆既蝕だ。かいきしよく）と云いましたが、まだ日本には、その風説うわさがないようでございますね。

有つても一向心こころがけ懸かけのございませぬ僕なんざ、年の暮に、太

神宮から暦の廻りますまでは、つい気がつかないでしまいます。

もつとも東洋とだけで、支那しなだか、朝鮮だか、それとも、北海道

か、九州か、どこで観ようと云うのだから、それを聞き懸かけた処へ、

貴女が食堂へ入つておいでなさいましたもんですから、（や、こ

れは日蝕どころじやない。）と云いましたよ。」

「じや、あとは、私をおなぶんなすつたんでございませうねえ

。」

「御串戯ごじょうだんおつしやつては不可いけませぬ。」

「それでは、どんなお話でございましたの。」

「実は、どういう御婦人だ、と聞かれまして……」

「はあ、」

「何ですよ、貴女、腹をお立てなすつちや困りますが、ええ、」

と俯向うつむいて、低声こゝえになり、

「女俳優やくしやだ、と申しました。」

「まあ、」と清すずしい目を睜みはつて、屹きつと睨にらむがごとくにしながら、口に

微笑みわうが含まれて、苦しくはない様子。

「沢山たん、そんなことを云つてお冷かしなさいまし。私はもう下り

ますから、」

「どちらで、」

と遠慮らしく聞くと、貴婦人は小児の事も忘れたように、調子が冴えて、

「静岡——ですからその先は御勝手におなぶり遊ばせ、室へやが違ひまして、私の乗っております内は殺生でございますわ。」

「御心配はございません。僕も静岡で下りるんです。」

「お湯ぶう。」

と小児が云う時、一所に手にした、珈琲はまだ熱い。

三

「静岡はどちらへお越しなさいます。」

貴婦人が嬉しそうにして尋ねると、青年はやや元気を失った体に見えて、

「どここと云つて当なしなんです。当分、旅籠屋はたごやへ厄介になりますつもりで。」

もしそれならば、土地の様子が聞きたそうに、

「貴女あなた、静岡は御住居おすまいでございますか、それともちよつと御旅行でございますか。」

「東京から稼やぎに出ますんですと、まだ取柄はございませが、まるで田舎俳優やくしやですからお恥しゆう存じます。田舎も貴下あなた、草くさぶ深かと云つて、名も情ないじゃありませんか。場末の小屋がけ芝居に、お飯まんまたき炊きの世話場ばかり勤めます、おやまですわ。」

と董色すみれの手巾ハンケチで、口許くちごを蔽おほうて笑つたが、前髪まへかみに隠れない、俯向うつむいた眉まゆの美しさよ。

青年は少時しばらく黙つて、うつかり卷まきた苘たばこを取出しながら、

「何とも恐縮。決して悪気があつたんじやありません。貴女ぐらいな女優があつたら、我国の名誉だと思つて、対手あいてが外国人だから、いえ、まつたくそのつもりで言つたんですが、真まことに失礼。」

と真面目まじめに謝罪あやまつて、

「失礼ついでに、またお詫をします氣で伺いますが、貴女もし静岡こうので、河野さん、と云うのを御存じではございませんか。」

「河野……あの、」

深く頷うなずき、

「はい、」

「あら、河野は私わたくしどもですわ。」

と無意識に小児こどもの手を取つて、卓子テイブルから伸上るようにして、胸を起こした、帯の模様の琴の糸、揺ゆるぐがごとく気を籠めて、

「そして、貴下は。」

「英吉君には御懇親に預ります、早瀬主税ちからと云うものです。」
と青年は衝つと椅子を離れて立つたのである。

「まあ、早瀬さん、道理こそ。貴下は、お人が悪いわよ。」と、何も知つた目に莞爾にっこりする。

主税は驚いた顔で、

「ええ、人が悪うございますって？ その女俳優おんなやくしや、と言いま

した事なんですかい。」

「いいえ、家がうちに氣に入らない、と仰おつしや有つて、酒井さんのお嬢さんを、貴下、英吉に許しちや下さらないんですもの、ほほほ。」

「……………」

「兄はもう失望して、蒼あおくなつておりますよ。早瀬さん、初めまして、」

とこなたも立つて、手巾を持つたまま、この時更あらためて、略式の会釈あり。

わたくし「私は英さんの妹でございます。」

「ああ、おうわさで存じております。島山さんの令夫人おくさんでいらつしやいますか。……………これはどうも。」

静岡県……某……校長、島山理学士の夫人管子、英吉がかつて、
 脱兎のごとし、と評した美人はこれであつたか。

足一ひとたび度静岡の地を踏んで、それを知らない者のない、浅間
 の森の咲耶姫さくやひめに対した、草深の此花このはなや、実にこそ、と頷うなずかる。
 河野一族随一の艶えん。その一門の富貴榮華は、一いつにこの夫人に
 因つて代表さるると称して可い。

夫の理学士は、多年西洋に留学して、身は顯職にありながら純
 然たる学者肌で、無慾、恬淡てんたん、衣食ともに一向氣にしない、無
 趣味と云うよりも無造作な、腹が空けば食べるので、寒ければ着
 るのであるから、ただその分量の多からんことを欲するのみ。
 たのでも、焼いたのでも、酢でも構わず。兵児帯へこおびでも、ズボンで

も、羽織に紐が無くつても、更に差支えのない人物、人に逢つても挨拶ばかりで、容易に口も利かないくらい。その短を補うに、令夫人があつて存する数^{すう}か、菅子は極めて交際上手の、派手好で、話好で、遊びずきで、御馳走ずきで、世話ずきであるから、玄関に引きも切れない来客の名札は、新聞記者も、学生も、下役も、呉服屋も、絵師も、役者も、宗教家も、……^{ことごと}悉く夫人の手に受取られて、偏^{ひとえ}にその指環の宝玉の光によつて、名を輝かし得ると聞く。

四

五円包んで恵むのもあれば、ビールを飲ませて帰すのもあり、連れて出て、見物をさせるのもあるし、音楽会へ行く約束をするのもあれば、慈善市バザアの相談をするのもある。飽かず、倦うまず、撓たゆまないで、客に接して、いずれもをして随喜渴仰せしむる妙を得ていて、加うるにその目がまた古今の能弁であることは、ここに一目見て主税も知った。

聞くがごとくんば、理学士が少なからぬ年俸は、過半菅子のために消費されても、自から求むる処のない夫は、すこしの苦痛も感じないで、そのなすがままに任せる上に、英吉も云った通り、実家さとから附属の化粧料があるから、天のなせる麗質に、紅粉よそおいの装をもつてして、小遣が自由になる。しかも御衣おんぞがち勝きやせの着瘦よそおいはした

が、玉の膚豊かにして、汗は紅の露となろう、宜なる哉、楊家の女、牛込南町における河野家の学問所、桐楊塾の楊の字は、菅子あつて、扱ばれたものかも知れぬ。で、某女学院出の才媛である。

当時、女学校の廊下を、紅色の緒のたつた、襲裏の上穿草履で、ばたばたと鳴らしたもので、それが全校に行われて一時物議を起した。近頃静岡の流行は、衣裳も髪飾もこの夫人と、もう一人、——土地随一の豪家で、安部川の橋の袂に、大巖山の峰を蔽う、千歳の柳とともに、鶴屋と聞えた財産家が、去年東京のさる華族から娶り得たと云う——新夫人の二人が、二つ巴の巴川に渦を巻いて、お濠の水の溢るる勢。

「ちつとも存じませんで、失礼を。貴女、英吉君とは、ちつとも似ておいでなさらぬから勿論気が着こう筈はずがありませんが。」

主税まことのこの挨拶は、真まことに如才まことの無いもので。熟々つくづく視ればどこにかおもかげ梯はしが似通つて、水晶すいせいと陶器せととにしる、目の大きい処などは、か

れこれそっくり同一であるけれども、英吉に似た、と云つて嬉しがるよう

な婦人おんなはないから、いささかも似ない事にした。その段は大出来

だったかが、時に衣兜かぶしから燐寸マツチを出して、鼻の先で吸つけて、ふつ

と煙を吐いたが早いかか、矢のごとく飛んで来たボオイは、小火ぼやを

見附けたほどの騒ぎ方で、

「煙草たばこは不可いかんですな。」

「いや、これは。」主税は狼狽うろたえて、くるりと廻つて、そそくさ

扉を開いて、隣の休憩室の唾壺へ突込んで、喫みさしを揉消して、
 太く恐縮の体で引返すと、そのボオイを手許へ呼んで、夫人は莞
 爾々々笑いながら低声で何か命じている。ただしその笑い方は、
 他人の失策を嘲けたのではなく、親類の不出来しを面白がった
 ように見える。

「すっかり面目を失いました。僕は、この汽車の食堂は、生れて
 から最初だ。」

と、半ば、独言を云う。折から四五人どやどやと客が入つ
 た。それらには目もくれず、

「ほほほ、日本式ではないんだわねえ、貴下、お気には入ります
 まい。」

「どういたしまして、大恥辱。」

「旅馴れないのは、かえつて江戸子えどっこの名誉なんですわ。」

ボオイが剩残り銭を持って来て、夫人の手に渡すのを見て、大照れの主税は、口をつけたばかりの珈琲もそのまま、立ったなりの腰も掛けずに、

「ここへも勘定。」

傍そばへ来て腰を屈かがめて、慇いんぎん懃きんに小さな声で、

「御一所に頂戴いたしました、は、」

「飛んでもない、貴女、」

と今度は主税が火の附くように慌あわただしく急あせつて云うのを、夫人は済まして、紙入を帯の間へ、キラリと黄金きんの鎖が動いて、

「旅馴れた田舎稼ぎの……」

(女俳優)とおんなやくしやと云いそうだったが、客が居たので、

「女形にお任せなさいまし。」

とすらりと立った丈高う、半面を颯と彩る、樺色の窓掛に、色彩羅馬の女神のごとく、愛神の手を片手で曳いて、主税の肩と擦違い、

「さあ、こつちへいらしつて、沢山お煙草を召上れ。」

と見返りもしないで先に立つて、件の休憩室へ導いた。背に立つて、ちよつと小首を傾けたが、腕組をした、肩が聳えて、主税は大跨おおまたに後に続いた。

窓の外は、裾野の紫雲英、高嶺の雪、富士皓く、雨紫なり。

五

聞けば、夫人は一週間ばかり以前から上京して、南町の桐楊塾に逗とうりゆう留ゆうしていたとの事。桜も過ぎたり、菖蒲あやめの節句というでもなし、遊びではなかつたので。用は、この小児こどもの二年ふたつ姉が、眼病——むしろ目が見えぬというほどの容態で、随分実家さとの医院において、治療せんぎに詮議せんぎを尽したが、その効かいなく、一生の不幸になりそうあきらめな。断念あきらめのために、折から夫理学士は、公用で九州地方へ旅行中。あたかも母親は、兄の英吉の事に就いて、牛込に行つてゐる、かれこれ便宜だから、大学の眼科で診断を受けさせる為

出向いた、今日がその帰途だと云う。

もとよりその女の児こに取つて、実家さとの祖父おじいさんは、当時の蘭医
（昔取つた杵きねづかですわ、と軽い口をその時交えて、）であるし、
病院の院長は、義理の伯父さんだし、注意を等閑にしようわけは
ないので、はじめにも二月三月、しかるべき東京の専門医にもか
かったけれども、どうしても治らないから、三年前にすでに思切
つて、盲目めくらの娘、（可哀相だわねえ、と客観かっかん的てきの口吻くちぶりだつた
が、）今更大学へ行つたつて、所詮か効かいのない事は知れ切つてい
けれど、……要するにそれは口実くちにしたんですわ、とちよいと堅
い語ことばが交つた。

夫がまた、随分自分には我儘わがままをさせるのに、東京へ出すのは、

なぜか虫が嫌うかして許さないから、是非行きたいと喧嘩も出来ず。ざつと二年越、上野の花も隅田の月も見ないでいると、京都へ染めに遣つた羽織の色も、何だか、艶つやがなくなつて、我ながらくすんで見えるのが情ない。

まあ、御覧なさい、と云う折から窓を覗のぞいた。

この富士山だつて、東京の人がまるつきり知らないと、こんな
に名高くはなりませんまい。自分は田舎で埋うもれぎ木きのような心こころもち地
で心細くつてならない処。夫が旅行で多しばらく日留守、この時こそと
思つても、あとを預つている主婦あるじならなおの事、実家さとの手前も、
旅をかけては出憎いから、そこで、盲目めくらの娘をかこつけに、籠を
抜けた。親鳥も、とりめにでもならなければ可い、小児の罰が当

りましよう、と言つて、夫人は快活に吻々と笑う。

この談話は、主税が立続けに巻煙草を燻らす間に、食堂と客室とに挟まった、その幅狭な休憩室に、差向いでされたので。

椅子と椅子と間が真に短いから、袖と袖と、むかい合つて接するほどで、裳は長く足袋に落ちてても、腰の高い、雪踏の尖は爪立つばかり。汽車の動揺みに留南奇が散つて、友染の花の乱るのを、夫人は幾度も引かさね、引かさねするのであつた。

主税はその盲目の娘と云うのを見た。それは、食堂からここへ入ると、突然客室の戸を開けようとして男の児が硝子扉に手をかけた時であつた。——銀杏返しに結つた、三十四五の、実直らしい、小綺麗な年増が、ちようど腰掛けの端に居て、直ぐにそ

こから、扉とを開けて、小児を迎え入れたので、さては乳母よ、と見ると、もう一人、被布ひふを着た女の子の、キチンと坐つて、この陽気に、袖口へ手を引込ひっこめて、首を萎すくめて、ぐったりして、その年増の膝に凭よりかかっていたのがあつて、病氣らしい、と思つたのが、すなわち話の、目の病わるい娘こなのであつた。

乳母の目からは、奥に引込んで、夫人の姿は見えないが、自分は居ながら、硝子越むこうに彼方みえすから見透みえすくのを、主税は何か憚はばかつて、ちよいちよい氣にしては目遣いをしたようだったが、その風を見ても分る、優しい、深切らしい乳母は、太いたくお主しゅうの盲目めしいなのに同情おなじしたために、自然おのずから氣が映つてなつたらしく、女の児おなじと同一おなじように目を瞑ねむつて、男の児おなじに何かものを言いかけるにも、なお深

く差俯向さしうつむいて、いささかも室の外を窺うかがう気色けしきは無かつたのである。

かくて彼一句、これ一句、遠慮なく、やがて静岡に着くまで続けられた。汽車には太いたく倦うんじた体で、夫人は腕かいなを仰向けに窓に投なげて、がつくり鬢びんを枕まくらするごとく、果は腰帯ゆるの弛ゆるんだのさえ、引繕ひきとう元氣も無くなつて見えたが、鈴のような目は活々と、白い手首に瞳大きく、主税の顔みまもを瞻みまもつて、物打語るに疲れなかつた。

草深辺

六

県庁、警察署、師範、中学、新聞社、丸の内をさして朝ごとに出勤するその道その道の紳士の、最も遅刻する人物ももう出払つて、——初夜の九時十時のように、朝の九時十時頃も、一時は魔ひとしきりの所有ものに寂寞ひっそりする、草深町くさぶかまちは静岡の侍さむらい小路こうじを、カラカラと挽ひいて通る、一台、艶つややかな幌ほろに、夜上りの澄渡つた富士を透かして、燃立つばかりの鳥毛の蹴け込み、友染せなかの背当てした、高台細骨せなかにほの車があつた。

あの、音ねの冴さえた、軽い車の軋きしる響ききは……例れいのがお出掛でかけに違ちがいない。昨日きのう東京から帰つた筈はず。それ、衣ころも更かえの姿を見よ、

と小橋の上で留とまるやら、旦那を送り出して引込ひっこんだばかりの奥から、わざわざ駈出はねすやら、芻釣瓶ねつるべの手を休めるやら、女連づれが上も下も齊ひとしく見る目を聳そてたが、車は確たに、軒に藤棚があつて下を用よ水みづが流れる、火の番小屋と相角あいかどの、辻の帳場で、近頃塗替ぬりかえて、島山の令夫人おくがたに乘初のりめをして頂く、と十日ばかり取つて置きおの逸えき物ものに違ちがひないが——風呂敷包み一つ乗らない、空車を挽ひいて、車夫かぶりものは被か物ものなしに駈かけるのであつた。

ものの半時ばかり経たつと、同じ腕車くるまは、通とおりの方かたから勢いきよく茶畑ちやを走はつて、草深ひきこの町へ曳ひ込んで来た。時に車上に居たものを、折まから行違ちがつた土地の豆腐屋、八百屋、（のりはどうですな——）と売うつて通とおる女房かみさんなどは、若竹座へ乗込んだ俳優やくしやだ、と思おもつ

たし、旦那が留守の、座敷から縁越に伸上つたり、玄関の衝立ついたての蔭になつて差覗さしのぞいた奥様連は、千鳥座で金色夜叉を演するとい
う新俳優の、あれは貫一こつちに扮なる誰かだ、と立騒いだ。

主税がまた此地こつちへ来ると、ちとおかしいほど男ぶりが立勝つて、
薙なぎ放はなしの頭髪かみも洗つたように水々しく、色もより白くすすきり
あく抜けがしたは、水道の余波なごりは争われぬ。土地の透明な光線に
は、ほこり（埃だらけな洋服を着換えた。）酒井先生の垢あかつき附つきを拝領も
のらしい、黒羽二重ともえ二ツ巴もんつきの紋着の羽織ちゆうぶるの中ちゆうぶる、古ちゆうぶるなのさえ、
艶えんがあつて折目が凜りり々々しい。久留米か、薩摩か、紺こんがすり 緋ひとえの単ひとえ
衣もの、これだけは新しいから今年出来たので、卯の花が咲くとと
もに、お薦つたが心懸けたものであろう。

渠かれは昨夜、呉服町の大東館に宿つて、今朝は夫人に迎えられて、草深さして来たのである。

仰いで、浅間せんげんの森の流るるを見、俯ふして、濠ほりの水の走るを見た。たちまち一朵紅いちぢたれなの雲あり、夢のごとく眼まなこを遮る。合ねむ歡の花ぞ、と心着いて、流ながれの音を耳にする時、車はがらりと石橋に乗のり懸かかつて、黒の大おお構がまえの門に楯かじが下りた。

「ここかい。」とひらりと出る。

「へい、」

と門内へ駈け込んで、取附とつつきの格子戸をがらと開けて、車夫は横ざまに身を開いて、浅黄裏かがを屈かめて待つ。

冠木門かぶきもんは、旧式のまま敷木があるから、横附けに玄関まで

曳込むわけには行かない。

男の児こが先へ立つて駈出して来る事だろう、と思ひながら、主税ぼうしが帽を脱いで、雨あがりの松の傍わきを、緑の露に袖擦りながら、格子を潜くぐつて、土間へ入ると、天井には駕籠かごでも釣つてありそう
な、昔ながらの大玄関。

と見ると、正面に一段高い、式台、片隅の板戸を一枚開けて、後の縁うしろから射さす明りに、黒髪だけ際立つたが、向つた土間の薄暗さきぬ、衣の色朦朧もうろうと、倂おもかけ白き立姿、夫人は待兼ねた体に見える。

会釈もさせず、口も利かさず、見迎えの莞爾にっこりして、

「まあ、遅かつたわねえ。ああ御苦労よ。」

ちよいと車わかいしゆ夫にに声を懸けたが、

「さぞ寝坊していらつしやるだろうと思つたの。さあ、こちらへ。さあ、」

口早に促されて、急いで上る、主税は明あかるい外から入つて、一倍暗い式台に、高足を踏んで、ドンと板戸ぶつつかに打附るのも、管子は心づかぬまで、いそいそして。

「こちらへ、さあ、ずつとここから、ほほほ、市川菅女、部屋の方へ。」

と直ぐに縁づたいで、はらはらと、素足さばもすそで捌く裳の音。

市川菅女……と耳にはしたが、玄関の片隅切つて、縁へ駈込むほどの慌^{あわただ}しき、主税は足早に続く咄^{とつぎ}嗟で、何の意味が分らなかつたが、その縁の中ほどで、はじめて昨日汽車の中で、夫人を女^や俳^{くしや}だど、外人に擲^{やゆ}揄一番した、ああ、崇^{たたり}だ、と気が付いた。

気が付いて、莞^{かんじ}爾とした時、渠^{かれ}の眼は口^{くちもと}許に似ず鋭かつた。

ちようどその横が十畳で、客^{きやく}室らしい造^{つくり}だけれども、夫人はもうそこを縁づたいに通越して、次の（菅女部屋）から、

「ずツといらっしやいよ。」と声を懸ける。

主税が猶^{ためら}予うと、

「あら、座敷を覗^{のぞ}いちゃ不可^{いけ}ません、まだ散らかっているんですから、」

と笑う。これは、と思うと、縁の突当り正面の大姿見に、渠の全身、飛白かすりの紺も鮮麗あざやかに、部屋へ入っている夫人が、どこから見透みすかしたろうと驚いたその目の色まで、歴然ありありと映っている。

姿見の前に、長椅子ソオファ一脚、広縁だから、十分に余裕ゆとりがある。戸袋と向合った壁に、棚を釣つて、香水、香油、白粉おしろいの類たぐい、花瓶まじりに、ブラツシ、櫛などを並べて、洋式の化粧の間と見えるが、要するに、開き戸の押入を抜いて、造作を直して、壁を塗替えたものらしい。

薄萌葱うすもえぎの窓掛を、件くだんの長椅子ソオファと雨戸の間あいへ引掛ひっかけて、幕が明いたように、絞すそった裙なびが靡なびいている。車で見た合歡ねむの花は、あたかもこの庭の、黒塀の外になって、用水はその下を、門前の石橋

続きに折曲つて流るので、惜いかな、庭はただふたもとみもと一本三本を植

棄てた、長方形の空地に過ぎぬが、そのかわり富士は一目。

地を坤こんじく軸ほりかえから掘覆して、将棊しょうぎだおし倒よに凭せかけたような、

あらゆる峰を麓ふもとに抱いだいて、折からの蒼空あおぞらに、雪なす袖ひるがえを翻ひるがえして、

軽くその薄うすくれな紅あかの合歡あじさいの花に乗っていた。

「結構な御住居おすまいでございますな。」

ここで、つい通りな、しかも適切なことを云つて、部屋へ入ると、長火鉢の向うに坐つた、飾を挿さぬ、S巻の濡色が滴るばかり。お納戸の絹セルに、ざつくり、山繭やままゆ縮緬ちりめんの縞しまの羽織しほを引掛けて、帯の弛ゆるい、無造作な居住居いすまいは、直ぐに立膝たすにもなり兼ねないよう。横に飾つた箆笥たんすの前なる、鏡台の鏡の裏うちへ、その玉の

頸うなじに、後毛おくれげのはらはらとあるのが通かよつて、新あらたに薄化粧うすけいじやうした美しさうつくしさが背中まで透通とおとおる。白粉おしろいの香かほは座蒲団ざぼたんにも籠こもつたか、主税しゆぜいが坐まると馥郁ふくいくたり。

「こんな処へお通し申すんですから、まあ、堅かたくるしい御挨拶ごあいさつはお止とまさないよ。ちよいと昨夜ゆうべは旅籠屋りやうりやで、一人で寂さびしかったでしよう。」

と火箸ひししを圧おさえたそうな白い手が、銅壺どうぶの湯気ゆけを除よけて、ちらちらして、

「昨夜ゆうべにも、お迎むかいに上げましようと思おもったけれど、一度、寂さびしい思おもいをさして置おかないと、他国たこくへ来て、友達の難有ありがたさが分わらないんですもの。これからも粗末そまつにして不実ふじつをすすると不可いけないから：

……」

と莞爾にっこり笑つて、瞥ちらりと見て、

「それにもう内が台なしですからね、私が一週間も居なかつた日にや、門前雀羅じゃくらを張るんだわ。手紙一ツ来ないんですもの。今朝起抜けから、自分で払はたきを持つやら、掃出すやら、大騒さわぎ。まだちつとも片附ないんですけれど、貴下あなたも詰らなかうし、私も早く逢いたいから、可いい加減にして、直ぐに車を持たせて、大急せうぎ、と云つてやつたんですがね。

あの、地方いなかの車だつて疾はやいでしよう。それでも何よ、まだか、まだか、と立つて見たり坐つて見たり、何にも手につかないで、御覽みまなさい、身化粧みじまいをしたまんま、鏡台を始末する方角もないじ

やありませんか。とうとう玄関の処へ立切りに待っていたの。どこを通つていらしつて？」

返事も聞かないで、ボンボン時計を打仰ぐに、象牙のような咽の喉を仰向け、胸を反らした、片手を畳へ。

「まあ、まだ一時間にもならないのね。半日ばかり待つてたよ。途中でどこを見て来ました。大東館の直きこつちの大きな山葵の看板を見ましたか、郵便局は。あの右の手の広小路の正面に、煉瓦の建物があつたでしょう。県庁よ。お城の中だわ。ああ、そう、早瀬さん、沢山喫つて頂戴、お煙草。露西亞卷だつて、貰つただけけれど、島山（夫を云う）はちつとも喫みませんから……」

八

それから名物だ、と云つて扇屋の饅頭を出して、茶を焙^{ほう}じる手つきはなよやかだったが、鉄瓶のはまだ沸^{たぎ}らぬ、と銅壺から湯を掬^くむ柄杓^{ひしゃく}の柄が、へし折れて、短くなつていたのみか、二度ばかり土瓶にうつして、もう一杯、どぶりと突込^{たわい}む。他愛^{たわい}なく、抜けて柄になつてしまつたので、

「まあ、」と飛んだ顔をして、斜めに取つて見透^{みすか}した風情は、この夫人^{ひと}の艶^{えん}なるだけ、中指^{なかざし}の鼈^{べつこう}甲^ふの斑^ふを、日影に透かした趣^{おもむき}だつたが、

「仕様がないわね。」と笑つて、その柄^{ぼう}を投^{ほう}り出した様子は、世^し

よたい
帯の事には余り心を用いない、学生生活のおもかげの俵が残った。

主税が、小児衆は、と尋ねると、二人とも乳母が連れて、土産ものなんぞ持って、東京から帰った報知旁々、朝早くから出向

いたとある。

「河野の父さんの方も、内々小児をだしに使って、東京へ遊びに行つた事を知っているんですから、言句は言わないまでも、苦い顔をして、髯の中から一睨み睨むに違ひはないんですもの、難有くないわ。母様は自分の方へ、娘が慕って行つたんですから、御機嫌が可いでしょう、もうちつと経つと帰つて来ます。それまでは、私、実家へは顔を出さないつもりで、当分風邪をひいた分よ。」

と火鉢の縁に肱ひじをついて、男の顔を視ながめながら、魂の抜け出したような仇あどけ気ないことを云う。

「そりや、悪いでしょう。」

と主税がかえつて心配らしく、

「彼方むこうから、誰方どなたかお来いでなさりやしませんか。貴女がお帰りだ、と知れましたら。」

「来るもんですか。義にいさん兄さん（医学士——姉婿を云う）は忙しいし、またちつとでも姉さんを出さないのよ。大でれでれなんですから。父さんはね、それにね、頃このごろ日は、家族主義の事に就いて、ちつと纏まとまった著述をするんだって、母屋に閉籠とじこもって、時々は、何よ、一日蔵の中に入りきりの事があつてよ。蔵には書物が一杯で

すから。父さんはね、医者なんですけれど、もと個人、人一人二人の病を治すより、国の病を治したい、と云う大な希望の人ですからね。過年、あの、家族主義と個人主義とが新聞で騒ぎましたね。あの時も、父様は、東京の叔父さんだの、坂田（道学者）さんに応援して、火の出るように、敵と戦ったんだわ。

惜い事に、兄さん（英吉）も奔走してくれたんですけど、可い機関がなくなつて、ほんの教育雑誌のようなものに掲つたものですから、論文も、名も出ないでしまつて、残念だからつて、一生懸命に遣つてますの。確か、貴下の先生の酒井さんは、その時の、あの敵方の大立ものじゃなくなつて？」

と不意に質問の矢が来たので、ちと、狼狽ついたようだったが、

「どうでしたか、もう忘れましたよ。」と気もなく答える。

別に狙ったのでないらしく、

「でも、何でしょう、貴下は、あなたやっぱり、個人主義でおいでなさるんでしよう。」

「僕は饅頭主義で、番茶主義です。」

と、なぜかきお気競つて云つて、片手で饅頭を色気なくむしやりと遣つて、息も吐かず、番茶をあお呷る。

「あれ、嘘ばかり。貴下は柳橋主義の癖に、」

夫人は薄笑いの目をぱちりと、まつげ睫毛を裂いたように黒目勝なのでにら睨むようにした。

「ちよいと、びっくり吃驚して。……そら、御覧なさい、まだ驚かして

上げる事があるわ。」

と振り返りざまに背後向きに肩を捻じて、茶棚の上へ手を遣った、活澆な身動きに、下交の棲が辻つた。

そのまま横坐りに見得もなく、長火鉢の横から肩を斜めに身を寄せて、翳すがごとく開いて見せたは……

「や！ 読本を買いましたね。」

「先生、これは何て云うの？」

「冷評しては不可ませんな、商売道具を。」

「いいえ、真面目に、貴下がこの静岡で、独逸語の塾を開くと云うから、早いでしょう、もう買って来たの。いの一のお弟子入よ。ちよいと、ライダーと云うのを、独逸では……」

「レエゼウツフ（読本）——月謝が出ますぜ。」

「レエゼウツフ。」

九

「あの、何？」

と真まことに打解けたものいいで、

「精々勉強したら、名高い、ギョウテの（ファウスト）だとか、シルレルの（ウイルヘルム、テル）………でしたっけかね、それなんぞ、何年ぐらいで読めるようになるんでしょう。」

「直じき読めます、」

と読本を受取つて、片手で大^{おおづか}掴みに引開けながら、

「僕ぐらいにはという、但書が入りますけれど。」

「だつて……」

「いいえ、出来ます。」

「あら、ほんとに……」

「もつとも月謝次第ですな。」

「あだもの、」

と衝^つと身を退^のいて、叱るがごとく、

「なぜそうだろう。ちゃんと御馳走は存じておりますよ。」

茶棚の傍^{わき}の襖^{ふすま}を開けて、つんつるてんな着物を着た、二百八十

間の橋向う、鞠^{まり}子^こ辺^{あたり}の産らしい、十六七の婢^{おさん}どんが、

「ふア、い、奥様。」と訛なまつて云う。

聞いただけで、伶俐りこうな菅子は、もうその用を悟つたらしい。

「誰か来たの？」

「ひやあ、」

「あら、厭いやな。ちよいと、当分は留守とおいいと云つたじゃないの？」

「ア、ニ、はい、で、ござりますけんど、お客様で、ござんしねえで、あれさ、もの、呉服町の手代衆しゅでござりますだ。」

「ああ、谷屋のかい、じゃ構わないよ、こちらへ、」
と云いかけて、主税を見向いて、

「かくまつて有る人だから……ほほほほ、そっちへ行きましようゆ

よ。」

衣紋えもんを直したと思うと、はらりと気早に立って、踞つくばった婢おんなの髪を、袂で払って、もう居ない。

トきよとんとした顔をして、婢は跡も閉めないで、のっそり引込む。

はて心得ぬ、これだけの構かまえに、乳母の他はあの女中ばかりであろうか。主人は九州へ旅行中で、夫人が七日ばかりの留守を、彼だけでは覚束ない。第一、多勢の客の出入に、茶の給仕さえ鞠子はあやしい、と早瀬は四辺あたりをみまわしたが——後で知れた——留守中は、実家さとの抱車夫かかえが夜宿とまりに来て、昼はその女房が来ていたので。昼飯の時に分つたのでは、客へ馳走は、残らず電話で料理屋から

取寄せる……もつとも、珍客というのであつたかも知れぬ。

そんな事はどうでも可いが、不思議なもので、早瀬と、夫人との間に、しきりに往来ゆききがあつたその頃しばらくの間は、この家に養われて中学へ通っている書生の、美濃安八みのあはちの男が、夫人が上京したあと直ぐに、故郷の親が病気というので帰っていた——これが居ると、たとい日中ひなかは学校へ出ても、別に仔細しさいは無かつたろうに。

さて、夫人は、谷屋の手代というのを、隣室となりのその十畳へ通したらしい、何か話声がしている内、

「早瀬さん——」

主税は、夫人が此室ここを出て、大廻りに行つた通りに、声も大廻

りに遠い処に聞き取つて、静にその跡を辿りつつ返事が遅いと、

「早瀬さん、」

と近くまた呼ぶ。今しがた、（かくまつて有る人だ）と串じょうだ

戯んを云つたものを。

「室数まかずは幾つばかりあれば可よくつて？」

「何です、何です。」

余り唐突だしぬけで解し兼ねる。

「貴下あなたのお借りなさろうというお家うちよ。ちよいと、」

「ええ、そうですね。」

「おほほほ、話しが遠いわ。こつちへいらつしやいよ。おほほほ、縁側から、縁側から。」

夫人がした通りに、茶棚の傍わきの襖口へ行きかけた主税は、（菅女部屋）の中を、トぐるりと廻つて、苦にが笑わらいをしながら縁へ出ると、これは！ 三足と隔てない次の座敷。開けた障子に背せなを凭もたせて、立膝の棲は深いが、円く肥えた肱ひじも露あらわに夫人は頬を支えていた。

「朝から戸迷とまどいをなすつては、泊とつたら貴下、どうして、」
と振向いた顔の、花の色は、合ねむ歡むの影。

「へへへへへ」

と、向うに控えたのは、呉服屋の手代なり。鬱うこん金木綿の風呂敷に、浴衣地うすたかが堆かい。

二人連

十

午後ひるすぎ、宮ヶ崎町の方から、ツンツンとあちこちの二階で綿を

打つ音を、時ならぬきぬた砧の合方にして、浅間の社の南口、裏門にか

かった、島山夫人、早瀬の二人は、花道へ出たようである。

門際ながれの流に臨むと、頃このころ日の雨で、用水みずかさが水嵩増あふして溢るる

ばかり道へ波を打って、しかも濁らず、蒼あおひるがえりくあおひるがえり翻りようつて竜の躍るがご

とく、茂しげりの下もとを流るるさえあるに、大空から賤しずはた機山やまの蔭がさす

ので、橋を渡る時、夫人は洋傘かさをすぼめた。

と見ると黒髪に变りはないが、脊せきがすらりとして、帯腰おびの靡なびくように見えたのは、羽織なしの一枚あわせ袴はかまという扮装でたちのせいで、また着換えていた——この方が、姿も佳よく、よく似合う。ただし媚なまめしさは少なくなつて、いくらか氣韻きいんが高く見えるが、それだけに品しなが可い。

セルで足袋たびを穿はいては、軍人の奥方おくさまめく、素足すそでは待合まちあひから出たようだと云つて邸やしきを出掛でがけに着換かえたが、膚はだに、緋ひの紋縮もんぢり緬めんの長襦袢ながじゆばん。

二人の児この母親ははで、その燃立つようなのは、ともすると同一軍人おなじ好みこのみになりたがるが、垢あか抜けあかぬけのした、意氣さかんの壯さかんな、色の白しろいの

が着ると、汗ばんだ木瓜ぼけの花のように生なま暖あたなものではなく、雪の下もみじで凜りんとする。

部屋で、先刻さつきこれを着た時も、乳を圧おさえて密そつと袖を潜くぐらすような、男に気を兼ねたものではなかった。露あらかにその長襦袢とぎに水紅色の紐をぐるぐると巻いた形なりで、牡丹の花から抜出たように縁の姿見の前に立つて、

(市川菅女。)と莞爾にこにこ々々笑つて、澄まして袷かいとを搔取かつて、襟を合あわせて、ト背うしろむ向むきに頸うなじを捻ねじて、衣紋えもんつきを映うつした時、早瀬が縁のその棚から、ブラツシを取つて、ごしごし痒かゆそうあたまに天窓あたまを引搔ひっかいていたのを見ると、

「そんな邪険なでつな撫着なでつけようがあるもんですか、私が分けて上げま

すからお待ちなさい。」

と云うのを、聞かない振でさつきと引込ひっこもうとしたので、

「あれ、お待ちなさい」と、下々《したじめ》をしたばかりで、
衝つと寄つて、ブラツシを引奪ひったくると、窓掛をさらさらと引いて、
端近で、綺麗に分けてやつて、前へ廻まわつて覗のぞき込むように瞳をた
めて顔を見た。

胸ちしおの血汐ちしおの通うのが、波打つて、風に戦そよいで見ゆるばかり、撓たわ

まぬ膚はだえの未開紅、この意気なれば二十六でも、紅くれなの色は褪あせぬ。

境内の桜の樹蔭こかげに、静々、夫人の裳もすそが留とどまると、早瀬かたわらが傍わらから
向うを見て、

「茶店があります、一休みして参りましょう。」

「あすこへですか。」

「お誂え通り、皺しわくちやな赤毛布あかげつとが敷いてあつて、水々しい婆さんが居ますね、お茶を飲んで行きましようよ。」

と謹んで色には出ぬが、午飯ひるに一銚子ひとちようし賜ったそうで、早瀬は怪しからず可い機嫌。

「咽喉のどが渴いて？」

「ひりつくようです。」

「では……」

茶店の婆さんというのが、式かたのごとく古ぼけて、ごほん、と咳せくのが聞えるから、夫人は余り気が進まぬらしかつたが、二三人もりっこ子守女こに、きよろきよろ見られながら、ずツと入る。

「お掛けなさいまし。お日和でございます。よう御参詣なさいりました。」

夫人がたたずいでいて掛けないのを見て、早瀬は懐ふところ中から切立の手拭てぬぐいを出して、はたはたと毛布けつとを払って、

「さあ、どうぞ、」

笑つて云うと、夫人は婆うしろさんを背後にして、悠々と腰を下ろして、

「江戸えどっこ児は心得たものね。」

「人を馬鹿にしていらつしやる。」

と、さしむかいの夫人の衣紋はずれに、店先を覗いて、

「やあ、甘酒がある……」

十一

「お止しなさいよ。先刻さつきもあんなものを食あつてさ、お腹を悪くしますから。」

と低声こゝろえでたしなめるように云つた、（先刻のあんなもの）は——鮪の茶漬で——慶喜公の邸あとだという、可懐なつかしいお茶屋から、わざと取寄せた午飯ひるの馳走の中に、刺身は江戸には限るまい、と特別に夫人が膳につけたのを、やがてお茶漬で搔か込んだのを見て、その時は太いたく嬉たしがつた。

得てこれを嗜たしむもの、河野の一門に一人も無し、で、夫人も口く

惜やしいが不可いけないそうである。

「ここで甘酒を飲まなくつては、鳩にして豆、」

と云うと、婆さんが早耳で、

「はい、盆に一杯五厘宛ずつでございます。」

「私は鳩と遊びましょう。貴下あなたは甘酒でも冷酒でも御勝手めしあに召食めしあれ。」

と前の床しょうぎ几ぎに並べたのを、さらりと撒まくと、颯さつと音して、揃そろいも揃そろって雉子鳩きしぼとが、神代かみよに島の湧わいたように、むらむらと寄せて来るので、また一盆、もう一盆、夫人は立上たてあって更に一盆。

「一杯、二杯、三杯、四杯、五杯！」

早瀬はその数を算かぞえながら、

「ああ、僕はたった一杯だ。婆さん甘酒を早く、」

「はいはい、あれ、まあ、御覧じまし、鳩の喜びますこと、沢山たんと

奥様に頂いて、クウクウかいのう、おおお、」

と合がってん点々々、ほたほた笑をこぼしながら甘酒を釜から汲くむ。

見る見るうち、輝く玄潮くろしおの退ひいたか、と鳩は掃いたように空

へ散つて、咄嗟とつさに寂寞せきぱくとした日当りの地の上へ、ぼんやりと影が

さして、よぼよぼ、蠢うごめいて出た者がある。

鼻の下はさまででないが、ものの切きつ尖さきに瘦やせた頤おとがから、耳の

根へかけて胡麻塩髻ごましおひげが栗の毬いのように、すすすす、頬ほお肉じしがつく

りと落ち、小鼻が出て、窪んだ目が赤味走つて、額の皺しわは小さな

天窓あたまを揉も込んだごとく刻んで深い。色蒼あおく垢あかじみて、筋つなで繫ないだ

ばかりげっそり肩の瘦せた手に、これだけは脚より太い、しつかりした、竹の杖を支いたが、さまで容子の賤しくない落魄らしい、五十近ちかの男の……肺病とは一目で分る……襟垢がぴかぴかした、閉糸とじいとの断れた、寝ン寝子を今時分。

藁草履わらぞうりを引摺ひきずつて、勢いきおいの無さは埃ほこりも得立えてず、地の底に滅入めり込むようにして、正面こから辿たどつて来て、ここへ休もうとしたらしかつたが、目ももう疎うとくて、近寄るまで、心着かなんだろう。そこに貴婦人があるのを見ると、出かかった足を内へ折曲げ、杖で留まめて、眩まばゆそうに細めた目に、あわれや、笑を湛たえて、婆さんの顔をじろりと見た。

「おお、貞ていさんか。」

と耳立つほど、名を若く呼んだトタンに、早瀬は屹きつとなつて鋭く見た。

が、夫人は顔を背けたから何にも知らない。

「主ぬしあ、どうさしつた、久しく見えなんだ。」

と云うさえ、下地はあるらしい婆さんの方が、見たばかりでもう、ごほごほ。

「方なしじや、」

思いの他ほか、声だけは確であつたが、悪寒がするか、いじけた小児どもがいやいやをすると同一おなじに縮すくめた首を破れた寝ン寝子の襟こすに擦こすつて、

「埒明らちあかんで、久しい風邪でな、稼業は出来ず、段々弱るばつか

りじや。芭蕉の葉を煎じて飲むと、熱が除とれると云うので、「

と肩を怒らしたは、咳うつむこうとしたらしいが、その力も無いか、口へ手を当てて俯向うつむいた。

「何より利くそうなが、主のまあ飲のましたか。」

「さればじや、方々様へ御願お願い申して頂いて来ては、飲んだにも、飲んだにも、大おおきな芭蕉を葉ごとまるで飲んだくらいじゃけれど、少しも……」

とがつくり首を掉ふつて、

「験げんが見えぬじやて。」

験しるしなきにはあらずかし、御身の骸むくろは疾とく消えて、賤せん機山きさんに根も

あらぬ、裂けし芭蕉の幻のみ、果敢はかなくそこに立てるならずや。

ごほごほと頷うなずき頷うなずき、咳入りつつ、婆さんが持つて来た甘酒を、早瀬が取ろうとするのを、取らせまいと、無言で、はたと手で払った。この時、夫人は手ハンケチ巾ハンケチで口をおさ圧えながら、甘酒の茶碗を、衝つと傍わきへ奪ったのである。

十二

「芭蕉の葉煎じたを立続けて飲まして、効験ききめの無い事はあるまいが、疾はやく快ようなろうと思いなさる慾よくで、焦あせらつしやるに因つてなおようない、氣長に養生さつしやるが何より薬じや。なあ、主ぬし、氣の持ちように依るぞいの。」

と婆さんは渠かれを慰めるような、自分も勢せいの無いような事を云う。病人は、苦を訴うるほどの元氣も持たぬ風で、目で頷き、肩で息をし、息をして、

「この頃は病氣やまいと張合う勇いさみもないで、どうなとしてくれ、もう投な身げみじゃ。人に由つては大にんにく蒜くが可ええ、と云うだがな。大蒜は肺の薬になるげじゃけれども、私わしはこう見えても癆ろうが咳がいとは思わん、風邪のこじれじゃに因つて、熱さえ除とれれば、とやっぱり芭蕉じや。」

愚痴のあわれや、繰返して、杖すがに縋すがつた手を置替え、
「煎じて飲むはまだるこいで、早や、根からかぶりつきたいように思うがい。」

と切なそうに顔を獅^し噛^かめる。

「焦らつしやる事よ、苛^じれてはようない、ようないぞの。まあ、休んでござらんか、よ。主あどんなにか大儀じやろうのう。」

「ちつと休まいて貰^{もら}いたいのがの、」

管子と早瀬の居るのを見て、遠慮らしく、もじもじして、

「腰を下ろすとよう立てぬで、久しぶりで出たついでじゃ、やつとそこらを見て、帰りに寄るわい。見^み霽^{はらし}へ上る、この男坂の百四段も、見たばかりで、もうもう慄^{ぞっ}然とする慄^{ぞっ}然とする、」

と重^{かさ}そうな頭^{かぶり}を掉^ふつて、顔を横向きに杖を上げると、尖^{さき}がぶるぶる震う。

こなたに腰掛けたまま、胸を伸して、早瀬が何か云おうとした、

(構わず休らえ、)と声を懸けそうだったが、夫人が、ト見て、指を弾はじいて禁とめたので黙った。

「そんなら帰りに寄りなされ、気をつけて行かっしやいよ。」
 物は言わず、睡ねむるがごとく頷くと、足で足を推動かし、寝ン寝子広き芭蕉の影は、葉がくれに破れて失せた。やがてこの世に、その杖ばかり残るであろう。その杖は、野墓に立てても、蜻蛉とんぼも留まるまい。病人の居たあとしばらくは、餌を飼っても、鳩の寄りそうな景色は無かった。

「お婆さん、」

と早瀬が調子高に呼んだ。

さすがに滅入っていた婆さんも、この若い、威勢の可い声に、

蘇^{よみがえ}生^えつたようになって、

「へい、」

「今の、風説^{うわさ}ならもう止しっこ。私は見たばかりで胸が痛いよ
」。

と、威^{おど}しては可^いけそうもないので、片手で拝^むむようにして、夫
人は厭^{いと}々^とをした。

「いえ、一ツ心当りは無いか、家^{うち}を聞いて見ようと思^うんです。
見物より、その方が肝^{かん}心^{しん}ですもの。」

「ああ、そうね。」

「どこか、貸家はあるまいか。」

「へい、無い事もござりませぬが、旦那様方の住まっしやります

ような邸は、この居まわりにはござりませぬ。鷹匠町たかじようまち辺をお

聞きなさりましたか、どうでござります。」

「その鷹匠町辺にこそ、御邸ばかりで、僕等の住めそうな家は無いのだ。」

「どんなのがお望みでござりまするやら、」

「やす廉いのが可い、何でも廉いのが可いんだよ。」

「早瀬さん。」と、夫人が見つともないとおさ圧えて云う。

「長屋で可いのはよ、長屋々々。」

と構わず、遣るので、また目で叱る。

「へへへ、お幾いくら千ばかりなのをお捜しなされまするやら。」

心当りがあるか、ごほりと咳きつつ、甘酒の釜の蔭をいざ膝行つて

出る。

「静岡じゃ、お米は一升幾干だい。」

「ええ。」

「厭よ、後生。」

と婆さんを避けかたがた、立構えで、夫人が肩を擦寄せると、

早瀬は後へ開いて、夫人の肩越に婆さんを見て、

「それとも一円に幾干だね、それから聞いて屋賃の処を。」

「もう、私は、」と堪りかねたか、早瀬の膝をハタと打つと、赤

らめた顔を手中で半ば蔽いながら、茶店を境内へ衝と出る。

どこも変わらず、風呂敷包を首に引掛けた草鞋穿わらしじばきの親仁おやじだの、日和下駄で尻端折しりはしより、高帽という壮俊あにいなどが、四五人境内をぶらぶらして、何を見るやら、どれも仰向あやむいてばかり通る。

石段の下あたりで、緑に包まれた夫人の姿は、色も一際鮮麗あざやかで、青葉越あざはに緋鯉ひごいの躍る池の水に、影も映りそうにイんだが、手ハ巾ンケチを振って、促うなががして、茶店から引張り寄せた早瀬はやせに、

「可い加減になさいよ、極きまりが悪いじゃありませんか。」

「はい、お忘れもの。」

と澄ました顔で、洋傘ひがさを持って来た柄の方を返して出すと、夫人は手巾を持換えて、そうでない方の手に取ったが……不思議に

この男のは汗ばんでいなかった。誰のも、こういう際は、持ったあとがしつとり、中には、じめじめとするのさえある。……

夫人はちよいと俯ふしめ目になつて、軽かろくその洋傘ひがさを支ついて、

「よく気がついてねえ。（小さな声で、）——大儀、」

「はッ、主税御おんともかまつ供仕りまする上からは、御道中いささかたりと

も御懸念はござりませぬ。」

「静岡は暢のんき気でしょう、ほほほほ。」

「三等米なら六升台で、暮しも楽な処ですつて、婆さんが言いましたつけ。」

「あらまた、厭ねえ、貴あなた下は。後生ですからその（お米は幾千だ、い、）と云うのだけは堪か忍にして頂戴な。もう私は極りが悪くつて、

同行は恐れるわ。」

「ええ、そうおっしやれば、貴女もどうぞその手巾で、こう、お招きになるのだけは止して下さい。余りと云えば紋切形だ。」

「どうせね、柳橋のようなわけには……」

「いいえ、今も、子守女もりっこめらが、貴女が手巾をお掉ふりなさるのを見て、……はははは、」

「何ですって、」

「はははははは。」

と事も無げに笑いながら、

「（男と女と豆煎、一盆五厘だよ。）ツて、飛んでもない、わつとはや噓して遁にげましたぜ。」

ツンと横を向く、脊が屹きつと高くなつた。引ひつかなぐつて、その手巾をはたと地つちなげうに擲つや否や、裳もすそけつを蹴むて、前途むこうへつかつか。

その時義経少しも騒がず、落ちた董色すみれの絹に風が戦そよいで、鳩の羽ははつと薫るのを、悠々と拾い取つて、ぐつと袂たもとに突込んだ、手をそのまま、袖引合わせ、腕組みした時、色が変わつて、人知れず俯うつむ向いたが、直ぐに大跨おおまたに夫人の後について、社やしろの廻廊を曲つた所で追着おついた。

「おくさん
夫人。」

「……………」

「貴女腹をお立てなすつたんですか、困りましたな。知らぬ他国へ参りまして、今貴女に見棄てられては、東西も分りませんで、

途方に暮れます。どうぞ、御機嫌をお直し下さい、夫人、おくさん」

「……………」

「英吉君の御妹御、菅子さん、」

「……………」

「島山夫人……河野令嬢……不可い、不可い。」

と口の裡うちで云つて、歩あ行き歩る行き、

「ほんとうに機嫌を直して、貴女、御世話下さい、なまじつか、貴女にお便り申したために、今更ひとり独じや心細くつてどうすることも出来ません。もう決して貴女の前で、米の直ねは申しますまい。その代り、貴女もどうぞ貴族的でない、僕すまが住すまれそうな、實際、相談の出来そうな長屋式のお心掛けなすつて下さい。実はその

御様子じゃ、二十円以内の家は念頭にお置きなさらぬように見
受けたものですから、いささか諷する処あるつもりで、」

いつの間にか、有名な随神門も知らず知らず通越した、北口を
表門へ出てしまった。

社は山に向い、直ぐ畠で、かえつて裏門が町続きになっている
が、出口に家が並んでいるから、その前を通る時、主税も黙った。
夫人はもとより口を開かぬ。

やがて茶畑を折曲つて、小家まばらな、場末の町へ、まだツン
とした態度でずんずん入る。

大巖山の町の上に、小さな溝があるばかり、障子の破やぶれから人顔
も見えないので、その時ずツと寄つて、

「ものを云つて下さいよ。」

「……………」

「おくさん、
夫人、」

「……………」

十四

少時しばらく——主税しゆぜいももう口を利こうとは思わなない様子になつて、別に苦にする顔色かおつきでもないが、腕こまぬを拱なりいた態で、夫人の一足後れあとに跟ついていて行く。

裏町の中程うちほどに懸ると、両側りょうがわの家は、どれも火が消えたように寂ひ

つそり 寞して、空屋かと思えば、蜘蛛くもの巣を引くような糸車の音が何
 こ 家ともなく戸外おもてへ漏れる。路傍みちばたに石の古井筒があるが、欠目に
 あおこけ 青苔あおこけの生えた、それにも濡色はなく、ばさばさはしや燥いで、流ながしも乾
 びている。そこいら何軒かして日に幾度、と数えるほどは米を磨
 ぐものも無いのであろう。時々陰に籠つて、しっこしの無い、咳
 の声の聞えるのが、墓の中から、まだ生きていると唸うめくよう。は
 ずれ掛けた羽目に、咳止飴せきどめあめと黒く書いた広告びらの、それを売る店
 の名の、風に取られて読めないのも、何となく世に便りが無い。
 振返つて、来た方を見れば、町の入口を、真暗まつくらな隧道トンネルに樹
 立たちが塞いで、炎のように光線ひざしが透く。その上から、日のかげつた
 大巖山が、そこは人の落ちた谷底ぞ、と聳そびえ立って峰どつから哄と吹

き下した。

かつ散る紅くれないなび、靡いたのは、夫人の褻つまと軒の鯛たいで、鯛は恵比寿えびすが引抱ひっかかえた処の絵を、色は褪あせたが紺暖簾こんのれんに染めて掛けた、一軒おんそめものどころ（御染物処）があつたのである。

廂ひさしから突出した物干棹ものほしざおに、薄汚れた紅もみの切きれが忘れてある。下に、荷車の片輪はずれたのが、塵芥ごみで埋うまつた溝へ、引傾いて落込んだ——これを境にして軒隣りは、中にも見すばらしい破屋あばらやで、煤すすのふさふさと下つた真黒まっくろな潜戸くぐりどの上の壁に、何の禁厭まじないやら、上に春野山、と書いて、口の裂けた白黒まだらの狗いぬの、前脚を立てた姿が、雨浸あめじみに浮び出でて朦朧もうろうとお札あられの中に顕あらわれて活躍いけるがごとし。それでも鬼が来て覗のぞくか、楽書で捏でっちたような雨戸

の、節穴の下に柵ひいらぎの枝が落ちていた……鬼も屈かがまねばなるまい、いとど低い屋根が崩れかかって、一目見ても空家である——またどうして生まれよう——お札もかかる家に在つては、軒を伝つて狗の通るように見えて物もの凄すごい。

フト立留まつて、この茅あばら家を覗ながめた夫人が、何と思つたか、主税と入違いに小戻りして、洋傘ひがさを袖の下へ横よこえると、惜なげもなく、髪くで、件くだんの暖簾だんを分けて、隣みせの紺屋せきの店前みせへ顔を入れた。

「御免なさいよ、御隣家おとなりの屋いえを借りたんですが、」
 「何でございますと、」

と、頓とん興きな女房にようの声こゑがする。

「家賃いくらは幾干いくらでしようか。」

「ああ、貞造さんの家の事かね。」

余り思切った夫人の挙動ふるまいに、呆氣あつけに取られて茫然とした主税

は、（貞造。）の名に鋭く耳をそばだてた。

「空家ではござりませぬが。」

「そう、空家じゃないの、失礼。」

と肩の暖簾をはずして出たが、

「大照れ、大照れ、」

と言つて、莞爾にっこりして、

「早瀬さん、」

「……………」

「人のことを、貴族的だなんのつて、いぎ、となりや私だつて、

このくらいな事はして上げるわ。この家^{うち}じゃ、貴下^{うぢ}だつて、借りたいと言つて聞かれないうでしよう。ちよいと、これでも家の世話が私にや出来なくつて？」

さすがに夫人もこれは離れ業^{わざ}であつたと見え、目のふちが颯^{さつ}となつて、胸^いで呼吸^きをはずませる。

その燃ゆるような顔^{しつ}を凝^{じつ}と見て、ややあつて、

「驚きました。」

「驚いたでしょう、可い気味、」

と嬉しそうに、勝誇つた色が見えたが、歩^{ある}行き出そうとして、

その茅家をもう一目。

「しかし極^{きまり}が悪かつてよ。」

「何とも申しようはありません。当座の御礼のしるし迄に……」
 と先刻さつき拾つて置いた董色の手巾を出すと、黙つて頷うなずいたばかりで、
 取るような、取らぬような、歩あ行るきながら肩が並ぶ。袖が擦合う
 たまま、夫人がまだ取られぬのを、離すと落ちるし、そうかと云
 つて、手はかけているから……引込めもならず……提ひげとていると
 ……手巾が隔てになつた袖が触れそうだったので、二人が齊ひとしく
 左右を見た。両側の伏屋ふせやの、ああ、どの軒にも怪しいお札の狗いぬが
 ……

貸小袖

十五

今来た郵便は、夫人の許へ、主人の島山理学士から、帰宅を知らせて来たのだらう……と何となくそういう気がしつつ——三四日日和が続いて、夜になつてももう暑いから——長火鉢を避けた食卓の角の処に、さすがにまだ端然と坐つて、例の（菅女部屋。）で、主税は独酌にして、ビール。

塀の前を、用水が流るるために、波打つばかり、窓掛に合歡の花の影こそ揺れ揺れ通え、差覗く人目は届かぬから、縁の雨戸は開けたままで、心置なく飲めるのを、あれだけの酒好が、なぜか、

夫人の居ない時は、硝子杯コップへ注げる口も苦そうに、差置いて、どうやら鬱ふさぐらしい。

襖ふすまが開いた、と思うと、羽織なしの引掛帯ひっかけおび、結び目が摺ずつて、横になつて、くつろいだ衣紋えもんの、胸から、柔かにふつくりと高い、真まつ白しろな線を、読みかけた玉章たまずさで斜めに仕切つて、衽おくみさ下がりにその繰くり伸のした手紙の片端を、北斎が描いた蹴出けだしのごとく、ぶるぶるとぶら下げながら出た処は、そんじよ芸それしや者の風がある。

「やっと寝かしつけたわ。」

と崩るるのように、ぼったり坐つて、

「上の児こは、もう原もとつから乳母ばあやが好いんだし、坊も、久しく私と寝ようなんぞと云わなかつただけけれども、貴下にかかりつきり

で構いつけないし、留守にばっかりしたもんだから、先刻さつきのあの取ツ着かれようを御覧なさい。」

と手紙を見い見い忙せわしそうに云う。いかにもここで膳を出したはじめには、小児こどもが二人とも母様かあさんにこびりついて、坊やなんざ、武者振いきおいつく勢。目の見えない娘こは、寂さみしそうに坐ったきりで、しきりに、夫人の膝から帯をかけて両手で撫でるし、坊やは肩から負われかかつて、背ける顔へ頬を押着おツつけ、躲かわす顔の耳許みみもとへかじりつくばかりの甘え方。見るまにばらばらに鬢びんが乱れて、面影も瘦やせたように、口のあたりまで振かかるとを搔かい払うその白やかな手が、空を掴つかんで悶もだえるようで、（乳母ばあや来ておくれ。）と云った声が悲鳴のように聞えた。乳母うばが、（まあ、何でござります、

嬢ちやまも、坊っちやまも、お客様の前で、と主税の方を向いたばかりで、いつも嬢さまかぶれの、眠ったような俯目ふしめの、顔を見ようとしないので、元氣なく微笑ほほえみながら、娘の兎の手を曳ひくと、厭々それは離れたが、坊やが何と云つても肯きかなくつて、果は泣出して乱暴するので、時の間も座を惜しそうな夫人が、寝かしつけに行つたのである。

そこへ、しばらくして、郵便——だった。

すらすらと読果てた。手紙を巻戻しながら顔を振上げると、乱れたままの後れ毛を、煩うるさそうに搔上げて、

「ついで思出しもしなかった、乳なんか飲まれて、さんざ膏あぶらを絞られたわ。」

と急いで衣紋を繕つて、

「さあ、お酌をしましょう。」

瓶を上げると、重い。

「まあ、ちつとも召喚めしあがらないのね。お酌がなくなつては不可いけないの、ちよいと贅ぜいたく沢たくだわ。ほほほほ、家うちも極きまつたし、一人で世帯を
持った時どうするのよ。」

「沢山頂きました、こんなに御厄介になつては、実に済みません
……もう、徐々そろそろ失礼しましょう。」

と恐しく真面目に云う。

「いいえ、返さない。この間から、お泊んなさいお泊んなさいと
云つても、貴下が悪いと云うし、私も遠慮したけれど、可いいわ、

もう泊つても。今ね、御覧なさい、牛込に居る母様かあさまから手紙が来て、早瀬さんが静岡へお出いでなすつて、幸いお知ちかづき己おのれになったのなから、精一杯御馳走なさい、と云つて来たの。嬉しいわ、私。

あのね、実はこれは返事なんです。汽車の中でお目にかかった事から、都合があつてこちらで塾をお開きなさるに就いて、ちつとも土地の様子を御存じじやない、と云うから、私がお世話をしてなんて、そこはね、可いように手紙を出したの、その返事、「てのひらと掌てのひらに巻き据えた手紙の上を、かろ軽く一つとんと拍うつて、かあさん「母様かあさんが可い、と云つたら、天下晴れたものなんだわ。ゆつくめしあ緩り召ゆつくめしあ食がれ。そして、是非今夜は泊るんですよ。そのつもりで風呂も沸わかしてありますから、お入んなさい。寝しなにしますか、それと

も颯と流してから喫りますか。どちらでも、もう沸いてるわ。そして、泊るんですよ。可くつて、」

念を入れて、やがて諾と云わせて、

「ああ、昨日も一昨日も、合歓の花の下へ来ては、晩方寂しそうに帰ったわねえ。」

十六

さて湯へ入る時、はじめて理学士の書齋を通った。が、机の上は乱雑で、そこに据えた座蒲団も無かった、早瀬に敷かせているのがそれらしい。

机には、広げたままの新聞も幅をすれば、小児の玩弄物も乗つて、大きな書棚の上には、世帯道具が置いてある。

湯は、だだつ広い、薄暗い台所の板敷を抜けて、土間へ出て、
ひあわい 庇間を ひとまた 一跨ぎ、すえ 据風呂をこの空地から焚くので、雨の降る日は難儀そうな。

そこにしゃが 踞んでいた、例のつんつるてん鞠子の婢が、湯加減を聞いたが じょうあんばい 上塩梅。

どつぷり沈んで、遠くで雨戸を繰る響、だいどん 台所をばたばた二三度行交いする音を聞きながら、やがて洗い果ててまた浴びたが、湯の設計は、この邸に似ず古びていた。

こともし 小灯のもうもう 朦々と包まれた湯気の中から、いきなみんどし 突然禪のなりで、

下駄がけで出ると、颯と風の通る庇間に月が見えた。廂はずれにのぞ覗いただけで、影さす程にはあらねども、と見れば尊き光かな、はだみ裸身に颯と白銀しろがねを鎧よろつたように二の腕あたり蒼あおずんだ。

思わず打仰いで、

「ああ、お妙たえさん。」

うつむ俯向いた肩がふるえて、

「お薦！」

よろめ踰踰いたように母屋の羽目に凭もたれた時、

「早瀬さん、」と、つい台所だいどころに、派手やかな夫人の声で、

「貴下、上つたら、これにお着換えなさいよ。ここに置いときま
すから、」

「はばか
憚り、」

と我に返つて、上つて見ると、薄べりを敷いた上に、浴衣がある。琉球紬つむぎの書生羽織が添えてあつたが、それには及ばぬから浴衣だけ取つて手を通すと、桁ゆきみじか短かに腕が出て着心の変な事は、引上げても、引上げても、裾が摺ずるのを、引縮めて部屋へ戻ると……道理こそ婦おんなもの物。中形模様の媚なまめかしいのに、藍あいの香ぶんが芬ぶんとする。突立つて見ていると、夫人は中腰に膝を支ついて、鉄瓶を掛けながら、

「似合つたでしょう、過日谷屋いっかが持つて来て、貴下が見立てて下さつたのを、直ぐ仕立てさしたのよ。島山のはまだ縫えないし、あるのは古いから、我慢して寝衣ねまきに着て頂戴。」

「むぎむぎ新らしいのを。」

と主税は袖を引張る。

「いいえ、私、今着て見たの、お初ではありません。御遠慮なく、でも、お気味が悪くはなくなつて。ちよいと着たから、」

「気味が悪い、」

「……………」

「もんですか。勿体至極もござらん。」

と極きまつたが、何かまだ物足りない。

「帯ですか。」

「さよう、」

「これを上げましょう。」

とすつと立って、うわじめ上緊をずるりと手繰った、麻の葉絞ちぢみの絹縮。

「……………」

目を見合せ、

「可いいわ、」

とはたと畳に落して、

「私も一風呂入って来ましょう。今の内に。」

主税はあとで座敷を出て、縁側を、十畳きやくまの客室の前から、玄
関の横手あたりまで、行ったり来たり、ややあしおと登音のするまで歩
行るいた。

おさん婢が来て、ぬいと立って、

「夫おくさま人が言いませしけえ、お涼みなさりますなら雨戸を開けるで

「ござります。」

「いや、宜よろしい。」

「はいい。」と念入りに返事する。

「いつも何時頃にお休みだい。」

と親しげに問いかけながら、口不重宝な返事は待たずに、長火鉢わきの傍へ、つかつかと帰つて、紙入の中をざつくりと搦んだ。

疾はやい事、もう紙ふたつに兩個。

「一個ひとつは乳母ばあやさんに、お前おくさんさんから、夫人おくさんに云わんのだよ。」

寝たのはかれこれ一時。

膳は片附いて、火鉢の火の白いのが果敢ないほど、夜も更けて、寂しんと寒くなつたが、話に実が入つたのと、もう寝よう、もう寝ようで炭も継がず。それでも火の気が便りだから、横坐りに、棲つまを引合せて肩で押して、灰の中へ露あわなあららも落ちるまで、火鉢の縁ふちに凭もたれかかつて、小豆あずきほどな火を拾う。……湯上りの上、昼間歩ある行き廻つた疲れが出た菅子は、髪も衣紋も、帯も姿も萎なえたようるで、顔だけは、ほんのりした——麦酒ビールは苦くて嫌い、と葡萄酒をコップ硝子杯ブに二ツばかりの——酔えいさえ醒めず、黒目は大きく睫毛まつげが開いて、艶うるおやかに湿うるおつて、唇くれないの紅くれないが濡れ輝く。手足は冷えたろうと思ふまで、頭かしらに気が籠つた様子で、相互たがいの話を留やめないのを、余

りおそ晩くなつては、また御家来衆しゆが、変にでも思うと不可いけませんから、とそれこそ、人に聞えたら変に思われそんな事を、早瀬が云つて、それでも夫人のまだ話し飽かないのを、幾いくたび度促しても肯き入れきいなかつたが……火鉢で隔てて、柔かく乗出していた肩の、衣きぬの裏がするりと辻すべつた時、薄寒そうに、がっくりと頷うなずくと見ると、
早さつきゆう急ゆうにフイと立つ……。

膝かにから搦もすんだ裳そが落ちて、蹠よろ踉ろめく袖そでが、はらりと、茶棚ちやだの傍わきのふすま襖ふすまに当あつた。肩を引いて、胸を反そらして、おつくらしく、身からだ体たで開けるようにして、次つぎ室むろへ入る。

板廊下を一つ隔てて、そこに四畳半があるのに、床が敷いてあって、小児が二人背中合せに枕して、真まんなか中なかに透いた処がある。

乳母うばが両方を向いて寝かし附けたらしいが、よく寝入っていて、乳母は居なかつた。

トそこを通り越して、見えなくなつたきり、襖も閉めないで置
きながら、夫人はしばらく経つても来なかつた。

早瀬は灰に突込んだ堆うずたかい巻まきた苳ぼこの吸殻なを視めながら、ああ、
喫んだと思ひ、ああ、饒舌しゃべつたと考える。

その話、と云うのが、かねて約束の、あの、ギョウテの（エル
テル）を直訳的ちやくやくてきにという註文で、伝え聞くかの大詩聖は、ある時
シルレルと葡萄の杯を合せて、予等われらが詩、年を経るに従したがいていよ
いよ貴たかからんことこの酒のごとくならん、と誓ちかつたそうだわね、
と硝子杯コップを火に翳かざしてその血汐ちしおのごとき紅くれないを眉まゆに宿とどめて、大した

学者でしよう、などと夫人、得意であつたが、お酌が柳橋のな
くつては、と云う機掛きつかけから、エルテルは後日ごにちにして、まあ、題
も（ハヤセ）と云うのを是非聞かして下さい、酒井さんの御意見
で、お別れなすつた事は、東京で兄にも聞きました、恋人はど
うなさいました。厭いやだわ、聞かさなくっちゃ、と強いられた。

早瀬は悉くわしく懺悔ざんげするがごとく語つたが、都合上、ここでは要
を摘んで置く。……

義理から別離わかれ話になると、お薦は、しかし二度芸者つとめをする気は
無いから、幸いめ組の惣助そうすけの女房は、島田が名人の女髪結。柳
橋は廻り場で、自分も結つて貰つて懇意だし、め組とはまたああ
いう中で、打明話が出来から、いつそその弟子になつて髪結で

身を立てる。商売をひいてからは、いつも独りで束ねるが、銀いちよ
うがえ杏返しなら不自由はなし、雛妓おしやくの桃割ぐらいは慰みに結つてや
 って、お世辞にも誉められた覚えがある。出来ないことはありま
 すまい、親もなし、兄弟もなし、行く処と云えば元の柳橋の主人
 の内、それよりは着屋さかなやへ内弟子に入つて当分梳手すきてを手伝いまし
 よう。……何も心まかせ、とそれに極きまつた。この事は、酒井先
 生も御承知で、内証ないしょうで飯田町の二階で、直々じきじきに、お蔭に逢つて
 下すつて、その志の殊勝なのに、つくづく領うなずいて、手ずから、小
 遣など、いろいろ心こころづけ着きがあつた、と云う。

それぎり、顔も見ないで、静岡へ引込ひっこむつもりだったが、め組
 の惣助の計らいで、不意に汽車の中で逢つて、横浜まで送る、と

云うのであった。ところが終列車で、浜が留まりだったから、旅は籠たごも人目を憚はばかって、場末の野毛の目立たない内へ一晩泊った。

(そんな時は、)

と酔っていた夫人が口を挟んで、顔を見て笑ったので、しばらくして、

(背中合わせで、別々に。)

翌日、平沼から急行列車に乗り込んで、そうして夫人あなたに逢ったんだと。……

うつらうつら

十八

途中で談話はなしに引入れられて鬱ふさぐくらい、同情もしたが、芸者な
んか、ほんとうにお止しなさいよ、と夫人が云う。主税は、当初はじめ
から酔わなきや話せないで陶然としていたが、さりながら夫人、
日本広しといえども、私にお飯まんまを炊たいてくれた婦おんなは、お蔭の他あり
ません。母親の顔も知らないから、噫ああ、と喟然きぜんとして天井を仰い
で歎ずるのを見て、誰が赤い顔をしてまで、貸家を聞いて上げま
した、と流眊しりめにかけて、ツンとした時、失礼ながら、家で命は繫つな
げません、貴女は御飯が炊けますまい。明日は炊くわ。米をにる

のだ、と笑つて、それからそれへ花は咲いたのだったが、しかし、
 気の毒だ、可哀相に、と憐愍あわれみはしたけれども、徹頭徹尾、（芸
 者はおよしなさい。）……この後たとい酒井さんのお許可ゆるしが出て
 も、私が不承知よ。で、さてもう、夜が更けたのである。

出て来ない——夫人はどうしたろう。

がたがた音がした台所も、遠くなるまで寂寞ひっそりして、耳馴れたれ
 ば今更めけど、戸外おもては数万すの蛙かわずの声。蛙、蛙、蛙、蛙と書い
 た文字に、一ツ一ツ音があつて、天地あめつちに響くがごとく、はた古
 戦場を記した文に、ことごとしらべ、尽く調があつて、章と句と齊ひとしく声を放つて
 鳴くがごとく、何となく雲が出て、白く移り行くに従うて、動揺どよみ
 を造つて、国が暗くなる氣勢けはいがする。

時に湯気の蒸した風呂と、ひあわい 庇合の月を思うと、一生の道中記に、荒れたうまやし 駄路の夜のひとりたび 孤旅が思出される。

かれ 渠は愁然として額をおさ 压えた。

「どうぞお休み下さりまし。」

と例の俯向うつむいた陰気な風で、敷居越に乳母が手を支ついた。

「いろいろお使い立てます。」

と直ぐにずつと立って、

「どちらですか。」

「そこから、お座敷へどうぞ……あの、先刻はまた、」と頭つむりを下
げた。

寢床はその、十畳の真まんなか中に敷いてあつた。

枕まくらもと許みずさしに水指みずさしと、硝子杯コップを伏せて盆がある。煙草盆を並べて、もう一つ、黒塗金蒔絵きんまきえの小さな棚を飾つて、毛糸で編んだ紫陽花あじさいの青い花に、玉ぎよくの丸火屋まるぼやの残燈ありあけを包んで載せて、中の棚に、香包を斜めに、古銅の香合が置いてあつて、下の台へ鼻紙を。重しの代りに、女持の金時計が、底澄んで、キラキラ星のように輝いていた。

じろりと視ながめて、莞爾にっこりして、蒲団に乗ると、腰が沈む。天鵝びろ絨うじどの括くくり枕まくらを横へ取つて、足を伸のばして裙すそにかさねた、黄縞きしまの郡内ぐんないに、桃色の絹の肩当てした搔卷かいまきを引寄せ、手てがすべつつて、ひやりと軽かろくかかつた裏の羽二重が燃ゆるよう。

トタンに次の書齋で、するすると帯を解く音がしたので、まだ

横にならなかつた主税は、搔卷の襟に両肱を支いた。

乳母が何か云つたようだったが、それは聞えないで、派手な夫の声して、

「ああ、このまま寝ようよ。どうせ台なしなんだから。」

と云つたと思うと、隔ての襖ふすまの左右より、中ほどがスーと開あいたが、こなたの十畳の京間は広し、向うの灯あかりも暗いから、裳もすそはかくれて、乳ちの下の扱帯しごきが見えた。

「お休みなさい。」

「失礼。」

と云う。襖を閉めて肩を引いた。が、幻の花環一つ、黒髪あたりのありし辺、宙に残つて、消えずおもかげに倂おもかげに立つ。

主税は仰向けに倒れたが、枕はしないで、両手を廻して、しつかと後脳を抱いた。目はハツキリと睜みひらいて、失せやらぬその幻を視めていた。時過ぎる、時過ぎる、その時の過ぎる間に、乳母が長火鉢の処ランブの、洋燈を消したのが知れて、しっこは、しっこは、と小児こどもに云うのが聞えたが、やがて静まって、時過ぎた。

早瀬は起上つて、棚の残ありあけ燈を取つて、縁へ出た。次の書齋を抜けるとまた北向きの縁で、その突当りに、便所かわやがあるのだが、夫人が寝たから、大廻りに玄関へ出て、鞠子の寝た裙すそを通つて、板戸を開けて、台所の片隅ひらきの扉から出て、小用を達たして、手を洗つて、手てぬぐい拭ぬぐを持つと、夫人が湯で使つたのを掛けたらしい、冷く手に触つて、ほんのり白粉おしろいの香においがする。

十九

寢室ねまへ戻つて、何か思切つたような意気込で、早瀬いきおいは勢よく枕して目を閉じたが、枕許こころの香は、包を開けても見ず、手拭の移香でもない。活々した、何の花か、その薫の影はないが、透通つて、きらきら、露を揺ゆつて、幽かすかな波を描いて恋を囁ささやくかと思われ、一種微妙な匂が有つて、搔卷かすかの袖を辿たどつて来て、和やわらかに面を撫おもでる。それを搔かい払はらうごとく、目の上を両手で無慚むざんに引ひ擦こると、ものの香はぱつと枕にに遁にげて、縁側の障子の隅へ、音も無く潜ひんだらしかつたが、また……有りもしない風を伝ひつて、引返ひして、

今度は軽く胸に乗る。

寝返りを打てば、袖の煽あおりにふつと払われて、やがて次の間と隔ての、襖の際に籠った氣勢けはい、原もとの花片はなびらに香が戻つて、匂は一処に集つたか、薫がひとしお一汐高くなつた。

快い、さりながら、強い刺戟を感じて、早瀬が寝られぬ目を開けると、先刻さつき（お休みなさい。）を云つた時、管子がそこへ長襦袢の模様を残した、襖の中途の、人の丈の肩あたりに、幻の花環は、色が薄らいで、花も白澄んだけれども、まだ歴々ありありと瞳に映る。

枕に手を支つき、むつくり起きると、あたかもその花環の下、襖の合せ目の処に、残燈ありあけの隈くまかと見えて、薄紫に畳を染めて、例

の堇色すみれの手巾ハンケチが、寂然せきぜんとして落ちたのに心着いた。

薫はさてはそれからと、見る見る、心ゆくばかりに思うと、萌も

黄えぎに敷いた畳の上に、一ひと簇むれの堇が咲き競ったようになって、朦も

朧ろうろうとした花環の中に、就な中輪なかんずくりんの大きい、目に立つ花の花片

が、ひらひらと動くや否や、立たち処どころに羽にかわって、蝶々に化

けて、瞳の黒い女の顔が、その同一おなじ処ところにちらちらする。

早瀬は、甘い、香かんばしい、暖かな、とろりとした、春の野に横よこわ

る心地で、枕を逆に、搔卷の上へ寝卷の腹ばいん這まになって、蒲団の

裙に乗出しながら、頬ほ杖おづえを支いて、恍うつ惚とりした状さまにその堇を見

ている内、上にたたずむ蝶々と齊ひとしく、花の匂が懐しくなつたと

見える。

やおら、手を伸して紫の影を引くと、手巾はそのまま手に取れた。……が董には根が有つて、襖の合せ目を離れない。

不思議に思つて、蝶々がする風情に、手で羽のごとく手巾を揺動かすと、一寸ばかり襖が……開……い……た。

と見ると、手巾の片端に、紅の幻影が一条、柔かに結ばれて、夫人の閨ねやに、するすると繋つなつていたのであつた。

董が咲いて蝶の舞う、人の世の春のかかる折から、こんな処には、いつでもこの一条が落ちている、名づけて縁えにしの糸と云う。禁断の智慧の果実このみと齊ひとしく、今も神の試みで、棄てて手に取らぬ者は神の児ことなるし、取つて繋ぐものは悪魔の眷属けんぞくとなり、畜生の浅猿あさましさとなる。これを夢みれば蝶となり、慕えば花となり、

解けば美しき霞となり、結べば恐しき蛇となる。

いかに、この時。

隔ての襖が、より多く開いた。見る見る朱あかくちなわき蛇は、その燃ゆる色に黄金の鱗うろこの絞を立てて、菫の花を搔かいくぐ潜かつた尾に、主税の首を巻きながら、頭かしらに婦人の乳ちの下を紅くれない見せて噛かんでいた。

颯さっと花環が消えると、横に枕した夫人の黒髪、後向きに、搔卷の襟を出た肩の辺あたりが露あらわに見えた。残ありあけ燈はその枕許にも差置いてあつたが、どちらの明あかりでも、繋いだものの中は断たれず。……

ぶるぶる震うと、夫人はふいと衾ふすまを出て、胸おきを圧おさえて、熟じっと見据えた目に、閨みまわの内をぼうして、としたようふで、まだ覚めやらぬ夢に、菫咲く春の野を徜徉さまようごとく、裳もすそも畳ただよに漾たつたが、ややあ

つて、はじめてその怪い扱帯しごきの我を纏まとえるに心着いたか、あ、と
忍び音に、魘うなされた、目の美しい蝶の顔は、俯向けに堇の中へ落
ちた。

思いやり

二十

妙子は同伴つれも無しにただ一人、学校がえりの態なりで、八丁堀のと
ある路地へ入って来た。

通うその学校は、こうじまち麴町辺であるが、どこをどう廻ったのか、
まざごちよう真砂町の嬢さんがこの辺へ来るのは、旅行をするようなもので、
 野山を越えてはるばると……近所でなら温習っている三味線も、旅の
 衣はずすかけの、旅の衣はずすかけの。

目で聞くごとくぱつちりと、その黒目勝なのをみは睜ったお妙は、
 鶯の声を見る時とおんなじ同一な可愛い顔で、路地に立ってみまわしなが
 ら、たちばな橘に井げたの紋、堀の内こうじゆう講中のお札を並べた、かんばら上原と
 姓だけのかどふだ門札をなが視めて、ひとえ単衣の襟をちよいと合わせて、すつと
 その格子戸へ寄つて、横に立って、ひがさ洋傘を支いたが、声を懸けよ
 うとしたらしく、のぞ斜めにのぞ覗き込んだ顔を赤らめて、黙つてうつむ俯向い
 てふしめ俯目になった。くちもと口許よりまつげ睫毛が長く、日にさした影は小さく

軒下に隠れた。

コトコトとその洋傘で、爪先の土を叩いていたが、

「御免なさい。」

とようよう云う、控え目だったけれども、朗に清しい、框の障子越にずツと透る。

中からよく似た、やや落着いた静な声で、

「はあ、誰方？」

お妙は自分から調子が低く、今のは聞えない分に極めていたのを、すぐの返事は、ちと不意討という風で、吃驚して顔を上げる。

「誰方、」

「あの……髪結さんの内はこつちでしようか。」

「はい、こちらでございますが。」と座を立つた氣勢けはいに連れて、

もの云う調子が婀娜あだになる。

と真正面まっしょうめんに内を透かして、格子戸に目を押附おっつける。

「何ぞ御用。」

といくらか透いていた障子をすらりと開ける。粹で、品の佳いい、しつとりした縞しまお召に、黒縹くろじゆす子の丸帯した御新造風の円鬘まるまげは、見違えるように質素じみだけれども、みどりの黒髪たぐいなき、柳橋こよしの小芳であつた。

立身たちみで、框から外を見たが、こんな門かどには最明寺、思いも寄ら

ぬ令嬢風に、急いで支膝つきひざになつて、

「あいにく出掛けて居りませんが、貴嬢、どちら様でいらつしやいますか。帰りましたら、直ぐ上りますように申しませう。」
瞳も離さないで視めたお妙が、後馳せおくればに会釈して、

「そう、でも、あの、誰方かおいででしょう。内へ来て貰うんじやないの。私が結つて欲しいのよ。どうせ、こんなのですから、」
と指でもおさ押えず、惜気おしげなく束髪びんの鬢ふを掉つて、

「お師匠さんでなくつても可いいんです。お弟子さんいでがお在なら、
ちよいと結んで下さいな。」

縋すがつて頼むように仇あどなく云つて、しつかり格子つかに掴つかまつて、差
覗のぞきながら、

「小母さんでも可いいわ。」

我を（小母さん）にして髪を結って、と云われたので、我ながら忘れたように、心から美しい笑顔になって、

「貴嬢、まあ、どちらから。あの、御近所でいらつしやいますか。」

「いいえ、遠いのよ。」

「お遠うございますか。」

「本郷だわ。」

「ええ、」

「私ねえ、本郷のねえ、酒井と云うの。」

「お嬢様、まあ、」

と土間に一足おろしさまに、小芳は、急いで框から開ける手が、

戸に掴まったお妙の指を、中からおさ压えたのも気が附かぬか、駒下こま駄げの先を、逆さかに半分踏まえて、片棲かたづま蹴出しのみだれさえ、忘れたようにみまも瞻つて、

「お妙様。」

「小母さんは、早瀬さんの……あの……お蔭さん？」

二十一

「いらつしやいまし、」

と小芳がいた太く更あらたまつて、三指を突いた時、お妙は窮屈そうに六じようざ畳の上座へ直されていたのである。

「貴嬢あなた、まあ、どうしてこんな処へ、たった御一人なんですか。

途中で何かございませでしたか、お暑かつたでしょうのに。唯ただいま

今手拭てぬぐいを絞しぼって差上げます。」

と一いつと斉きに云いいかけられて、袖で胸むねを煽あおいでいた手を留とどめて、

「暑あついんじゃないの、私きまり極ぎが悪いから、それでもって、あの、」

と袂たもとを顔かほに当てて、鈴すずのような目めばかり出して、

「小母こははさんが、お薦すすさん？」と低こご声こゑでまた聞いた。

「あれ、どうしましょう。あんまり思懸おもけない方がお見えなさいましたもんですから、私は狼狽とつちてしまつてさ。ほほほ、いうことも前後あとさきになるんですもの、まあ、御免ごめんなさいまし。

私は……じゃありません。その……何でございますよ、お薦すすさ

んが煩らつて寝ておりますので、見舞に来たんでございます。」

「ええ、御病氣。」と憂慮きづかわしげに打傾く。

「はあ、久しい間、」

「沢山たんと、悪くつて？」

「いいえ、そんなでもないようですけれど、臥ふせつておりますから、お髪ぐしはあげられませんでしょう。ですが、御緩ごゆっくり、まあ、なさいます。この頃では、お増さんも気に掛けて、早く帰つて参りますから、ほんとうに……お嬢さん、」

と擦寄みとつて、うっかりと見惚みとれている。

上あがりぐち 框まどが三畳で、直ぐ次がこの六畳。前の縁が折曲おりまがつた処に、もう一室ひとま、障子は真中まんなかで開いていたが、閉つた蔭に、床が

あれば有るらしい。

向うは余所よその蔵で行詰つたが、いわゆる猫の額ほどは庭も在つて、青いものも少しは見える。小綺麗さは、酔のんだくれには過ぎたりといえども、お増と云う女房の腕で、畳も蒼あおい。上原とあつた門札こそ、世を忍ぶ仮の名でも何でも無い、すなわちこれめ組の住居すまい、実は女髪結お増の家と云つてしかるべきであろう。

惣助の得意先は、皆、渠かれを称して恩田百姓と呼ぶ。註およぼすに不及、作つくりど取りのただ儲け、商あきない売で儲けるだけは、飲よむも可し、打ぶつても可し、買もとでうも可しだが、何がさてそれで済もうか。儲けを飲よんで、資本もとでで買つて、それから女房の衣服きもので打つ。

それお株がはじまった、と見ると、女房はがちがちと在り

たけの身しんしょう上へ錠をおろして、錠を昼夜帯へ突込んで、当分商売はさせません、と仕事に出る、

トかますの煙草入に湯銭も無い。おなまめだんぶつ、座敷牢だ、と火鉢の前に縮すくまつて、下げ煙管ぎせるの投首が、ある時悪心増長して、鉄瓶を引外ひっぱずし、沸立にたつた湯を流ながしへあけて、溝の湯気の消えぬ間に、笹蕎麦ざるそばで一杯いちを極きめた。

その時女房に勘当されたが、やっとよりが戻つて以来、金目な物は重箱まで残らず出入先へ預けたから、家には似ない調度の疎そ末まつさ。どこを見てもがらんとして、間狭ませまな内には結句さっぱりして可よさそうなが、お妙は目を外らす壁張りの絵も無いので、しきりに袂たもとを爪繰つまぐつて、

「可いのよ、小母さん、髪結さんの許とこだから、極りが悪いからそう云つて来たけれど、髪なんぞ結いわなくなつたつて構わなくなつてよ。ちつとも私、結いたくはないの、」

と投出したように云つて、

「早瀬さんの、あの、主税さんの奥さんに、私、お目にかかれなくつて？」

「姉さん、」

ト、障子の内から。

「あい、」と小芳が立構えで、縁へ振向いてそなたを見込むと、
「私、そこへ行つても可いいかい？」

小芳が急いで縁づたいで、障子を向うへ押しながら、膝を敷居

越に枕許。

枕についた肩細く、半ば搔か巻まを藻脱けた姿の、空う蟬つのあわれな胸を、瘦やせた手でしつかりと、浴衣に襲かねた寝衣ねまきの襟の、はだかつたのを切なそうに掴つかみながら、銀杏返しの鬢びんの崩れを、引ひ結きえた頭かしら重おもげに、透通ほるように色の白い、鼻筋の通つた顔を、がつくりと肩につけて、吻ほと今呼い吸きをしたのはお蔦である。

二十二

お蔦は急に起上つた身体からだのあがきで、寝床に添つた押入の暗い方へ顔の向いたを、こなたへ見返すさえ術じゆつなそうであつた。

枕から透く、その細う振れた背へ、小芳が、密と手を入れて、上へ抱起すようにして、

「切なくはないかい、お蔭さん、起きられるかい、お前さん、無理をしては不可いけないよ。」

「ああ、難有ありがとう、」

とようよう起直つて、顛はちまき巻を取ると、あわれなほど振りかか
る後れ毛を搔上げながら、

「何だか、骨が抜けたようで可笑おかしいわ、気障きざだねえ、ぐったりして。」

と蓮葉はすはに云つて、口惜くやしそうに力のない膝を緊しめ合わせる。

お妙はもう六畳の縁へ立って来て、障子に掴のぞまって覗のぞいていた

が、

「寝ていらつしやいよ、よう、そうしておいでなさいよ。私がそこへ行つてよ。」

とそれまで遠慮したらしかつたが、さあとなると、ひらり翻然と縁を切つて走込むばかりの勢いきおい——小芳の方が一目先へ御見の済んだな馴染しみだけ、この方が便りになつたか、薄くお太鼓に結んだ黒縹子のその帯へ、すりつ擦着くように坐つて、袖のわきから顔だけ出して、はじめで逢つたお蔦の顔を、瞬もしないで凝じつと視ながめる。

肩を落して、お蔦が蒲団の外へ出ようとすることを、

「よう、そうしていらつしやいなね。そんなにして、私は困るわ。」

「はじめまして、」

と余り白くて、血の通るのは覚おぼつか束うなじない頸うなじを下げて、手を支つき
つつ、

「失礼でございますから、」

「よう、私困るのよ。寝ていて下さらなくっては。小母さん、そ
う云つて下さいな。」

と氣を揉んで、我を忘れて、小芳の背中をとんとんと叩いて、
取次あせげ、と急あせつて云う。

その優しさが身に浸みたか、お薦の手をしつかり握つた、小芳
の指も震えつつ、

「お薦さん、可いから寝ておいでな、お嬢さんがあんなに云つて

下さるからさ。」

「いいえ、そんなじやありません。切なければ直じきに寝ますよ。

お嬢さん、難ありがと有う存じます。貴嬢あなた、よくおいで下さいましたのね。

。」

「そして、よく家うちが知れましたわね。この辺へは、滅多においでなさいましたことはござんせんでしようにねえ。」

小芳はまた今更感心したように熟つくづく々云った。

「はあ、分らなくってね。私、方々で聞いて極きまりが悪かったわ。

探むずすのさえ煩むずかしいんですもの。何だか、あの、小母さんたちは、ちよいとは、あの、逢あつて下さらなかうと思つて、私、心配しんぱいツたらなかつてよ。」

「私たちが……」

「なぜでございますえ。」

と両方へ身を開いて、お妙を真まんなか中にして左右から、珍らしそうに顔を見ると、俯うつむ向きながら打微笑み、

「だって私は、ちつともお金子かねが無いんですもの。お茶屋へ行つて、呼ばなくつては逢えないのじやありませんか。」

お薦がハツと吐息といきをつくつと、小芳はわざと笑いながら、

「怪我にもそんな事があるもんですか。それに、お薦さんも、もう堅気です。私が、何も……あの、もつとも、私に逢おうとおつしやつて下すつたのではござんせんが、」

となぜか、怨めしそうな、しかも優やさしい目みまもで瞻みまもつて、

「私は何も、そんな者じゃありませんのに。」

「厭よ、小母さん、私両方とも写真で見えて知っていてよ。」

と仇気あどけなく、小芳の肩へ手を掛けて、前髪を推込むばかり、額をつけて顔を隠した。

二人目と目を見合せて、

「極きまりが悪い、お蔭さん。」

「姉さん、私は恥かしい。」

「もう……」

「ああ、」

思わず一所に同音に云った。

「写真なんか撮るまいよ、」——と。

二十三

お妙は時に、小芳の背後うしろで、内証ないしようで袂たもとを覗のぞいていたが、細い紙に包んだものを出して気兼ねそうに、

「小母さん、あの、お蔭かげさんが煩わづらつていらつしやる事は、私は知らなかったんですから、お見舞みまひじやないの、あのね、あの、お土産みやげに、私、極ごくりが悪いわ。何にも有りませんから、毛糸けいとで何か編あんで上げようと思おもつたのよ。

だけれども何が可かいか、ちつとも分わらないでしょう。粋粋な芸者芸者衆しゆだから、ハイカラなものは不可いけないでしょう。靴足袋くつあしふくろも、手袋てぶくろも、

銀貨入も、そんなものじゃ仕方が無いから、これをね、私、極りが悪いけれども持って来ました。小母さんから上げて頂戴。」

「お喜びなさいよ、お嬢さんが、」

「まあ、」

と嬉しそうに頂くのを、小芳は見い見い、蒲団へ膝を乗懸けて、
「何を下さつたい。」

「開けて見ても可いかね。」

「早く拝見おしなねえ。」

「あら！ 見ちや可厭いやよ、酷ひどいわ、小母さんは。」

と背中を推着おっついて、たつた今まで味方に頼んだのを、もう目の敵かたきにして、小突く。

お蔭は病気で気も弱って、

「遠慮しましょうかね、」と柔順おとなしく膝の上へ大事に置く。

「ほんとうに、お蔭さんは羨うらやましいわねえ。」

ときも羨しそうに小芳が云うと、お妙はフト打仰向いて、目を大きくして何か考えるようだったが、もう一つの袂ひびろうどから緋天鵝絨がまぐちの小さな蝦蟇口を可愛らしく引出して、

「小母さん、これを上げましょう。怒つちや可厭たんとよ。沢山たんとあると

可いけれど、大おおきな銀貨おおき（五十銭）が三みつ個みつつだけだわ。

先せんの紙入せんの時は、お紙幣さつが……そうねえ……あの、四円ばかりあつたのに、この間落してねえ。」

と驚いたような顔をして、

「どうしようかと思つたの。だからちつとぼかしただけけれど、小母さん怒らないで取つといて下さいな。」

小芳が吃驚びっくりしたらしい顔を、お蔭は振上げた目で吃きつと見て、

「ああ、先生のお嬢さん。……とも……かくも……頂戴おしよ、姉さん、」

「お礼を申し上げます。」

と作法正しく、手を支ついたが、柳の髪かみの品の佳よさ。頭つむりも得え上げず、声が曇くもつて、

「どうぞ、此金これで、苦界くがいが抜ぬけられますように。」

その時お蔭も、いもと仮名書の包みを開けて、元気よく発奮はげんだ調子で、

「おお、半襟を……姉さん、江戸紫の。」

「主税さんが好きな色よ。」

と喜ばれたのを嬉しげに、はじめて膝を横にずらして、蒲団にお妙が袖をかけた。

「姉さん、」

と、お蔦は俯向うつむいた小芳を起して、膝突合わせて居直つたが、頬を薄蒼そむう染るまでその半襟を咽喉のどに当てて、頤おとが深く熟じつと圧おさえた、浴衣に映る紫榮えて、血を吐く胸の美しさよ。

「私が死んだら、姉さん、経帷きようかたひら子も何にも要らない、お嬢さんに頂いた、この半襟を掛けさしておくれよ、頼んだよ。」

と云う下から、桔梗ききようを走る露に似て、玉か、はらはらと襟を

走る。

「ええ、お前さん、そんな、まあ、拗ねたような事をお言いでない。お嬢さんのお志、私、私なんざ、今頂いた御祝儀を資本もとでにして、銀行を建ててるんです。そして借金を返してね、綺麗に芸者を止すんだよ。」

と串じょうだん戯はからしく言いながら、果敢なないお蔭の姿につけ、情なさけにもろく崩折くずおれつつ、お妙おもてを中に面を背けて、紛らす煙草の煙も無かった。

小芳の心中、ともかくも、お蔭の頼み少ない風情は、お妙にも見て取られて、睫毛まつげを幽かすかに振わしつつ、

「お医者には懸っているの。」

「いいえ、私もその意見をしていた処でござんすよ。お医者様にもろくに診^みて貰わないで、薬も嫌いで飲まないんですもの、貴女からもそう云ってやって下さいましな。」

と、はじめて煙草盆から一服吸って、小芳はお妙の声を聞くのを、楽しそうに待つ顔^{かおつき}色。

お取膳

二十四

その時お妙の言ことばというのが、余り案外であつたのから、小芳は慌あわただしく銀の小さな吸口を払はたいて煙管きせるを棄てたのである。

「お医者もお薬も、私だつて大嫌いだわ。」

と至つて真面目まじめで、

「まずいものを内服のませて、そしてお菓子を食べては悪いの、林檎を食べては不可いけないの、と種いろん々なことを云うんですもの。」

そんな事よりねえ、面白いことをしてお遊びなさいよ。」

小芳が（まあ。）と云う体で呆れると、お蔭は寂しえみそうな笑えみを見せて、

「お嬢さん、その貴嬢あなた、面白いことが無いんですもの、」と勢せいのない呼吸いきをする。

「主税さんに逢えば可いでしょう。」

「え、」

「貴女、逢いたいでしよう。」

二人が黙つて瞻みまもつても、お妙は目まじろぎもしないで、

「私だつて逢いたくつてよ。静岡へ行つてから、全く一年になるんですもの、随分だと思つてわ、手紙も寄越さないんですもの。私は、あんまりだと思つてよ。」

絵のお清書をする時、硯すずりを洗つてくれて、そしてその晩別れたのは、ちようど今月じやありませんか。その時の杜かきつばた 若ばた なんざ、もう私、嬰あかんぼ児が描いたように思ふんですよ。随分しばらくなんですもの、私だつて逢いたいわ。」

と見る見る瞳にうるみを持ったが、活々した顔は撓たわまず、声も凜々りんりんと冴えた。

「それですから、貴女も逢いたかろうと思つてねえ。実は私相談に来たの。もっと早くから、来よう、来ようと思つただけけれど、極きまりが悪いしねえ、それに私見たようなものには逢つて下さらないでしょうと思つて、学校の帰りに幾いくたび度も九段まで来て止したの。

それでも、あの、築地から来るお友達に、この辺の事を聞いて置いて、九段から、電車に乗るのは分つたの。だけでもねえ、一度めがね万世橋で降りてしまつて、来られなくなつた事があるのよ。

そのお友達と一所に來ると、新富座の処まで教えて上げましよ
うツて云うんだけれど、学校でまた何か言われると悪いから、今

日も同一電車おなじに乗らないように、招魂社の中にしばらく居たら、男の書生さんが傍そばへ来て附着くつついて歩行あるくんですもの。私、斬られるかと思つて可恐こわかつたわ、ねえ、お臀しりの肉みが薬になると云うんでしよう、ですもの、危いわ。

もう一生懸命にここへ来て、まあ、可よかつた、と思つてよ。

あのね、あの、」

と蓐とこの綴とじいと糸を引張つて、

「貴女も主税さんも、父さんに叱られてそれでこうしているんだつて、可哀相だわ。私なら黙つちやいないわ、我わがまま儘を云つてやるわ。だつて、自分だつて、母様かあさんが不可いけないと云うお酒を飲んで仕様が無いんですもの。自分も悪いのよ。」

貴女叱られたら、おあやまんなきいよ。そしてね、父さんはね、私や母様の云う事は、それは、憎らしくつてよ、ちつとも肯きかないけれど、人が来て頼むとねえ、何でも（厭だ。）とは言わないで、一々引受けるの。私ちやんと伝授を知っているから、それを知らせて上げたいの、貴女が御病気で来られないんなら、小母さん、」

と隔てなく、小芳の膝に手を置いて、

「小母さんでも可ようござんす。構わないで家うちへいらつしやいよ。玄関の書生さんは婦おんなのお客様をじろじろ見るから極きまりが悪かったら遠慮は無いわ、ずんずん庭の方からいらつしやい。」

私がね、直ぐに二階へ連れてつて、上げるわ。そうするとねえ、

母様がお酒を出すでしょう。私がお酌をして酔わせてよ。アハアハ笑つて、ブンと響くような大な声おおきを出したら、そしたらもう可いわ。

是非、主税さんと呼んで下さい。電報で——電報と云つて頂戴、可くつて。不可いけないとか何とか、父さんがそう云つたら、膝をつかまえて離さないの。そして、お蔭さんが寂さみしがつて、こんなな煩らつていらつしやると云つて御覧なさい。あんなに可恐こわらしくつても、あわれな話だと直じきに泣くんですもの、きつと承知するわ。そのかわり、主税さんが帰つて来たら、日曜に遊びゆに行くから、そうしたらば、あの……」

と蔭とこの端につかまつて、お蔭の顔を覗くようにして、

「貴女も、私を可厭いやがらないで、一所に遊んで頂戴よ。前ぜんに飯田町に行きたくつても、貴女が隠れるから、どんなに遠慮だったか知れないわ。」

もう二人とも泣いていたが、お蔭は、はツと面おもてを伏せた。

二十五

涙を払って、お蔭が、

「姉さん、私は浮世に未練が出た。また生命いのちが惜おしくなつたよ。皆さんに心配を懸けないで、今日からお医師いしやにも懸りましょう、薬も服のむよ。」

お嬢さん、もう早瀬さんには逢えなくつても、貴女がお達者でいらつしやいます内は、死にたくはなくなりました。」

と身をせめて、わなわな震える。

「寒気がするのねえ、さあ、お寝なさいよ、私が掛けて上げましよう。」

搔か卷まの襟へ惜気もなく、お妙が袖も手も入れて引くのを見て、

「ああ、勿体ない。そんなになすつては不い可けません。皆みんながそうじやないって言いますけれど、私は色のついた痰たんを吐きますから、大切なお身体からだに、もしか、感う染つりでもするとなりません。」

覚悟した顔の色の、颯さつと桃色なが心細い。

「可いいわ！」

「可いわではござんせん。あれ、そして寒気なんぞしませんよ。もう私は熱くって汗が出るようなんです、それから、姉さん、」
と小芳を見て、

「何ぞ……」

と云うと、黙ってうなず頷く。

「来たらね、こんな処でなく、あっちへ行つて、お前さん、お嬢さんと。」

「今日は私に任かせておくれ。」

「いいえ、」

「不可いけないよ、私がするんだよ。」

「お嬢さん、ああですもの。見舞に来て、ちよつと、病人をいじ苛め

るものがあつて、」

「無理ばかり云う人だよ、私に理由わけがあるんだから。」

「理由は私にだつて有りますよ。あの、過般いつかもお前さんに話したろう。早瀬さんと分れて、こうなる時、煙草を買え、とおつしやつて、先生の下すつた、それはね、折目のつかない十円紙幣さつが三枚。勿体ないから、死んだらお葬式とむらいに使つて欲しくつて、お仏壇ひきだしの抽斗ひきだしへ紙に包んでしまつてある、それを今日使いたいのよ。お嬢さんに差上げて、そして私も食べたいから、」

とただ言うのさえ病人だけ、遺言のように果敢はかなく聞えた。

「ああ、そんならそうおしな。どれ、大急ぎで、いいつけよう。」

「戸外おもては暑かろうねえ。」

「何の、お蔭さん。お嬢さんに上げるんだもの、無理にも洋傘（こうもり）をさすものか。」

「角の小間物屋で電話をお借りよ。」

「ああ、知ってるよ。あんまりあらくない中くらいな処よが好よかるうねえ。」

「私はヤケに大串が可いけれど、お嬢さんは、」

「ここで皆みんな一所に食べるんでなくつちや、厭。」

「お相伴しますとも、お取膳とやらで、」

と小芳が嬉しそうに云う。

「じゃ、私も大きいの。」

「感心、」

とお蔦が莞爾にっこり。

「驚きましたねえ。」

と立つ。

「御飯も一所よ。」

「あいよ、」

とかまち框を下りる時、つま褌を取りそうにして、振向いた目のふちがはれ腫ぼったく、小芳は胸を抱いて、格子をがらがら。

「お嬢さん、」

とお蔦が懐しそうに、

「もともと、そういう約束で別れたんですけれど、私の方へも丸一年……ちつともたより便がないんですよ。

人が教えてくれましてね、新聞を見ると、すっかり土地の様子が知れるツて言いますから、去年の七月から静岡の民友新聞と云うのを取りましてね、朝起きると直ぐ覗のぞいて、もう見落しはしなからうか、と隙ひまさえあれば、広告まで読みますんですが、ちつとも早瀬さんの事を書いてあつたことはありませんから、どうしておいでだか分かりません。

この頃じや落胆がっかりして、勢せいも張合も無いんですけれども、もしやにひかされては見ています。

たった一度、早瀬さんのことを書いてあつたのがござんしてね、切抜いて紙入の中へ入れてありますから、今、お目に掛けますよ

。

二十六

お蔭は蔭しとねに居直つて、押入の戸を右に開ける、と上も下も仏壇で、一ツは当家の。自分でお蔭が守をするのは同居だけに下に在る。それも何となくものあわれだけれども、後姿が褻つまの萎なえた、かよわい状さまは、物語にでもあるような。直ぐにその裳もすそから、仏壇の中へ消えそうに腰が細く、撫肩がしおれて、影が薄い。

紙入の中は、しばらく指の尖さきで搔探さねばならなかつたほど、可哀相に大切だいじに蔵しまつて、小さく、整然きちんと畳んで、浜町の清正せいしょうこ公うの出世開運のお札と一所にしてあつた、その新聞の切抜を出

す、とお妙は早やへだてごころ隔心も無く、十年の馴染のように、横ざまにとこ蓐もたに凭れながら、うなじのぼ頸を伸して、待構えて、

「ちよいと、どんなことが書いてあつて。またすり掏賊を助けたりなんか、いけ不可いないことをしたのじやないの。急いで聞かして頂戴な
。」

「いいえ、まあ、貴女がお読みなさいまし。」

「拜見な。」

と寝転ぶようにして、ほおづえ頬杖ついて、畳の上で読むのを見なが

ら、抜きかけた、仏壇のひきだし抽斗を覗くと、そこに仰向けにしてあ

る主税の写真をそつ密と見て、ほろりとしながら、カタリと閉めた。

ふところ懐中へ、その酒井先生恩賜の紙幣さつの紙包を取って、仏壇の中に

落ちた線香立ての灰を、フツフツと吹いて、手で撫でる。

おもて戸外を金魚売が通った。

「何でしょう。この小使は、また可訝おかしなものじゃないの、」

とお妙が顔を赤うして云う。新聞に書いたのは（A B横町。アアベエ）

と云う標題みだしで、西の草深のはずれ、浅間に寄った、もう郡部にな

ろうとするあだなとある小路を、近頃渾名してA B横町と称となえる。すで

に阿部郡ごおりであるのだから語呂が合い過ぎるけれども、これは独語

学者早瀬主税氏が、ここに私塾を開いて、朝からその声の絶間の

ない処から、学生たわむれが戯たわむれにしか名づけたのが、一般に拡まって、豆

腐屋までがA B横町と呼んで、土地の名物である。名物と云えば、

も一ツその早瀬塾の若いもので、これが煮焼にたき、拭掃除、万端世話

をするのであるが、通例なら学僕と云う処、いなせ粹な兄哥あにいで、鼻唄あはを唱うたえばと云つても学問をするのでない。以前早瀬氏が東京で或学ある校に講師だった、そこで知ちかづき己おのの小使が、便つて来たものだそうだが、俳優やくしやの声色が上手で落語やも行る。時々（いらつしやい、）と怒鳴つて、下足に札を通して通学生を驚かす、とんだ愛敬もので、小使さん、小使さんと、有名な島山夫人をはじめ、近頃流行ごひのようになつて、独逸語をその横町に学ぶ貴婦人連が、大分御鼻いきである、と云う雑報の意味であつた。

小芳が、おお暑い、と云いつつ、いそいそと帰つて来た。

話にその小使の事も交つて、何であろうと三人が風説うわさとりどりの中へ、へい、お待遠様、と来たのが竹葉。

小芳が火を起すと、気取氣の無いお嬢さん、台所へ土瓶を提げ
 てる。お蔦も勢いきおいに連れて蹠踉よろよろ起きて出て、自慢の番茶の焙ほうじ加
 減で、三人睦くお取膳。

お妙が奈良漬にほうとなつた、顔がほてると洗つたので、小芳
 が刷毛はけを持つて、颯さつとお化粧つくりを直すと、お蔦がぐい、と櫛ふを拭い
 て一齒入れる。

苦勞人くろうとが二人がかりで、妙子は品のいい処へ粹になつて、また
 あるまじき美あでやか麗さを、飽かず視ながめて、小芳が幾いくたび度も恍うっとり惚と氣
 抜けのするようなのを、ああ、先生に瓜二つ、御尤ごもつともな次第だけ
 れども、余り手放しで口惜くやしいから、あとでいじめてやろう、とお
 蔦が思い設けたが、……ああ、さりとは……

いずれ両親には内証ないしよなんだから、と（おいしかつてよ。）を見得もなく門口でまで云つて、遅くならない内、お妙は八ツ下りに歸つた。路地の角まで見送つて、ややあつて引返ひつかえした小芳が、ばたばたと駈込んで、半狂乱に、ひしと、お蔦すがに縋りついて、

「我慢が出来ない。我慢が出来ない。我慢が出来ない。あんな可愛いお嬢さんにお育てなすつたお手柄は、真砂町の夫人おくさんだけれど、産……産んだのは私だよ。私の子だよ、お蔦さん、身体からだへ袖が触るたんび度に、胸がうずいてならなんだ、御覧よ、乳のはつたこと。」

と、手を引入れて引緊ひきしめて、わつとばかりに声を立てると、思わず熟じつと抱き合つて、

「あれ、すっかりおし、小芳さん、癩しやくが起ると不可いけないよ。私たち

は何の因果で、」

芸者なんぞになつたとて、色も諸分しよわけも知抜いた、いずれ名取の婦おんなども、処女むすめのように泣いたのである。

小待合

二十七

「ごうごう、姉あねえ、姉あねえ、目を開あいて口を利きねえ。もつとも、かつと開いたところで、富士も筑波も見えるかどうか、覚束ね

え目だけれどよ。はははは、いくら江戸前めえの肴屋さかなやだつて、玄関から怒鳴り込む奴があるかい。お客だぜ。お客様だぜ。おい、お前めえの方で惣菜は要らなくつても、己おらが方で座敷が要るんだ。何を！ 座敷が無え、古風な事を言うな、芸者の霜枯じやあるめえし。

と盤はんだい台をどさりと横づけに、澄まして天秤てんびんを立てかける。微醉ほろえいのめ組の惣助。商売あきないの帰途かえりにまたぐれた——これだから女房が、内には鉄瓶さえ置かないのである。

立迎えた小待合の女中は、坐りもやらず中腰でうろうろして、「全くおあいにくなんですよ。」

と入口を塞いだ前へ、平気で、ずんと腰を下ろして、

「見ねえ、身もんでえをする度たんびに、どんぶりが鳴らあ。腹の虫が泣くんじやねえ、金子かねの音だ。びくびくするねえ。お望みとありや、千両束で足の埃ほこりを払はたいて通るぜ。」

とあげ膝で、ボコポン靴をずぶりと脱いで、装もりじお塩しおのこなたへボカン。

声が高いのでもう一人、奥からばたばたと女中が出て来て、推お重つかさなると、力を得たらしく以前の女中が、

「ほんとうにお前さん、お座敷が無いのですよ。」

「看板を下ろせ、」

と喚わめいて、

「座敷がなくなば押入へ案内しねえ、天井だって用は足りらい。や

あ、御新規お一人様あ、」

と尻上りに云つて、げどうづら 外道面の口を尖らす、相好塩吹の面のごとし。

「そつちの姉あねえは話せそうだな。うんや、やつぱりお座敷ござなく面づらだ。変な面だな。はははは、トおつしやる方が、あんまり変でもねえ面でもねえ。」

行詰つた鼻の下へ、にぎりこぶし 握拳を捻ねじ込こむように引ひ擦こつて、
 「憚はばかながらこしれこう見えても、余よ所そ行ゆきの情いろ婦むがあるぜ。待まち合あへ
 来て見繕こしれいで拵こしれえるような、べらぼうな長なが生いきをするもんかい。

おう、八丁堀のめの字が来たが、の、の、承知か、承知か、と電話を掛けねえ。柳橋の小芳とこさん許とこだ。柏かしわ屋やの綱つな次じと云う美し

いのが、忽然^{こつぜん}として頭^あれらあ。

「どうだ、驚いたか。銀行の頭取が肴屋に化けて来たのよ。いよ、御趣向！」

と変な手つき、にゆうと女中の鼻頭^{はなさき}へ突出して、

「それとも半纏^{はんてんぎ}着は看板に障るから上げねえ、とでも吐^ぬかして

見ろ。河岸から鯨を背負^{しよ}つて来て、汝^{てめえ}許^{ところ}で泳がせるぞ、浜町界^か

隈^い洪水だ。地震より恐怖^{おっかね}え、屋体骨^{やていほね}は浮上るぜ。」

女中二人が目配せして、

「ともかくお上んなさいまし、」

「どうにか致しますから。」

「何だ、どうにかする。格子で馴染を引くような、気障^{きざ}な事を言

やあがる。だが心底は見届けたよ。いや、御案内引。」

と黄^{きなこえ}声を発して、どさり、と廊下の壁に打^{ぶつ}附りながら、

「どこだ、どこだ、さあ、持って来い、座敷を。」

で、突立って大手を拡げる。

「どうぞこちらへ、」

と廊下で別れて、一人が折^{おり}曲^{まが}って二階へ上る後から、どしど

し乱入。とある六畳へのめずり込むと、蒲団も待たず、半^{はん}股^{もも}引^{ひき}

の薄汚れたので大^{おお}胡^{あぐら}坐。

「御酒^{ごしゆ}をあがりますか。」

「何升お爛^{かん}をしますか、と聞きねえ。仕入れてあるんじや追^おつ^つく

めえ。」

女中が苦笑いして立とうとすると、長々と手を伸ばして、すえま据なご眼で首を振って、チヨ、舌鼓を打って、

「待ちな待ちな。大夫前芸たゆうと仕つかまつつて、一ツ滝の水を走らせる、」
とふいと立って、

「鷺尾の三郎案内致せ。ひよどりごえ鶯越の逆落しと遣れ。うらばしご裏階子から
便所だ、便所だ。」

どっかの夜講で聞いたそうなの。

二十八

手ちようず水鉢の処へめ組はのっそり。里心のついた振られ客のよう

な腰附で、中庭越に下座敷をきよろきよるとみまわしたが、どこへ何
 んと見当附けたか、案内も待たず、元の二階へも戻らないで、と
 ある一室ひとまへのつそりと入って、襖ふすま際まぎわへ、どさりとまた胡坐あぐらに
 なる。

女中あわただが慌しく駈込んで、

「まあ、どこへいらつしやるんですか。」

と、たしなめるように云うと、

「ここにいらつしやら。ははは、心配するな。」

「困りますよ。隣のお座敷には、お客様が有るじゃありませんか
 。」

「構わねえ、一向構わねえ。」

「こちらがお構いなさいませんでも、あちら様で。」

「可いいじゃねえか、お互たげえだ。こんな処へ来て何も、向う様だつて

遠慮はねえ。大家様の隠居殿の葬ともれい礼れいに立つとつてよ、町内が質

屋で打附ぶつかつたようなものだ。一ツ穴の狐だい。己おらあまた、猫のさ

かるような高い処は厭いやだからよ。勘当された息子じやねえが、二

階で寝ると魘うなされらあ。身分相当割床と遣やるんだ。棟割むなわりに住ん

でるから、壁隣かきりの賑にぎやかなのが頼たのもしいや。」

「不可いけませんよ、そんなことをお言いなすつちや、選えり好このんでこ

のお座敷へいらつしやらないだつて、幾らでも空あいてるじやあり

ませんか。」

「空あいてる！　こう、たった今座敷はねえ、おあいにくだと云つ

たじやねえか。氣障きざは言わねえ、氣障な事は云わねえから、黙もくつて早く爛たけて来ねえよ。」

いいがかりに止むを得ず、厭な顔して、

「じや、御酒を上るだけになすつて下さいよ、お肴さかなは？」

「肴おらは己が盤台ばんたいにあら。竹の皮に包んでな、斑ぶち 鮭しやけの鎌とこン処ところが

あるから、そいつを焼いて持つて来ねえ。蔦すきちゃんがが好すきだったん

だが、この節じや何にも食わねえや、折角せきやく残のこして帰かえつても今日も

食うめえ。」

と独ひとりごと言ことになつて、ぐつたりして、

「媽かかあ々に遣かるんじや張はりええ合あが無なえ。焼やいて来ねえ、焼やいて来ねえ

。」

女中は、氣違かあやぶと危けんんで、怪訝けんな顔をしたが、試みに、

「そして綱次さんを掛けるんですか。」

「うんや、今度はこつちがおあいにくだ。ちつとも馴染なじみでも情婦いろでもねえ。口説きように困つちや出来ねえ事もあるめえと思うのよ。もつとも惚れてるにや惚れてるんだ。待ちねえ、隣の室へやで口説いてら、しかも二人がかりだ。」

「ちよつと、」

と留めて姉さんは興さめ顔。

「こつちは一人だ、今に来たら、お前めえも手伝つて口説いてくんねえ。何だ、何だ、（と聞く耳立てて）純潔な愛だ。けつのあいたあ何だい。」

と、ふすま襖にどしんと顔を当てて、

「蟻の戸とわたり渡でいやあがらあ、べらぼうめ。」

「やかましい！」

隣の室へやから堪りかねたか叱咤しったした。

「地声だ！」

「あれ、」

と女中が留めようとする手も届かず、ばたりめ組が襖を開けると、いつの間に用意をしたか、取って捨てた手拭の中から腹掛を出た出刃庖丁。

「この毛唐人めら、うぬ汝、どうするか見やあがれ。」

あつと云つて、まつさき真前に縁へ遁にげた洋服は——河野英吉。続い

て駈出そうとする照陽女学校の教頭、宮畑閑耕の胸づくし、
 釦ぼたんひつが引ちぎれて辻すべつた手で、背後うしろから抱込んだ。

「そ、そこに泣いていらつしやるなア大先生の嬢様でがしよう。
 飯田町の路地で拜んで、一度だが忘れねえ。此奴等こいつらがこの地獄宿
 へ引張込んだのを見懸けたから、ちびりちびり遣りながら、痴こけの
 色ばなしを冷かしといて、ゆつくり撲なぐろうと思つたが、勿体なく
 ツて我慢ならねえ。酒井さんのお嬢さん、私わっしがこうやってゐる処
 を、ここへ来て、こん唐人打ぶつくし挫いておやんなせえ、お打ちぶなせ
 え、お打ちなせえ。

どうしてまたこんな処へ。……何、八丁堀へおいでなすつて。

ええ、お帰んなさる電車で逢つたら、一人で遠歩きが怪しいから、

教師の役目で検^{しら}べるツて、……沙汰の限りだ。

むむ、此奴等、活かして置くんじゃねえけれど、娑婆の違つた
 獣^{けだもの}だ、盆に来て礼を云え。」

と突飛ばすと、閑耕の匍^{のめ}つた身体^{からだ}が、縁側で、はあはあ夢中になつて体操のような手つきでいた英吉に倒れかかつて、脚が擲^{から}んで漾^{ただよ}う処へ、チャブ台の鉢を取つて、ばらり天窓^{あたま}から豆を浴びせた。惣助呵^{から}々と笑つて、大音に、

「鬼は外、鬼は外——」

道子

二十九

夫の所好このみで白粉おしろいは濃いいが、色は淡あい。淡あしとて、容きり色ようの劣せうる意味ではない。秋の花は春のと違ちがつて、艶えんを競あい、美を誇こる心こころが無いから、日向ひなたより蔭かげに、昼ひるより夜よる、日ひよりも月つきに風情ふうせいがあつて、あわれが深く、趣おもむが浅あいのである。

河野病院長医学士の内室、河野家の総領娘、道子の倂おもかげはそれであつた。

どの姉きょうだい妹いも活々きんぎんして、派手はでに花はなやかで、日の光ひかりに輝きらいている中に、独ひとりり慎しんましやかで、しとやかで、露つゆを待ち、月つきにあこが

るる、芙蓉ふようは丈のびても物寂しく、さした紅も、偏ひとえに身みだし躡なみらしく、装きぬった衣も、鈴虫の宿らしい。

いつも引籠勝ひっこもりがちで、色も香も夫ばかりが慰むのであつたが、

今日は寺町の若竹座で、某孤兒院なにがしに寄附の演劇があつて、それに

附属して、市の貴婦人連が、張出しの天幕テントを臨時の運動場にしつ

らえて、慈善市バザアを開く。謂いうまでもなく草深の妹は先陣承りの飛

將軍。そこでこの会のほとんど参謀長とも謂いつべき本宅の大切な

母親が、あいにく病気で、さしたる事ではないが、推おしてそ

う場所へ出て、気配り心扱いをするのは、甚だ予後のために宜よろし

からず、と医家だけに深く注意した処から、自分で進んだ次第で

はなく、道子が出席することになった。——六月下旬の事なりけ

り。

朝涼あさすずの内に支度が出来て、そよそよと風が渡る、袖がひたひたかいななびと腕に靡なびいて、引緊ひきしまつた白の衣紋えもんつき着。車を彩る青葉の緑、鼈べつこうなかせし甲つこうの中なかざし指なかせしに影が透く艶やかな円鬘まるまげで、誰にも似ない瓜核うりざね顔がお、気高く颯さつと乗出した処は、きりりとして、しかも優しく、媚なまめかおつとりず溫柔して、河野一族第一の品。

嗜たしなみも気風もこれであるから、院長の夫人よりも、大店向おおだなむきの御ご新姐しんぞらしい。はたそれ途中一土手田畝たんぼみち道へかかつて、青田越あおたごしに富士の山に対した景色は、慈善市パザアへ出掛ける貴女レディとよりは、浅間あさまの社へ御代参の御守殿という風があつた。

車は病院所在地の横田の方から、この田畝を越して、城の裏通

りを走つたが、突かけ若竹座へは行くのでなく、やがて西草深へ
 挽込んで、楫棒は島山の門の、例の石橋の際に着く。

姉夫人は、余り馴れない会場へ一人で行くのが頼りないので、

菅子を誘いに来たのであつたが、静かな内へ通つて見ると、妹は
 影も見えず、小児達も、乳母も書生も居ないで、長火鉢の前に主
 人の理学士がただ一人、下宿屋に居て寝坊をした時のように詰ら
 なそうな顔をして、膳に向つて新聞を読んでいた。火鉢に味噌汁
 の鍋が掛つて、まだそれが煮立たぬから、こうして待っているの
 である。

気軽なら一番威かしても見よう処、姉夫人は少し腰を屈めて、
 縁から差覗いた、眉の柔な笑顔を、綺麗に、小さく畳んだ手巾

で半ば隠しながら、

「お一人。」

「やあ、誰かと思った。」

と髻ひげのべつたりした口許くちもとに笑わらいは見せたが、御承知の為ひととなり人
で、どうとも謂いわぬ。

姉夫人は、やつぱり半分なかば隠れたまま、

「滝ちゃんや、透とおるさんは。」

「母様かあさんが出掛けるんで、跡を追うですから、乳母ばあやが連れて、日曜
だから山田（玄関の書生の名）もついて遊びです。平時いつもだと御宅
へ上るんだけれど、今日の慈善会には、御都合で貴女も出掛ける
と云うから、珍らしくはないが、また浅間へ行つて、豆ふか麩ふを食

わしとるですかな。」

「ではもう管子さんは参りましたね。」

「先刻さつき出たです。」

なぜ待つててくれないのだろう、と云う顔かおつき色もしないで、

「ああ、もつと早く来れば可ようござんした。一所に行つて欲しかつたし、それに四五日お来みえなさらないから、滝ちゃんや透さんの顔も見たくつて、」

と優しく云つて本意ほんいなそう。一門うちの中に、この人ばかり、一いち人も小兒こにんを持たぬ。

姉夫人の、その本意無げな様子を見て、理学士は、ああ、気の毒だと思うと、この人物だけにいつそ口重になって、言訳もしなければ慰めもせず、希代にニヤリとして黙ってしまふ。

と直ぐ出掛けようか、どうしようかと、氣拔のした姿うら寂しく、姉夫人も言なく、手を掛けていた柱を背に向直つて、黒堀越に、雲切れがしたように合歡の散つた、日曜の朝の青田を見遣つた時、ぶつぶつ騒しい鍋の音。

と見ると、むらむらと湯氣が立って、理学士が蓋を取つた、がよつぽど腹が空いたと見えて、

「失礼します。」と碗を手にする。

「お待ちなさいまし、煮詰りはしませんか。」

と肉色の紹ろの長襦袢ながじゆばんで、紹縮ちりめん緬つますの裊摺つまする音ない、するする

と長火鉢の前へ行つて、科しなよく覗のぞいて見て、

「まあ、辛うござんすよ、これじゃ、」

と銅壺どうこの湯を注さして、杓文字しゃもじで一つ軽くおさ圧えて、

「お装つけ申しませう、」と艶麗あでやかに云う。

「恐縮おそそくですな。」

と碗を出して、理学士は、道子が、毛一筋も乱れない円鬚つやの艶こぼも溢こぼさず、白粉おしろいの濃い襟えりを据たえて、端然たんぜんとした白襟しろえり、薄お納戸うすおなごのその紗綾形さやがた小紋もんつきの紋もん着きで、味噌汁みそ汁を装よそう白しろ々しろとした手を、感かんに堪たえて見ていたが、

「玉手を労しますな、」

と一代の世辞を云つて、嬉しそうに笑つて、

「御馳走（とチュウと吸つて）これは旨い^{うま}。」

「人様のもので義理をして。ほほほ、お土産も持つて参りません
。」

その挨拶もせず、理学士は箸^{はし}もつけないで、ごツくごツく。

「非常においしいです。僕は味噌汁と云うものは、塩が辛くなき
や湯を飲むような味の無いものだとはかり思つたです。今、貴女、
干杓^{ひしゃく}に二杯入れたですね。あれは汁を旨く喰わせる禁^{まじない}厭^{いや}です
かね。」

「はい、お禁厭でございます。」

と云つた目のふちに、蕾つぼみのような微笑ほほえみを含んでいたから。

「は、は、は、串じょうだん戯ででしょう。」

「菅子さんに聞いて御覧なさいまし。」

「そう云えば貴女、もうお出掛けなさらなければなりませんまいで
。」

「は、私はちつとも急ぎませんけれど、今日は名み代ようだいも兼ねて
おりますから、疾はやく参つてお手伝いをいたしませんと、また菅子
さんに叱こ言ごを言いわれると不可いまけせん——もうそれでは、若竹座へ
参つております時分でしょうね。」

「うんえ、」

頬頬ばつた飯飯に籠籠つて、変変な声。

「道寄をしたですよ。貴女これからおいでなさるなら、早瀬の許へお出でなさい、あすここに居ましようで。」

「しますと、あの方も御一所なんですか。」

「一所じゃないです。早瀬がああいう依怙地もんです。半分馬鹿にしている、孤児院の義捐なんざ賛成せんです。今日は会へも出んと云うそうで。それを是非説破して引張出すんだと云いましたから、今頃は盛に長紅舌を弄しておるでしょう、は、はは、」

と調子高に笑って、厭な顔をして、

「行つて見て下さらんか。貴女、」

「はい、」

となぜか俯向いたが、姉夫人はそのまましとやかに別れの会釈。

「また逢違いになりませんように、それでは御飯を召食りかけた処を、失礼ですが、」

「いや、もう済んだです。」

その日は珍らしく理学士が玄関まで送つて出た。

絹足袋の、静な畳ざわりには、客の来たのを心着かなかつた鞠子の婢も、旦那様の踏みしだいて出る蹠音に、ひよつこり台所から顔を見せる。

「今日は、」

と少し打傾いて、姉夫人が、物優しく声をかける。

「ひやあ、」と打魂消て棒立ちになつたは、出入りをする、貴

婦人の、自分にこんな様子をしてくれるのは、ついぞ有つた験が

無いので。

車夫が門外から飛込んで来て駒下駄を直す。

「A B横町でしたかね。あすこへ廻りますから、」

「へい、へい、ペロペロの先生の。」と心得たるものである。

三十一

早瀬は、妹が連れて父の住居すまいへも来れば病院へも二三度来て知
 っているが、新聞にまで書いた、塾の（小使）と云うわかいもの壮佼はどん
 なであろう。男世帯だと云うし、他に人は居ないそうであるから、
 取次にはきつとその（小使）が出るに違いない、とこもりがち籠勝がちな道

子は面白いものを見もし聞ききもしするよな、物珍らしい、楽しみな、時めくよな心持こころもして、早や大巖山が幌ほろに近い、西草深のはずれの町、前途さきは直ぐに阿部の安東村になる——近ちかごろ来評判のA B横町へ入ると、前庭に古びた黒塀めぐを廻らした、平屋の行詰つた、それでも一軒立ちの門もんがまえ構、低く傾いたのに、独語教授、と看板だけ新しい。

車を待たせて、立附けの悪い門をあければ、女の足でも五歩いつあしは無ない、直じき正面の格子戸から物静かに音ずれたが、あの調子なれば、話声は早や聞えそうなもの、と思う妹の声も響かず、可訝おかしな顔をして出て来ようと思つたその（小使）でもなしに、車夫のいわゆるペロペロの先生、早瀬主税、左の袖口の綻ほころびた広袖どてらのよ

うなかすり緋ひとえの単衣でひよいと出て、顔を見ると、これは、とばかり笑み迎えて、さあ、こちらへ、と云うのが、座敷へ引返す途中になるまで、きばや気疾に引込んでしまったので、左右のとこういとま暇も無く、姉夫人は鶴が山路にふみまよ踏迷ったような形で、机だの、卓タイプル子だの、算を乱した中を拾つて通つた。

菅子さんは、と先ず問うと、まだ見えぬ。が、いずれお立寄りに相違ない。今にも威勢の可い駒下駄の音が聞えましよう。格子がからりと鳴ると、立たちどころ処にこの部屋へお姿があらわ露れますからお休みなさりながらお待ちなさい、と机のわき傍に坐り込んで、煙草を喫もうとして、打うち棄ちつて、フイと立って蒲団を持出すやら、開あ放けしましはなしよう、と障子を押お開ひらいたかと思うと、こっちの庭が

もうちつとあると宜よろしいのですが、と云うやら。散らかつておりまして、と床の間の新聞を投ほうり出すやら。火鉢を押出して突附けるかとするれば、何だ、熱いのに、と急いでまた摺ずらすやら。なぜか見苦しいほど慌あわただしげで、蜘蛛くもの囿すをかけるように煩うるさく夫人の居まわりを立ちつ居つ。間には口を続けて、よくいらつしやいました、ようこそおいで、思いがけない、不思議な御方が、不思議だ、不思議だ、と絶たえず饒舌しゃべつたのである。

「まあ、まあ、どうぞ、どうぞ、」

とその中うちに落着いた夫人もつい、口早になつて、顔を振上げながら、ちと胸そを反らして、片手で煙を払うような振ふりをした。

早瀬はその時、机の前の我が座を離れて、夫人の背後うしろに突立つたつ

ていたので、うえした上下に顔を見合わせた。余り騒がれたためか、内
 気な夫人の顔は、かんばせ まぶた瞼に色を染めたのである。

と、早瀬は人間が変ったほど、落着いて座に返って、おもむろまきた徐に巻
ばこ苘を取って、まだ吸いつけないで、ぴたりと片手を膝に支ついた、
 肩が聳そびえた。

「夫人、おくさん貴女はこれからじぜんし慈善市へいらしつて、びんぼうにん貧者のために
 お働きなさるんですね。」

と沈んで云う。

顔を見詰められたので、まつげ睫毛を伏せて、

「はい、ですが私はただお手伝いでございます。」

「お願いがございました。」

と鬻のめるがごとく、主税がはたと両手を支いた。

余り意外な事の体に、答うる術すべなく、黙なつて流眊ながしめに見ていたが、果こしなく頭こうべも擡もたげず、突いた手に畳つかを掴きづんだ憂慮きづかわしさに、棄ても置かれぬ氣になつて、

「貴下、まあ、更あらたまつて何でございますの。」

とは云つたが、思入つた人の体に、氣味悪くもなつて、遁にげ腰こしの膝を浮かせる。

「失礼な事を云うようですが、今日の催もよおしはじめ、貴女方のなさいます慈善は、博くまんべなく情なさけをお懸けになりますので、早ひでりに雨を降らせると同様の手段。萎なえしぼんだ草樹も、その恵めぐみに依つて、蘇いきかえ生るのでありますが、しかしそれは、廣大無辺な自然の力

でなくつては出来ない事で、人間業^{わがざ}じゃ、なかなか焼石^{しよろ}へ如露^{じよろ}で振懸けるぐらいに過ぎますまい。」

三十二

「広く行^{ゆき}渉^{わた}るばかりを望んで、途中で群^{むら}消^ぎえになるような情を掛^かけずに、その恵の露^たを湛^たえて、ただ一つのものの根^ねに灌^そいで、名もない草の一葉^{いち}だけでも、蒼^あ々^おと活^かかして頂^たきたい。

大勢^{たい}寄^よつてなさる仕事を、貴^き女^{にょ}方^{ほう}、各^{めい}々^{めい}御^ご一^{いち}人^{にん}宛^{づつ}で、専^{せん}門^{もん}に、完全^{かん}に、一^{にん}人^{にん}を救^{すく}つて下さるわけには参^まりませんか。力^{ちから}が余^あれば二人^{ふたり}です、三人^{さんにん}です、五人^{ごにん}ですな。余^よ所^その子^こ供^ごの世^よ話^わを焼^やく隙^{ひま}に、

自分の児こに風邪を感ひかせないように、外国の奴隷に同情をする心で、御自分お使いになる女中いたわを勤たわめてやって欲しいんですが、これじゃ大おおづか掴みのお話です、何もそれをかれこれ申上げるわけはないのです。

ところが、差当り、今日の前に、貴女のひとしづく一雫の涙を頂かないと、死んでも死に切れない、あわれな者があるんです。

この事に就きましては、私わたくしは夜の目も合わないほど心を苦めまして。」

とようよう少し落着いて、

「前ぜんから、貴女の御憐愍ごれんみんを願おうと思つていたんですけれど、

島山さんのと違って、貴女には軽かるがる々しくお目に懸かかる事も出来ま

せんし、そうかと云つて、打棄うっちゃつて置けば、取返しまことのなりませ
 ん一大事、どうしようかと存じておりました処へ、実に何とも思
 いがけない、不思議な御光来おいでで、殊にそれが慈善会にいらつしや
 る途中などは、神仏の引合せと申しても宜しいのです。

どうぞ、その、遍あまねく御施しになろうという如露の水を一雫、一
 滴で可ようございます、私わたくしの方へお配すそわけ分なすつてくださるわけに
 は参りませんか。

御存じの風来者でありますけれども、早瀬きが一生の恩に被きます
 。

と拳こぶしを握り緊しめて云うのを、半ば驚き、半ば呆れ、且つ恐れて
 聞いていたようだった。重かつた夫人の眉が、ここに至ると微ほほえ

笑みに開けて、深切に、しかしたしな羨めるような優しい調子で、

「お金子かねが御入用なんでございますか。」

と胸へ、しなやかに手を当てたは、次第に依つては、直すぐにも帯の間へすべ亘つて、懐ふところ紙の間から華奢きゃしゃな（囊物ふくろもの）の動作こなしである。道子はしばしば妹の口から風説うわさされて、その暮くらし向むきを知つていた。

ト早瀬の声に力が入つて、

「金子かねにも何にも、私わたくしが、自分の事ではありません。」

「まあ、失礼な事を云つて、」

と襟をおもて合わせて面を染め、

「どうしましょう私は。では貴下の事ではございませんので。」

「ええ、勿論、救って頂きたい者は他ほかにあるんです。」

「どうぞ、あの、それは島山のに御相談下さいまし。私もまた出来ますことなら、蔭で——お手伝いいたしましょうけれど、河野（医学士）が、喧やかましゅうございますから。」

……差俯さしうつむ向いて物寂しゅう、

「私が自分では、どうも計らい兼ねますの。それには不調法でもございますし……何も、妹の方が馴れておりますから。」

「いや、貴女でなくては不可いかんです。ですから途方に暮れます。その者は、それにもう死にかかった病人で、翌日あすも待たないという容体なんです。」

六十近い老人で、孫子はもとより、親類みよりらしい者もない、全まるっ

然きりやもめで、實際形影相弔うというその影も、破蒲団やぶれぶとんの中へ消えて、骨と皮ばかりの、その皮も貴女、褥摺とこずれに摺切れているじゃありませんか。

日の光も見えない目を開いて、それでただ一目、ただ一目、貴女、夫人おくさんの顔が見たいと云います。」

「ええ、」

「御介抱にも及びません、手を取って頂くにも及びません、言ことばをお交わし下さるにも及びません、申すまでもない、金銭の御心配は決して無いので。真ま暗くらな地獄の底から一目貴女を拝むのを、仏とも、天人とも、山の端はの月の光とも思つて、一生の思出に、莞爾にっこりしたいと云うのですから、お聞届け下さると、実に貴女は

人間以上の大善根をなさいます。夫人、おくさん大慈大悲の御心持で、この願いをお叶え下さるわけには参りませんか、十分間とは申しません。」

と、じりじりと寄ると、姉夫人、思わず膝を進めつつ、

「どこの、どんな人でございますの。」

「直じきこの安東あんとう村に居るんです。貞造と申して、以前御宅の馬べ丁つとうをしたもので、……夫人、おくさん貴女の、実の……御父上おとうさん……」

三十三

「その……手紙を御覧なさいましたら、もうお疑はありますまい。」

それは貴女の御父上、英臣さんが、御出征中、貴女の母おつかさ様が御宅の馬丁貞造と……」

早瀬はちよつと言を切つて……夫人がその時、わななきつつ持

つ手を落して、膝の上に翻然ひらりと一葉、半紙に書いた女文字。その

たまずさ

玉章の中には、恐ろしい毒薬が塗籠ぬりこんででもあつたように、真

つさお

蒼になつて、白襟にあわれ口紅の色も薄れて、頤おとが深く差入れた、

おもかけきつ

梯を屹と視て、

ことば

「……などと云う言だけでも、貴女方のお耳へ入れられる筈はずのもの

じゃありません、けれども、差迫つた場合ですから、繕つくろつて申上

げる暇いとまもありません。

で、そのために貴女がおできなすつたんで、まだお腹はらにいらつ

しやる間には、貴女の母おつかさん様が水にもしようか、という考えから、土地に居ては、何かにつけて人目があると、以前、母様をお育て申した乳母が美濃安八あはちの者で、——唯今島山さんの玄関に居る書生は孫だそうです。そこへ始末をしに行つてお在いでなすつた間に、貞造へお遣わしなすつたお手紙なんです。

馬丁はしていたが、貞造はしかるべき禄を食はんだ旧藩の御馬廻の悴せがれで、若気の至りじやあるし、附合うものが附合うものですから、御主人の奥おくさん様と出来たのを、嬉しい紛れ、鼻で指をさして、つい酒の上じや惚のろけ気を云つた事もあるそうですが、根が悪人ではないのですから、兎こをなくすという恐おそろしい相談に震い上つて、その位なら、御身分をお棄てなすつて、一所に遁にげておくんなさい。

お肯入ききいれ無く、思切わぎつた業をなさりや、表向わぎきに坐込まむ、と變つた言種いぐさをしたために、奥さんも思案に余つて、氣を揉もんでいなすつた処へ、思いの外用事が早く片附かたいて、英臣さんが凱旋がいせんでしよう。腹帯にはちつと間が在あつたもんだから、それなりに日が経たつて、貴女は九月ここのつきご児ごでお在いでなさる。

が、世間じや、ああ、よくお育ちなすつた、河野さんは、お家が医者だから。……そうでないと、大抵九月児は育たんものだと申します。また旧弊れんじゆうな連中れんじゆうは、戦争で人が多く死んだから、生れるのが早い、と云つたそうです。

名譽に、とお思いなすつたか、それとも最初はじめての御出産で、お喜びの余りか、英臣さんは現に貴女の御父おとうさん上だ。

貞造は、無事に健かに産れた児の顔を一目見ると、安心をして、貴女の七夜の御祝いに酔つたのがお残懷なごりで、お暇を頂いて、お邸を出たんです。

朝晩お顔を見ていちや、またどんな不了ふりようけん簡けんが起るまいものでもない、という遠慮と、それに肺病からだの出る身体、若い内から儂りょうウ麻質マチスがあつたそうマチスで。旁かたがた々々お邸を出るとなると、力ちから業わざは

出来ず、そうかと云つて、その時分はまだ達者おふくろだつた、阿母おふくろを一人養わなければならぬてぎれもんですから、奥さんが手切てぎれなり心こころ着づけなり下すつた幾干いくらかの金子かねを資本もとでにして、初めは浅間の額堂裏へ、大弓場を出したそうです。

幸い商売が的に当つて、どうにか食つて行かれる見込みのついで

た処で、女房を持ったんですがね。いや、罰ばちは覲てきめん面だ。境内へ多しばらく時かかっていた、見世物師と密通くつついて、有金を攫さらつて遁にげたんです。しかも貴女、女房が孕はらんでいたと云うじゃありませんか。

「まあ、」

と、夫人は我知らず嘆息した。

「忌々しい、とそこで大弓の株を売つて、今度は安東村の空地を安く借りて、馬場を拵こぎえて、貸馬を行やつたんですな。

貴女、それこそ乳母おんぼ日傘で、お浅間へ参詣にいらした帰り途、円い竹の罎うちに拵つかまつて、御覧なすつた事もありましょう。道々お摘みなすつた鼓たんぼ草ぼなんぞ、馬に投げてやったりなさいましたのを、

貞造が知っています。

阿母おふくろが死んだあとで、段々馬場も寂れて、一いつとき齊ひきに二頭斃死おちした馬を売って、自暴酒やけを飲んだのが、もう飲仕舞ぶツツで。米も買えなくなる、粥かゆも薄くなる。やつと馬小屋へ根太を打附けたので雨露しのを凌いで、今もそこに居るんですが、馬場のあとは紺屋の物干になつたんです。……」

三十四

「私わたくしは不思議な縁で、去年静岡へ参つて……しかもその翌日でした。島山さんのと、浅間を通つた時、茶店へ休んで、その貞造に

逢つたんです。それからこういう秘密な事を打明けられるまで、懇意になつて、唯今の処じや、是非貴女のお耳へ入れなくつてはなりませんほど、老人危篤きとくなのでございます。

私でさえ、これは一番ひとつ貴女に願つて、逢つてやつて頂きたいと

思いましたから、今迄いくたび度か病人に勧めても見ましたけれども、

いやいや、何にも御存じない貴女に、こういう事をお聞かせ申すのは、足を取つて地獄へ引落すようなもの。あとじや月も日も、

貴女のお目には暗くなるう。お最惜いとしいい、と貞造が頭かぶりを掉ふります。

もつとも道理だと控えました。もつとも私も及ばずながら医師いしやの世話も

したんです、薬も飲ませました。名高い医学士でお在いでなさるから一ツ河野さんの病院へ入院してはどうか、余所よそながらお道さんの

お顔を見られようから、と云いましたが、もつての外だ、と肯ききません。

清い者です。

人の悪い奴で御覧なさい、対あいて手が貴女の母おつかさん様で、そのお手紙が一通ありや、貞造は一生涯朝から刺身で飲めるんですぜ。

またちつとでも強ねだ情りがましい了見があつたり、一銭たりとも御心配を掛かけるような考かんがえがあるんなら、私は誓つて口は利かんです。

そうじゃない！ ただ一目拝みたいと云う、それさえ我慢をしなければ、それものです……老人自分じゃ、まだ治らないとは思つていなかつたからなので。煎じて飲むのがまだるツこし、薬鍋の世

話をするものも無いから、薬だと云う芭蕉の葉を、青いまんまで
噛かじつたと言います——

その元氣だから、どうかこうか薬が利いて、一度なんざ、私と
一所に安倍川へ行つて餅を食べて茶を喫のんで歸つた事もあつたん
ですが、それがいいめを見せたんで、先頃からまたどツと褥とこに着
いて、今は断念あきらめた処から、貴女を見たい、一目逢ういたいと、現
に言うようになったんです。

容態が容態ですから、どうぞ息のある内にと心配をしていたん
ですが、人に相談の出来る事じゃなし、御宅へ参つてお話をしよ
うにも、こりや貴女と対さしむか向いでなくつては出来すまい。

失礼だけでも、御主人の医学士は、非常に貴女を愛してい

つしやるために、恐ろしく嫉妬深い、と島山さんののに、聞きま
した。

ほとんど当惑していた処へ、今日のおいでは実に不思議と云つ
ても可い。一言（父よ。）とおっしゃって、とそれまでも望むん
じやないのです。弥陀みだの白びやく光こうとも思つて、貴女を一目と、云
うのですから、逢つてさえ下されば、それこそ、あの、屋うち中じゆう
真ま黒くろに下つた煤すすも、藤の花に咲かわつて、その紫の雲の中に、
貴女のお顔を見る嬉しさはどんなでしよう。

そうなれば、不幸極まる、あわれな、情ない老人が、かえつて
百万人の中に一人も得られない幸福なものとなつて、明かに端麗
な天人を見ることを得て、極楽往生を遂げるんです、——おくさん夫人。
」

と云つた主税の声が、夫人の肩から総身へ浸渡るようであつた。
「貞造は、貴女の実うみの父親で、またある意味から申すと、貴女の生命の恩人ですよ。」

「は……い。」

「会は混雜しましょう。若竹座は大変な人でしよう。それに夜も更ふけると申しますから、人目を紛らすのに仔細しさいありません。得難い機会です。私わたくしがお供をして、ちよつと見舞に参るわけにはまいりませんか。」

と片手に燐寸マツチを持つたと思うと、片手が衝つと伸びて猶予ためらわず夫人の膝から、古手紙を、ト引取つて、

「一度お話した上は、たとい貴女が御不承知でも、もうこんなも

のは、」

と※と火を摺ると、ひらひらと燃え上つて、蒼くなつて消えた。が、靡なびきかかる煙の中に、夫人の顔がちらちらと動いて、何となく、誘いざわれて膝も揺ら揺ら。

居い坐ざを直して、更あらたまつて、

「お連れ下さいまし、どうぞ。」

がらがらと格子の開く音。それ、言わぬことか。早や座に見えた管子の姿。眩まぼゆいばかりの装いで、坐りもやらず、

「まあ、姉さん！」

私語さぐめごと

三十五

「もう遅いわ、姉さん、早くいらっしやらないでは、何をして
いるの、」

と管子は立つたままで急せきこ込んで云う。戸外おもての暑さか、駈か込んだ
せいか、赫かつと逆のぼ上のせた顔の色。

胸打騒さわげる姉夫人、道子がかえって物静かに、

「先刻さつきから待まちっていたんですよ。」

「待まちっていたって、私は方々に用があるんだもの、さっさと行いつ

て下さらないじゃ、」

「何ですnee、邪険な、和女あなたを待つていたんですよ。来がけに草深へも寄つたのよ。一所に連れて行つて欲しいと思つて。——さあ、それでは行きましようね。」

「私は用があるわ。」

「寄道をするんですか。」

「じゃ……ないけども、これから、この早瀬さんと一議論して、何でも慈善会へ引張り出すんですから手間が取れてよ。」

とまだ坐りもせぬ。

主税は腕組をしながら、

「はははは、まあ、貴女も、お聞きなさい、お菅さんの議論と云

うのを。いくら僕を説いたって、何にもなりやしないんですから。
」

「承わって参りましょうか。」

と姉夫人が立ちかけた膝をまた据えて、何となく残惜そうな風が見えると、

「早くいらつしやらなくつちや……私は可いけれども、姉さん、貴女は兄さん（医学士）がやかましいんだもの、面倒よ。」

と見下す顔を、斜めに振仰いだ、蒼白い姉の顔に、血が上つて、屹きつとなったが、寂しく笑つて、

「ああ、そうね、私は前に参りましょう。会場の様子は分らないけれど、別にまごつくような事はありませんまいから。」

とおとなしく云つて、端然きちんと会釈して、

「お邪魔をいたしましたしてございます。」とちよいと早瀬の目を見
たが——双方で瞬きした。

「まあ、御一所が宜しいじやありませんか。お菅さんもそうなさ
い。」

「いいえ、そうしてはおられません、もつと、」

と声に力が籠つて、

「種々いろいろお話を伺いとう存じますけれども……」

「私も、直じきだわ。」

「待っていますよ。」

と優しい物越、悄悄しおしおと出る後姿。主税は玄関へ見送つて、身を

蔽おおいにして、密そつとその袂たもとの端はしをおさえた。

「さようなら！」

勢いきおいよく引返すと、早や門の外をれきろく輾輳れきろくとして車が行く。

「暑い、暑い、どうも大変に暑いだね。」

管子はもうそこに、袖を軽く坐っていたが、露の汗の悩ましげに、朱鷺とぎ色縮緬の上へ《うわじめ》の端はしをゆる寛めた、辺あたりは昼顔の盛りさかりのようで、明あかるい部屋へやに白々あからさま地ぢな、衣きぬばかりが冷すずしい蔭かげ。

「久振ひさびさだわね。」

「久振ひさびさじゃないじゃありませんか。今の言種いいぐさは何なにです、ありや。

……姉さんにお氣いきの毒どくで、傍そばで聞きいていられやしない。」

「だって事実じじつだもの。病院びやういんに入はいり切きりで居いながら、いつの何なん時どき

には、姉さんが誰と話をしたツて事、不^{のこら}残^ず旦那様御存じなの、
もう思^{おぼ}召^{しめ}つたらないんですからね。

それでも大事にして置かないと、院長は家^{うち}中^{じゆう}の稼^うぎ人で、
すっかり経済を引受けてるんだわ。お庇^{かげ}様^{さま}で一番末の妹の九ツ
になるのさえ、早や、ちゃんと嫁入支度が出来てるのよ。

道楽一ツするんじゃない、ただ、姉さん^{たの}を楽^しみにして働いてい
るんですからね。ちつとでも怒らしちや大変なのだから、貴下も
気をつけて下さらなくっちゃ困るわ。」

「何を云ってるんです、面白くもない。」

「今の様子ツたら何です、厭^{いや}に御^ご懇^{ねん}ね^{ごろ}。そして肩を持つこと
ね。油断もすきもなりはしない。」

「可い加減になさい。串じょうだん戯も、」

「だつて姉さんが、どんな事があればツたつて、男と対向さしむかいで五分間と居る人じゃないのよ。貴下は口前が巧くつて、調子が可いから、だから坐り込んでゐるんじやありませんか。ほんとうに厭よ。貴下浮気なんぞしちや、もう、沢山だわ。」

「まるでこりや、人情本の口絵のようだ。何です、対向つた、この体裁は。」

三十六

しめやかな声で、夫人が――

「貴下……どうするのよ。」

「……………」

「私がこれほど願つても、まだ妙子さんを兄さん（英吉）には許してくれないの。今までにもどんなに頼んだか知れないのに、それじゃ貴下、あんまりじゃありませんか。」

去年から口説通しくどつきなんだわ。貴下がはじめて、静岡こちらへ来て、私と知ち己かづきになつたというのを聞いて、（精一杯御待遇おもてなしをなさい

。）ツて東京から母さんが手紙でそう云つて寄越したのも、酒井さんとの縁談を、貴下に調べて頂きたければこそだもの。

母さんだつて、どのくらい心配しているか知れないんだわ。今まで、ついぞ有つた験ためしは無い。こちらから結婚を申込んで匆はねら

れるなんて、そんな事——河野家の不名誉よ、恥辱ツたらありませんものね。

兄さんも、どんなにか妙子さんを好いていると見えて、一体が遊蕩過ぎる処へ、今度の事じゃ失望して、自棄気味らしいのよ、遣り方が。自分で自分を酒で殺しちや、厭じやありませんか、まあ、」

と一際低声で、

「ちよいと、いかな事でも小待合へなんぞ倒込むですって。監督の叔父さんから内々注意があるもんだから、もう疾くに兄さんへは家でお金子を送らない事にして、独立で遣れツて名義だけども、その実、勘当同様なの。」

この頃じゃ北町（桐楊塾）へも寄り着かないんですって。

だってどこに転がっていたって、皆お金子みんなが要るんでしよう。

どこから出て？ いずれ借りるんだわ。また河野の家の事を知っ

ていて、高利で貸すものがあるんだから困っちまう。千と千五百

と纏まとったお金子で、母様が整理を着けたのも二度よ。洋行させる

費用に、と云って積立ててあつた兄さんの分は、とうの昔無くな

って、三度目の時には皆私たち妹の分にまで、手がついたんじゃ

ありませんか。

妙子さんの話がはじまってからは、ちようど私も北町へ行つて
いて知っているけれど、それは、気の毒なほど神妙になったのに。

……

もともと気の小さい、懐育ちのお坊ちゃんなんだから、遊蕩あそびも駄よ々で可よかつたんだけれど、それだけにまた自棄になつちや乱暴さが堪たまらないんだもの。

病院の義にいさん兄は養子だし、大勢の兄弟中なかに、やっと学位の取れた、かけ替えのない人を、そんなにしてしまつちや、それは家うちでもほんとうに困るのよ。

早瀬さん、貴下の心一つで、話が纏まるんじやありませんか。私が頼むんだから助けると思つて肯きいて頂戴、ねえ……それじや、あんまり貴下薄情よ。」

「ですから、ですから。」
とおさ圧おさえるように口を入れて、

「決して厭だとは言いません。厭だとは言いやしない。これからでも飛んで行って、先生に話をして結納を持って帰りましょう。」

事もなげに打笑つて、

「それじゃあべこべ反対だった。結納はこちらから持つて行くのでしたつけ。」

「そのかわりました、（あの安東村の紺屋の隣家となりの乞食小屋で結婚式を挙げる）ツて言うんでしょう。貴下はなぜそう依怙いこじ地に、さもしいお米の価ねを気にするようなことを言うんだらう。」

ほんとうに串じょうだん戯ごではないわ！ 一家の浮沈と云つたような場合ですからね。私もどんなに苦労だか知れないんだもの。御覽なさい、瘦やせたでしょう。この頃じゃ、こちらに、どんな事でも

あるように、島山（理学士）を見ると、もうね、身体が萎むような事があるわ。土間へ駈下りて靴の紐を解いたり結んだりしてや
つてるじゃありませんか。

ひざまず

跪いて、夫の足に接吻キッスをする位なものよ。誰がさせるの、早瀬

さん。——貴下の意地ひとつじゃありませんか。

ちつとは察して、肯いてくれたって、満更罰は当るまいと、私
思うんですがね。」

机に凭もたれて、長くなつて笑いながら聞いていた主税が、屹きつと居
直つて、

「じゃ貴女は、御自分に面じて、お妙さんを嫁ほしに欲しいと言うんで
すか。」

「まあ……そうよ。」

「そう、それでは色仕掛になすつたんだね。」

三十七

「怒つたの、貴下、怒つちや厭よ、私。貴下はほんとうにこの節じゃ、どうして、そんなに気が強くなつたんだろうねえ。」

「貴女が水臭い事を言うからさ。」

「どつちが水臭いんだか分りはしない。私はまさか、夜内よるを出るわけには行ゆかず、お稽古に來たつて、大勢入いれご込みなんだもの。ゆつくりお話をする間も無いじゃありませんか。」

過日いつか何と言いました。あの合歡の花が記念だから、夜中にあすこへ忍んで行く——虫の音や、蛙かわずの声を聞きながら用水越に立っていて、貴女がああの黒堀の中から、こう、扱しご帯か何ぞで、姿を見せて下すつたら、どんなだろう。花がちらちらするか、闇やみか、蛍か、月か、明星か。世の中がどんな時に、そんな夢が見られましよう——なんて串じょうだん戯云うから、洗濯をするに可いの、瓜が冷せて面白いのツて、島山にそう云つて、とうとうあすこの、板堀を切抜いて水門を拵こしらえさせたんだわ。

頭痛がしてならないから、十畳の真中まんなかへ一人で寝て見たいの、なんのツて、都合をするのに、貴下は、素通りさえしないじゃありませんか。」

「演劇しゆげいのようだ。」

と低声こごせで笑うと、

「理想実行よ。」と笑顔で言う。

「どうして渡るんです。」

「まさか橋をかける言種いごさは、貴下、無いもの。」

「だから、渡られますまい。」

「合歡がっくわんの樹の枝は低くつてよ。搦つかまつて、お渡んなさいなね。」

「河童かっぱじゃあるまいし、」

「ほほほほ、」

と今度は夫人の方が笑い出したが。

「なにしろ、貴下は不実よ。」

「何が不実です。」

「どうかして下さいな。」

——あらたま更つて——

「妙子さんを。」

「ですから色仕掛けか、と云うんです。」

「あんな恐い顔をして、（と莞爾にっこりして。）ほんとうはね、私：

…自ら欺むあざむいているんだわ。家のために、自分の名誉を犠牲ぎせいにし

て、貴下から妙子さんを、兄さんの嫁に貰おう、とそう思つてこ

ちらへ往來ゆききをしているの。」

でなくつて、どうして島山の顔や、母様の顔が見ていられます。

第一、乳母ばあやにだつて面おもてを見られるようよ。それにね、なぜか、誰

よりも目の見えない娘が一番恐いわ。母さん、と云つて、あの、見えない目で見られると、悚然ぞつとしてよ。私は元気でいるけれど、何だか、そのために生身を削られるようで瘠やせるのよ。可哀相だ、と思つたら、貴下、妙子さんを下さいな。それが何より私の安心になるんです。……それにね、他ほかの人は、でもないけれど、母様がね、それはね、実に注意深いんですから、何だか、そうねえ、春の歌留多かるた会時分から、有りもしない事でもありそうに疑うたぐつてい
るようなの。もしかしたら、貴下私の身体からだはどうなると思つて？
ですから妙子さんさえ下されば、有形にも無形にも立派な言訳になるんだわ。ひよつとすると、母様の方でも、妙子さんの為にするのだ、と思つているのかも知れなくつてよ。顔さえ見りや、

（私がどうかして早瀬さんに承知させます。）と、母様が口を利かない先にそう言つて置くから。よう、後生だから早瀬さん。」

言い言い、^{すが}縫るように言う。

「詰らん言を。^{こと}先生のお嬢さんを言訳に使つて可いもんですか。」
「そうすると、私もう、母さんの顔が見られなくなるかも知れませんかよ。」

「僕だつて生きて二度と、先生の顔が見られないように……」と
思わず拳を握つたのを、我を引緊められたごとくに、夫人は思い
取つて、しみじみ、

「じゃ、私の、私の身体はどうなつて？」

「訳は無い、島山から離縁されて、」

「そんな事が、出来るもんですか。」

「出来ないもんですか。　当あたりまえ前だ、」

と自若として言うのと、呆れたように、また……莞にっこり爾、
「貴下はどうしてそうだろう。」

三十八

「どうもこうもありはしません、それが当前じゃありませんか。」

義、周の粟を食くらわずとさえ云うんだ。貴女、」

と主税は澄まして言い懸けたが、常ただならぬ夫人の目の色に口を
噤つぶんだ。菅子は息急いきせわしい胸を圧おさえるのか、乳ちの上へ手を置いて、

「何だって、そりやあんまりだわ、早瀬さん、」

と、ツンとする。

「不都合ですとも！ 島山さんが喜ばないのに、こうして節々おいでなさるんです。

それでいて、家庭の平和が保てよう法は無い。実はこうこうだと打明けて、御主人の意見にお任せなさい。私もまた卑怯な覚悟じゃありません。事実明かに、その人の好まない自分の許とこへ令夫おく人がたをお寄せ申すんだから、謹んで島山さんの思わくに服するんだ。だから貴女もそうなさい。懊惱おうのうも煩悶はんもんも有ったもんか。世の中には国家の大法を犯し、大不埒だいふらちを働いて置いて、知らん顔で口を拭いて澄ましていようなどと言う人があるが、間違つてい

ます。」

夫人はこれを戯たわむれのように聞いて、早瀬ことばの言を露まことも真とは思わぬ

様子で、

「戯じょうだん談 おつしやいよ！ 嘘にも、そんな事を云つて、事が起

つたら子供たちはどうするの？」

と皆まで言わせず、事も無げに答えた。

「無論、島山さんの心まかせで、一所に連れて出ると、言われりや連れて出る。置いて行けとなら、置いて……」

「暢のんき気で怒る事も出来はしない。身に染みて下さいな、ね……」

「何が暢気だろう、このくらい暢気でない事はない。小使と私と二人口でさえ、今の月謝の収入じゃ苦しい処へ、貴女方親子を背し

負^よい込むんだ。静岡は六升代でも瘦腕にや堪^{こた}えまさ。」

余^{あまり}の事と、夫人は凝^{じつ}と瞻^{みまも}つて、

「私がこんなに苦勞をするのに、ほんとに貴下は不実だわ。」

「いざと云う時、貴女を棄^すてて逐^{ちくてん}電でもすりや不実でしょう。

胴を据えて、覺悟を極^きめて、あくまで島山さんが疑^うつて、重ねて

四ツにするんなら、先へ真^{まっふた}二ツになろうと云うのに、何が不実

です。私は実は何にも知らんが、夫人^{おくさん}が御勝手に遊^{あそ}びにおいでな

さるんだなんて言^いはしない。」

「そう云^いつてしまつては、一も二も無いけれど。」

「また、一も二も無いんですから、」

「だつて世の中は、そう貴下の云^いうようには参^まりませんもの。」

「ならんのじやない、なる、が、勝手にせんのだ。恋愛は自由です、けれども、こんな世の中じや罪になる事がある。盗賊どろぼうは自由かも知れん、勿論罪になる。人殺、放火つけび、すべて自由かも知れんが、罪になります。すでにその罪を犯した上は、相当の罰を受けるのがまたあたりまえ当あ前まへじやありませんか。愚図ぐずぐず々々塗ぬり秘かくそうとするから、卑怯未練な、吝けちな、了見が起つて、他ひとと不都合しながら亭主の飯を食つてるような、猫の恋になるのがある。しみつたれてるじやありませんか。度胸を据えて、首の座へお直んなさい。私なんざ疾とくに——先生……には面おもては合わされない、お薦……の顔も見ないものと思つている。この上は、どんなことだつて恐れはしません。

それに貴女は、島山さんに不快を感じさせながら、まだやっばり、夫には貞女で、子には慈悲ある母親で、親には孝女で、社会の淑女で、世の亀鑑きかんともなるべき徳を備えた貴婦人顔をしようとするから、痩せもし、苦勞もするんです。

浮気をする、貞女、孝女、慈母、淑女、そんな者があるものか。」

「じゃ……私を、」

と擦寄つて、

「不埒と言わないばツかりね。」

さすがに顔の色をかえて屹きつと睨にらむと、頷うなずいて、

「同時に私だって、」

と笑つて言う。

その肩を突いて、

「まあ、仕ようの無い我儘だよ。」

三十九

「貴下は始めからそうなんだわ。……」

道学者の坂田（アバ大人）さんが、兄さんの媒口を利くのが癪に障るからつて、（攫徒の手つだいをして、参謀本部も諭旨免官になりました。攫徒は、その時の事を恩にして、警察では、知らない間に袂へ入れて置いて逆振を食わしたように云つてく

れたけれど、その実は、知っていて攫徒の手から紙入を受取つてやつたんだ。それで宜しくよろばお稽古にお出でなさい、早瀬主税は攫徒の補助をした東京の食詰者くいづめものです。」とこの塾を開く時、千鳥座かどこかで公衆に演説をする、と云つた人だもの——私が留めたから止したけれど……」

早瀬の胸のあたりに、背うしろむ向きになつて、投げ出した褌つまを、熟じつと見ながら、

「私、どうしたら、そんな乱暴な人を友だちにしたんだか。」

と自から怪むがごとく独言ひとりごとつと、

「不都合な方と知りながら、貴女と附合つてる私と同一おんなじでしよ
う。」

「だって私は、貴下のために悪いようにとした事は一つも無いのに、貴下の方じゃ、私の身の立たないように、立たないようにと言うじゃありませんか。早瀬さんへ行くのが悪いんなら、（どうでもして下さい、御心まかせ。）何のつて、そんな事が、譬えたとにも島山に言われるもんですか。」

島山の方は、それで離縁になるとして、そうしたら、貴下、第一河野の家名はどうなると思うのよ。末代まで、汚点しみがついて、系図けいずが汚れるけがじゃありませんか。」

「すでに云々うんぬんが有るんじゃないやありませんか。それを秘かくそうとするんじゃないやありませんか。卑怯だと云うんです。」

「そんな事を云つて、なぜ、貴下は、」

少し起返つて、なお背向うしろむきに、

「貴下にちつとも悪意を持つていない、こうして名誉も何も一所に捧げているような、」

と口惜くやしように、

「私を苦しめようとなさるんだらうねえ。」

「ちつとも苦しめやしませんよ。」

「それだって、乱暴な事を言つてさ、」

「貴女が困っているものを、何も好き好んで表おもてむき向むきにしようと

言うんじゃない。不実だの、無情だの、私の身体からだはどうなるの、

とお言いなさるから、貴女の身体は、疑の晴れくもりで——制裁を請けるんだ、と言うんです。貴女ばかり、と言つたら不実でし

よう。男が諸共に、と云うのに、ちつとも無情な事がありますまい。どうです。」

と言う顔を斜めに視て、

「ですから、そんな打破ぶちこわしをしないで、妙子さんさえ下さると、円満に納まるばかりか、私も、どんなにか気が易やすまつて、良心の呵責かしゃくを免れることが出来ますツて云うのにな。肯ききますまい！それが無情だ、と云うんだわ。名誉も何も捧たげている婦おんなの願ねがいじゃありませんか、肯きいてくれたつて可よいんだわ。」

「（名誉も何も）とおっしゃるんだ。」

「ああ、そうよ。」と振向ねじむいて清すずしく目を睜みひらく。

「なぜその上、家も河野もと言わんです。名誉を別にした家が

ありますか。家を別にした河野がありますか。貴女はじめ家門の名誉と云う気障きざな考えが有る内は、情合は分りません。そういうのが、夫より、実家さとの両親ふたおやが大事だったり、他の娘ひとの体格検査をしたりするのだ。お妙さんに指もささせるもんですか。

お妙さんの相談をしようと言うんなら、先ず貴女から、名誉も家も打棄うつちやつて、誰なりとも好いた男と一所になるという実証をお挙げなさい。」

と意気込んで激しく云うと、今度は夫人が、気の無い、疲れたような、倦うんじた調子で、

「そしてまた（結婚式は、安東村の、あの、乞食小屋見たような茅屋あばらやで挙げろ）でしょう。貴下はまるツきり私たちと考えが反あ

べこべ

対だわ。何だか河野の家を滅ぼそうというような様子だもの、

家に仇あだする敵かたきだわ。どうして、そんな人を、私厭でないんだか、

自分で自分の気が知れなくツてよ。ああ、そして、もう、私、慈バ善ザア市へ行かなくツては。もう何でも可いわ！ 何でも可いわ。」

夫人と……別れたあとで、主税はカツと障子を開けて、しばらく天を仰いでいたが、

「ああ、今日はお妙さんの日だ。」と、眩つぶやいて仰向けに寝た——妙子の日とは——日曜を意味したのである。

宵闇

四十

おなじ
同、日曜の夜の事^よで。

日が暮れると、早瀬は玄関へ出て、^{かまち}框に腰を掛けて、土間の下駄を引掛けたなり、^{ランプ}洋燈を背後^{うしろ}に、片手を突いて長くなつて一人でいた。よくぞ男に生れたる、と云う陽気でもなく、虫を聞く時節でもなく、家は古いが、壁から生えた^{すすき}芒も無し、絵でないから、一筆描^がきの月のあしらいも見えぬ。

^{いみいみ}ト忌々しいと言え^{あがり}ば忌々しい、^{がまち}上^{ともしび}框に、灯を背^{かどび}中にして、あたかも^{かどび}門火を焚^{すか}いているような——その薄あかりが、格子戸を透

して、軒で一度暗くなつて、中が絶えて、それから、ぼやけた輪
 を取つて、朦朧もうろうと、雨曝あまざれの木目の高い、門の扉とに映つて、蝠こ
うもりの影にもあらず、空を黒雲が行通うか何そのように、時々、
 むらむらと暗くなる……また明あかるくなる。

目も放さず、早瀬がそれを凝じつと視ながめる内に、濁つたようなその
 灯影が、二三度ゆらゆらと動いて、やがて礫つぶてした波が、水の面おもに
 月輪を纏まとめた風情に、白やかな婦おんなの顔がそこを覗のぞいた。

門の扉とが開あくでもなしに……続いて雪のような衣紋えもんが出て、そ
 れと映うつりあ合あつてくつきりと黒い鬢びんが、やがて薄お納戸の肩のあた
 り、きらりと光つて、帯の色の鮮麗あざやかになつたのは——道子であ
 った。

門に立忍んで、密そと扉を開けて、横から様子を伺ったものである。

一目見ると、早瀬は、ずいと立って、格子を開けながら、手招ぎをする。と、立直って後姿になって、アアベエ A B 横町の左右をみまわす趣であったが、うしろ向きに入って、がらがらと後を閉めると、三足ばかりを小刻みに急いで来て、人目の関には一重も多く、遮るものが欲しそうに、また格子を立てた。

「ようこそ、」と莞爾にっこりして云う。

姉夫人は、口を、畳んだ手巾ハンケチでおさえしたが、すツすツと息が忙せわしく、

「誰方どなたも……」

「誰も。」

「小使さんは？」

ともう馴染んだか尋ね得た。

「あれは朝つから、貞造の方へ遣つてあります。目の離せません容態ですから。」

「何から何まで難有^{ありがと}う存じます……一人の親を……濟みませんですねえ。」

とその手巾が目に障る。

「濟まないのは私こそ。でもよく会場が抜けられましたな。」

「はい、色艶が悪いから、控所の茶屋で憩^{やす}むように、と皆さんが、そう言つて下さいましたから、好^い都合に、
点^{あかりのつきごろ}燈^{ころ}頃の混雑

紛れに出ましたけれど、宅の車では悪うございますから、途中で
辻待のを雇いますと、気が着きませんでした、それが貴下、片
々蠅目かきめのようで、その可恐こわらしい目で、時々振返つては、あの、
幌ほろの中を覗きましてね、私はどんなに気味が悪うござんしてしよ
う。やつとこの横町の角で下りて、まあ、御門まで参りましたけ
れども、もしかお客様でも有つては悪いから、と少しばらく時立つてお
りましたの。」

「お心づかい、お察し申します。」

と頭こうべを下げて、

「島山さんの、お菅さんには。」

「今しがた参りました。あんなに遅くまで——こちら様に。」

「いいえ。」

「それでは道寄りをお願いしましたのでございましょう。灯あかりの点つきます少し前に見えましたっけ、大勢の中でございますから、遠くに姿を見ましたばかりで、別に言ことばも交まじわささないで、私は急いで出て参りましたので。」

「成程、いや、お茶も差上げませんで失礼ですが、手間が取れちやまたお首尾が悪いと不い可けません。直ぐに、これから、」

「どうぞそうなすって下さいまし、貴下、御苦労様でございませぬえ。」

「御苦労どころじゃありません。さあ、お供いたしましょう。」

ふと心着いたように、

「お待ちなさいよ、夫人。^{おくさん}」

四十一

早瀬は今更ながら、道子がその白襟の品好く麗^{うるわ}しい姿を視^{なが}めて、
 「宵^{よいやみ}暗^あでも、貴女^{あなた}のその態^{なり}じや恐^{おそ}しく目に立^たつて、どんな事^{こと}で
 またその蠅^は目の車夫^{くるまぶ}なんぞが見着^みけまいものでもありません。ち
 よいと貴女^{あなた}手^て巾^{ハンケチ}を。」

と慌^{あわただ}しい折^まから手の触^ふるも顧^かみず、奪^ううがごとく引取^ひつて、背^う
 後^{しろ}から夫人^{しよお}の肩^{かた}を肩^{シヨオル}掛^かのように包^かむと、撫^な肩^{かた}はいよいよ細^こつて、
 身^みを萎^{すく}めたがなお見^よ好^よげな。

懐中からまた手拭を出して、夫人に渡して、

「姉さん冠りと云うのになさい、田舎者がするように。」

「どうせ田舎者なんですもの。」

と打傾いて、鬚にちよつと手を当てて、

「こうですか。」白地を被つて俯向けば、黒髪こそは隠れたれ、包むに余る鬢の馥の、雪に梅花を伏せたよう。

主税は横から右瞻左瞻で、

「不可い、不可い、なお目立つ。貴女、失礼ですが、裾を端折つ

て、そう、不可い。長襦袢が突丈じゃ、やっぱり清元の出

語がありそうだ。」

と口の裡に独言きつつ、

「お気味が悪くつても、胸へためて、ぐっと上げて、足袋との間を思い切つて。ああ、おいたわしいな。」

「厭いやでございますね。」

「御免なさいよ。」

と言うが疾はやいか、早瀬の手は空を切つて、体を踞しゃがんだと思うと、

「あれ、」

かっとなつて、ふらふらと頭つむり重く倒れようとした——手を主税の肩に突いて、道子はわずかに支えたが、早瀬の掌たなそこには逸早く壁の隅すずなる煤すすを掬すくつて、これを夫人の脛はぎに塗つて、穂にあらわれて蔽おほわれ果てぬ、尋常なその棲つまはずれを隠したのであつた。

「もう、大丈夫、河野の令夫人おくがたとは見えやしない。」

と、ランプの洋燈を上から、フツ！

とめき たより留南奇を便に、身を寄せて、

「さあ、出掛けましょう。」

胸に当つた夫人の肩は、誘わるるまで、震えていた。

この横町から、安東村へは五町に足りない道だけれども、場末の賤しずが家ばかり。時に雨もよいの夏雲の閉した空は、星あるよりも行方遥はるかに、たまさか漏るる灯の影は、山路なる、孤ひとつや家のそれと疑わるる。

名門の女子深窓に養われて、傍かたわらに夫無くしては、濫みだりに他と言葉さえ交えまじきが、今日朝からの心の裡うち、蓋けだし察するに余あまりあり。

我は不義者の児こなりと知り、父はしかも危篤きとくの病者。逢うが別

れの今世こんじょうに、臨終いまわのなごりを惜むおしため、華燭かしよく銀燈輝いいて、
 見返る空に月のごとき、若竹座を忍んで出た、慈善市バザアの光を思う
 につけても、横町の後暗さは冥土よみじにも増るまさのみか。裾端折り、頬ほ
 ほかぶり
 被ほして、男——とあられもない姿。ちらりとでも、人目に触
 れて、貴女は、と一言聞くが最後よ、生きてはいられない大事の
 瀬戸。辛からく乗切ゆつて行く先は……実まことの親の死目である。道子が心
 はどんなであらう。

大巖山の幻が、闇やみの氣勢けはいに目を圧おさえて、用水の音凄すさまじく、地を
 揺ゆるごとく聞えた時、道子は俯おもかげさえ、衣きぬの色さえ、有るか無きか
 の声して、

「夢ではないのでしようかしら。宙を歩ある行きますようで、ふらふ

らして、倒れそうでなりません。早瀬さん、お袖につかまらして
下さいまし。」

「しつかりと！ 可い塩梅あんばいに人通りもありませんから。」

人は無くて、軒を走る、怪しき狗いぬが見えたであろう。紺屋の暖
簾の鯛の色は、燐火おにびとなつて燃えもせぬが、昔を知ればひづめの
音して、馬の形も有りそうな、安東村へぞ着きにける。

四十二

道子は声も徜徉さまようように、

「ここは野原でございますか。」

「なぜ、貴女？」

「真中まんなかに恐しい穴がございますよ。」

「ああ、それは道端の井戸なんです。」

と透すかしながら早瀬が答えた。古井戸は地獄が開けた、大なる口のごとくに見えたのである。

早瀬より、忍び足する夫人の駒下駄が、かえつて戦おのきに音高く、辿たど々たどしく四辺あたりに響いて、やがて真暗まっくらな軒下に導かれて、そこで留まった。が、心着いたら、心弱い婦ひとは、得堪ええず倒れたであらう、あたかもその頸うなじの上に、例の白黒斑まだらな狗いぬが踞うずくまっているのである。

音訪おとなう間も無く、どたんどと畳たたみを蹴けて立つ音して、戸を開けるの

と、ついそのかまち框まつかに真赤な灯の、ほやの油煙に黒こずんだ小洋燈ランプの見ゆるが同時で、ぬいと立つたは、眉の迫った、目の鋭い、細ほそおも面のて壮わかもの俊はげまで、巾狭ひとえな単衣はばせまに三尺帯ひとえを尻下り、粹いなせな奴やつこを誰とかする、すなわち塾の（小使）で、怪！ 怪！ 怪！ アバ大人をすりそ搦すり損そこねた、万太まんたと云う攫すり徒すりである。

はたと主税おもてと面おもてを合あわせて、

「兄あにい哥い！」

「……………」

「不可いけえねぜ。」と仮色こわいろのように云った。

「何だ——馬鹿、お連がある。」

「やあ、先生、大変だ。」

「どう、大變。」

衝つと入る。袂たもとに縋すがつて、牲にえの鳥の乱れ姿や、羽搔はがいを傷いためた袖を
 悩ねぐらんで、塹ねぐらのような戸を潜くぐると、跣足はだしで下りて、小使、カタリと
 後を鎖さし、

「病人が冷くなつたい。」

「ええ、」

「今駈出そうてえ処でさ。」

「医者か。」

「お医者は直ぐに呼んで来たがね、もう不可いけねえツて、今しがた歸
 ったんで。私わっしあ、ぼうとして坐っていました、何でもこりや先
 生に来て貰わなくちや、仕様がないと、今やつと気が附いて飛ん

で行こうと思つた処で。」

「そんな法はない。死ぬなんて、」

と飛び込むと、坐ると同時いつしよで、ただ一室ひとまだからそこが褥しとねの、
筵むしろのような枕許へ膝を落して、
三布蒲団みのぶとんを持上げて、骨の蒼あおいのがくつきり見える、病人の仰向
けに寝た胸へ、手を当てて熟じつとしたが、

「奥さん、」

と静しずかに呼ぶ。

道子が、取つたばかりの手拭を、引摺ひきずるように膝にかけて、振ふり
を繕いとまう違いとまもなく、押並んで跪ひざまずいた時、早瀬は退すきつて向き直つて、

「線香なんぞ買つて——それから、種々いろいろ要いるものを。」

「へい、宜^ようがす。」

ぼんやり戸口に立つていた小使は、その跣足^{はだし}のまま飛んで出たと見れば、貞造の死骸^{なきがら}の、恩愛に曳^ひかれて動くのが、筵に響いて身に染みるように、道子の膝は打震いつつ、幽^{かすか}に唱名の声が漏れる。

「よく御覧なさいましよ。貴女も見せてお上げなさいよ。ああ、暗くつて、それでは顔が、」

手洋燈を摺^ずらして出したが、灯^{あかり}が低く這つて届かないので、裏が紺屋の物干の、破櫛^{やぶれんじ}子の下に、汚れた飯櫃^{めしびつ}があつた、それへ載せて、早瀬が立つて持出したのを、夫人が伸上るようにして、露^{うるみ}をもった目を見据え、現^{うつつおもて}の面で受取つたが、両方掛けた手の震

えに、ぶるぶると動くと思うと、坂になった蓋ふたをすべにつつて、啊呀あなやと云う間に、袖うづむに俯向うつむいて、火を吹きながら、畳に落ちて砕けたではないか！ 天井が真紫に、筵かがかつ赫かつと赤くなつた。

この明あかりで、貞造の顔は、生きて眼まなこを開いたかと、蒼白あおざめた鼻も見えたが、松明たいまつのようにひらひらと燃え上る、夫人の裾の手拭ひつつかを、炎ながら引ひ拵つかんで、土間へ叩き出した早瀬が、一大事の声を絞ひつて、

「大変だ、帯に、」と一声。余りの事に茫ぼうとなつて、その時座を避けようとする、道子の帯の結むすびめ目めを、引断ひつきれよ、と引いたので、横よこざまに倒れた裳もすその煽あおり、乳ちのあたりから波打なみつて、炎に燃えつと見えたのは、膚はだえの雪に映る火をわずかに襦袢じゆばんに隔へてたのであつ

た。トタンに早瀬は、身を投げて油の上をぐるぐると転げた。火はこれがために消えて、しばらくは黒白あやめも分かず。阿部街道を戻り馬が、遥はるかに、ヒイインと嘶いななく声。戸外おもてで、犬の吠ゆる声。

「可おツそろし恐い真暗ですな。」

品々を整えて、道の暗さに、提ちようちん灯を借りて帰つて来た、小

使が、のそりと入ると、薄色の紋着を、水のように畳に流して、

夫人はそこに伏沈んで、早瀬は窓をあけて、櫛ほつ子に腰をかけて、

吻として腕をさすっていた。——もうこにくにようてはじめてさむるとき猛虎肉醉初醒時。楷か

磨ようをかいました苛かぜい痒いたすく風助威。

廊下づたい

四十三

家の業でも、気の弱い婦おんなであるから、外科室の方は身震いがすると云うので、是非なく行かぬ事ゆになっているが、道子は、両親の注意——むしろ命令で、午後十時前後、寢際には必ず一度ずつ、入院患者の病室を、遍あまねく見舞うのが勤めであつた。

その時は当番の看護婦が、交代に二人ずつ附添うので、ただ（御気分はいかがですか、お大事になさいまし、）と、ただこれども、心優しき生うまれつき来の、自おのずから言外の情が籠るため、病者

は少なからぬ慰安を感じて、結句院長の廻診より、道子の端麗な、この姿を、待ち兼ねる者が多い。怪しからぬのは、鼻風邪ごときで入院して、貴女のお手ずからお薬を、と唸ると云うが、まさかであろう。

で——この事たるや、夫の医学士、名は理順りじゆんと云う——院長は余り賛成はしないのだけれども、病人を慰めるといふ仕事は、いかなる貴婦人がなすつても仔細しさいない美德であるし、両親もたつて希望なり、不問に附して黙諾の体でいる。

ト今夜もばたばたと、上草履の音に連れて、下階したの病室を済ました後、横田の田畝たんぼを左に見て、右に停車場ステイションを望んで、この向は天氣が好いと、雲に連なつて海が見える、その二階へ、雪洞ほんぼり

を手にした、びやくえ白衣の看護婦を従えて、まんなか真中に院長夫人。雲を開いたようにはしごだん階子段を上へ、髪が見えて、肩、帯があらわ露れる。

じみ質素な浴衣に昼夜帯を……もつともお太鼓に結んで、紅鼻緒しごきに白足袋であつたが、冬の夜などはねまき寝衣に着換えて、浅黄の扱帯しごきという事がある。そんな時は、ねおしろい寝白粉の香も薫る、それはた異香くん薫ずるがごとく、患者は御来迎、ととな称えて随喜渴仰。

また実際、夫人がそのとりなり風采、そのきりよう容色で、看護婦を率いたさま状は、常に天使のごとく拝まれるのであつたに、いかにやしけむ、近い頃、殊に今夜あたり、色艶すぐ勝れず、円まるまげ鬚も重そうにうなだ首垂れて、胸をせめて袖をかき襲ねた状は、慎ましげに床し、とよりは、し悄ようぜん然と細つて、何か目に見えぬいましめ縛の八重の縄で、風なびに靡く弱腰

かけて、ぐるぐると巻かれたよう。従つて、前後を擁した二体の白衣も、天にもし有らば美しき獄卒の、法廷の高く高き処へ夫人を引立てて来たようである。

ドア扉を開あけはな放した室の、患者無しに行抜けの空は、右も左も、折

まつしろ

から真ま白しろな月夜で、月の表には富士の白しろ妙たえ、裏は紫、海ある

気勢けはい。停車場の屋根はきらきらと露が流れて輝く。

例に因つて、室々へ、雪洞が入り、白衣が出で、夫人が後姿になり、看護婦が前に向き、ばたばたばた、ばたばたと規律正しい沈んだ音が長廊下に断えては続き、処々月になり、また雪洞がぽつと明あかくなつて、ややあつて、遙かに暗い裏うら階ぼしご子へ消える筈はずのが、今夜は廊下の真ま中なかを、ト一列になつて、水彩色みずさいしきの燈籠の

絵の浮いて出たように、すらすらこなたへ引返して来て、中程よりもうちつと表階子へ寄つた——右隣が空いた、富士へ向いた病室の前へ来ると、夫人は立留つて、白衣は左右に分れた。

順に見舞つた中に、この一室だけは、行きがけになぜか残したもので。……

と見ると胡粉ごこんで書いた番号の札に並べて、早瀬主税と記してある。

道子は間なかに立つて、徐おもむろに左右を見返り、黙つて目礼をして、ほとんど無意識に、しなやかな手を伸ばすと、看護婦の一人が、雪洞を渡して、それは両手を、一人は片手を、膝のあたりまで下げ、ひらりと雪のひとかたまり一団。

ずツと離れて廊下を戻る。

道子は扉ドアに吸込まれた。ト思うと、しめ切らないその扉の透間から、やや背屈せかがみをしたらしい、低い処へ横顔を見せて廊下を差さしのぞくと、表階子の欄干てすりへ、雪洞を中にして、からみついたようになつて、二人附着くつついて、こなたを見ていた白衣が、さらりと消えて、壇に沈む。

四十四

寝ね台だいに沈んだ病人の顔の色は、これが早瀬か、と思うほどである。

道子は雪洞を裾に置いて、帯のあたりから胸を仄かに、顔を暗く、寝台に添うてゐたたずんで、心を細めた洋燈ランプのあかりに、その灰のような面おもてを見たが、目は明かに開いていた。

ト思うと、早瀬に顔を背けて、目を塞いだが、瞳は動くか、烈しく睫毛まつげが震えたのである。

ややあつて、

「早瀬さん、私に分りますか。」

「……………」

「ようよう今日のお昼頃から、あの、人顔がお分りになるようにおんななさいましたそうでございますね。」

「お庇かげ様で。」

と確たしかに聞えた。が、腹でもの云うごとくで、口は動かぬ。

「酷ひどいお熱だつたんでございますのねえ。」

「看護婦に聞きました。ちようど十日間ばかり、全まるツきり人事不省で、驚きました。いつの間にか、もう、七月の中なか旬だそうで。」と暝ねむつたままて云う。

「宅では、東京の妹たちが、皆みんな暑中休暇で帰つて参りました。」
少し枕を動かして、

「英吉君も……ですか。」

「いいえ、あの人だけは参りませんの。この頃じや家うちへ帰られな
いような義理になっておりますから、気の毒ですよ。」

ああ、そう申せば、「と優しく、枕許ななめの置棚を斜ななめに見て、

「貴下は、まあ、さぞ東京へお帰りなさらなければならなかつた
んでございましたように。あいにく御病気で、ほんとうに間が悪う
ございましたわね。酒井様からの電報は御覧になりましたの？」

「見ました、先刻はじめて、」

と調子が沈む。

「二通とも、」

「二通とも、」

「一通はただ（直ぐ帰れ。）ですが、二度目のには、ツタビヨウ
キ（蔦病氣）——かねて妹から承っております。貴下の奥さん
が御危篤ごきとくのように存じられます。御内の小使さん、とそれに草深
の妹とも相談しまして、お枕許で、失礼ですが、電報の封を解き

まして、私の名で、貴下がこのお熱の御様子で、残念ですがいらつしやられない事を、お返事申して置きました。ですが、まあ、何という折が悪いのでございましょう。ほんとうにお察し申しております。」

「……病気が幸です。達者で居たって、どの面さ^{つら}げて、先生はじめ、顔が合されますもんですか。」

「なぜ？ 貴下、」

と、熟^{じつ}と頤^{おとが}を据^いえて、俯^{うつむ}向いて顔を見ると、早瀬はわずかに目を開^あいて、

「なぜとは？」

「……………」

「第一、貴女に、見せられる顔じやありません。」

と云う呼吸いきづかいが荒くなつて、毛布けつとを乗出した、薄い胸の、露あたらわな骨が動いた時、道子の肩もわなわなして、真白な手の戦おののくのが、雪の乱るるようであつた。

「安東村へおともをしたのは……夢ではないのでございますね。」

早瀬は差置かれた胸の手に、圧おし殺されて、あたかも呼吸の留るがごとく、その苦くるしみを払わんとするように、瘦やせほそ細ほそった手で握つて、幾いくたび度も口を動かしつつ辛うじて答えた。

「夢ではありません、が、この世の事ではないのです。お、お道さん、毒を、毒を一思いに飲まして下さい。」

と魚うおの渴けるがごとく悶もだゆる白歯びんに、傾く鬢びんからこぼるると

見えて、衝と一片の花が触れた。

颯となつた顔を背けて、

「夢でなければ……どうしましょう！」

と道子は崩れたように膝を折つて、寝台の端に額を隠した。窓の月は、キラリと笄の艶に光つて、雪燈は仄かに玉のごとき頸を照らした。

これより前、看護婦の姿が欄干から消えて、早瀬の病室の扉が堅く鎖されると同時に、裏階子の上へ、ふと顛れた一人の婦があつて、堆い前髪にも隠れない、鋭い瞳は、屹と長廊下を射るばかり。それが燈音を密めて来て、隣の空室へ忍んだことを、断つて置かねばならぬ。こは道子等の母親である。

——おなじ同一事が——同一事が……五晩六晩続いた。

四十五

妙なことが有るもので、夜ごとに、道子が早瀬の病室を出る時間の後れるほど、人こそ替れ、二人ずつの看護婦の、階子段の欄干を離れるのが遅くなった。

どうせそこに待っていて、一所に二階を下りるのではない——要するに、遠くから、早瀬の室を窺う間が長くなったのである、と言いかえれば言うのである。

で、今夜もまた、早瀬の病室の前で、道子に別れた二人の白びやく

衣えが、多しばらく時宙にかかったようになって、欄干の処こゝに居た。

広庭を一つ隔てた母屋の方では、宵の口から、今度暑中休暇で帰省した、牛込桐楊塾の娘たちに、内の小児こども、甥おいだの、姪めいだのが一所になつた処へ、また小児同志の客があり、草深の一家いっけも来、ヴァイオリンが聞える、洋オルガン琴が鳴る、唱歌を唄う——この人数にんずへ、もう一組。菅子の妹の辰子というのが、福井県の参事官へ去こ年の秋縁ぞ着いてもう児こが出来た。その一組が当河野家へ来揃うと、この時だけは道子と共に、一族残らず、乳母小間使と子守を交ぜて、ざつと五十人ばかりの人数で、両ふたおや親がついて、かねてこれがために、清水港みなとに、三保に近く、田子の浦、久能山、江尻はもとより、興津おきつ、清見寺きよみなどへ、ぶらりと散歩が出来ようという地

を選んだ、宏大な別荘もうけの設たてが有つて、例年必ずそこへ避暑する。一門の栄華を見よ、と英臣大夫妻、得意の時ときで、昨年は英吉だけ欠けたが、……今年も怪しい。そのかわり、新しく福井県の頭官が加わるのである……

さて母屋の方は、葉越に映る燈ともにも景氣しびづいて、小さいのが弄もてあそぶ花火の音、松の梢こずえに富士より高く流星も上つたが、今は静しずかになつた。

壇の下から音もなく、形の白い脊せの高いものが、ぬいと廊下へ出た、と思うと、看護婦二人は驚おどいて退すきつた。

来たのは院長、医学士河野理順である。

ホワイト襯衣しやつに、縞しまの粗あらい慢ゆるな筒服やかすぼん、上靴はを穿はいたが、ビール

を呷あおつたらしい。充血した顔の、額はちわれに顛割ねのある、髯ひげの薄い人物で、ギラリと輝く黄金縁きんぶちの目金越ねに、看護婦等を睨ねめ着けながら、

「君たちは……」

と云うた眼まなこが、目金越に血走つた。

「道子に附ついているんじゃないか。」

「は、」と一人にんこうべが頭を下げる。

「どうしたか。」

「は、早瀬さんの室を、お見舞になります時は、いつも私わたくしどもはお付き申しませんでございませす。」と爽さわやかな声で答えた。

「なぜかい。」

「奥様がおつしやいます。御本宅の英吉様の御朋友ですから、看護婦などを連れては豪えらそうに見えて、容体ぶるようで気恥かしいから、とおつしやつて、お連れなさいませるので、は……」と云う。

「いつもそうか。」

と尋ねた時、衣兜かくしに両手を突込んで、肩を揺ゆつた。

「はい、いつでも。」

「む、そうか。」と言ひ棄てに、荒らかに廊下を踏んだ。

「あれ、主人あるじの躰あしおと音でございます。」

「院長ですか。」

道子は色を変えて、

「あれ、どうしましょう、こちらへ参りますよ。アレ、」

「院長が入院患者を見舞うのに、ちつとも不思議はありません。」
と早瀬は寝ながら平然として云った。

目も尋常ただならず、おろおろして、

「両親も知りませんが、主人は酷いあるじ目に逢わせますのでござい
ますよ。」としめ木にかけられた様に袖を絞って立窘たちすくむと、

「寝台ねだいの下へお隠れなさい。可いいから、」

とむつくと起きた、早瀬は毛布けつとひるがえを翻して、夫人の裾を隠しながら、寝台きつに屹きつと身構えたトタンに、

「院長さんが御廻診ですよ！」と看護婦の金切声が物凄ものすごく響

いたのである。

理順は既に室に迫つて、あわや開けようとすると、どこに居たか、忽然^{こつぜん}として、母夫人が立^{たち}露^{あらわ}れて、扉^{ドア}に手を掛けた医学士の二の腕を、横ざまにグツと圧^{おさ}えて……曰く、

「院長。」

と、その得も言われぬ顔を、例の鋭い目で、じろりと見て、

「どうぞ、こちらへ。いいえ、是非。」

燃ゆるがごとき嫉妬^{かいな}の腕を、小脇にしっかりと抱込んだと思うと、早や裏階子の方へ引いて退^のいた。――

蛭

四十六

「己おれが分るか、分るか。おお酒井だ。分ったか、しつかりしな。」
酒井俊蔵ただ一人、臨終いまわのお蔭の枕許に、親しく顔を差寄せた。
次の間には……

「ああ、皆居みんなるとも。妙も居るよ。大勢居るから氣を丈夫に持て！
ただ早瀬が見えん、残念だろう、己も残念だ。病気で入院を
していると云うから、致いたしかた方が無い。断念あきらめなよ。」

と、黒髪ばかりは幾千代までも、早やその下に消えそうな、薄

白んだ耳に口を寄せて、

「未来で会え、未来で会え。未来で会ったら一生懸命に縋すがりつ着いていて離れるな。己のような邪魔者の入らないように用心しろ。きつと離れるなよ。先生なんぞ持つな。

己はこういう事とは知らなんだ。お前より早瀬の方が可愛いから、あれに間違いの無いように、怪我の無いようにと思つたが、可哀相な事をしたよ。

早瀬に過あやまち失をさすまいと思ふ己の目には、お前の影は彼奴あいつに魔が魅さしているように見えたんだ。お前を悪魔だと思つた、己は敵かたきだ。間なかをせいたつて処女きむすめじゃやない。真逢まこといたくば、どんなにしても逢えん事はない。世間体だ、一所に居てこそ不都合だが、内

証なら大目に見てやろうと思つたものを、お前たちだけに義理がたく、死ぬまで我慢をし徹とおしたか。可哀相に。……今更卑怯な事は謂いわない、己を怨め、酒井俊蔵を怨め、己を呪のろえよ！

どうだ、自分で心を弱くして、とても活きられない、死ぬなんぞと考えないで、もう一度石に喰くついても恢復なおつて、生樹なまきを裂いた己へ面当つらあてに、早瀬と手を引いて復讐しかえしをして見せる元氣は出せんか、意地は無いか。

もう不可いけまいなあ。」

と、忘れたようなお蔭の手を膝へ取つて、熟じつと見て、

「瘠やせたよ。一昨日見た時よりまた半分になつた。——これ、目を開あきなよ、しつかりしな、己だ、分つたか、ああ先生みんなだよ。皆

居る、妙も来ている。姉さん——小芳か、あすこに居るよ。

なぜ、お前は気を長くして、早瀬が己ほどの者になるのを待た
ん、己でさえ芸者の情婦いろは持余しているんだ、世の中は面倒さな。
あの腰を突けばひよろつくような若い奴が、お前を内へ入れて、
それで身を立つて行かれるものか。共倒れが不便ふびんだから、剣突けんつく
を喰わしたんだが、可哀相に、両方とも国を隔つて煩らつて、胸
一つ擦さすつて貰えないのは、お前たち何の因果だ。

さぞ待つているだろうな、早瀬の来るのを。あれが来るから、
と云つて、お前、昨夜髪ゆうべを結いつたそうだ。ああ、島田よが好く出来
た、己が見たよ。」

と云う時、次の室まで泣音なくねがした。続いてすすり泣く声が聞えた

が、その真まつさき先まへだったのは、お蔦のこれを結った、髪結のお増であつた。芸妓げいこ島田は名誉おんなの婦おんなが、いかに、丹精をぬきんでたろう。上らぬ枕を取交えた、括くくりぶとん蒲団いちに一いちが沈しんんで、後おくれげ毛けの乱れさえ、一ひとしお入いたましの可いたまし傷まじさに、お蔦は薄化粧うすけしょうさえしているのである。

お蔦は恥じてか、見て欲ほしかつたか、肩かたを捻ひねつて、鬚まげを真向まへむかひきに、毛筋けぢんも透通うなじるような頸うなじを向けて、なだらかに掛けた小搔こがいまき卷まきの膝かたの辺あたりに、一ひとしお波打なみつと、力ちからを入れたらしく寝返りした。

四十七

「似合にあつた、似合にあつた、ああ、島田が佳よく出来た。早瀬はやせなんか

分るものか。顔を見せな、さあ。」

とじりりと膝を寄せて、その時、颯さつと薄桃色の瞼まぶたの霑うるんだ、冷たい顔が、夜の風そよに戦たたかぐばかり、蓐しとねの隈くまに倅おもかけ立つのを、縁あから明あかりと取りの月影かりとに透とおかした酒井が、

「誰か来て蛍籠あきを外はずしな、厭いやな色だ。」

「へへい、」と頓興とんきやうな、ぼやけた声を出して、め組つぎが継つぎの当あつた

千草色の半股引はんももひきで、縁側えんがわを膝立ひざたつて来た——婦おんなたちは皆我を忘

れて六畳むつじやうに——中には抱合かかつて泣ないているのもあるので、惣助一

人三畳さんじやうの火鉢わきの傍わきに、割膝かきこまで畏おそつて、齒くを喰く切しつた獅しが噛み面づらは、

額かぶに蠟燭ろうそくの流れぬばかり、絵えにある燈台鬼とうだいおにという顔色が。時々病

人の部屋しんが寂しんとするごとに、隣の女連おんなの中へ、四ツ這ばいに顔を出し

て、

(死んだか、)と聞いて、女房のお増に流眇しりめにかけられ、

(まだか、)と問うて、また睨ねめつけられ、苦笑いをしては引込ひっこ

んで控えたのが——大先生の前なり、やがて仏になる人の枕許、
 謹しんで這つて出て、ひよいと立上つて蛍籠を外すと、居すくま
 った腰が据すわらず、ひよろり、で、ドンと縁へ尻餅。魂が砕けたよ
 うに、胸へ乱れて、颯と光つた、籠の蛍に、ハツト思ふ処を、

「何ですね、お前さん、」

と鼻声になつている女房かみさんに劍呑けんのみを食つて、慌にげこて遁にげこ込む。

この物音に、お蔭はまたぱつちりと目を睜みひらいて、心細く、寂し
 げに、枕を酒井に擦寄せると……

「皆居る、寂しくはないよ。しかしどうだい。早瀬が来たら、誰も次の室へ行つて貰つて、こうやって、二人許りで、言いたいことがあるだろう。致方が無い断念めな。断念めて——己を早瀬だと思え。世界に二人と無い夫だと思え。早瀬より豪い男だ。学問も出来る、名も高い、腕も有る、あれよりは年も上だ。脊も高い、腹も確だ、声も大きい、酒も強い、借金も多い、男振もあれより増だ。女房もあり、情婦もあり、娘も有る。地位も名誉も段違ひの先生だ。酒井俊蔵を夫と思え、情夫と思え、早瀬主税だと思つて、言いたいことを言え、したいことをしろ、不足はあるまい。念仏も弥陀も何も要らん、一心に男の名を称えるんだ。早瀬と称えて袖に縫れ、胸を抱け、お薦。……早瀬が来た、ここに居るよ

。

と云うと、縋りついて、膝に乗るのを、横抱きに頸を抱いた。

トつかまろうとする手に力なく、二三度探りはずしたが、震えながらしつかりと、酒井先生の襟を掴んで、

「咽喉が苦しい、ああ、呼吸が出来ない。素人らしいが、（と莞

爾して、）口移しに薬を飲まして……」

酒井は猶予らわず、水薬を口に含んだのである。

がつくりと咽喉を通ると、気が遠くなりそうに、仰向けに恍惚したが、

「早瀬さん。」

「お蔭。」

「早瀬さん……」

「むむ、」

「先^せ、先生が逢つても可いって、嬉しいねえ！」
酒井は、はらはらと落涙した。

おとずれ

四十八

病室の寝台^{ねだい}に、うつらうつらしていた早瀬は、フト目が覚めた

が……昨夜あたりから、歩ある行かわやいて廁ゆへ行かれるようになったので、もう看護婦も付いておらぬ。每晚きま極きまつたように見舞つてくれた道子が、一昨日おとといの夜よの……あの時から、ふつつり来ないし、一寝入りして覚めた今は、昼間、菅子に逢つたのも、世を隔てたようで心寂しい。室内を横伝い、まだ何か便り無さそうだから、寝台の縁に手をかけて、腰を曲げるようにして出たが、扉との外になると、もう自分でも足の確たしかなのがつつて、両側のそちこちに、白い金かなだ盥らいに昇しょう汞こう水すいの薄桃色なのが、飛々の柱はしら燈あかりに見えるのを、
 氣の毒らしく思うほど、氣も爽さつぱり然りして、通り過ぎた。

どこも寝入つて、寂しんとして、この二三日めつきり暑さが増したので、中には扉とを明けたまま、看護婦が廊下へ雪のような裙すそを出

して、戸口に横よこわつて眠つたのもあつた。遠くで犬の吠ゆる声はするが、幸いどの呻吟うめきごえ声も聞えずに、更けてかれこれ二時であらう。

厠は表階おもてばしご子の取附とつきにもあつて、そこは燈あかりも明あかるいが、風は佳し、廊下は冷たし、歩ある行くのも物珍らしいので、早瀬はわざと、遠い方の、裏階子の横手の薄暗い中へ入つた。

ざぶり水を注かけながら、見るともなしに、小窓の格子から田圃たんぼを見ると、月は屋やの棟に上つたらう、影は見えぬが青田の白さ。

風がそよそよと渡ると見れば、波のように葉末が分れて、田の水の透いたでもなく、ちらちらと光つたものがある。緩い、遅い、稲妻のように流れて、靄もやのかかった中に、土のひだが数えられる、

大巖山の根を低く繞めぐつて消えたのは、どこかの電燈ひらめが閃いて映つたようでもあるし、蛍が飛んだようににも思われる。

手ちようず水と、その景色にぶるぶると冷くなつて、直ぐに開けて出ようとする。戸の外へ、何か来て立っていて、それがために重いような気がして、思わず猶ためら予つて、暗い中に、昼間被きかえた自分の浴衣の白いのを、視ながめて悚然ぞっとして咳せきをしたが、口の裡うちで音には出ぬ。

「早瀬さん。」

「お蔭か、」

と言つた自分の声に、聞えた声よりも驚かされて、耳を傾けるや否や、赫かつとなつて我を忘れて、しやにむに引開けようとした戸

が、少しきしんで、ヒヤリと氷のような冷いものを手に掴んで、そのまま引開けると、裏階子がおおき大な穴のように真黒まっくろなばかりで、別に何にも無い。

瓦を噛むかように棟近く、夜鴉よがらすが、かあ、と鳴いた。

鳴きながら、伝うて飛ぶのを、ほうとして仰ぎながら、導かれるようにふらふらと出ると、声の止む時、壇階子の横を廊下に出た。
いた。

と見ると打向い遙か斜めなる、渠かれが病室の、半開きにして来た扉との前に、ちらりと見えた婦おんなの姿。——出たのか、入ったのか、直ぐに消えた。

ぱたぱたと、我あわただながら慌あしおとしく登音立てて、一文字に駈けつけ

たが、室へ入口で、思わず釘附にされたようになった。

バサリと音して、ひとにぎり一握の綿が舞うように、むくむくと渦くうずま

ばかり、枕許の棚をほとんどころが転つて飛ぶのは、大きな、色の白い蛾ひとりむしで。

枕をかけて陰々とした、ともしび燈の間に、あたかも鞠まりのような影がさ

した。棚には、管子が活けて置いた、浅黄の天鵝絨びろうどに似た西洋花

のおおりん大輪があつたが、それではなしに——筋一ツ、元来の薬嫌ぎらいが、

快いにつけて飲忘れた、一度ぶり残つた呑かけの——水すいやく葉の瓶

に、ばさばさと当るのを、じっみつ熟とみつ瞻めて立つと、トントントンと壇

を下りるような躑音がしたので、どこか、と見当も分らず振向い

たのが表階子の方であつた。その正面の壁に、一番明あかるかつた燈ひが、

アワヤ消えそうになっている。

その時、ひとりむし蛾に向うごとく、衝と踏込む途端に、

「私ですよ引」と床に沈んで、足許の天井裏に、電話の糸を漏れたような、夢の覚際に耳に残ったような、胸へだけ伝わるような、お蔭の音が聞えたと思うと、ひとりむし蛾がハタと落ちた。

はじめて心付くと、厠の戸で冷く握って、今まで握にぎりし緊めていた、左の拳こぶしに、細い尻尾のひらひらと動くのは、一尾びきの守宮やもりである。

はつと開くと、雫しずくのように、ぽたりと床に落ちたが、足を踏張ったまま動きもせぬ。これに目も放さないで、手を伸ばして薬瓶を取ると、伸過ぎた身の発奮はげずみに、蹠よろ踉けて、片膝を支ついたなり、

口を開けて、垂々たらたらと濺ぐと——水葉の色が光つて、守宮の頭を擡もたげて睨にらむがごとき目をかけて、滴るや否や、くるくると風車のごとく烈しく廻るのが、見る見る朱を流したように真赤まっかになつて、ぶるぶると足を縮めるのを、早瀬は瞳を据えて屹きつと視た。

四十九

早瀬はその水葉すいやくの残余のこりを火影ほかげに透かして、透明な液体の中に、芥子粒けしつぶほどの泡の、風のごとくめぐる状さまに、莞爾にっこりして、

「面白い！」

と、投げる様に言棄てたが、恐おそれ気げも無く、一分時の前は炎の

ごとく真紅まつかに狂つたのが、早や紫色に變つて、床に氷ひるついて、翻がえつた腹の青い守宮やもりを摘つまんで、ぶらりと提げて、鼻紙を取つて、薬瓶と一所に、八重にくるくると巻いて包んで、枕許のその置戸棚の奥へ、着換の中へ突込んで、ついでにまだ、何かそこらを探したのは、落ちた蛾を拾おうとするらしかったが、それは影も無い。なお棚には、他に二つばかり処方ひとつの違つた、今は用いぬ、同一薬瓶があつた。その一個ひとつを取つて、ハタと叩きつけると、床に粉々になるのを見向きもしないで、躍上るように勢込んで寝台ねだいに上つて、むずと高胡坐たかあぐらを組んだと思うと、廊下の方を屹きつと見て、

「馬鹿な奴等！ 誰だと思う。」

と言うと齊ひとしく、仰向けに寝て、毛布けつとを胸へ。——鷄とりの声を聞

きながら、大胆不敵な^{いびぎ}麩で、すやすやと寝たのである。

暁かけて、院長が一度、河野の母親大夫人が一度、前後して、この病室を差^さ覗^{のぞ}いて、人知れず……立去った。

早瀬が目を覚ますと、受持の看護婦が、

「薬は召上りましたか。瓶が落ちて破^われておりましたが。」
と注意をしたのは言うまでもなかった。

で、新^{あたらし}い瓶がもう来ていたが、この分は平気で服した。

その日燈^{あかり}の点^つくちと前に、早瀬は帯を緊^{しめ}直^{なお}して、看護婦を呼んで、

「お世話になりました。お庇^{かげ}様^{さま}でどうやら助りました。もう退院をしまして宜しいそうで、後の保養は、河野さんの皆さんがい

らっしやる、清水港の方へ来てしてはどうか、と云つて下さいますから、参ろうかと思ひます。何にしても一旦塾の方へ引取りますが、種々用いろいろがありますから、人を遣つて、内の小使をお呼び下さい。それから、お呼立て申して済みませんが、少々お目に懸りたい事がございます。ちよつとこの室までお運びを願ひたい、と河野さんに。……いや、院長さんじゃありません、母屋にいらつしやる英臣さん。」

「はあ、大先生に……申し上げましょう。」

「どうぞ。ああ、もし、もし、」

と出掛けた白びやくえ衣の、腰の肥ふといのを呼留めて、

「御書見中でもありませんたら、御都合に因つて、こちらから参

りまして可ようございますと。」

馴染んでゐるから、黙うなずつて領うなずいて室を出て、表階子の方へ登あしお

音とがして、それぎり忙しい夕暮の蟬の声。どこかの室で、新聞

を朗読するのが聞えたが、ものの五分間経たつたのではなかつた。

二階もまだ下り切るまいと思うのに、看護婦が、ばたばた忙せわしく

引返して、発奮はずみに突込むように顔を出して、

「お客様ですよ。」

「島山さんの？」

と言う、呼吸いきも引かず、早瀬は目を睜みはつて茫然とした。

昨夜ゆうべの事の不思議より、今目前まのあたりの光景を、かえつて夢かと思う

よう、恍惚うっとりとなつたも道理。

看護婦の白衣にかさなつて、紫の矢^や絣^{がすり}の、色の薄^ういが鮮^{あざ}麗^{やか}に、朱^し緞^ゆ子^{どんす}に銀と觀世水のやや幅細な帯を胸高に、緋^ひ鹿^{かの}子の背^し負^よ上^{いあ}げして、ほんのり桜色に上氣しながら、こなたを見入つたのは、お妙である！

「まあ！……」

ときよとんとして早瀬はひたと瞻^みめた。

「主税さん。」

と、一年越、十年も恋^{ととせ}しく百^{もも}年^{とせ}も可^な懐^つい声^{かし}をかけて、看護婦の傍^{かた}をすつと抜^わけて真^ま直^つに入^すつたが、

「もう快^よくつて？」

と胸を斜めに、帯にさし込んだ塗骨の扇^{おうぎ}子も共に、差^さ覗^{しの}くよ

うにした。

「お嬢さん……」とまだ^{ほう}としている。

「しばらくね。」

と前^{さき}へ言われて、はじめて吃^{びっくり}驚した顔をして、

「先生は？」

「宜しくツて、母さんも。」と、ちやんと云う。

五十

寝^ね台と椅子との狭い間、目^め前にその燃ゆるような帯が輝いてい
るので、迂^{すべ}り下りようとする、それもならず。蒼^{あおぞら}空の星を仰ぐ

がごとく、お妙の顔を見上げながら、

「どうして来たんです。誰と。貴女。あなた いつ。どの汽車で。」と、
ひといきあわただ
 一呼吸に慌しい。

「今日の正午の汽車で、今来たわ。惣助ツて肴屋さかなやさんが一所なの。」

「ええ、め組がお供で。どうしてあれを御存じですね。」

「お薦さんの事よ、」

と言いかける、口の荅つぼみが動いたと思うと、睫毛まつげが濃くなつて、

ほろりとして、振返ると、まだそこに、看護婦が立っているので、

慌たもとて袂を取つて、揉もみこ込むように顔を隠すと、美しい眉のはずれ

から、振ふりひるがひるがえつて、朱鷺色とぎの縞ろの長襦袢の袖が落ちる。

「今そんな事を聞いちゃ、厭いや！」

と突慳つっけんどん貪どんなように云った。勿な、問いそそこに人あるに、涙得え堪えず、と言うのである。

看護婦は心得て、

「では、あの、お言託ことづけは。」

「ちと後にして頂きましょう。お嬢さん、そして、お伴をしました、め組の奴は？」

「ステイション停車場で荷物を取つて来るの。半日なら大丈夫だつて、氷につけてね、あなた貴下すきの好きなお魚を持って来たのよ。病院なら直じき分りまず、早くいらつしやいッて、車をそう云つて、あの、私も早く来たかつたから、先へ来たわ。みんな皆、そうやって思つてるのに、あ貴

下は酷なたいわ。手紙も寄越さないんですもの。お薦さん……」

とまた声が曇つて、黙つて差俯さしうつむ向いた主税を見て、

「あの、私ねえ、いろいろ沢山話があるわ。入院していらつしやる、と云うから、どんなに悪いんだろうと思つたら、起きていられるのね。それなのに、まあ……お薦さん……私……貴下あなたに叱言こごとを言うこともあるけれど、大事な用があるから、それを済ましてから緩ゆつくりしましょうね。」

と甘えるように直ぐ變つて、さも親しげに、

「小刀ナイフはあつて？」

余り唐突だしぬけな問だつたから、口も利けないで……また目を睜みはる。

「では、さあ、私の元結もとゆいを切つて頂戴。」

「元結もとゆいを？ お嬢さんの。」

「ええ、私の髪の毛の、」

と、主税ねだが後へずらなるとその膝に乗つたらう、色気も無く、寝台ねだの端に、後向きに薄いお太鼓の腰をかけると、緋鹿子がまた燃える。そのままお妙は俯向うつむいて、玉のごとき頸うなじを差伸べ、

「お切んなさいよ、さあ、早くよ。父上とうさんも知つていてよ、可いんだわ。」

と美しく流眊ながしめに見返つた時、危なく手がふるえていた。小刀の尖さきが、夢のごとく、元結を弾はじくと、ゆらゆらと下つた髪を、お妙が、はらりと掉ふつたので、颯さつと流れた薄雲の乱るる中から、ふつと落ちた一握ひとにぎりの黒髪があつて、主税の膝に掛つたのである。

早瀬は水を浴びたように悚然とした。

「お蔭さんに託つたの。あの、記念にね、貴下に上げて下さいって、主税さん、」

と向う状に、椅子の凭に俯伏せになると、抜いて持った簪の、花片が、リボンを打って激しく揺れて、

「もうその他には逢えないのよ。」

お蔭の記念の玉の緒は、右の手に燃ゆるがごとく、ひやひやと練衣の氷れるごとき、筒井筒振分けて、丈にも余るお妙の髪に、左手を密と掛けながら、今はなかなか胴据って、主税は、もの言う声も確に、

「亡くなつたものの髪の毛なんぞ。……」

飛んでも無い。先生が可い、とおっしゃいましたか、奥様が可い、とおっしゃったんですかい。こんなものをお頭つむりへ入れて。御出世前の大事なお身体からだじゃありませんか。ああ、鶴亀々々、」

と貴いものに触るように、静しずかにその緑の艶つやを撫でた。

「私、出世なんかしたかないわ。髪結さんにでも何にでもなつてよ。」

と勇ましく起直つて、

「父さんがね、主税さん、病気が治ったら東京へお帰んなさいって、そうして、あの、……お墓参をしましょうね。」

日蝕

五十一

日盛りの田畝たんぼみち道には、草の影も無く、人も見えぬ。村々では、朝から藪しとみを下ろして、羽目を塞いだのさえ少くない。田舎は律義で、日蝕は日の煩いとて、その影には毒あり、光には魔あり、熱には病やまいありと言伝える。さらぬだにその年は九分九厘、ほとんど皆既蝕と云うのであった。

早あさまだき朝

日の出の色の、どんよりとしていたのが、そのまま冴あおぞらえもせず、曇りもせず。鶏卵色たまごに濁りを帯びて、果し無き蒼空

にただ一つ。別に他に輝ける日輪があつて、あたかもその雛形ひながたのごとく、灰色の野山の天に、寂寞として見えた――

風は終ひねもす日無かつた。蒸むしむし々と悪気の籠つた暑さは、そこらの

田舎屋を圧するようで、空気は大磐石に化したるごとく、嬰兒みどりごの泣音なくねも沈み、鶏の羽はさえ羽叩もくに懶もうげで、庇間ひあわいにかけた階子はしごに

留じまつて、熟じつと中空を仰ぐのさえ物ありそうな。透間すゐまに射さし入る

日の光は、風に動かぬ粉にも似て、人々の袖に灰を置くよう、身み動じろぎにも払われず、物蔭にも消えず、細こまやかに濃ひく引ひ包つまれたか

の思おもがして、手足も顔も同じ色の、蟬せみにも石かにも固たまるか、とばか

り次第しだいに息苦しい。

白昼凝こつて、尽ことごとく太陽の黄なるを包む、混こん沌とんたる雲かの凝たまり固まり

とならんず光景ありさま。万有あわや死せんとす、と忌わしき使者つかいの早
 打、しつきりなく走るは鴉からすで。黒き礫つぶてのごとく、灰色の天狗てんぐのご
 とく乱れ飛ぶ、とこれに驚かされたようになって、大波を打つ
 のは海よ。その、山の根を畝うねり、岩に躍り、渚なぎさに翻かえつて、沖を高く
 中空に動けるは、我ここに天地の間に充満みちみちたり、何物の怪しき影
 ぞ、円まどかなる太陽ひの光を蔽おほうやとて、大紅玉の悩める面おもてを、拭ぬぐい洗
 わんと、苛立もたち、悶もたえ、憤される状さまがあつたが、日の午に近こき頃おいに
 は、まさにその力尽なき、骨萎なえて、また如何いかんともするあたわざる
 風情して、この流動せる大偉人は、波を伏せしぶ※きを収めて、なよ
 なよと拈ひげた蒼き綿わたのようになって、興津、江尻、清水をかけて、
 三保の岬、田子の浦、久能の浜に、音をも立てず倒れたのである。

一分^ぶたちまち欠け始めた、日の二時頃、何^{おちゆうど}の落人か慌^{あわ}しき車の音。一町ばかりを絶えず続いて、轟々^{ごうごう}と田舎道を、清水港の方から久能山の方^{かた}へ走らして通る、数八台。真^ま前の車^{まっさき}が河野大夫人富子で、次のが島山夫人菅子、続いたのが福井県参事官の新夫人辰子、これが三番目の妹で、その次に高島田に結つたのが、この夏さる工学士とまた縁談のある四番の操子^{みさこ}で、五ツ目の車が絹子と云う、三五の妙齡。六台目にお妙が居た。

一所に東京へと云うのを……仔細^{しさい}あつて……早瀬が留めて、清水港の海水浴に誘つたのである。

お妙の次を道子が乗つた。ドン尻に、め組の惣助、婦^{おんな}ばかりの群^{ひとむれ}には花籠に熊蜂めくが、此奴^{こいつ}大切なお嬢^{かたえ}の傍を、決して離

れる事ではない。

これは蓋しけだ一門の大統領、従五位勲三等河野英臣の発議に因て、景色の見物をかねて、久能山の頂で日蝕の観測をしようとする催もよおしで。この人達には花見にも月見にも変りはないが、驚いて差覗いた百姓だちの目には、天宮に蝕の変あつて、天人たちが遁にげるのだと思つたろう。

共に清水港の別荘に居る、各々めいめいの夫は、別に船をしつらえて、三保まわりに久能の浜へ漕こぎ寄せて、いずれもその愛人の帰途かえりを迎えて、夜釣をしながら海上を戻る計画。

小児こどもたち、幼稚おさないのは、傅もり、乳母など、一ひと群むれに、今日は別荘に残った次第。すでに前にも言つたように、この発議は英臣で、

真まつさき前に手を拍うつて賛成したのは管子で、余は異論なく喜んで同意したが、島山夫人は就なかんずく中得意であつた。

と云うのは、去年汽車の中で、主税が伊太利人に聞いたと云うのを、夫人から話し伝えて、まだ何等の風説の無い時、東京の新聞へ、この日の現象を細かに論じて載せたのは理学士であつたら。その名たちまち天下に伝えて、静岡では今度の日蝕を、（島山蝕）——とさえ称となえたのである。

五十二

田を行ゆく時、白鷺が驚いて立つた。村を出る時、小店の庭の松ま

葉牡丹つばぼたんに、ちらちら一行の影がさした。聯つらなる車は、薄日なれば母衣ほろを払はつて、手に手にさしかざしたいろいろの日傘に、あたたかも五彩の絹を中空に吹き靡なびかしたごとく、死したる風も颯さつと涼しく、美女たおやめたちの面おもてを払はつて、久能の麓ふもとへ乗附けたが、途中では人一人、行脚の僧にも逢あわなかつたのである。

蝕あり、変あり、兵あり、乱みだれある、魔に囲まれた今日の、日の城の黒雲を穿うがつた抜穴の岩に、足がかりを刻んだ様な、久能の石段の下へ着くと、茶店は皆ひしひしと真夜中のごとく戸を鎖とぎして、蜻蛉とんぼうも飛ばず。白茶けた路ばかり、あかあかと月影を見るように、寂然ひっそりとしてゐるのを見て、大夫人が、

「野蛮だね。」

と嘲笑あざわらつて、車夫に指揮さしずして、一軒店を開けさして、少時しばらく休んで、支度が出来ると、帰りは船だから車は不残のこらず帰す事にして、さて大なる花束の糸を解いて、縦に石段に投げかけた七人の裾袂、ひらひらと扇子を使うのが、さながら蝶のひらめくに似て、め組を後押えで、あの、石段にかかった。

が、河野の一族、頂へ上つたら、思いがけない人を見よう。

これより前さき、相貌堂々として、何等か銅像の揺ゆるぐがごとく、頤おとがいに髯ひげ長き一個の紳士の、握にぎりしろがねの色の燦爛さんらんたる、太く逞たくまびテツキ杖きを支ついて、ナポレオン帽子の庇ひさし深く、額に暗くき皺しわを刻み、満面に燃もゆるがごとく怒気を含んで、頂の方を仰ぎながら、靴音を沈めて、石段を攀よじて、松の梢こずえに隠れたのがあつた。

これなん、ここに正に、大夫人がなせるごとく、海を行く船の竜頭に在るべき、河野の統領英臣であつたのである。

英臣が、この石段を、もう一階で、東照宮の本殿になろうとする、一場の見霽みはらしに上り着いて、海面うなづらが、高くその骨組の丈夫な双の肩に懸かかつた時、音に聞えた勘助井戸を左に、右に千仞せんじんの絶壁の、豆腐を削つたような谷に望んで、幹には浦の苫屋とまやを透すかし、枝には白き渚なぎさを掛け、緑に細波さざなみの葉を揃えた、物見の松をそれぞれと見るや——松の許もとなる据置の腰掛に、長くなつて、肱ひじまくら枕まくらして、面を半ば中折の帽子で隠して、羽織を畳んで、懐中ふところに入れて、枕した頭つむりの傍わきに、薬瓶かと思う、小さな包を置いて、悠悠と休んでいた一個ひとりの青年を見た。

と立向つて、英臣が杖を前につき出した時、目を遮つた帽子を払つて、柔かに起直つて、待構え顔に屹と見迎えた。その青年を誰とかなす——病後の色白きが、清く瘠せて、鶴のごとき早瀬主税。

英臣は庇ひさし下りに、じろりと視ながめて、
「疾はやかつた、のう」と鷹揚おうように一ツ頤あごでしやくる。

「御苦勞様です。」

と、主税は仰ぐようにして云つた。

「いや、ここで話しようと言つたのは私わしじゃで、君の方が病後大儀じゃつたらう。しかし、こんな事を、好んで持上げたのはそちらじゃで、五分々々か、のう、はははは、」

と髯の中に、唇が薄く動いて、せせら笑う。

早瀬は軽く微笑みながら、

「まあ、お掛けなさいまし。」

と腰掛けた傍を指で弾いた。

「や、ここで可え。話は直き分る。」と英臣は杖を脇挟んで、葉巻を銜えた。

「早解りは結構です、そこで先日のお返事は？」

「どうかせい、と云うんじやった、のう。もう一度云うて見い。」

「申しましようかね。」

「うむ、」

と吸いつけた唾を吐く。

「ここで極きめて下さいませうか。過このあいだ日、病院で掛合かひいました時のように、久能山で返事しようじや困りますよ。ここは久能山なんですから。またと云つちや竜爪りゅうそうざん山へでも行かなきゃならない。そうすりや、まるで天狗が寄合よひいをつけるようです。」

「余計な事を言わんで、簡単に申せ。」

と今の諧かいぎやく謔やくにやや怒気いかでかを含んで、

「私わしが対手あいてじや、立たちどころ処ところに解決してやる！」

「第一！」

と言つた……主税ほがらかの声は朗であつた。

「貴下あなたの奥さんを離縁りえんなさい。」

隼

五十三

いちげんぼうじよう
 一 一言亡状を極めたにも係わらず、英臣はかえつて
 物もの静しずか
 に聞いた。

「なぜか。」

べつとう
 「馬丁貞造と不埒ふらちして、お道さんを産んだからです。」
 強こいて言ことばを落着けて、

「それから、」

「第二、お道さんを私に下さい。」

「何でじゃ？」

「私と、いい中です。」

「むむ、」

と口の内と言った。

「それから、」

「第三、お菅さんを、島山から引取っておしまいなさい。」

「なぜな。」

「私と約束しました。」

「誰と？」

はたと目を怒らすと、早瀬は澄まして、

「私とさ。」

「うむ、それから?」

「第四、病院をお潰つぶしなさい。」

「なぜかい。」

「医学士が毒を装もります。」

「まだ有った、のう。」と、落着いて尋ねた。

「河野家の家庭は、かくのごとく汚けがれ果てた。……最早や、忤せがれの嫁とを娶とるのに、他ひとの大切な娘ひとの、身分系しんぶんけい図ずなどを検しらべるような、不埒ふちな事はいたしませんまい。また一門の繁栄を計るために、娘どもを餌えさにして、婿むこを釣つりますまい。

就なかに中なく、独逸文学者酒井俊蔵先生の令嬢れいじやうに対して、身の程も

弁えず、無礼を仕りました申訳が無い、とお詫びなさい。

そうすりや大概、河野家は支離滅裂、貴下のいわゆる家族主義の滅亡さ。そこで敗軍した大将だ。貴下は安東村の貞造の馬小屋へでも引込むんだ。ざつと、まあ、これだけさ。」

と帽子で、そよそよと胸を煽いだ。

時に蝕しつつある太陽を、いやが上に蔽い果さんずる修羅の叫喚けびものすさまじの物凄く響くがごとく、油蟬の声の山の根に染み入る中に、英臣は荒らかな声して、

「癡狂人！」

「ああ、狂人だ、が、他の気違は出来ないことを云って狂うのに、この狂気は、出来る相談をして澄ましているばかりなんだ

よ。」

舌もやや釣る、唇を蠢かしつつ、

「で、私わしがその請求を肯きかんけりや、汝きさま、どうすツとか言うんじやのう。」と、太息を吐ついたのである。

「この毒薬の瓶をもつて、ちと古風な事だけれど、恐れながらと、遣やろうと云うのだ。それで大概、貴下の家は寂滅でしょうぜ。」

英臣は辛うじて罵ののり得た。

「騙かたじやのう、」

「騙かたですとも。」

「強請ゆすりじやが。汝きさま、」

「強請ゆすりですとも。」

「それで汝人間か。」

「畜生でしょうか。」

「それでも独逸語の教師か。」

「いいえ、」

「学者と言われようか。」

「どういたしまして、」

「酒井の門生か。」

「静岡へ来てからは、そんな者じゃありません。騙です。」

「何、騙じゃ、」

「強請です。畜生です。そして河野家の仇あだなんです。」

「黙れ！」

と一喝、虎のごとき唸うなりをなして、杖ステッキをひしと握って、

「無礼だ。黙れ、小僧。」

「何だ、小父さん。」

と云った。英臣は身心ともに燃ゆるがごとき中にも、思わず掉ふりおろす得物を留めると、主税は正面へ顔を出して、呵から々と笑つて、

「おい、己おれを、まあ、何だと思う。浅草田畝たんぼに巢すを持って、観音様へ羽のを伸すから、隼はやぶさの力と綽名あだなアされた、搦すり摸もだよ、巾きんちやく着き切りだよ。はははは、これからその気で附合あいねえ、こう、頼たのむぜ、小父さん。」

五十四

「己おれが十二の小僧の時よ。朝露の林を分けて、塹ねぐらを奥山へ出たと
 思いねえ。蛙けえろつらの面へ打ぶつかけるように、仕かけの噴水が、白粉おしろいの
 禿げた霜げた姉さんの顔を半分に仕切つて、洒しやあ亜と出ていら。そ
 この釣堀つりぼりに、四人連づれ、皆洋服で、まだ酔よの醒さめねえ顔も見えて、
 帽子は被かぶつても大童おおわらわと云う体だ。芳原げえりが、朝ツぱら鯉
 を釣つつてゐるじゃねえか。

釣つつてるのは鯉こいだけれど、どこのか田畝どじょうの鱒ますだろう。官員で、
 朝歸りで、洋服で、釣つつてりや馬鹿だ、と天窓あたまから呑のんでかかっ
 て、中でも鮒ふならしい奴やつの黄金鎖きんぐさりへ手を懸ける、としまつた！

この腕を呻うんと握つかられたんだ。

掴つかえて打ぶちでもする事か、片手で澄まし込んで釣るじゃねえか。

釣つつた奴を籠へ入れて、（小僧これを持って供をしろ。）ツて、
ひとにらみ

一 睨にらまれた時は、生れて、はじめて縮すくんだのさ。

こりや成程ちよろツかな（隼）の手でいかねえ。よく顔も見な
かつたのがこつちの越度おちどで、人品骨柄を見たつて知れる——その

頃は台湾の属官だったが、今じや同一おんなじとこ所の税関長、稲坂と云う
法学士で、大鵬たいほうのような人物、ついて居た三人は下役だね。

後で聞きや、ある時も、結婚したての細君を連れて、芳原を冷
かして、格子で馴染なじみの女に逢つて、

（一所に登楼あがるぜ。）と手を引いて飛込んで、今夜は情いろおんな女と

遊ぶんだから、お前は次の室まで待つてるんだ、と名代みょうだいへ追いやつて、遊あいらん女と寝たと云う豪傑さね。

それツきり、細君も妬やかないが、旦那も嫉じんすけ気少しもなし。

いつか三月ばかり台湾を留守にして、若いその細君と女中と書生を残して置くと、どこの婦おんなも同おんなじ一だ。前ぜんから居る下役の媽かかあ々々ども、いずれ夫人とか、何子とか云う奴等が、女同士、長官の細君の、年とし紀の若いのを猜そねんだやつさ。下女に鼻薬を飼つて讒つげぐち言いをさせたんだね。その法学士が内へ帰ると、（お帰んなさいまして、奥様はひよんな事。）と、書生と情交わけがあるように言いつける。とよくも聞かないで、——（出て行ゆけ。）——と怒鳴り附つけた。

誰に云つたと思ひます。細君じゃない。その下女にさ。

どうです。のろかつたり、妬過ぎたり、凡人業じやねえような、河野さん、貴下のお婿様連にや、こういうのは有りますまい。

己が掴つたのはその人だ。首を縮めて、鯉の入った籠を下げて、（魚籃）の丁稚と云う形で、ついて行くと、腹こなしだ、とぶらりぶらり、昼頃まで歩行いてき、それから行つたのが真砂町の酒井先生の内だった。

学校のお留守だったが、親友だから、ずかずかと上つて、小僧も二階へ通されたね。（奥さん、これにもお膳を下さい。）と掬摸にも、同一ように、吸物膳。

女中の手には掛けないで、酒井さんの奥方ともあろう方が、ま

だ少^{わか}かつた——縮^{ちりめん}緬のお羽織で、膳を据えて下すつて、（遠慮をしないで召^{めしあが}食れ、）と優しく言つて下すつた時にや、己^{おら}あ始めて涙が出たのよ。

先生がお帰りなさると、四ツ膳の並んだ末に、可愛い小僧が居るじゃねえか。（何だい、）と聞かれたので、法学士が大口開いて（掏摸だよ。）と言われたので、ふツつり留^やめる気になつたぜ、犬畜生だけ、情^{なさけ}には脆^{もろ}いのよ。

法学士が、（さあ、使賃だ、祝儀だ、）と一円出して、（酒が飲めなきや飯を食つてもう帰れ、御苦労だった、今度ツからもつと上手に攫^やれよ。）と言われて、豊^くに喰^くついて泣いていると、（親がないんだわねえ、）と、勿体ねえ、奥方の声がうるんだと

思いいえ。（晩の飯を内で食って、翌日の飯をまた内で食わないか、酒井の籠で飼ってやろう、隼。）と、それから親鳥の声を真似て、今でも囀る独逸語だ。

世の中にや河野さん、こんな猿を養って、育ててくれる人も有るのに、お前さん方は、まあ何という、べらぼうな料簡方だ
い。

可愛い娘たちを玉に使って、月給高で、婿を選んで、一家の繁昌とは何事だろう。

たまたま人間に生を受けて、しかも別嬪に生れたものを、一生にたった一度、生命とはつりがえの、色も恋も知らせねえで、盲鳥を占めるように野郎の懐へ捻込んで、いや、貞女になれ、

賢母になれ、良妻になれ、と云つたつて、手品の種を通わせやしめえし、そう、うまく行くものか。

見たが可い、こう、己おれが腕がちよいと触ると、学校や、道学者が、新粉細工しんこで拵こしらえた、貞女も賢母も良妻も、ばたばたと将某倒しだ。」

英臣の目は血走つた。

五十五

「河野の家には限らねえ。およそ世の中に、家の為に、女の児こを親勝手に縁附けるほど惨むごたらしい事はねえ。お為ごかしの理窟を

言つて、動きの取れないように説得すりや、十六や七の何にも知らない、無垢な女が、頭一ツ掉り得るものか。羞含んで、ぼうとなつて、俯向くので話が極つて、赫と逆上せた奴を車に乗せて、きつけ回生剤のような酒をのませる、こいつを三々九度と云うのよ。そこで寝て起りや人の女房だ。

うっかり他と口でも利きや、直ぐに何のかのと言われよう。それで二人が繋つて、光つた態でもして歩行けば、親達は緋緘ひおどしのよろい鎧でも着たように汝が肩身をひけらかすんだね。

娘が惚れた男に添わせりや、たとい味噌漉を提げたつて、玉の冠を被つたよりは嬉しがるのを知らねえのか。傍の目からは筵むしろと見えても、当人には綾錦だ。亭主は、おい、親のものじゃね

えんだよ。

己が言うのが嘘だと思つたら、お道さんに聞いて見ねえ。病院長の奥様より、馬小屋へ入つても、早瀬と世帯が持ちたいとよ。

お菅さんにも聞いて見ねえ。」

「不埒ふちちな奴だ？」

と揺ゆいた英臣の髯の色、口を開あいて、黒煙に似た。

「不埒は承知よ。不埒を承知でした事を、不埒と言つたつて怯然びくともしねえ。豪えらい、と讚ほめりや吃驚びつくりするがね。

今更慌てる事はないさ、はじめから知れていら。お前さんの許とこのような家風で、婿を持たした娘たちと、情事いろごとをするくらい、下女を演劇しばいに連出すより、もつと容易たやすいのは通相場よ。

こう、もう威張ったって仕ようがねえ。恐怖おっかなくはないと言え

と微笑ほほえみながら、

「そんな野暮な顔をしねえで、よく言うことを聞け、と云うに。

おい、まだ驚く事があるぜ。もう一枝、河野の幹さかえを榮さそうと、

お前さんが頼みにしている、四番目の娘だがね、つい、この間、暑中休暇で、東京から帰って来た、手入らずの嬢さんは、医学士にけがされたぜ。

己に毒薬を装もらせたし、ばれかかったお道さんの一件を、穩便おっつにさせるために、大奥方の計らいで、院長に押附けたんだ。己と

合棒の万太と云う、幼馴染の掏摸なかもの夥間なかもが、ちやんと材料たねを上げていら。

やっぱり家の為だろう。河野家の名誉のために、旧悪を知つて上、お道さんと不都合した、早瀬と云う者を毒殺しようと、娘を一人傷物にしたんじやないか。

そこを言うのだ。こども児よりも家を大切がる残酷な親だと云うのは、よ。

なぜ手をついて懺悔ざんげをしない。悪かった。これからは可愛い娘を決して名み聞きのためには使いますまい。家柄を鼻にかけて他ひとの娘に無礼も申掛けますまい、と恐入つてしまわないよ。

こども小兒一人犠牲にえにして、毒薬なんぞ装らないでも、坊主になつて

あやま
謝んねえな。」

五十六

おもてふ
面も触らず言を継ぎ、

「それに、お前さん何と云った。——この間も病院で、この掛合をする前に、念のために聞いた時だ。——

たつて英吉君の嫁に欲しいとお言いなさる、私わっしが先生のお妙さんわっしは、実は柳橋の芸者の子だが、それでも差支えは無いのですか、と尋ねたら、お前さん、もつての外な顔をして、いや、途方もない。そんな賤いやしい素性の者なら、たとえ英吉がその為に、憧こがれ死しに

をしようとも、己たち両親が承知をせん。家名に係わる、と云つたろう。

こう、お前めえたちにや限らねえ。世間にやそうした情なさけ無けえ了簡ねな奴ばかりだから、そんな奴等へ面当つらあてに、河野の一家いっけを鎗やり玉だまに挙げたんだ。

はじめから話にならねえ縁談だから可いけれど、これが先生も承知の上、嬢さんも好いた男で、いざ、と云う時、そこでねえ系図しらべをされて、芸者の子だというだけで、破談にでもなつた時の、先生御夫婦、お嬢さんの心持はどんなだろう。

己おいらそれを思うから、人間並にや附合えねえ肩書あつきの悪あく丁でつ稚ちを、一人前に育てた上、大切な嬢さんに惚れているなら添そわ

してやろう、とおっしやつて下すつた、先生御夫婦のお志。掏摸の野郎と顔をならべて、似而非道学者の坂田なんぞを見返そうと云つた江戸児のお嬢さんに、一式の恩返し、二ツあつても上げた命を、一ツ棄てるのは安価いものよ。

お前さんにや気の毒だ。さぞ御迷惑でございましょう。」
と丁寧に笑つて言つて、

「迷惑や気の毒を勘酌して巾着切が出来るものか。真人間でない者に、お前、道理を説いたつて、義理を言つて聞かしたつて、おまわり 巡查ほどにも恐くはねえから、もんく 言句なしに往生するさ。いくさ 軍に負けた、と思えば可よかろう。

掏摸の指で突つついても、倒れるような石垣や、蟻で崩れる濛ほりを穿ほ

つて、河野の旗を立てていたつて、はじまらねえ話じゃねえか。

お前さん、さぞ口惜くやしかろう。打ちたくば打て、殺したくば殺しねえ、義理を知つて死ぬような道理を知つた己じやねえが、嬢さんに上げた生命いのちだから、その生命を棄てるので、お道さんや、お菅さんにも、言訳をするつもりだ。死んでも寂さびしい事はねえ、女房が先へ行つて待つていら。

お薦と二人が、毒蛇になつて、可愛いお妙さんを守護する覚悟よ。見ろ、あの竜宮に在る珠は、悪竜が絡まとい繞めぐつて、その器に非ずして濫みだりに近づく者があると、呪殺すと云うじやないか。

呪のろ詛ろわれたんだ、呪詛のろわれたんだ。お妙さんに指を差して、お前たちは呪詛のろわれたんだ。」

と膝に手を置き、片はんおもて面めんを、怪あやしきものの走るがごとく颯さと暗くくなつた海に向けて、蝕くある凄すげき日の光に、水底みなそこのその悪竜の影に憧おもちるる面おも色ちした時、隼はやぶさの力の容貌は、かえつて哲学者のごときものであつた。

英臣は苔蒸せる石の動かざるごとく緘かんもく黙もくした。

一声高らかに雉きじ子が啼なくと、山は暗くくなつた。

勘助井戸の星を覗のぞこうと、末の娘が真まっさき先ひらりに翻ひら然りと上つて、続いて一人々々、名ある麗人の霊のごとく朦朧もうろうとして露あらわれた途

端はなはに、英臣はかねてその心構えをしたらしい、やにわに衣兜かぶとから短銃ピストルを出して、衝つと早瀬の胸を狙ねらつた。あわやと抱いだき留とどめた惣

助は刎は倒ねたおされて転ころんだけれども、渠危かゑやうし、と一目見て、道子と

管子が、身を蔽おほいに、背せなより、胸より、ひしと主税を庇かばつたので、英臣は、面おもてを背けて嘆息し、たちまち狙を外らすや否や、大夫人を射て、倒して、硝しょうやく薬の煙とともに、蝕する日の面おもてを仰ぎつつ、この傲岸ごうがんなる統領は、自からその脳を貫いた。

抱合つて、目を見交わして、姉きょうだい妹いの美人たおやめは、身を倒さかさまに崖に投じた。あわれ、蔦かずらに蔓とどに留まった、道子と管子が色ある残懷なごりは、滅びたる世の海の底に、珊瑚さんごの碎けしに異ならず。

折から沖を遙はるかに、光なき昼の星よと見えて、天に連つらなつた一点の白帆は、二人の夫等の乗れる船にして、且つ死骸なきがらの倂おもかげに似たのを、妙子に隠して、主税は高く小手かぎを翳かぎした。

その夜よ、清水港の旅店において、爺じじいは山へ柴芻かぎに、と嬢さんを

慰めつつ、そのすやすやと寐たのを見て、お蔭の黒髪を抱きながら、早瀬は潔く毒を仰いだのである。

早瀬の遺書は、酒井先生と、河野とに二通あつた。

その文学士河野に宛てたは。——英吉君……島山夫人が、才と色をもつて、君の為に早瀬を擒とりこにしようとしたのは事実である。また我自から、道子が温良優順の質に乗じて、謀はかつて情を迎えたのも事実である。けれども、そのいずれの操をも傷きずけぬ。双互にただ黙会したのに過ぎないから、乞う、兩位の令妹のために、その淑徳を疑うことなかれ。特に君が母堂の馬丁ばていと不徳の事のごときは、あり触れた野人の風説に過ぎなかつた。——事実でないの

を確めたに就いて、我が最初の目的の達しられないのに失望したが、幸か、不幸か、浅間の社頭で逢つた病者の名が、偶然貞造と云うのに便つて、狂言して姉夫人を誘おびきだ出し得たのであつた。従つて、第四の令妹の事はもとより、毒薬の根も葉もないのを、深夜蛾ひとりむしが燈ともに斃おちたのを見て、思ひ着いて、我が同類の万太と謀つて、渠をして調べしめた毒薬を、我が手に薬の瓶に投じて、直ちに君の家蔵に迫つた。

不義、毒殺、たとえば父子、夫妻、最親至愛の間においても、その実否じつぷを正すべく、これを口にすべからざる底ていの条件をもつて、咄嗟とっさに雷発らいして、河野家の家庭を襲つたのである。私は掏賊すりだ、はじめから敵に対しては、機謀権略、反間苦肉、有あゆる辣手らっしゅだん手段

を弄して差支えないと信じた。

要はただ、君が家系門閥もんぼつの誇の上に、一部の間隙を生ぜしめて、氏素性、かくのごとき早瀬の前に幾分の譲歩をなさしめん希望に過ぎなかつたに、思わざりき、久能山上の事あらんとは。我ひとえは偏に、君の家敵の、左右一顧の余裕のない、一時の激怒を惜むおしとともに、清冽一塵の交るを許さぬ、峻厳なるその主義に深大なる敬意を表する。

英吉君、能あたうべくは、我意を体して、より美うつくしく、より清しみき、第二の家庭を建設せよ。人生意気を感じずや——云々の意したたを認めてあつた。

門族の栄華の雲に蔽おおわれて、自家の存在と、学者の独立とを忘

れていた英吉は、日蝕の日の、蝕の晴ると共に、嗟嘆さたんして主税に聞くべく、その頭脳は明あきらかに、その眼は輝まなこいたのである。

早瀬は潔く云々以下、二十一行抹消。——前篇後篇を通じその意味にて御覽を願う。はじめ新聞に連載の時、この二十一行なし。後単行出版に際し都合により、徒とを添そえたるもの。あるい或はおなじ単行本御所有の方々の、ここにお心つかいもあらんかとして。

明治四十（一九〇七）年一〜四月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成12」ちくま文庫、筑摩書房

1997（平成9）年1月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十卷」岩波書店

1940（昭和15）年5月15日

初出：「やまと新聞」

1907（明治40）年1～4月

入力：真先芳秋

校正：かとうかおり

2000年8月17日公開

2009年2月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

婦系図

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>